上 里 遺 跡

縄文時代晩期集落遺跡の調査

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

上 里 遺 跡

縄文時代晩期集落遺跡の調査

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序文

本報告書は、京都市西京区大原野上里、長岡京市井ノ内に所在する上里遺跡において行った、京都市建設局道路建設部道路建設課による ・ ・3 伏見向日町線道路建設工事に先立つ試掘調査・発掘調査のうち、縄文時代晩期の遺構・遺物を取り上げた発掘調査報告書であります。

当地は、長岡京跡の北西部にもあたっており、長岡京期の遺構・遺物は勿論、縄文時代から中世に至る複合遺跡であり、それぞれの時代ごとに成果が期待されました。このため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導の下、京都市建設局道路建設部道路建設課から、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ調査が委託されました。

当研究所では、2001年度に道路予定地の西から試掘調査を開始し、2002年度以降断続的に発掘調査を進め、2009年度に調査を終了しています。今回の調査では、縄文時代から中世に至る各時代の遺構・遺物が良好に検出され、多大な成果をあげることができました。それぞれの調査は上里遺跡における第12・13・15・16・18・19次調査にあたっており、それらの調査内容と成果については、その年次ごとに調査報告書を刊行しています。

この一連の調査の中でも、遺跡の東部において竪穴住居を主体とした縄文時代晩期の 前半という比較的短い期間に営まれた集落跡について『上里遺跡 』として本報告書を 作成しました。

本報告書の内容について、御意見、御批評をいただけますようお願い申し上げるとと もに、各年次の調査中、および本報告書作成にあたり、京都府ならびに京都市、乙訓の 二市一町をはじめ、多くの関係各位に種々御指導、御協力を賜りましたことについて、 御礼申し上げます。

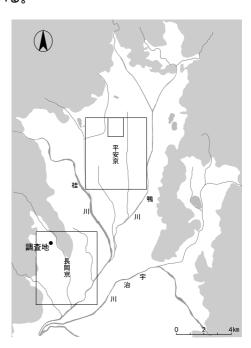
末尾ではありますが、長期間の調査中、近隣の皆様には多大なる御迷惑をお掛けしたにも関わらず、御理解、御協力いただき無事調査を終えることができましたこと、改めて厚く御礼申し上げます。

平成22年11月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 所 長 川 上 賈

例 言

- 1 本書は、京都市西京区大原野上里・長岡京市井ノ内に所在する上里遺跡において、(財) 京都市埋蔵文化財研究所が実施した京都市建設局道路建設部道路建設課による ・ ・3 伏見向日町線道路建設工事に先立つ試掘調査・発掘調査のうち、縄文時代の遺構・遺物を取り上げた報告書である。
- 2 使用した地図は、国土地理院発行の地形図(縮尺1:50,000)「京都西南部」および京都市発行の 都市計画基本図(縮尺1:2,500)「石見」・「粟生」・「寺戸」・「向日町」を参考に作成した。
- 3 図中で使用した座標は、世界測地系による平面直角座標系 であり、単位(m)は省略した。標高は、T.P.(東京湾平均海面高度)によった。文中で表記する遺構の深さは、特に断わらない場合は、検出面からの深さを示す。
- 4 遺構・層位の土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 5 調査区の呼称は、各年次の報告書の呼称をそのまま使用し、本文中で新たに設定した上里遺跡の 調査次数を調査区名の前に付した。例えば、16次調査である2006年度調査のC2区は「16次-C 2区」とした。
- 6 遺構番号は、各調査時にそれぞれ付した遺構番号を使用し、前に調査次数を表す数字を付け、さらにその前に「土坑」などの遺構種類を表す語句を付けた。例えば、18次調査の竪穴住居1294 は「竪穴住居18-1294」と表記した。また、年次報告書掲載時の名称から本報告の遺構番号に変更したものは、括弧《》内に年次報告書掲載時の名称を付記した。
- 7 遺物番号は、種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、石製品は「石」、土製品は「土」をそれぞれ頭に付した。写真番号も同一とした。これまでの各年次報告書に掲載したものについても修正すべき箇所を修正して再掲している。
- 8 遺物実測図は、基本的に土器類は縮尺1:4、石器類は1:2で掲載したが、拓本をつけたものは1:3に したほか、適宜縮尺を変えて掲載した。
- 9 掲載写真は、村井伸也・幸明綾子が担当した。遺構写 真の一部は調査担当者によるものがある。
- 10 調査中の基準点測量は、宮原健吾が担当した。
- 11 本書の作成は、高橋 潔・近藤奈央が担当し、執筆は高橋・近藤の他に竜子正彦、また研究所外の方々より原稿を賜った。執筆の分担は目次に記した。
- 12 編集・調整は、網 伸也・辻 裕司・児玉光世が担当 した。



(調査地点図)

目 次

| 第1章 | 遺跡の位置と環境 | 1 |
|-----|--------------------------------------|-----|
| 1 | 遺跡の位置と現状(高橋) | 1 |
| 2 | 地理的環境(松田・辻本) | 2 |
| 3 | 歴史的環境(高橋) | 11 |
| 4 | 遺跡周辺の既往調査(近藤) | 15 |
| 第2章 | 調査の経緯と経過(高橋) | 22 |
| 1 | 調査に至る経緯 | 22 |
| 2 | 本事業における各年度の調査の概要 | 22 |
| 3 | 本報告書作成の経緯と経過 | 26 |
| 第3章 | 縄文時代晩期の調査の概要(高橋) | 28 |
| 1 | 13次調査 | 28 |
| 2 | 16次調査 | 28 |
| 3 | 18次調査 | 28 |
| 4 | 19次調査 | 29 |
| 5 | 層序 | 29 |
| 第4章 | 遺 構(高橋) | 33 |
| 1 | 縄文時代晩期前半の遺構 | 33 |
| 2 | 縄文時代晩期後半の遺構 | 60 |
| 第5章 | 遺 物 | 63 |
| 1 | 遺物の概要(近藤) | 63 |
| 2 | 土器(近藤) | 63 |
| 3 | 石製品(近藤) | 82 |
| 4 | 土製品(近藤) | 95 |
| 5 | 自然遺物(竜子) | 97 |
| 第6章 | 自然科学的分析の成果 | 117 |
| 1 | 流路状遺構18-1215出土の朱鉱石の鉱物学的検討とその産地の推定(豊) | 117 |
| 2 | 石器の使用痕分析と磨石・石皿類の残存デンプン分析(上條) | 119 |
| 3 | 放射性炭素年代測定値について(辻本) | 133 |
| 4 | サヌカイトの産地推定(パリノ・サーヴェイ株式会社) | 145 |
| 5 | 動物遺存体の分析(丸山) | 147 |
| 第7章 | まとめ(高橋) | 150 |
| 1 | 縄文時代晩期の上里遺跡 | 150 |
| 2 | 本遺跡の縄文時代晩期集落の特徴と問題点 | 154 |

図 版 目 次

```
巻頭図版1 遺跡 19次調査および調査地全景(東から)
巻頭図版2 遺構 1 竪穴住居16-3175(西から)
           2 竪穴住居16-3175中央炉(北から)
           3 竪穴住居16-3175床面遺物出土状況(北東から)
巻頭図版3 遺構 1 竪穴住居16-3205周辺(東から)
           2 溝18-1067遺物出土状況(北西から)
巻頭図版 4 遺物 1 石刀および石刀未製品
           2 朱関連用具と朱塗り製品
        13次調査 平面図(1:300)
図版 1
     遺構
図版 2
        16次調査 平面図(1:300)
     遺構
図版 3
        18次調査・19次- 区 平面図(1:300)
     遺構
        19次- ・ 区 平面図(1:300)
図版 4
     遺構
図版 5
     遺物
        土器実測図1(竪穴住居16-3175出土土器)
図版 6
     遺物
        土器実測図2(竪穴住居16-3175・200出土土器)
図版 7
     遺物 土器実測図3(竪穴住居16-3223・3205・149出土土器)
図版 8
     遺物
        土器実測図4(竪穴住居16-149、18-1294出土土器)
図版 9
        土器実測図5(竪穴住居19-848出土土器)
     遺物
図版10 遺物
        土器実測図6(竪穴住居19-848、19-995、16-3234出土土器)
図版11 遺物
        土器実測図7(土器棺墓16-3164・3196出土土器)
図版12 遺物 土器実測図8(土器棺墓16-3178、18-978出土土器)
図版13 遺物 土器実測図9(土器棺墓16-3165・3159、18-340・1640・354出土土器)
図版14 遺物 土器実測図10 (土器棺墓18-349・845・1271出土土器)
図版15 遺物 土器実測図11 (土器棺墓18-1288・1291・1452、19-1358、18-1010、土壙墓
                  16 - 3158 \cdot 3253)
図版16 遺物 土器実測図12(土坑16-3213出土土器)
図版17 遺物
        土器実測図13 (土坑16-3282、18-847・1283・1532出土土器)
図版18 遺物
        土器実測図14(土坑16-3195、18-1487出土土器)
図版19 遺物
        土器実測図15 (土坑19-849・1033・1327・527・1433出土土器)
図版20 遺物
        土器実測図16(溝18-1067出土土器1)
図版21 遺物
        土器実測図17 (溝18-1067出土土器 2 )
図版22 遺物 土器実測図18(流路状遺構18-1215出土土器1)
```

図版23 遺物 土器実測図19(流路状遺構18-1215出土土器2)

```
図版24 遺物 土器実測図20(流路状遺構18-1215出土土器3)
```

- 図版25 遺物 土器実測図21(流路状遺構18-1215出土土器4)
- 図版26 遺物 土器実測図22(流路状遺構18-1215出土土器5)
- 図版27 遺物 土器実測図23(流路状遺構18-1215出土土器6)
- 図版28 遺物 土器実測図24(流路状遺構19-1155出土土器1)
- 図版29 遺物 土器実測図25(流路状遺構19-1155出土土器2)
- 図版30 遺物 土器実測図26(流路状遺構19-1155出土土器3)
- 図版31 遺物 土器実測図27(流路状遺構19-1155出土土器4)
- 図版32 遺物 土器実測図28(流路状遺構19-1155出土土器5)
- 図版33 遺物 土器実測図29(流路状遺構19-1155出土土器6)
- 図版34 遺物 土器実測図30(流路状遺構19-1155出土土器7)
- 図版35 遺物 土器実測図31(集石遺構19-1430、遺物包含層出土土器)
- 図版36 遺物 石器実測図1(石鏃1)
- 図版37 遺物 石器実測図2(石鏃2)
- 図版38 遺物 石器実測図3(石鏃3、サヌカイト石製品、楔形石器)
- 図版39 遺物 石器実測図4(削器1)
- 図版40 遺物 石器実測図5(削器2、石核、大型剥片)
- 図版41 遺物 石器実測図6(打製石斧1)
- 図版42 遺物 石器実測図7(打製石斧2、横刃型石器)
- 図版43 遺物 石器実測図8(磨製石斧1)
- 図版44 遺物 石器実測図9(磨製石斧2)
- 図版45 遺物 石器実測図10(磨製石斧3)
- 図版46 遺物 石器実測図11 (穿孔具、石錐、磨石)
- 図版47 遺物 石器実測図12(磨石)
- 図版48 遺物 石器実測図13(磨石、異形石製品)
- 図版49 遺物 石器実測図14(凹石、敲石)
- 図版50 遺物 石器実測図15(砥石、台石)
- 図版51 遺物 石器実測図16(砥石、台石、石皿)
- 図版52 遺物 石器実測図17(石刀未製品1)
- 図版53 遺物 石器実測図18(石刀1、石刀未製品2)
- 図版54 遺物 石器実測図19(石刀2、石刀未製品3)
- 図版55 遺物 石器実測図20(玉類、石棒、その他石製品、剥片)
- 図版56 遺物 土製品実測図(土製円盤、耳栓、有孔球状土製品、輪状土製品、半輪状土製品)
- 図版57 遺構 1 16次-D・E区 全景(西から)
 - 2 18次調査 全景(西から)

- 図版58 遺構 1 19次- 区 全景(南西から) 2 19次- 区 全景(西から) 図版59 遺構 1 竪穴住居16-149(北西から)
 - 2 竪穴住居16-200・240(北から)
- 図版60 遺構 1 竪穴住居16-3175(北東から)
 - 2 竪穴住居16-3025、土坑16-3213(西から)
- 図版61 遺構 1 竪穴住居16-3223(西から)
 - 2 竪穴住居16-3234(北から)
- 図版62 遺構 1 竪穴住居18-1294(東から)
 - 2 竪穴住居19-848(西から)
- 図版63 遺構 1 竪穴住居19-995(南東から)
 - 2 土器棺墓16-3164・3165・3196(東から)
- 図版64 遺構 1 土器棺墓16-3143(南東から)
 - 2 土器棺墓16-3159(東から)
 - 3 土器棺墓16-3178(東から)
 - 4 土器棺墓18-340(北から)
 - 5 土器棺墓18-349(北から)
 - 6 土器棺墓18-354(北から)
- 図版65 遺構 1 土器棺墓18-436(南東から)
 - 2 土器棺墓18-845(北東から)
 - 3 土器棺墓18-967・968(北東から)
 - 4 土器棺墓18-978・1078(北から)
 - 5 土器棺墓18-1010(北から)
 - 6 土器棺墓18-1064(東から)
- 図版66 遺構 1 土器棺墓18-1271(西から)
 - 2 土器棺墓18-1288(北から)
 - 3 土器棺墓18-1291(北から)
 - 4 土器棺墓18-1452(北から)
 - 5 土器棺墓19-740(北から)
 - 6 土器棺墓19-1202南半(南東から)
- 図版67 遺構 1 土器棺墓19-1358(北東から)
 - 2 土壙墓16-3158(西から)
 - 3 土壙墓16-3253(北東から)
 - 4 土壙墓18-1611(西から)
 - 5 炉18-1280(西から)

| | | 6 | 炉18-1326(南西から) |
|------|----|---|-----------------|
| 図版68 | 遺構 | 1 | 土坑16-3156(北西から) |
| | | 2 | 土坑18-847(東から) |

- 3 土坑19-527(南西から)
- 4 土坑19-849(西から)
- 5 土坑19-1033(西から)
- 6 土坑19-1079(北から)
- 7 土坑19-1433(西から)
- 8 土坑19-3288(南から)

図版69 遺構 1 土坑18-1487北半(19次- 区、西から)

- 2 土坑18-1487北東部(19次- 区、東から)
- 3 配石遺構19-1412(北から)
- 4 集石遺構18-1631、土器棺墓18-1640(北東から)

図版70 遺構 1 溝18-1067(北西から)

2 流路状遺構18-1215 Bセクション断面、深み集石部(北から)

図版71 遺構 1 流路状遺構18-1215北西部(19次- 区、南東から)

2 流路状遺構19-1155北東部 Aセクション断面(南西から)

図版72 遺構 1 流路状遺構19-1155南東部 Bセクション断面(南西から)

2 集石遺構19-1430(北西から)

図版73 遺構 1 流路状遺構19-1155南半部(北西から)

2 流路状遺構19-1155南半部 完掘状況(北西から)

図版74 遺構 1 土器棺墓13-158(北西から)

- 2 土器棺墓13-112・113(北から)
- 3 土坑13-200(北から)
- 4 土坑19-3109(東から)
- 5 土坑13-143・145(北から)

図版75 遺物 1 竪穴住居16-3175出土土器 1

2 竪穴住居16-3175出土土器 2

図版76 遺物 1 竪穴住居16-200出土土器

2 竪穴住居16-3223出土土器

3 竪穴住居16-3205出土土器

図版77 遺物 1 竪穴住居16-149出土土器

2 竪穴住居18-1294出土土器 1

3 竪穴住居18-1294出土土器 2

図版78 遺物 1 竪穴住居19-848出土土器 1

2 竪穴住居19-848出土土器 2

図版79 遺物 土器棺墓16-3164・3196・3178、18-978、16-3165出土土器

図版80 遺物 土器棺墓16-3159、18-340·1640·349·845出土土器

図版81 遺物 土器棺墓18-1271・1288・1291、19-1358、土壙墓16-3158・3253、土坑16-3213・3282、18-847出土土器

図版82 遺物 土坑18-1283・1487、19-1033・1327・527・1433出土土器

図版83 遺物 1 土坑16-3213出土土器

2 土坑19-849出土土器

図版84 遺物 溝18-1067出土土器

図版85 遺物 流路状遺構18-1215出土土器 1

図版86 遺物 1 流路状遺構18-1215出土土器 2

2 流路状遺構18-1215出土土器 3

図版87 遺物 1 流路状遺構18-1215出土土器 4

2 流路状遺構18-1215出土土器 5

図版88 遺物 流路状遺構19-1155出土土器 1

図版89 遺物 流路状遺構19-1155出土土器2

図版90 遺物 1 流路状遺構19-1155出土土器3

2 流路状遺構19-1155出土土器 4

図版91 遺物 1 流路状遺構19-1155出土土器5

2 流路状遺構19-1155出土土器 6

図版92 遺物 土器棺墓13-158・113、土坑13-143、19-3109、遺物包含層出土土器

図版93 遺物 石鏃、石錐

図版94 遺物 1 ナイフ形石器、楔形石器

2 削器、大型剥片

図版95 遺物 1 打製石斧

2 横刃型石器

図版96 遺物 1 磨製石斧1

2 磨製石斧 2

図版97 遺物 1 磨石、異形石製品、凹石、敲石

2 磨石、凹石、敲石、石皿

図版98 遺物 砥石、石皿

図版99 遺物 1 石核、サヌカイト原石

2 石棒、不明石製品

3 大型石棒

図版100 遺物 1 石刀

2 石刀未製品

図版101 遺物 石匙、サヌカイト石製品、黒曜石剥片、石錘、玉類、辰砂鉱石、土製品、粘土塊図版102 遺物 1 土器片円盤

2 輪状土製品、半輪状土製品

挿 図 目 次

| 図 1 | 遺跡位置図(1:50,000) | 1 |
|-------------|-------------------------------------|----|
| 図 2 | 調査地周辺の表層地質図 | 3 |
| 図3 | 地形分類図(1:40,000) | 6 |
| 図 4 | 調査区の流路断面および河床レベル図 | 9 |
| 図 5 | 周辺の遺跡分布図(1:25,000) | 12 |
| 図 6 | 上里遺跡既往調査地点図(1:5,000) | 16 |
| 図 7 | 16次 D・E区調査風景(西から) | 23 |
| 図 8 | 18次 重機掘削風景(東から) | 23 |
| 図 9 | 18次 流路状遺構18-1215 土壌サンプル採集作業風景(南東から) | 23 |
| 図10 | 19次 調査前風景(北東から) | 23 |
| 図11 | 19次 土坑18-1487北半 石器剥片検出作業風景(南東から) | 23 |
| 図 12 | 19次 クレ ンによる全景写真撮影風景(西から) | 23 |
| 図13 | 19次 集石遺構19-1430 実測風景(西から) | 23 |
| 2 14 | 19次 レ ザ 測量作業風景(東から) | 23 |
| 図15 | 13次調査 遺構平面および土層模式図 | 30 |
| 図16 | 16・18・19次調査 遺構平面および土層模式図 | 31 |
| 図17 | 竪穴住居16-149実測図(1:100) | 33 |
| 図18 | 竪穴住居実測図1(1:100) | 34 |
| 図19 | 竪穴住居実測図 2 (1:100) | 35 |
| 図20 | 土器棺墓実測図1(1:20) | 37 |
| 図 21 | 土器棺墓実測図2(1:20) | 38 |
| 図 22 | 土器棺墓実測図3(1:20) | 39 |
| 図23 | 土器棺墓実測図4(1:20) | 40 |
| 2 24 | 土器棺墓実測図5 (1:20) | 41 |
| 図 25 | 土器棺墓実測図6(1:20) | 43 |
| 図26 | 十塘莫宝測図(1:40) | 44 |

| 図 27 | 炉18-1280・1326 実測図(1: 20) | 45 |
|-------------|-------------------------------------|-----|
| 図 28 | 土坑16-3213実測図(1:40) | 46 |
| 図 29 | 土坑18-1487実測図(1:100) | 47 |
| 図30 | 土坑実測図1(1:40) | 48 |
| 図31 | 土坑実測図2(1:20) | 49 |
| 図 32 | 土坑18-1637検出状況(北から) | 50 |
| 図33 | 土坑18-1638検出状況(北から) | 50 |
| 図 34 | 土坑19-1429検出状況(北東から) | 50 |
| 図35 | 土坑19-3288実測図(1:20) | 51 |
| 図36 | 流路状遺構18-1215断面図1(1:50) | 52 |
| 図 37 | 流路状遺構18-1215断面図2(1:50) | 53 |
| 図 38 | 流路状遺構19-1155断面図1(1:50) | 55 |
| 図 39 | 流路状遺構19-1155断面図2(1:50) | 56 |
| 2 40 | 集石遺構19-1430実測図(1:50) | 57 |
| 図 41 | 配石遺構19-1412実測図(1:50) | 58 |
| 2 42 | 集石遺構18-1631実測図(1:50) | 58 |
| 2 43 | 集石遺構19-1422実測図(1:50) | 59 |
| 2 44 | 集石遺構18-870(北北西から) | 59 |
| 図 45 | 集石遺構18-1540(南から) | 59 |
| 2 46 | 集石遺構18-1541(南から) | 59 |
| 2 47 | 集石遺構19-1422(東から) | 59 |
| 2 48 | 土器棺墓13-112・113・158実測図(1:20) | 60 |
| 2 49 | 土坑13-33実測図(1:20) | 61 |
| 図50 | 土坑実測図(1:20) | 62 |
| 図51 | 土器実測図32(土器棺墓13-112・113・158出土土器) | 80 |
| 図 52 | 土器実測図33(土坑13-143、19-3109、遺物包含層出土土器) | 81 |
| 図53 | 19次- 区 中央断割断面 (Y=-28,320付近) | 97 |
| 図 54 | 炭化イネ | 105 |
| 図55 | 炭化マメ類1(流路状遺構18-1215出土) | 106 |
| 図56 | 炭化マメ類 2 (流路状遺構18-1215出土) | 107 |
| 図57 | 炭化マメ類3(流路状遺構19-1155出土) | 108 |
| 図 58 | 炭化ドングリ類 1 (流路状遺構19-1155出土) | 109 |
| 図 59 | 炭化ドングリ類 2 (流路状遺構19-1155出土) | 110 |
| 図 60 | 炭化種実 | 111 |
| 図 61 | 炭化していない種宝 1 | 112 |

| 図 62 | 炭化していない種実 2 | 113 |
|-------------|----------------------------|-----|
| 図63 | 自然木1(集石遺構19-1430出土) | |
| 図 64 | 自然木2(集石遺構19-1430出土) | 115 |
| 図65 | 自然木3(集石遺構19-1430出土) | 116 |
| 図66 | 打製石斧使用痕 1 | 122 |
| 図67 | 打製石斧使用痕 2 | 123 |
| 図 68 | 大型刃器使用痕 1 | 124 |
| 図 69 | 大型刃器使用痕 2 | 125 |
| 図 70 | 磨石・石皿類使用痕 | 126 |
| 図71 | 磨石・石皿類検出デンプン | 127 |
| 図 72 | 調査地点の位置および分析層準 | 134 |
| 図 73 | 暦年較正結果 | 137 |
| 図 74 | 縄文時代晩期から弥生時代前期堆積物のX線写真 | 138 |
| 図75 | 縄文時代晩期層準の土壌薄片写真とトレース図 | 139 |
| 図 76 | 縄文時代晩期層準の土壌薄片拡大写真 | 140 |
| 図77 | サヌカイト産地推定判別図 1 | 146 |
| 図 78 | サヌカイト産地推定判別図 2 | 146 |
| 図 79 | 縄文時代晩期前半遺構分布図(1:1,000) | 150 |
| 図80 | 縄文時代晩期前半遺構変遷図(1:1,000) | 152 |
| | 表目次 | |
| 表 1 | 周辺の遺跡一覧表 | 13 |
| 表 2 | 上里遺跡調査一覧表 | 17 |
| 表3 | 石器剥片集計表(g) | 46 |
| 表 4 | 自然木樹種一覧表 | 99 |
| 表 5 | 18次調査 流路状遺構18-1215 炭化種実一覧表 | 101 |
| 表 6 | 19次調査 炭化種実一覧表 | 102 |
| 表7 | 19次調査 炭化していない種実一覧表 | 104 |
| 表 8 | 観察石器一覧表 | 121 |
| 表 9 | 検出デンプン観察表 | 128 |
| 表10 | 打製石斧の厚さと石材との関係 | 129 |
| 表11 | 放射性炭素年代測定および暦年較正結果表 1 | 135 |

| 表12 | 放射性炭素年代測定および暦年較止結果表 2 | 136 |
|------|-----------------------|-----|
| | 原石採取地と判別群名称表 | |
| 表14 | 産地推定結果表 | 145 |
| 表15 | 種名表 | 147 |
| 表16 | 動物遺存体集計表 | 148 |
| 表17 | 出土土器からみた遺構の変遷表 | 151 |
| | | |
| | | |
| | 付 表 目 次 | |
| 付表 1 | 縄文土器観察表 | 161 |
| 付表 2 | 石製品観察表 | 192 |
| 付表 3 | 十製品観察表 | 202 |

第1章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と現状

上里遺跡は、京都盆地の北半、北山城の西部、桂川右岸に位置している。旧乙訓郡にあたり、いわゆる乙訓地域に属する。現在の行政区では京都市西京区大原野上里、および長岡京市井ノ内である。西山山地北方に端を発し、向日丘陵の西側を南流して桂川に注ぐ、小畑川中流域の右岸に位置している。遺跡の北側には、同じく西山山地から発し、向日丘陵の手前で小畑川に合する善峰川が東流する。遺跡に立てば、北から西を西山山地、東を向日丘陵に囲まれ、南へ開く小盆地状の地形であることがわかる。

遺跡周辺は、近世以降永らく遺跡南部の井ノ内や北西の石見集落近郊の田園地帯として利用されてきたが、昭和40年以降の開発によって遺跡の北側には住宅地が広がっている。さらに、近年本事業を初めとする道路の拡幅・整備や新設工事などにより、その状況を著しく変貌させようとしている。

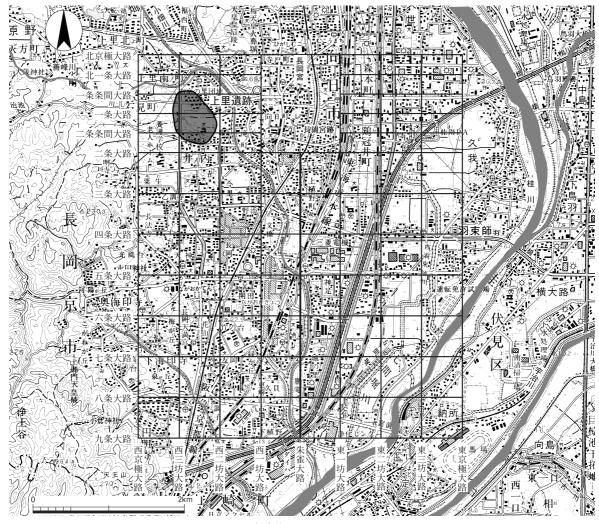


図1 遺跡位置図(1:50,000)

2 地理的環境

京都盆地北西部は桂川右岸の山地、その南部の唐櫃越の山地とさらに老ノ坂峠をはさんでその南につづく西山山地に画され、それらの盆地側には向日丘陵、西山丘陵とより低い台地が分布する。西山山地南部とその盆地側の丘陵・台地は長岡京市以南で東に張り出し、向日丘陵の高まりから、西方の山地までの間を囲ったような領域を生じている。この東西 4 ~ 5 km、南北約 7 kmの領域を集水域として、小畑川とその支流の善峰川が流下し、両川沿いには幅600 mまでの谷底平野が広がる(図 2)。以下の山地、丘陵、台地および断層については、植村(1999、2004)、経済企画庁(1972)、西山団研グループ(1967)にもとづき、地形図判読を行って記載した。図 3 の範囲の地形判読は1948年米軍撮影の空中写真による。

1)山地、丘陵、台地

西山山地は北摂山地の東縁にあたり、古生界の砂岩、泥岩、チャートなどの堆積岩類からなる。標高200~600mの山頂を連ね、その主稜線の西側は亀岡盆地、北摂地方の水系に含まれ、主稜線から京都盆地側の山麓丘陵までの水平距離は2km未満で短く、急斜面あるいは崖をなす。斜面を開析する谷の密度は高い。

丘陵は主要な山地に対して低く、開析のすすんだ頂部、尾根(背面)と谷の地形をなす。標高 55~160mまでの連続的な背面高度をなし、より低い台地や谷底の低地とは30~50mの比高がある。この地域の丘陵は更新統大阪層群の河成、湖沼成、海成の未固結堆積物からなり、山地斜面 と同様に丘陵を刻む開析谷の密度は高いが、ネットワークがより複雑で次数の高い谷がある。

台地は低地に対して一段高く、丘陵よりは低い、あまり開析されていない平坦面か緩斜面をなす地形を指す。大阪層群分布域でその上位の岩相層序単元を総称する用語に高位、中位、低位の各「段丘」という地形名称を含んでおり不都合だが、地域の地形区分として慣用されているので、ここでも植村(1999,2004)にしたがい、地形判読範囲の台地を高位段丘と中位段丘に分けた。地層としての高位段丘構成層は向日丘陵上や、西山山地の谷底の一部にも分布する。

高位段丘は、小畑川右岸の、標高50mの善峰川合流点付近から、上流部の標高110mに分布する。この領域では更新統中部の上部にあたる20~30万年前のおもに砂礫からなる高位段丘構成層が大阪層群の上に載る。台地にしては小畑川谷底側からの開析谷がよく発達しているが、丘陵地帯にくらべて背面高度はより連続的である。また上流区間に沿う高所ではあまり開析されていない。京都盆地では、中位段丘構成層の分布域は限られ、小畑川沿いでも狭い範囲にみとめられるらしいが、ここでは述べない。

低位段丘は、高位段丘面より相対的に一段低く、あまり開析されていない。概して約2万年前の最終氷期最寒冷期までに累重した堆積物で構成されるが、部分的には完新統に覆われる。丘陵地帯からの土砂流出で発達した沖積扇状地には、この段丘面と同時期に発達したと思われるものと、段丘面を覆っているように見えるロウブが観察される。なお台地の西山山地側に発達する沖積扇状地は開析が進んでおり、低位段丘に相当する沖積扇状地より古期の地形を含むと思われる。

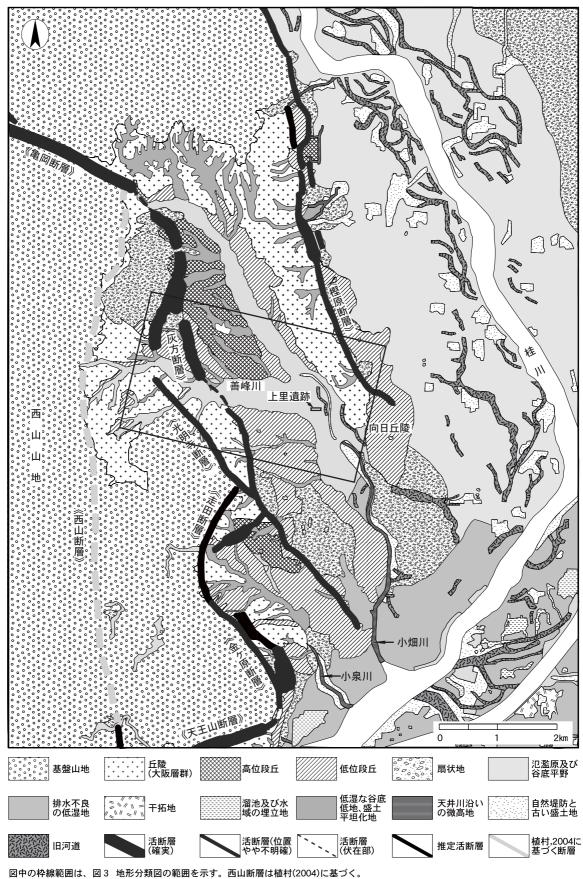


図2 調査地周辺の表層地質図(関西地盤活用協議会 2002年に基づき作成)

小畑川・善峰川合流点付近と上流側の左岸、向日丘陵の西縁に接して細長く分布し、同合流点下流側、右岸の丘陵寄り、さらに向日丘陵の東側にも分布する。また植村(前掲)は、西山団研グループ(1967)によって高位段丘礫層分布域とされていた灰方から椎ノ木川までの範囲を、降下年代が2万数千年前の姶良火山灰(AT)層や地形面の対比をふまえ、低位段丘と区分した。この領域を含めると、低位段丘は向日丘陵東側の標高20m付近から、灰方北西方の標高約100mまで比較的大きな高度分布を示す。

2)断層

この地域では、いわゆる西山断層帯の南東端部にあたり、いくつかの断層が山地、丘陵、台地および低地の地形境界をつくっている。桂川右岸の山地北縁には、亀岡盆地付近から南東に伸び、保津峡に斜交する神吉・越畑断層が、これにほぼ平行して南縁西寄りには、老ノ坂峠付近まで亀岡断層が伸びる。同山地東縁と向日丘陵の東縁に連続して樫原断層がはしる。いっぽう、老ノ坂峠から南方へ、天王山の西側をとおり、大阪府島本町付近までには西山断層が伸びる。同断層の北部4.5kmは、東側に隣接する西山丘陵との境をなす。西山丘陵の南で、山地が盆地側に張り出した前縁には、光明寺断層が南東-北西方向に伸び、灰方、大原野で丘陵・台地の境界付近をとおる灰方断層を介して西山断層、亀岡断層にななめに接続する。

神吉・越畑断層と亀岡断層は左横ずれ断層である。樫原断層、西山断層、光明寺断層、灰方断層は現地形の高い側が上昇する縦ずれ逆断層で、1000年あたり10~30数cmの垂直変位が推定されている。

3)河川と谷底平野

小畑川は、断層変位をともなう西山山地、丘陵の隆起と向日丘陵の橈曲向斜軸に制約され、善峰川は3本の断層と斜交しているが、右岸側の山地、丘陵、台地の張り出しの側縁をたどるという点で、ともに適従的な河川である。小畑川右岸にみられる高位段丘の開析谷の主軸が上述の河系ととくに不調和でなく、向日丘陵上に高位段丘堆積物が載ることから、現在みられる河系の配置は遅くとも、中位段丘層堆積期の約12、13万年以前に生じていたと考えられる。

小畑川と善峰川の集水域面積はそれぞれ略測で14km、11km、両川の合流点までの流路長は、7.4km、5.9kmである。後者は支流だが相対的に大きな流出量が想定される。また、両川合流地点より上流側の谷底平野の幅が約100m以下に狭まるまでの区間の流路勾配は、小畑川の旧流路をたどるように測ると約4.87km区間で約12‰、善峰川の現河道の3.56km区間でも約12‰で、本流・支流の流路勾配の差はあまりない。両川の上流域は、谷密度が高く、地表流が増えるため、降雨時の流出ピークは相対的に早く現れ、短時間に集中すると考えられる。

地形判読に用いた空中写真が撮影された1948年でも、河道はいちじるしく改変されているが、 両川沿いの氾濫原、谷底平野には完新世に生じた地形の特徴がみとめられる。小畑川谷底平野に は、かつて河床であったと思われる、谷幅の半分ほどを占める、低い帯状の領域がほぼ連続して みとめられ、それに沿って完新世段丘が分布する。善峰川合流地点のすぐ上流側ではやや断片的 だが、上流区間にはより幅広く、連続する段丘面がみとめられる。 善峰川の谷底にも、1~3段のごく低い崖で区分される段丘面がみとめられる。段丘崖の多くの部分は耕作地の境界と重複しているので、その造成にともなう切土、盛土の段差を誤認する可能性もあるが、谷をとおして数100m~1km以上連続する面は、過去の氾濫原面と解釈できる。

4) 善峰川谷底平野の完新世段丘

小畑川との合流点から、上流側へ約6km、光明寺断層(西分岐)と流路が交差する灰方の南にあたる標高約70mまでの区間では、谷底の幅は500~200mで比較的広い。小塩川合流点より下流側では、谷底の南寄りに完新世に発達したと考えられるもっとも高い河成段丘面(HHT)が6~10%前後の勾配で分布する。この面に対比される上流側の地形面は、灰方の南の左岸から、勾配を増しつつ、社家川の合流点をこえて、さらに上流の本流沿いに分布する。

小塩川合流点付近より下流側では、この中をもっとも新しい河床が谷底の北寄りを狭く伸びている。現河床に隣接する1・2段の狭い段丘面はおよそ連続するが、小塩川合流点付近では、同川谷口の堆積地形面と段丘面の切り合いがやや錯綜している。下流区間にくらべて氾濫原面(段丘面)が広いのは、小塩川、社家川の合流で増加するこの区間の流量・土砂供給量にたいして、河床勾配の平衡を保つために、河川が側方侵食で応答したことを示唆する。より下流の区間は、流路幅・深さ比が小さい流送区間とみなせる。石見から小塩川合流点付近までの上流約1km区間は、耕作地への水がかりのためか、より高い段丘面に水路が付け替えられたように見える。

HHT面には、いくつかの傾斜変換線や段差状、溝状の起伏がみとめられる。標高60m付近では、より新しい河床、氾濫原の発達で元の氾濫原面は失われているが、流出土砂の堆積面が、狭隘な谷底の急斜面から、より幅広い谷底に出たところで勾配を減じるような傾斜変換線が想定される。その下流側の標高50m付近では比較的明瞭な段差と勾配の変化がみとめられる。段差は北西 - 南東方向に伸び、すでに述べた光明寺断層(東分岐)に影響されたものと考えられるが、推定されている断層の延長よりも約200m下流側にずれる。その北東に接して石見の集落が段丘崖に沿って数100m伸び、その分布域はわずかに高いが、最近の流路の両側で高まり、段丘崖の起伏を覆っている部分があるので、河道改変後、善峰川の破堤堆積物で生じた微高地(クレバス・スプレー)と考えられる。またこの付近から下流側で、HHT面の南辺部には、南側の低位段丘との境界に沿って小畑川の氾濫原まで、わずかに低い流路状の凹地が続いている。上里遺跡の西縁にあたる標高43m付近から下流側では、わずかに勾配が増し、2・3の流路状の凹地が集合したような領域が、HHT面の傾斜方向とは異なり、北東方向(すなわち小畑川・善峰川合流点下流側の氾濫原方向)に開いている。いっぽう、16・18・19次調査区にあたる部分では、調査区の伸びとわずかに斜交し、東向きに伸びる流路状の凹地がみとめられ、先に述べたHHT面南辺の流路状凹地とともに小畑川右岸氾濫原の縁辺で切られている。

このHHT面と小畑川氾濫原との境界には、段丘崖状の高さ1・2mの段差があり、小畑川との合流点から約300m上流地点にあたる、低位段丘の先端付近から下流南東方向に、今里北方約400m付近の小畑川河岸まで伸びる。小畑川氾濫原から侵食されたようにゆるやかな凹形をなす長さ100~200mの弧状の崖が直線的に連続する。しかし、この崖は発掘調査でも明らかにされたが、

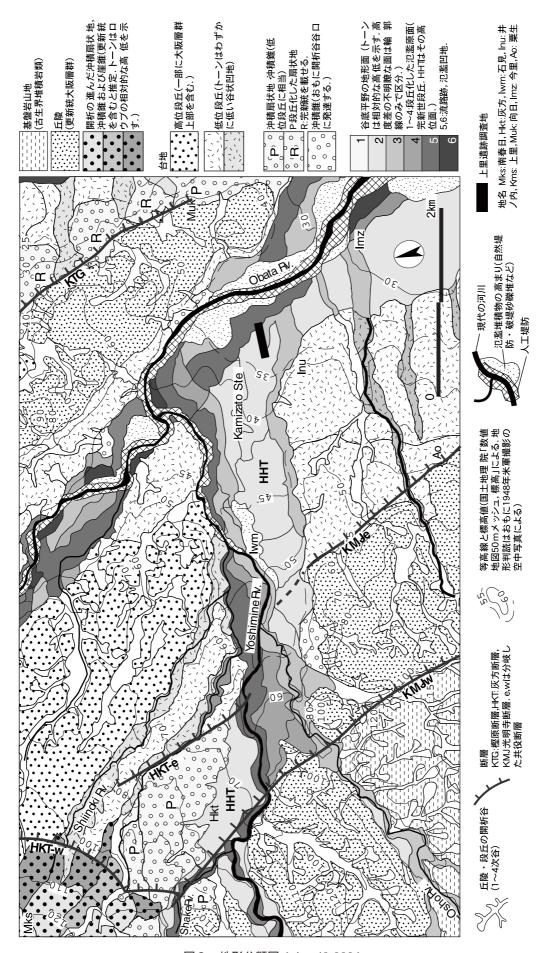


図3 地形分類図(1:40,000)

切土によって自然の形状が失われている。現在の崖面の東側約2.5mの位置で、中近世耕作土直下の小畑川氾濫原の堆積物が、縄文時代前期頃の堆積物(後述する)を侵食し累重しており、その境界が元の崖の位置を示唆している。

5) 完新世段丘構成層の堆積相と推測される堆積状況

発掘調査によって、弥生時代前期および縄文時代晩期遺構の基盤堆積物と、上述の高さ約3mの崖面を切るトレンチ(I・II区境界)で、現状のHHTを構成する堆積物の累重が観察できた。理想的には、その層序と地形を構成するアーキテクチャを知りたいが、ここでは掘削された範囲での議論にとどまる。およそ垂直的に上位層準より以下のような堆積相がみとめられた。堆積相の記載用語について原著を掲げないが、堆積学研究会編(1998)などを参照していただきたい。

- (1)砂質泥~泥質砂。水平層理をなし、内部構造は不明瞭な水平葉理か塊状で、中粒砂以細の砂が多くまじる。土壌生成がみとめられる。弥生時代前期遺構の基盤堆積物。
- (2)砂礫質泥。おおむね水平層理をなし、内部構造は水平葉理か塊状で、おもに中礫までの礫と砂を含む。最大層厚数10cmの砂礫や、礫1、2個分の厚みで大礫までの礫がほぼ水平に散布するレンズ状の層が挟まれる。弱い土壌生成がみとめられる。縄文時代晩期遺構の基盤堆積物。
- (3)大礫・中礫。泥質砂をマトリクスとするが礫支持。トラフ型およびプラナ型斜交層理、平行層理がみとめられる。厚さ数10cm~1 m、幅数m以上で幅広く分布し、トラフ型およびほぼ水平な平行層理がみとめられる。上面は起伏に富むとともに、(2)と側方で指交する層準がある。一部は縄文時代晩期遺構の基盤をなす。
- (4)砂礫。礫支持あるいは砂質泥をマトリクスする。深さ 1 m前後、幅数m以内で(2)・(3)に流路状に挟在し、不明瞭なトラフ型斜交層理・葉理をなす。
- (5)大礫・中礫を主とする礫。トラフ型斜交層理・葉理をなす。砂質泥をマトリクスとするが礫支持で、ところにより礫支持の粗粒の中礫~細礫をレンズ状に挟む所があるほか、逆級化成層もみとめれる。厚さ数10cm以下、幅数m以下で分布し、(6)と互層する。
- (6)砂質泥。厚さ数10cm以下、側方へはおそらく幅数m以下で浅い流路状か凹地状に広がり、内部構造は水平葉理あるいは下位堆積物(泥マトリクスの砂礫)の起伏に沿った葉理をなす。植物片や分解した有機物を含む。(5)と互層し、その凹部を埋めるような部分が多い。(5)・(6)は年代測定の結果、縄文時代前期末(約5,600年前)の堆積物と判明している。

堆積相(1)からは、主流路氾濫時の懸濁流で運ばれた堆積物で、谷底平野が頻繁に冠水して累重し、堆積後大気下の地表面となったと推測される。この堆積物をもたらした氾濫は、小畑川、善峰川の両川、あるいは小畑川の氾濫による可能性がある。(2)からは、堆積物重力流による泥主体の土石流の堆積物が推定される。善峰川流域からの流出が想定される。上流側ほどさらに礫が増えるかもしれない。(3)からは、水流(掃流)といわゆるハイパーコンセントレイテッド流(土石流になっていないが礫どうしが衝突して流れる)による、善峰川の急激な土砂流出を示すと考えられる。(4)は、より広範囲な流出の際に水流と運搬堆積物が部分的に下位堆積物を溝状に削って即時に充填したスカー・アンド・フィル構造と考えられ、(2)・(3)にはふつうにともなう。堆積相

(5)のトラフ型斜交層理から知られる古流向は、北から南方向で、(6)とともに小畑川の氾濫堆積物と考えられる。高流出時に網状流が生じ、複数の礫州を発達させ、平水時にそれらに挟まれた凹部に泥が溜まるような河床が推測される。

6)堆積相から推測される地形発達

上述の崖面の下部、標高31.5m付近までに堆積相(5)・(6)の堆積物が累重し、その上位に(4)~(1)が載る。このうち(4)~(2)については堆積相と、すでに述べたHHT面の起伏から、その段丘化以前の谷底における主要な地形営力は、狭隘な谷から広い谷底への土石流(堆積物密度流)、掃流などによる土砂流出で、沖積扇状地の地形発達といえる。これは1本の澪筋をもつ主流路とそれに隣接した氾濫原からなる自然堤防帯の堆積様式とは異なり、基本的には複数のロウブの発達場所の移動や重複によって発達した地形である。下位層準の小畑川河床堆積物の年代から、HHT構成層は縄文時代前期末以後、おそらく縄文時代中期から後期を中心に堆積したと考えられる。活発な土砂流出の時代とみなせる。

堆積相(2)~(4)の堆積物は、標高31.5mから高い場所では33m付近までの累重を構成する。この上面付近で、縄文時代晩期(滋賀里 a式期)の人間活動が可能であったことから、同期にはすでに扇状地性谷底面を流下する善峰川の河床はいくぶんか下刻と側方侵食によって段丘化していたと考えられる。ただし、後述するように、この面に発達した蛇行流路の充填堆積物や、弥生時代前期遺構の基盤堆積物の堆積相(1)からみて、善峰川、小畑川の両川、あるいはそのいずれかの氾濫によって、河床の粗粒堆積物をほとんど堆積させないまでも、冠水し泥質堆積物に覆われる状況がみとめられることから、その河床低下はさほど顕著ではなかったと推測できる。現在の河道近傍の最も低い氾濫原との比高は調査地付近では2m以下と推定され、弥生時代前期遺構の基盤の一部に礫層が分布し、発生頻度の低い大規模な流出では段丘面にも氾濫堆積がおよんだことが了解される。いずれにせよ、縄文時代中期から後期と縄文時代晩期以後の谷底における河成地形プロセスはいちじるしく変化した。河川が谷底面を下刻し段丘化させる要因には、堆積作用や隆起による谷底面の上昇に対する河川の平衡化、流出土砂の減少、下流区間あるいは本流の局地的な河床低下、内陸の河川におよぶ海水準低下の影響などが考えられる。

7)縄文時代晩期の蛇行流路

離水・段丘化が始まったと考えられる縄文時代晩期の遺構検出面で、18・19次調査区を西から東に流下した蛇行流路の跡が検出された。縄文時代晩期の遺構・遺物を含む充填堆積物で示される流路横断面形状と、模式的な流路縦断面を図4に示す。流路幅7~12m、蛇行波長は45~60m、1波長あたりの直線距離にたいする流路長の比(屈曲度)は1.5~1.7、流路勾配は約8‰であった。未固結堆積物を侵食して形成された穿入蛇行流路で、流路底の深度は蛇行流路でふつうにみられるように、湾曲の下流寄りで深く、次の反転する湾曲区間への移行部分で浅くなる傾向がみとめられた。凹岸が急傾斜であるのにたいし、凸岸の侵食斜面はひじょうに緩やかなので、初期の振幅が小さく、浅い侵食流路から増幅、下刻された生育蛇行と考えられる。また、蛇行ループの顕著な下流側への移動の形跡はなかった。現地の検出状況では曲流の内側にあたる凸岸の充填

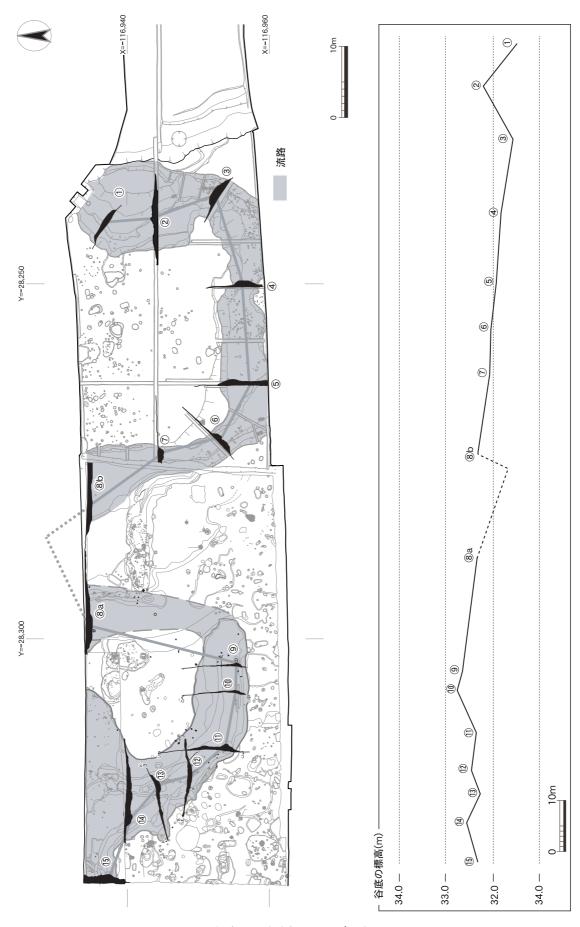


図4 調査区の流路断面および河床レベル図

堆積物や基盤上に目立ったポイント・バー堆積物は検出されていないが、掘削除去された充填堆 積物にポイント・バー堆積物が含まれていた可能性はある。基盤に含まれる礫がラグ堆積物とし て側壁と流路底に散布していた。大礫サイズより大きな礫は、基盤堆積物からの人為的な再堆積 か近傍からの搬入によると考えられる。縄文時代晩期の層準には遺物とともに、地表の掘削、擾 乱によって生じた偽礫が含まれ、密集する場所もあった。図4の流路横断面形は充填過程の一時 期の断面形(一部人工改変を含む)を示しており、もっとも下刻された流路底は各断面形のさら に下に想定しなければならない。そのことをふまえ、いくつかの地点で遺構・遺物検出層準より 下の流路底により近い堆積物を観察すると、砂あるいは礫質砂がみとめられた。それらは上方細 粒化し、より上位の泥質堆積物が累重する。未固結で凝集性が低く、比較的均質な堆積物を基盤 とする直線流路が、基準面低下によってストリームパワーを増し、蛇行流路に変化することは水 路実験によって確かめられている(たとえばSchumm et al. 1987)が、本遺跡の泥がちな堆積物 を基盤とする穿入蛇行流路では、荷重にたいして流量が増大し、流路深と曲流度が増加したとみ なせる (Schumm 1965)。このことはこの流路の下刻期には、谷底の氾濫流量が多く、頻繁に満 水流量を越えたレベルから排水されていた可能性が高い。流路充填堆積物は上方細粒化し、流量、 流速が減少していったことを示す。流路充填堆積物の下底付近から得られた試料の年代測定値は 約2900年であり、上位の遺構・遺物に富む層準の年代とほとんど差がないことから、流路は比較 的速く充填され、この河川活動の減衰期の地形・水文条件を人間が利用していたと考えられる。 扇状地性谷底平野の最下部にあたる調査地の流路では、通常間欠的にでも、地下水に涵養された 流水があり、増水時には細粒の砂や泥が流路下流側に懸濁して再堆積したと考えられる。

【引用文献】

関西地盤情報活用協議会 2002『新関西地盤-京都盆地-』196p.

西山団研グループ 1967「京都盆地南西 西山山麓の大阪層群」『地球科学』21 1-10p.

植村善博 1999『京都の地震環境』ナカニシヤ出版 pp.54-71.

経済企画庁 1972 『土地分類基本調査,地形・表層地質・土壌 京都西南部 5万分の1簿冊』61p. 表層地質図.

植村善博 2004「変異地形と地下構造からみた京都盆地の活断層」『京都歴史災害研究』2 7-28p.

堆積学研究会編 1998 『堆積学辞典』朝倉書店 470p.

Schumm, S.A (1969) River metamorphosis. *Journal of Hydraulics Division American Society of Civil Engineers*. 95(HY1), 255–273.

Schumm, S.A., Mosley, M.P., and Weaver, W.E. (1987) Experimental Fluvial Geomorphology. pp.238–250.

3 歴史的環境

上里遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。先述の通り、当地は桂川右岸の乙訓地域に属しており、その中央に北から張り出す向日丘陵の西部域にあたる。以下、当遺跡を取り巻く遺跡の状況を、縄文時代に重点を置きつつ、時代を追って概観する(図5、表1)。

旧石器時代 当該地に於ける最も古いヒトの痕跡は、今から約3万年前以降の後期旧石器時代の頃である。各地点で石器の出土あるいは採集資料が確認されているものの、いずれも遺構に伴うものではない。上里遺跡(1)内の西部に位置する頭本遺跡(2)ではサヌカイト製ナイフ形石器が、南方の今里遺跡(8)ではサヌカイト製のナイフ形石器・縦長剥片・翼状剥片、チャート製の縦長剥片などが採集されている。また、西方の西山山地東麓の大原野神社遺跡ではチャート製の有舌尖頭器、北方の大枝遺跡(4)ではナイフ形石器、石核などの出土が知られる。

縄文時代 上里遺跡の東方の殿長遺跡(7)、南方の今里遺跡、東代遺跡(29)、伊賀寺遺跡 (18)、下海印寺遺跡(15)、西方の大原野南春日町片山遺跡などで、後世の遺構や包含層などか ら有茎尖頭器が出土・採取されている。土器は共伴しないものの、草創期と考えられている。早 期では下海印寺遺跡で楕円押型文(高山寺式)の土器片が出土した。このほか、異形局部磨製石 鏃が伊賀寺遺跡と硲遺跡で出土し、上里遺跡でも採集されている。前期では開田遺跡(13)や水 垂遺跡などで土器片、井ノ内遺跡(21)・今里遺跡・神足遺跡(14)などで石匙が出土している。 また、南栗ヶ塚遺跡では、2009年度調査(R955)で竪穴住居1棟と隣接した窪地に廃棄された多 量の遺物が検出され、前期後半(北白川下層 a式~大歳山式)の良好な資料が得られた。中期 には下海印寺遺跡、伊賀寺遺跡、友岡遺跡(31) 硲遺跡など、上里遺跡の南方域や小泉川流域で の遺構・遺物の検出が顕著になる。友岡遺跡では中期前葉から中葉(船元 ~ 式)の土器・石 器が段丘斜面に廃棄された状態で大量に出土した(R325)。近辺に集落が広がることが期待され る。伊賀寺遺跡では中期末(北白川 C式)の方形の竪穴住居 6棟や土坑を検出、このうち 1棟の 竪穴住居には中央に石囲炉が設けられていた(R927)。小泉川左岸の河岸段丘上に当該期の集落 が営まれていたことが明らかになっている。上里遺跡でも同時期の土坑が2基検出されている (11次調査・R830)。後期には中期末に引き続き、小畑川右岸の上里遺跡・井ノ内遺跡、小泉川左 岸の下海印寺遺跡・伊賀寺遺跡・硲遺跡などに加え、小畑川のやや下流域の開田遺跡 (13)・開田 城ノ内遺跡(11)・神足遺跡(14)や向日丘陵東側の鶏冠井遺跡(16)・鶏冠井清水遺跡・石田遺 跡(17)・森本遺跡(19)などで遺構・遺物が検出されており、遺跡が増加する傾向が看取できる。 上里遺跡では前半(北白川上層式)の土坑が3基あり、そのうちの1基は住居の炉跡である可能 性がある(3次調査・R25)。井ノ内遺跡でも同時期の床面中央に炉をもつ竪穴住居1棟(R235) や土坑が検出された。伊賀寺遺跡では後半(元住吉山式)の竪穴住居が2棟と土壙墓のほかに、 複数の人骨を焼いて納めた火葬墓を2基検出した(R943)。また、これらの東側の調査(R975) では同時期の土器・石器などとともに碧玉の玉の未成品や破片が多く出土しており、碧玉の玉造 りが行われていたことが明らかになっている。

るこの日遺跡では末葉(宮滝式)の土坑を数基検出し、

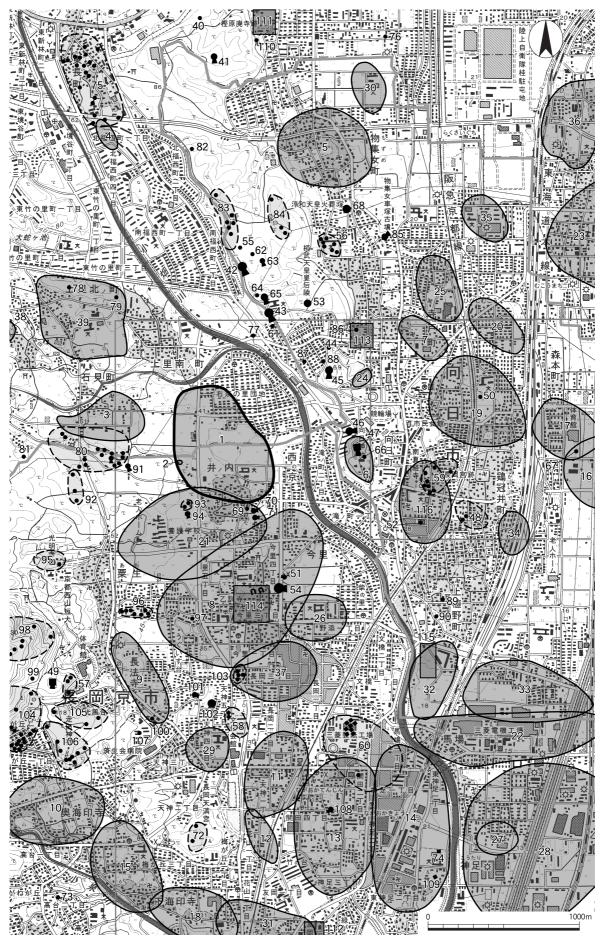


図5 周辺の遺跡分布図(1:25,000)

表 1 周辺の遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 種類 | 主な時代 | 番号 | 遺跡名 | 種類 | 主な時代 |
|----|----------|------|-------------|-----|-----------|-----|---------|
| 1 | 上里遺跡 | 集落 | 縄文~中世 | 59 | 山畑古墳群 | 古墳群 | 古墳中期~後期 |
| 2 | 頭本遺跡 | 散布地 | 旧石器 | 60 | 開田古墳群 | 古墳群 | 古墳中期~後期 |
| 3 | 大原野石見町遺跡 | 散布地 | 旧石器、縄文~古墳 | 61 | 大原野東野町古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 4 | 大枝遺跡 | 散布地 | 旧石器、縄文前期 | 62 | 芝山1号墳 | 古墳 | 古墳 |
| 5 | 中海道遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文晩期~中世 | 63 | 芝山2号墳 | 古墳 | 古墳 |
| 6 | 北山遺跡 | 集落 | 旧石器、弥生中期~後期 | 64 | 芝山3号墳 | 古墳 | 古墳 |
| 7 | 殿長遺跡 | 集落 | 旧石器~中世 | 65 | 芝山4号墳 | 古墳 | 古墳 |
| 8 | 今里遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文中期~近世 | 66 | 稲荷社古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 9 | 長法寺遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文~平安 | 67 | 狐山古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 10 | 奥海印寺遺跡 | 散布地 | 旧石器、縄文 | 68 | 丸塚山古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 11 | 開田城ノ内遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文後期~近世 | 69 | 南内畑古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 12 | 十三遺跡 | 散布地 | 旧石器、縄文中期~晩期 | 70 | 下東ノロ古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 13 | 開田遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文~古墳 | 71 | 親王御塚古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 14 | 神足遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文後期~ | 72 | 天神山古墳群 | 古墳群 | 古墳 |
| 15 | 下海印寺遺跡 | 集落 | 旧石器、縄文~古墳 | 73 | 塚穴ノ前古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 16 | 鶏冠井遺跡 | 集落 | 縄文中期~古墳前期 | 74 | 丸薮古墳 | 古墳 | 古墳 |
| 17 | 石田遺跡 | 集落 | 縄文中期~弥生後期 | 75 | 福西古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 18 | 伊賀寺遺跡 | 集落 | 縄文~中世 | 76 | 三重古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 19 | 森本遺跡 | 集落 | 縄文後期~古墳 | 77 | 牛廻り古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 20 | 渋川遺跡 | 集落 | 縄文後期~古墳前期 | 78 | 石見上里古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 21 | 井ノ内遺跡 | 集落 | 縄文後期~中世 | 79 | 鏡山古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 22 | 馬場遺跡 | 集落 | 縄文後期~古墳中期 | 80 | 芝古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 23 | 中久世遺跡 | 集落 | 縄文晩期~中世 | 81 | 向鉢伏古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 24 | 中野遺跡 | 集落 | 縄文晩期~古墳 | 82 | 長野古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 25 | 笹屋遺跡 | 集落 | 縄文晩期~古墳後期 | 83 | 東山古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 26 | 今里北ノ町遺跡 | 散布地 | 縄文晩期~古墳後期 | 84 | 長野丙古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 27 | 芝本遺跡 | 散布地 | 縄文晩期 | 85 | 物集女車塚古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 28 | 雲宮遺跡 | 集落 | 縄文晩期~飛鳥 | 86 | 西垣内古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 29 | 東代遺跡 | 集落 | 縄文~平安時代 | 87 | 大牧 1 号墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 30 | 西ノ岡遺跡 | 集落 | 縄文~中世 | 88 | 大牧 2 号墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 31 | 友岡遺跡 | 集落 | 縄文~近世 | 89 | 西小路古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 32 | 吉備寺遺跡 | 集落 | 弥生前期~中世 | 90 | 南小路古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 33 | 鴨田遺跡 | 集落 | 弥生前期~古墳後期 | 91 | 井ノ内車塚古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 34 | 沢ノ西遺跡 | 集落 | 弥生中期~後期 | 92 | 北平尾古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 35 | 修理式遺跡 | 集落 | 弥生後期~古墳前期 | 93 | 井ノ内古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 36 | 上久世遺跡 | 集落 | 弥生~古墳 | 94 | 井ノ内稲荷塚古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 37 | 陶器町遺跡 | 集落 | 弥生~奈良 | 95 | 光明寺古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 38 | 上里北ノ町遺跡 | 散布地 | 古墳~室町 | 96 | 長法寺七ツ塚古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 39 | 大原野松本遺跡 | 集落 | 奈良時代 | 97 | 薬師堂古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 40 | 百々池古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 98 | 南原古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 41 | 一本松塚古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 99 | 堂ノ上古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 42 | 寺戸大塚古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 100 | 力池古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 43 | 妙見山古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 101 | 細塚古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 44 | 芝山ノ内古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 102 | 今里大塚古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 45 | 五塚原古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 103 | 舞塚古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 46 | 北山古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 104 | 大原古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 47 | 元稲荷古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 105 | 稲荷山古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 48 | 南開遺跡 | 古墳群? | 古墳前期 | 106 | 走田古墳群 | 古墳群 | 古墳後期 |
| 49 | 長法寺南原古墳 | 古墳 | 古墳前期 | 107 | 南平尾古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 50 | 山開古墳 | 古墳 | 古墳中期 | 108 | 塚本古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 51 | 今里庄ノ渕古墳 | 古墳 | 古墳中期 | 109 | 神足古墳 | 古墳 | 古墳後期 |
| 52 | 御塔道古墳 | 古墳 | 古墳中期 | 110 | 権現原古墳 | 墓 | 古墳後期 |
| 53 | 伝高畠陵古墳 | 古墳 | 古墳中期 | 111 | 樫原廃寺 | 寺院 | 飛鳥 |
| 54 | 今里車塚古墳 | 古墳 | 古墳中期 | 112 | 鞆岡廃寺 | 寺院 | 飛鳥~平安 |
| 55 | 恵美須山古墳 | 古墳 | 古墳中期 | 113 | 宝菩提院廃寺 | 寺院 | 飛鳥 |
| 56 | 南条古墳群 | 古墳群 | 古墳中期 | 114 | 乙訓寺旧境内遺跡 | 寺院 | 飛鳥~ |
| 57 | 南原東古墳群 | 古墳 | 古墳中期 | 115 | 吉備寺廃寺 | 寺院 | 奈良~平安 |
| 58 | 宇津久志古墳群 | 古墳群 | 古墳中期 | 116 | 鶏冠井山畑遺跡 | 官衙? | 奈良 |

なかには竪穴住居と考えられるものもある(L525)。続く晩期前半には遺構・遺物を検出する遺跡数がやや減少する傾向がみられるが、上里遺跡の東半部で竪穴住居を中心とする集落(滋賀里式~篠原式)が明らかになっているほか、鶏冠井遺跡、石田遺跡などがあり、中野遺跡(24)でも竪穴住居が検出されている。晩期後半には再び増加するようであるが、土坑や土器棺墓が個別に検出される例がほとんどで、住居など集落を構成する遺跡はこれまで確認されていない。

弥生時代 北九州から瀬戸内海を経て、大阪湾から淀川を遡って稲作文化が伝播する。前期の遺跡では乙訓地域で最も古いと考えられる雲宮遺跡(28)がある。集落を囲む環濠と考えられる溝が少なくとも2条検出されている($1216 \cdot 407$)。この遺跡を起点として支流沿いに遡上する経路で乙訓地域内に弥生文化が広がったとみられる。上里遺跡東半部でもやや遅れて、縄文時代晩期前半の遺構群の分布域とほぼ重なる箇所で竪穴住居と多数の柱穴を中心とする集落の存在が明らかになっている。ほかには鴨田遺跡(33),開田遺跡、水垂遺跡などがあり、鶏冠井遺跡では中期にかけての流路から石製の銅鐸鋳型破片が出土し(182)、鶏冠井の集落内で銅鐸が制作されていたことが明らかになった。中期には多数の竪穴住居や方形周溝墓が検出された神足遺跡、竪穴住居を中心とする段丘上の居住域(182)の東に水田に伴う用水路が検出された(182)。森本遺跡、ほかに上久世遺跡(1820),中久世遺跡(1822)、鶏冠井遺跡、北山遺跡(1823)。森本遺跡、南栗ケ塚遺跡、下植野南遺跡などがあり、土坑や方形周溝墓などが検出されている。後期には中期から続くものに加え、中海道遺跡、西ノ岡遺跡(1823)。東土川西遺跡、谷山遺跡、長法寺遺跡(1824)などで集落を構成する竪穴住居などが検出されている。

古墳時代 当該地域の首長墓は、まず向日丘陵を中心に展開する。これまで前期の段階では、前方後方墳である元稲荷古墳(47)前方後円墳の五塚原古墳(45)寺戸大塚古墳(42)妙見山古墳(43)の順と考えられていたが、近年各墳で調査が進められ、墳丘施設や出土する埴輪などの様相が明らかになってきており、再考の余地がありそうである。少し遅れて乙訓地域北方の樫原では一本松塚古墳(41)・百々池古墳(40)の系譜、同地域南方の長岡京・大山崎では長法寺南原古墳(49)・鳥居前古墳の系譜がみられる。中期の古墳は長岡京域に重なって築かれたものが多く、造営に伴い削平された古墳が調査で複数検出されている。今里車塚古墳(54)今里庄ノ渕古墳(51)御塔道古墳(52)や方墳を主体とした宇津久志古墳群(58)・開田古墳群(60)円墳が主体の山畑古墳群(59)などである。後期古墳は主として向日丘陵上や西山山地の東麓に築かれた群集墳である。首長墓の系譜を引くものとしては物集女車塚古墳(85)今里大塚古墳(102)などがあげられる。後期の群集墳は、小型の前方後円墳を含む芝古墳群(80)が西側に展開するほか、北に福西古墳群(75)西から南の西山山地東麓に多くの古墳群が築かれる。

集落は、弥生時代後期から継続するものがほとんどであるが、前期には鴨田遺跡(33)や馬場遺跡(22) 中期から後期には上里遺跡・井ノ内遺跡・神足遺跡・殿長遺跡などで顕著に検出例が報告されている。南方の水垂遺跡では古墳時代の集落と水田跡が良好に検出されている。

飛鳥時代・奈良時代 飛鳥時代以降、当地域でも樫原廃寺 (111)・鞆岡廃寺 (112)・宝菩提院 廃寺 (113)・乙訓寺旧境内遺跡 (114) など寺院の造営が開始される。樫原廃寺では八角形の瓦 積みの塔基壇など、宝菩提院廃寺では国内最古の湯屋遺構や建物・井戸などが検出された。乙訓寺旧境内遺跡では講堂に推定される複廊をもつ大規模な礎石建物や平窯などが検出されている。 また、鶏冠井山畑遺跡 (116) では長岡宮朝堂院跡の下層で奈良時代の大型掘立柱建物などが検出され、乙訓郡衙の候補地とされている。

そして、延暦三年(784)の長岡京遷都を迎えることになるのである。

4 遺跡周辺の既往調査

遺跡周辺では、長岡京期をはじめ、それ以前および平安時代以降の遺構に対する調査が行われており、多くの成果が上がっている。検出された遺構や遺物の概要を時代ごとにまとめて述べる。上里遺跡内の調査については表2に示した調査次数で、周辺の調査については長岡京連絡協議会において与えられた長岡京跡に対する調査次数で示す(図6)

縄文時代 中期から晩期の遺構が検出されている。11次調査では土坑2基が検出され、中期末の深鉢が出土している。2・3次調査では後期の土坑3基があり、その内の1基は壁面が赤く焼けていることから竪穴住居の炉になる可能性が指摘されている。遺跡の東部で行った16・18・19次調査(本報告)では晩期前半の集落の存在が明らかとなった。竪穴住居10棟、土器棺墓26基、土壙墓4基などを検出し、集落内を区画するような大規模な流路状遺構を2条検出している。この流路状遺構からは大量の土器や石器だけではなく、食物残滓とみられる炭化した穀類・堅果類や動物骨片なども多く出土し、当時の食生活や自然環境の復元の手掛かりとして注目されている。遺跡西部の13次調査(本報告)では晩期後葉の土器棺墓3基や土坑6基などを検出した。同じ晩期でも新しい時期の遺構は遺跡の西側で営まれたとみられる。その他に、早期の押型文土器片が遺跡外東方のR547-北調査で、後期の土器や石匙が南の井ノ内遺跡のR21-4調査、晩期後半の突帯文土器や小型石棒が北西・大原野石見町遺跡のR746調査などで出土している。

弥生時代 2・3次調査では土坑、16次調査では土器棺墓4基や土坑など18次調査では竪穴住居1棟や土器棺墓2基、溝、炉、土坑など、19次調査では竪穴住居6棟、土器棺墓1基、掘立柱建物、土坑、多数の柱穴などが検出され、前期第 様式中から新段階の集落が遺跡の東半部に広がることが明らかになってきた。遺跡外の東側のR584調査やR547-北調査では前期の遺物を含む自然流路が検出されている。中期の集落は明らかではないが、13次調査で方形周溝墓1基、R285-A・R310-C調査やR48調査で方形周溝墓の溝とみられる遺構が検出されており、中期の墓域が確認されている。特に13次調査の方形周溝墓の溝から出土した土器群は、中期後半の一括資料とされ、重要である。後期の土坑はR547-北調査で検出された。弥生時代の自然流路はR746調査・R775調査においても、北西から南東または西から東へという地形に沿った方向で検出され、起伏のあった地形が想定できる。

古墳時代 R746調査では前期の自然流路や溝が検出されている。中期の遺構はR547-北調査で検出された素掘りの井戸がある。土師器高杯3個体と緑色凝灰岩製管玉1点、先端をとがらせた石製の棒1本が出土し、何らかの祭祀が行われたと考えられている。13~15次調査では、5世紀

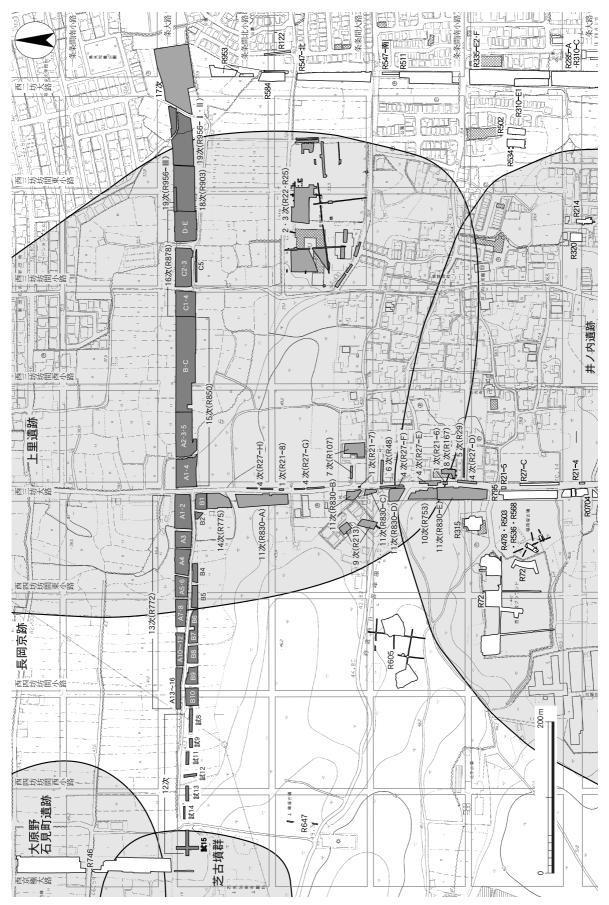


図6 上里遺跡既往調査地点図(1:5,000)

表 2 上里遺跡調査一覧表

| 女 | 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | | | | | | 16 | 17 | | | | | | | | | | |
|-----------|---------------------------------------|------------------------------|-----------------------|------------------------------|-----------------------|--|-----------------------|------------------------|-------------------------|---------------------------------------|---|------------------------------------|---|-----------------------------------|---|---|------------------------------|---|---|
| ¥ | | | 4 | (1) | | 17.7 | | , , | | | <u> </u> | - | _ | <u> </u> | 1 | | | 1 | |
| 平安時代以降 | 平安末~鎌倉:南北溝 | **· 丰士 *** - 孙氏 | | 平安:南北溝。中世:南北溝 | 平安前期:井戸、鎌倉:溝、土坑 | 鎌倉:溝、土坑 | 中世:溝、土坑 | 難: 単中 | 遺物のみ | 平安:土坑。中世:東西溝、土坑。 時期不明:総柱建物1棟 | 平安:溝 | | 平安:掘立柱建物4棟、柵列。 中世:東西溝、柵列、耕作溝 | 遺物のみ | 難: 糾中 | 製: | | 中世:耕作溝 | 鎌倉:据立柱建物1棟 |
| 長岡京期 | 土坑 | 掘立柱建物6棟、足場跡、塀跡3列、溝、 | 土坑 | 遺物のみ | 遺物のみ | | 遺物のみ | 遺物のみ | 東西溝 | 遺物のみ | | 出。発掘調査へ | 一条大路南側溝、西三坊大路西側溝、掘 立柱建物 4 棟、井戸、柵列、木棺墓 | 西三坊大路西側溝・築地・内溝、掘立柱 建物、柵列、門、区画溝 | 掘立柱建物10棟、井戸、柵、土坑、溝、 河川、一条大路南側溝・築地 | 一条大路南侧溝・築地、掘立柱建物 5 棟、柵列、西三坊坊間小路東側溝・西側溝 | | 一条大路南側溝・築地・内溝、西三坊坊 間東小路東側溝・西側溝、掘立柱建物 2 棟、暗渠、造営期整地層、溝、土坑など | 一条大路南側溝・築地、内溝、造営期整 地層、一条大路・西三坊坊間東小路交差 点 |
| 奈良時代以前 | 遺構なし。縄文後期:土器・石器出土 | 縄文後期:土坑(炉?)。弥生前期:土坑。古墳:旧流路(化 | 西~南東)、土坑。奈良:杭護岸溝、石敷遺構 | 古墳後期:竪穴住居1棟、土坑。奈良:溝 | 古墳後期:土坑3基、溝1条 | 弥生中期:溝(方形周溝墓か)、土坑。古墳後期:焼土(竪穴 住居か)、土坑、柱穴状遺構。「平安神宮火山灰層」検出 | 古墳後期:土壙墓3基、土坑1基、溝 | 古墳後期:土坑。奈良:掘立柱建物2棟、東西溝 | 顕著な遺構なし | 古墳後期:竪穴住居1棟、土坑、柱穴。古墳後期以降: 掘立 柱建物1棟 | 網文中期:土坑2基。古墳後期:竪穴住居2基、土壙墓?、 掘立柱建物1棟。奈良後半:溝 | 東半の1~6トレンチで長岡京期を中心とする遺構・遺物検出。発掘調査へ | 網文晚期: 土器棺墓3基、土坑6基。弥生: 方形周溝墓1基, 溝、流路。古墳: 竪穴住居15棟、掘立柱建物3棟、溝、土坑 | 縄文~弥生:石器出土。古墳後期:攝立柱建物 6 棟、柵、溝 | 古墳中期~後期:竪穴住居 9 棟、捆立柱建物 7 棟、溝、土坑、 河川 (韓式系土器)。 奈良:土坑 | 縄文晩期:竪穴住居8棟、土器棺墓6基、土壙墓3基、土坑 など。弥生前期:土器棺墓4基、土坑など。古墳:溝 | GL-0.25m以下は河川の氾濫堆積のため、遺構残存せず | 縄文晩期:竪穴住居1棟、土器棺墓18基、流路状遺構1条、溝1条、炉など。弥生前期:竪穴住居1棟、土器棺墓2基、溝、炉など。奈良以前:溝 | 縄文晩期:竪穴住居2棟、土器棺墓3基、土坑、柱穴、流路 状遺構、集石遺構、配石遺構。弥生前期:竪穴住居5棟、土 器棺墓1基、掘立柱建物1棟、柱穴列、焼土痕、土坑。奈良 以前:溝 |
| 調査機関 | 京府教 | 長市教 | 長十奏 | 京府教 | 長発研 | 長発研 | 京府セ | 長市セ | 長市教 | 京府七 | 京府セ | 京市研 | 京市研 | 京市研 | 京市研 | 京市研 | 京市保 | 京市研 | 京市研 |
| 調査期間 | $1978.11.20 \sim$ 12.27 | $1979.2.7 \sim$ 3.5 | $1979.4.2 \sim$ 9.22 | $1979.6.18 \sim$ $1980.3.31$ | $1980.2.15 \sim$ 3.15 | $1980.9.12 \sim$ 10.14 | $1982.7.20 \sim 10.2$ | 1984.6.27~ 7.20 | $1985.11.25 \sim$ 12.24 | $1992.12.11 \sim 1993.2.21$ | $1994.7.26 \sim 1995.3.9$ | $2001.11.26 \sim 2002.1.25$ | $2003.1.6 \sim 8.6$ | $2003.5.22 \sim$ 8.12 | $2005.6.17 \sim$ $2006.6.9$ | 2006.6.12~ 2007.3.16 | 2007.3.22 | $2007.4.16 \sim$ $2008.1.10$ | $2009.3.16 \sim 11.10$ |
| 所在地 | 長岡京市井ノ内南内畑 ・小西・広海道・西広 海道・西ノロ | 長岡京市井ノ内玉ノ上・ | 北裏(長岡第十小学校) | 長岡京市井ノ内ほか | 長岡京市井ノ内広海道 | 長岡京市井ノ内西ノロ | 長岡京市井ノ内西ノロ | 長岡京市井ノ内広海道 | 長岡京市井ノ内頭本 | | 長岡京市井ノ内頭本・ 広海道 | 京都市西京区大原野石 | 見町地内 | 京都市西京区大原野石 見町地内 | 京都市西京区大原野上 里南ノ町地内・長岡京 市井ノ内北襄 | 京都市西京区大原野上 里南ノ町地内・長岡京 市井ノ内北裏 | 京都市西京区大原野上 里鳥見町 | 京都市西京区大原野上 里南 / 町地内 | 京都市西京区大原野上 里南ノ町地内 |
| 長岡京跡条坊 | 右京二条三坊 十三~十五町 | 右京二条三坊 | 古 声 | 右京二条三坊十三~十六町 | 右京二条三坊 十四町 | 右京二条三坊 十四町 | 右京二条三坊 十五町 | 右京二条三坊 十四町 | 右京二条四坊 二・三町 | 右京二条四坊 三町 | 右京二条四坊一一一四町 | 右京二条四坊 | 一・八・九町 | 右京二条四坊 一町 | 右京二条三坊 九・十六町 | 右京二条三坊 八・九町 | 右京二条三坊 一町 | 右京二条三坊 一•八町 | 右京二条三坊一・八町 |
| 長岡京 次数 | R21 | R 22 | R25 | R27 | R 29 | R48 | R107 | R167 | R213 | R753 | R830 | , C | K112 | R775 | R850 | R878 | ı | R903 | R 956 |
| 次数 | 1 | 2 | 60 | 4 | rc. | 9 | 2 | ∞ | 6 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |

※ 長岡京次数は長岡京連絡協議会における長岡京跡に対する調査次数である。 ※ 調査機関については以下のように略して表記した。京都府教育委員会=京府教、長岡京市教育委員会=長市教、長岡第十小学校発掘調査委員会=長十委、長岡京跡発掘調査研究所=長発研、 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター=京府セ、(財) 長岡京市埋蔵文化財センター=長市セ、(財) 京都市埋蔵文化財研究所=京市研、京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課=京市保 ※ 文献は【上里遺跡調査関連文献】の番号と一致する。

- 17 -

末の竪穴住居、6世紀後半の方形総柱の掘立柱建物、6世紀末から7世紀初の掘立柱建物、溝、土坑などが検出されており、中期末から後期の集落が確認された。10次調査で後期後半の竃をもつ竪穴住居が1棟と、後期以降の掘立柱建物1棟、11次調査(Aトレンチ)で同時期とみられる掘立柱建物が検出された。6次調査で竪穴住居の可能性のある焼土が検出されている。7次調査において後期の土壙墓が3基確認された。その内の1基からは銀環1対と須恵器杯蓋2点が伏せられた状態で出土し、別の1基からは刀子が出土している。また、短頸壷が2個体出土した土壙墓とみられる遺構が11次調査(Aトレンチ)で検出されている。R605調査では、周溝を持つ方墳2基、須恵器杯身・蓋や甕体部片を枕に転用した6世紀中頃の土壙墓が2基検出され、内1基は鉄鏃や鉄鎌を副葬していた(井ノ内3・4号墳)。R647調査は井ノ内車塚古墳の範囲確認調査で、後円部と前方部裾で溝状遺構を検出し全長が36mであることや、葺石が施されていないことがわかった。この南東にある井ノ内稲荷塚古墳に後続する古墳とされていたが、埴輪が立てられていたことから造営時期が先行する可能性が示唆された。その他に、北西から南西方向の自然流路が15次調査や2・3次調査で確認され、さらに南東のR511調査やR285-A・R310-C調査で確認されている旧流路につながるのではないかと推定されている。

奈良時代 この時期の掘立柱建物がR285-A調査と8次調査で検出された。R285-A調査では、 5間×2間の東西棟に南庇が付くものと、1間以上×2間の東西棟になるとみられる柱列がある。 柱穴底には、礎石があるものと、柱根が残るものがあった。前者の南には柵列が平行する。これ らの建物から北へ40mほどの所に井籠組の井戸が検出された。この井戸を取り囲むように方形の 石敷き溝と排水用の石敷きを敷設していた。井戸は北西半分にかかっていた自然流路を埋め立て て造られており、この流路の埋土と井戸の周辺からは多量の奈良時代の遺物が出土した。遺物に は土師器や須恵器の他に、「園宅」・「園司」・「園」と書かれた墨書土器や「御司」・「御曹司」と 書かれた木簡、顔の描かれた人形、斎串などがある。土器などに書かれた文字史料から、10世紀 の「乙訓園」や「長岡園」つながる宮内省園池司に関係した施設が周辺にあったとされ、この井 戸がその施設の一部であったと推定されている。この井戸は長岡京期造営に伴って廃棄・整地さ れた。8次調査では掘立柱建物2棟や東西溝が検出されている。2・3次調査では杭で護岸した 溝や石敷遺構が確認されている。古墳時代の旧流路の名残であった湿地状凹みを利用して、水田 や畠が造られた可能性が指摘されている。11次調査では後半の溝が検出され、フイゴの羽口や鉄 |滓などが出土した。R547-北調査では柱穴から、墨書された土師器や癒着した萬年通寶、神功開 寶、その他不明なものの計3枚の銭貨が出土した。その他、北東から南西方向または、北西から 南西方向の溝群が18次調査で検出され、7世紀前半以降の畠の畝などが想定されている。4次調 査では溝からレンズ状に堆積した焼土や炭と共に、フイゴ羽口や鉄滓などが出土し、近辺に鍛冶 関係の遺構の存在が指摘されている。

長岡京期 一連の13・15・16・18・19次調査で一条大路南側溝を総延長約740mにわたって検出した。R746調査の北調査区では一条条間南小路南北両側溝、R285-A調査では二条大路北側溝と推定される溝、R285-A調査とR511調査では西二坊大路東側溝、18次・19次 区調査では西三

坊坊間東小路、13・14次調査では西三坊大路西側溝と条坊関係の溝が各所で検出されており、右京四坊まで条坊が施工されていたことが判明している。13~16・18次調査で、掘立柱建物や井戸などが検出されていることから、二条三・四坊における町の土地利用が明らかになりつつある。16・18次調査では、三坊八町の東から中央部と九町中央部に整然と建物が並ぶが、一・八・九町北西部に空関地が存在することがわかった。2・3次調査では二町中央に大型建物が配置されていたことから、高位・高官の邸宅または離宮の存在が想定されている。対する七町の建物は小型ではあるが、「大舎人寮」銘の墨書須恵器から大舎人寮と関係のある施設とみられている。15次調査の十六町は小振りな建物から、小規模な宅地、九町は官衙的な施設が造られた後、雑舎群が造られたという2時期が考えられている。14次調査では西三坊大路に開く門が発見され、身分の高い人の邸宅であったと推定され、平安時代初期に至る建て替えの痕跡から、平安京遷都後も宅地としての利用が続けられていたことが明らかとなった。その他に、R285-A調査では丸太材を使用して地盤改良を行った二条大路に対する路面改修痕跡が検出されている。

平安時代以降 平安時代の遺構は、13次調査で掘立柱建物 4 棟と柵列、R285-A調査、5次調査、11次調査(Aトレンチ)で井戸、その他に溝や柱穴・土坑が検出されている。R285-A調査で確認された自然流路は、長岡京期の西二坊大路東側溝を横断して、北から南へ流れる自然流路に合流していた。5次調査の井戸からは平安時代前期の良好な一括資料を得ている。鎌倉時代の遺構は、5・6次調査で溝や土坑、中世の遺構は境界溝や耕作溝を検出している。1次調査(R21-6)・4次調査(R27-E)・10次調査では、断面U字状で多量に土師器・瓦器を含む溝が検出された。4次調査(R27-E)で南から西へ折れ曲がる北東の隅が検出され、東西19m以上、南北23m以上になることが判明した。12世紀後半の中世居館跡の外郭施設と考えられ、溝は13世紀中頃には埋没したとされる。富坂荘・長岡荘の荘園に関係する遺構と考えられている。R746調査では平安後期から鎌倉時代前期の2時期ある掘立柱建物や柵列、建物に重なる土壙墓の位置から屋敷墓が想定されている。調査結果から、13世紀後半には現在につながる水田景観が成立、検出した集落跡はそれ以前の景観とみられ、集落廃絶後に水田になったと考えられている。19次調査でも遺物が伴わず、正確な時期はわからないが、中世と考えられる掘立柱建物が1棟検出された。

【上里遺跡調査関連文献】(表2 上里遺跡調査一覧表の文献番号に対応)

- 1 奥村清一郎ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 (1979)』 京都府教育委員会 1979年
- 2 山本輝雄『長岡京跡右京第22・25次調査報告書』『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第11集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1997年
- 3 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』第2分冊 京都府 教育委員会 1980年
- 4 岩崎 誠「長岡京跡右京第29次(7ANGHD-2地区)調査概要 右京二条三坊十六町・井ノ内遺跡 」 『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1987年
- 5 岩崎 誠ほか「長岡京跡右京第48次(7ANGNC-2地区)調査概要 右京二条三坊十六町・上里遺

- 跡 (西ノ口地点) 」『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査 研究所 1987年
- 6 山下 正「長岡京跡右京第107次発掘調査概要 (7 ANGNC地区)」『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年
- 7 小田桐 淳「右京第167次 (7ANGHD-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和59年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1985年
- 8 中尾秀正「長岡京跡右京第213次 (7ANGKT地区)調査概要 右京南一条四坊四町・一条四坊一町・南一条大路 」『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 長岡京市教育委員会 1986年
- 9 増田孝彦「長岡京跡右京第753次(7ANGHD-5地区)・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要」『京都 府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年
- 10 増田孝彦ほか「長岡京跡右京第830次 (7ANGKT-2・GHD-9地区)・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調 査概要」『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006年
- 11 永田宗秀ほか『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 12 網 伸也ほか『長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-4 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 13 上村和直ほか『長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 14 上村和直ほか『長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-34 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 15 堀 大輔ほか「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』 京都市文化市民局 2008年
- 16 高橋 潔ほか『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 17 高橋 潔ほか『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-9 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

註

- 1) 向日市史編さん委員会編『向日市史 上巻』京都市向日市 1983年。長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史 資料編一』長岡京市役所 1991年。(財) 向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会編『向日市の遺跡』2008年。また、分布図および遺跡一覧表の作成には、京都府教育庁指導部文化財保護課編『京都府遺跡地図[第3版] 第4分冊』京都府教育委員会 2004年を参考にした。特に、縄文時代の遺跡については、岩崎 誠「乙訓における縄文遺跡の消長」『第17回京都府埋蔵文化財研究集会 資料集』2010年を参考にした。
- 2) 岩崎 誠「右京第955次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成20年度』 (財) 長岡京 市埋蔵文化財センター 2010年
- 3) 原 秀樹「右京第325次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和63年度』(財)長岡京 市埋蔵文化財センター 1990年
- 4) 中川和哉ほか「京都第二外環状道路関係遺跡 長岡京跡(長岡京跡右京第927次)・伊賀寺遺跡」『京 都府遺跡調査報告集 第136冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010年

- 5) 山本輝雄「右京第235次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』(財)長岡京 市埋蔵文化財センター 1988年
- 6) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター『伊賀寺遺跡(長岡京跡)現地説明会資料』2008年
- 7) (財)長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京跡右京第975次調査(伊賀寺遺跡)関係者説明会資料』 2009年
- 8) 梅本康広「長岡京跡左京第525次(7ANEJS-19地区)~一条大路・東二坊坊間東小路、左京二条二坊 六町、鶏冠井遺跡、石田遺跡~発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第82集』(財)向日 市埋蔵文化財センター 2009年
- 9) 「長岡京跡・東土川西遺跡・修理式遺跡」『長岡京跡発掘調査研究所報告書』長岡京跡発掘調査研究 所・(財) 向日市埋蔵文化財センター 2003年
- 10) 戸原和人ほか「長岡京左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第47冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年。堀内明博「雲宮遺跡(シンポ工業敷地内)」『第7回京都府埋蔵文化財研究集会 資料集』1998年
- 11) 長谷川浩一・國下多美樹ほか「長岡京跡左京第82次(7ANEIS地区)~左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次~発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第10冊』(財)向日市埋蔵文化財センター 1983年
- 12) 山中 章「長岡宮跡第283次(7ANBHG地区)~朝堂院北東官衙、森本遺跡~発掘調査概要」『向日 市埋蔵文化財調査報告書 第39冊』(財)向日市埋蔵文化財センター 1996年
- 13) 長岡京跡発掘調査団『森本遺跡発掘調査概報』1970年
- 14) 伊野近富ほか「長岡京跡右京第547次発掘調査概要 (7ANGTE-3・GKN-2)」『京都府遺跡調査 概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997年。
- 15) 網 伸也ほか『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 16) 八木厚之「長岡京跡右京第584次発掘調査概要 (7ANGHD-1地区)」『京都府遺跡調査概報』第80 冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998年
- 17) 石尾政信ほか「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要 (7ANIFC・CS地区)」『京都府遺跡 調査概報』第45冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 18) 岩崎 誠ほか「長岡京跡右京第48次(7ANGNC-2地区)調査概要 右京二条三坊十六町・上里遺跡(西ノ口地点) 」『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1987年
- 19) 網 伸也ほか『長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 20) 小田桐 淳「右京第605次 (7ANGMM-1地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成10年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 2000年
- 21) 福永伸哉ほか「井ノ内車塚古墳第3次調査概要 長岡京跡右京第647次調査 」『長岡京市文化財調 査報告書』第41集 長岡京市教育委員会 2000年
- 22) 石尾政信「長岡京跡右京第511次発掘調査概要 (7ANGKN地区)」『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996年

第2章 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

本調査は京都市建設局道路建設部道路建設課による、・・3 伏見向日町線道路建設工事に 先立って実施した試掘調査・発掘調査である。計画された道路は幅32m、片側2車線で両側に歩 道の付く東西方向のものである。今回調査の対象となったのは、同じく西側で計画された南北方 向の中山石見線道路と、東側の京都府乙訓土木事務所の計画する外環状線道路の間を結ぶ約1km の区間である。

当地は長岡京跡右京の北西部にあたっており、道路予定地が東西方向の一条大路の南端および、これに南面する二条三坊・四坊の北端を含むと想定された。また、予定地の東半は縄文時代以降中世に至る上里遺跡の推定範囲の南北のほぼ中央を東西に貫く形となっており、道路建設に先立って発掘調査の必要性が検討された。

このため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「京都市文化財保護課」という)の指導の下、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所が2001年度に試掘調査、2002年度以降断続的に発掘調査を実施した。なお、各年度とも排土置き場の確保と周囲の田畑・水路・農道の保全のため、適宜調査区をわけて調査を行った。

2 本事業における各年度の調査の概要

本事業に係る各年度の概要は、以下の通りである。

2001年度試掘調査

12**次調査 (**2001NG-EW001)

調査期間 2001年11月26日~2002年1月25日

調査体制 調査課長:鈴木久男、調査係長:菅田 薫、調査担当:永田宗秀

道路予定地の西部の遺構・遺物の残存状況の確認のため、15箇所の調査区を設けて試掘調査を行った。調査面積は1,482㎡。対象範囲の東半部、試掘トレンチ7以東の地域で長岡京期の遺構を検出し、発掘調査を行うこととなった。

2002年度発掘調査

13次調査 (2002NG-EW002)

長岡京跡右京第772次調査、7ANUDC-4・UMD-2・UNW-2地区

調査期間 2003年1月6日~8月6日

調査体制 調査課長:鈴木久男、調査係長:吉村正親、調査担当:南出俊彦・尾藤徳行・大槻明義・大立目一・加納敬二・布川豊治・上村和直・鎌田泰知・南 孝雄・網 伸



図7 16次 D・E 区調査風景(西から)



図8 18次 重機掘削風景(東から)



図9 18次 流路状遺構18-1215 土壌サンプル採集作業風景(南東から)



図10 19次 調査前風景(北東から)



図11 19次 土坑18-1487北半 石器剥片検出作業風景(南東から)



図12 19次 クレ ンによる全景写真撮影風景 (西から)



図13 19次 集石遺構19-1430 実測風景(西から)



図14 19次 レ ザ 測量作業風景(東から)

也・百瀬正恒

報告書 『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査 概報2003-3 2003年

2001年度試掘調査の成果を受けて、推定される西四坊坊間小路以東の約280mの範囲について、調査区をA1~16区、B1~10区にわけて調査を行った。調査面積は6,030㎡。検出した主な遺構は縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代中期、長岡京期、平安時代以降にわたり、遺物は土器を中心に、整理用コンテナに97箱出土した。2003年4月26日にA1~3区、6月21日にB1・2区の現地説明会を実施した。

2005年度発掘調査

15次調査 (2005NG-EW003)

長岡京跡右京第850次調査、7ANUKW・UMI・GKR地区

調査期間 2005年6月17日~2006年6月9日

調査体制 調査課長:鈴木久男、担当係長:吉崎 伸、調査担当:上村和直・南出俊彦・モンペティ恭代・ト田健司・長戸満男

報告書 『長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-4 2006年

2002年度調査の東、東西約220mの範囲について、調査区をA1~5区、B区、C区にわけて調査を行った。調査面積は5,478㎡。検出した主な遺構は、古墳時代中期から後期、奈良時代、長岡京期、中世以降の耕作溝におよぶ。遺物は弥生時代から中世に至り土器類を中心として整理用コンテナに277箱出土した。大半は古墳時代の河川から出土した須恵器類で、少量ながら韓式系土器(甕)が含まれる。2005年11月12日にA区の古墳時代、2006年2月11日にB・C区の長岡京期の現地説明会を行った。

2006年度発掘調査

16次調査 (2006NG-EW004・005)

長岡京跡右京第878次調査、7ANUKW・UMI-2・GKR-2地区

調査期間 2006年6月12日~2007年3月16日

調査体制 調査課長:鈴木久男、担当係長:吉崎 伸、調査担当:上村和直・ト田健司・津々 池惣一・南出俊彦

報告書 『長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-34 2007年

2005年度調査の東、東西約140mの範囲をC1~5区、D・E区にわけて調査を行った。調査面積は3,329㎡。主な遺構は、縄文時代晩期、弥生時代前期、古墳時代、長岡京期、平安時代以降である。遺物は縄文時代から長岡京期以降の土器類を中心に整理用コンテナに169箱出土した。2006年9月2日にC区の長岡京期、2007年2月11日にD・E区の縄文時代晩期の現地説明会を行った。

2007年度発掘調査

18次調查 (2007NG-EW006)

長岡京跡右京第903次調査、7ANUMK-2地区

調査期間 2007年4月16日~2008年1月10日

調査体制 調査課長:吉崎 伸、担当係長:辻 純一、調査担当:高橋 潔・大立目一・津々 池惣一

報告書 『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12 2008年

2006年度調査の東、調査区は1箇所である。一部北西部は、北側田畑の耕作の関係から次年度以降の調査へ繰り越すこととなった(19次一区)。調査面積は1,474㎡。主な遺構は縄文時代晩期、弥生時代前期、奈良時代以前、長岡京期である。遺物は縄文時代から長岡京期に至り、整理用コンテナに340箱出土した。大半が縄文時代晩期の土器・石器類であった。また、縄文時代晩期の流路状遺構には土器・石器などとともに多量の炭化物が含まれており、炭化植物種実類などの検出が見込まれたため、水洗選別によって内容物の抽出を行う必要性が認められた。水洗選別用に土壌サンプルを整理用コンテナに340箱分採取した。現地説明会は長岡京期を2007年6月9日に、縄文時代晩期を12月1日に行った。

2008年度発掘調査

19次調査 (2008NG-EW007)

長岡京跡右京第965次調査、7ANUMK-3・UNI-1地区

調査期間 2009年3月18日~11月5日

調査体制 調査課長: 吉崎 伸、担当係長: 辻 純一、調査担当: 高橋 潔・近藤奈央・津々 池惣一・南出俊彦・大立目 一・南 孝雄

報告書 『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-9 2010年

2007年度調査の東、南北方向の段丘崖を境に西側の段丘上を 区、東側の段丘下を -1・2 区とし、2007年度未調査区を 区として調査を行った。調査面積は2,323㎡。主要な遺構は縄文時代晩期、弥生時代前期、奈良時代以前、長岡京期、平安時代以降である。遺物は縄文時代から鎌倉時代に至る土器類を中心として、整理用コンテナに470箱出土した。特に縄文時代晩期の土器・石器類が流路状遺構などから多く出土し、2007年度と同様に炭化物が多く含まれていることから、水洗選別を行うための土壌サンプルを整理用コンテナに490箱分採取した。長岡京期については2009年5月30日に現場公開、弥生時代前期は7月18日に、縄文時代晩期は10月3日に現地説明会を行った。

なお、2008年度調査以東の範囲については、現状で小畑川の氾濫原となっており、2007年3月に京都市文化財保護課によって試掘調査(17次)が行われており、地表下25cmの厚さの現代耕作土以下は後世の河川堆積による砂礫層のみであると確認され、発掘調査は実施しないこととなった。

3 本報告書作成の経緯と経過

前述の一連の調査において、長岡京期はもちろん、縄文時代から中世に至る各時代の遺構・遺物が良好に検出され、多大な成果をあげることができた。これまでに各年度とも調査終了後に、それぞれ年次報告書を作成して、その責は果たしてきた。しかし、これら成果のうち、特に東部(2006~2008年度調査)で検出した縄文時代晩期の竪穴住居を中心とする遺構群は当該期の集落跡の様相を明らかにし得るものであり、土器・石器類を中心に遺物の量も非常に多く、特筆するべきものであった。

西日本、近畿地方の縄文時代の集落遺跡については、これまで良好な検出例が少なく、その実態があまり明らかではなかった。しかし、近年、時を同じくして近畿各地域において縄文時代の遺跡の調査が相次いで行われ、また当遺跡の属する乙訓地域においても縄文時代の遺構・遺物の検出例が増加し、縄文時代後期から晩期の資料の蓄積がなされてきた。このような中で、当遺跡の縄文時代晩期の調査成果は、当該期集落研究に資するところ多大であると判断された。さらに、縄文時代晩期前半の流路状遺構より採取した炭化物の放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した結果、同一層より出土したにもかかわらず、イネ胚乳とマメ種実の測定値に約500年という大きな齟齬が生じており、この問題の検討も重要な課題であった。このため、とくに縄文時代晩期の遺構・遺物のみを取り上げ、より詳細な報告書を『上里遺跡』として作成することとした。したがって、本報告で取り上げる調査は前述の調査のうち、縄文時代晩期の遺構・遺物を検出した遺跡西寄りの2002年度(13次)調査のA1~3・B1区、東部の2006年度(16次)調査のD・E区、2007年度(18次)調査、2008年度(19次)調査の・区である。

作業は、まず各調査の図面・日誌・台帳類・報告書などの整理により調査内容を再検討・把握するとともに、各調査出土の縄文時代晩期の全遺物の内容点検を行った。この後、報告書に掲載する遺跡・遺構関連の図面類の抽出作業、遺物の抽出・実測作業、写真撮影などを行い、図版類の構成、文章の作成と編集など作業を進めた。また、これらの作業に先行して、2007年度、2008年度の土壌サンプルの水洗選別作業を実施し、自然遺物の分別・抽出作業および集計作業を併行して行った。

作業期間 2010年4月~8月

作業体制 調査課長: 吉崎 伸

担当係長:内田好昭・網 伸也

担当職員:高橋 潔·近藤奈央

竜子正彦(自然遺物の抽出・分析)

田中利津子(復元・彩色作業)

村井伸也・幸明綾子(遺物写真撮影)

遺物実測作業:有本佐和・上峯貴代・内田早織・甲田春奈・辻井和子

遺物復元作業:前田千津子

縄文時代の遺構調査中、および遺物整理作業、本報告書の作成にあたり、京都大学大学院の泉 拓良教授の全面的なご指導を賜った。また、京都産業大学の鈴木久男教授、立命館大学の高 正 龍 教授には検証委員として現地発掘調査の指導をお願いした。

さらに、本報告の内容を充実させるため、各分野の研究者の方々からご好意により玉稿を賜った。第1章第2節の地理的環境については、史跡鴻池新田会所管理事務所の松田順一郎氏とパリノ・サーヴェイ株式会社の辻本裕也氏にお願いした。第6章では、近畿大学理工学部の南武志教授と東京大学総合博物館の豊遙秋教授に辰砂の肉眼観察による産地同定、弘前大学人文学部の上條信彦講師に打製石斧・横刃型石器の使用痕と石皿残留の澱粉質の分析、奈良国立文化財研究所の丸山真史氏に自然遺物のうち動物遺存体の同定をお願いした。

ほかにも多くの方々や各方面の機関より、調査現場や整理作業において、直接・間接にご指導、 ご助言、ご協力を頂戴した。記して感謝の意を表したい(敬称略、順不同)。

千葉 豊・富井 眞・奥村香子・妹尾祐介・長廻友貴(京都大学) 安富匠彦(長崎南山学園) 上峯篤志・面 将道(同志社大学大学院) 西本豊弘・住田雅和(国立歴史民俗博物館) 和田晴吾・矢野健一・冨田昌太郎(立命館大学) 岡田憲一(奈良県立橿原考古学研究所) 中村健二(財団法人滋賀県文化財協会) 大野 薫(大阪府教育委員会) 佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所) 長田友也(南山大学) 奥 善次(森添遺跡整理事務所) 鈴木忠司(財団法人古代学協会)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、大山崎町教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、(財)向日市埋蔵文化財センター、国立歴史民俗博物館、総合地球環境学研究所、関西縄文文化研究会、(株)文化財サービス、パリノ・サーヴェイ株式会社

註

1) 一例を挙げれば、京奈和自動車道の建設に伴って調査が実施されている奈良県橿原市・御所市の観音寺本馬遺跡、和歌山県伊都郡かつらぎ町の中飯降遺跡などがあり、乙訓地域では第二外環状線道路の建設に伴って調査が行われた長岡京市の伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡、宅地造成に伴い行われた南栗ヶ塚遺跡などがある。

第3章 縄文時代晩期の調査の概要

前章で示した通り、本事業に係る各年度の調査のうち、縄文時代晩期の遺構・遺物を検出した調査は、遺跡西寄りの13次調査のA1~3・B1区、東端の16次調査のD・E区、18次調査、19次調査の ・ 区である。本章では調査毎に縄文時代晩期の調査の状況を概説する。

1 13次調査(図版1)

13次調査では、平安時代以降、長岡京期、古墳時代中期、弥生時代後期などの遺構とほぼ同一面で、縄文時代晩期の遺構を調査範囲東半部のA1~3・B1区で検出した。縄文時代晩期の遺構には土器棺墓3基と土坑6基がある。A1・2区では土器棺墓1基(13-158)と土坑3基(13-33・13-143・13-145)、A3区では土器棺墓2基(13-112・13-113)と土坑1基(13-149)、B1区では土坑2基(13-53・13-200)をそれぞれ検出した。年次報告では土坑13-33・13-143・13-145・13-149は土壙墓とされているが、本報告では土坑とした。また、土坑13-53・13-200は古墳時代の遺構とされているが、形状や検出状況などから当該期の遺構と判断した。いずれも、縄文時代晩期の後半の遺構である。

2 16次調査(図版2・57-1)

16次調査では、D・E区の東半部で縄文時代晩期の遺構を検出した。縄文時代晩期の遺構面は 西で標高34.5m、東で34.0mと西から東への緩やかな傾斜面となっており、上層の弥生時代前期 の遺構基盤層である、厚さ0.1~0.5mの黄色から褐色の砂泥層に覆われている。

検出した主な遺構には竪穴住居 7 棟、土器棺墓 6 基、土壙墓 3 基のほか、土坑・柱穴や流路状遺構などがある。竪穴住居は16-200と16-240のように重複するものも認められたが、おおよそ20m四方の範囲に 3 ~ 8 mの間隔で検出した。土器棺墓や土壙墓は竪穴住居分布域の東寄りの空閑地にみられた。いずれも縄文時代晩期前半の遺構である。

3 18次調査(図版3・57-2)

18次調査では調査区全域にわたり、縄文時代晩期の遺構を検出した。遺構面は西端で標高34.0 m、東端で33.0 m、概して西から東への緩やかな傾斜面であるが、遺構面基盤層の形成に河川の影響を大きく受けて起伏に富んでいる。16次調査と同様に、全面が弥生時代前期の遺構基盤層である0.3~0.6 mの厚さの灰黄褐色から黄褐色の砂泥に覆われている。

検出した遺構は竪穴住居 1 棟、土器棺墓17基、土壙墓 1 基、炉 3 基、集石遺構 3 基、土坑、柱穴、焼土痕などである。竪穴住居18-1294は調査区の南西端で検出した。16次調査の住居群と一連のものと考えられる。土器棺墓はおおよそ西部と南東部にまとまって分布する。西部のものは住居域に近接している。住居域の東には流路状遺構18-1215が北から大きく湾曲して東へ延びる。埋土には多量の土器・石器とともに炭化物が多く含まれ、炭化した植物種実が検出された。土層

観察用のセクションから、層位を確認しながら採取した土壌サンプルの水洗選別によって植物種 実・動物骨類などを検出した。調査区東部には下層の砂礫の盛り上がりがあり、これを取り巻く ように溝18-1067が東西に延び、この南に土器棺墓の南東部のまとまりがある。いずれも縄文時 代晩期前半に位置付けられる。

4 19次調査(図版4・58)

19次調査地は遺跡の東端にあたり、調査範囲内に小畑川・善峰川が形成したとみられる段丘崖が南北方向に存在して、約2mの段差で東が低くなっている。段丘崖は長岡京期以降に形成されたとみられ、その際に以東の遺構面も大きく削られて失われた。段丘の上側を 区、氾濫原と考えられる下側を 区とし、さらに18次調査の未調査区を 区として調査を行った。 区および区で縄文時代晩期の遺構を検出した。 区の遺構面は西端で標高33.0m、東端で32.5mと西から東への緩やかな傾斜面である。18次調査と同様に遺構基盤層の形成に河川による堆積作用が影響したため、起伏に富んだ地形が形成された。東半部では後世に削平を受けているが、16次・18次調査と同様に0.4m前後の厚さの弥生時代前期遺構基盤層に全面が覆われていたと考えられる。

区では竪穴住居 2 棟、土器棺墓 3 基、土坑、柱穴、配石遺構、集石遺構、流路状遺構などを検出した。流路状遺構19-1155は西から南、東へと大きくU字状に調査区を囲うように屈曲する。埋土には多くの土器・石器とともに多量の炭化物が含まれており、炭化した植物種実や動物骨類を検出した。南西の屈曲部には集石遺構19-1430が設けられ、水場遺構に関連する遺構とみられる。流路状遺構19-1155の北側は平坦であり、比較的遺構密度が高い。竪穴住居19-848・19-995を検出しており、居住域と考えている。

区は18次調査の一部であり、遺構面の状況は同じである。検出した遺構は流路状遺構と土坑などである。調査区の西2/3は流路状遺構18-1215の北延長部にあたっている。東部では輪郭が不明瞭であるが、18次調査の土坑18-1487と一連の遺構と考えられる土坑を検出した。埋土に多量のサヌカイト・チップを含んでおり、石器製作に関連する遺構と考えられる。

区弥生時代前期遺構面で検出した土坑19-3109のみが縄文時代晩期後半、それ以外はすべて 16・18次調査と同様に縄文時代晩期前半の遺構群である。

5 層 序

本調査の対象地は、概して北西から南東への緩傾斜地であり、調査前には田畑として利用されていた。地表面の標高は西端の13次-A13~16区で42.5m、東端の19次- 区で32.6m、この間の距離が約800mである。後述するが、19次- 区と 区の間には崖面をなす、南北方向の段丘崖が存在しており、以東は現在約200m東を南流する小畑川の氾濫原となっている。

ここでは、本報告の対象調査区の層序を概述する。土層図は高低差を強調するために、距離は 1/800、標高は1/50と縮尺を変えて図化し、平面との対応関係を示すため1/800の縮尺の平面 略図を付した。

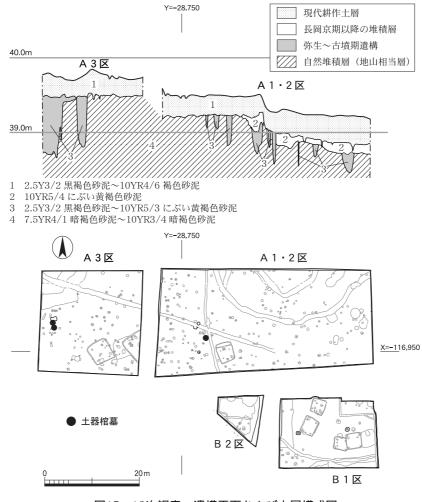


図15 13次調査 遺構平面および土層模式図 (平面図および断面距離は1:800、断面図標高は1:50)

(1)13次調査(図15)

調査前の地表面は、西側のA3区で標高39.8m前後、東側のA1・2区では39.5~39.2mである。緩やかな東向きの傾斜面に水田経営の平坦面確保のため、雛壇状に整地される。これら現代の耕作に伴う土層は耕作土・床土からなっており、厚さが0.3~0.4mある。この下面はA3区およびA1・2区の西半では砂礫が混じる7.5YR4/1暗褐色砂泥や10YR3/4暗褐色砂泥などからなる自然堆積層、いわゆる地山となる。この上面が縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代中期から後期、長岡京期の各時期の遺構検出面である。A1・2区の東半では厚さ0.1~0.2mの10YR5/4にぶい黄褐色砂泥層が自然堆積層の上面を覆う。長岡京期以降の堆積層である。

(2)16・18・19次調査(図16)

調査前の地表面は部分的に乱れているが、東向きの雛壇状を呈している。標高は16次-D・E区 西端で36.0m、19次- 区の東端、段丘崖上面で33.5m、下面の 区では32.6mである。段丘の 上面での基本層序は、地表面より現代耕作土層(厚さ0.3~0.6m)、長岡京期基盤層(厚さ0.1~

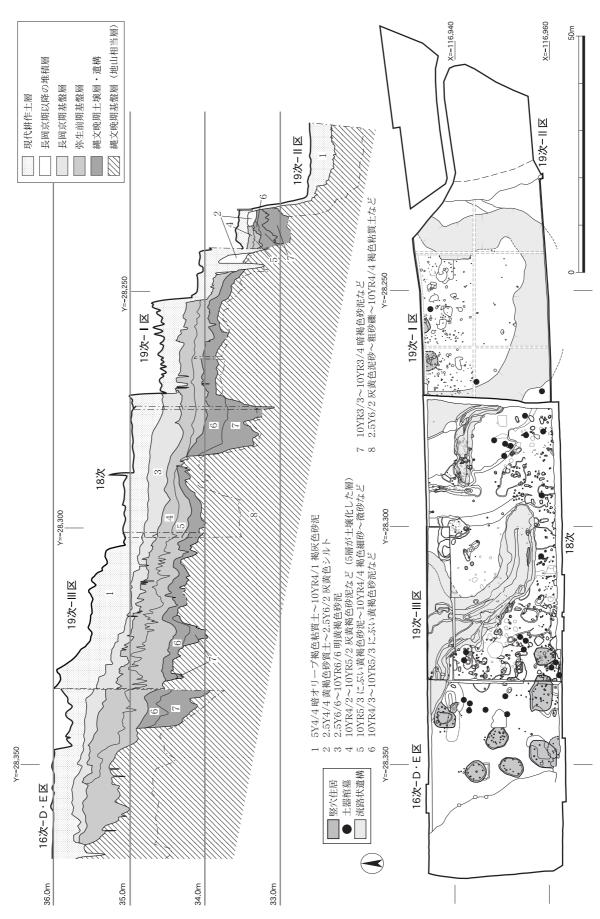


図16 16・18・19次調査 遺構平面および土層模式図 (平面図および断面距離は1:800、断面図標高は1:50)

0.3m) 弥生時代前期基盤層(厚さ0.2~0.6m) 縄文時代晩期基盤層となる。長岡京期基盤層以下の各層は、いずれも自然堆積層であり、その形成には小畑川および善峰川による河川活動の大きな作用があったと考えられる。

縄文時代晩期基盤層も河川活動による堆積物である砂礫、粗砂、細砂~シルトなどからなる。この上面は起伏が著しく、砂礫が堆積して凸状に盛り上がる箇所や埋め残された帯状の凹み地形である流路状遺構18-1215や19-1155などがみられる。縄文時代晩期の遺構を検出した16次-D・E区以東では、本層の上面が土壌化により暗褐色から黒褐色に変色しているため(厚さ0.1~0.2 m)遺構の認識が難しい。本来、この土壌化層の上面が生活面に近いと思われるが、調査では除去した土壌化層下面が遺構検出面となっている。

弥生時代前期の基盤層は、10YR5/3にぶい黄褐色から10YR4/4褐色系の細砂~微砂を中心とする自然堆積層である。縄文時代晩期基盤層の凹む箇所には厚く、突出する箇所には薄く堆積して、起伏を平坦化する。縄文時代晩期基盤層と同様に、上面が土壌化により暗褐色から黒褐色に変色する。

長岡京期基盤層は、弥生時代前期以降に堆積した2.5Y6/6~10YR6/6明黄褐色砂泥などからなる。19次- 区では後世に削られて失われている。

19次- 区では地表面より、現代耕作層(厚さ0.2m) 近世以前の耕作土層(厚さ0.1m前後) の下層は砂礫を中心とする堆積となり、小畑川の氾濫原堆積と考えられる。

なお、縄文時代晩期基盤層の堆積状況を確認するため、19次- ・ 区の中央を断ち割って土層 観察を行った。段丘崖下の19次- 区西端部分で、落ち込みに堆積する粘土からシルト質の土層を 確認した(図53)。粘土質の土層に密封され、炭化していない種実・木片・葉片などが検出された (第5章第5節)。検出したトチノキ果皮の炭素年代測定を行い、約5600年前という年代を得た (表12の19次- 区13地点)。縄文時代晩期基盤層の形成年代の一端を示すと考えられる。

第4章 遺 構

遺跡東端の16・18・19次調査地点では晩期前半の滋賀里 式から b式(篠原式) 西寄りの13 次調査地点では晩期後半の滋賀里 式から長原式の土器群が出土した。以下では晩期前半と晩期 後半にわけて、それぞれ主要な遺構について記述する。

1 縄文時代晩期前半の遺構

縄文時代晩期前半の遺構群は、遺跡東端にあたる16次-D・E区以東の18次調査、19次-・ 区で検出した。遺構密度は高く、竪穴住居10棟、土器棺墓26基、土壙墓4基、炉跡、大型の溝1 条、流路状遺構2条、配石遺構1基、集石遺構などがあり、土坑、柱穴は特に多く検出している。

(1)竪穴住居

竪穴住居16-149(図版59-1、図17) 16次-D・E 区南西端で検出した。南西部は後世に壊されているが、東端部分を18次調査の南西端で検出した。平面形は東西方向に細長い楕円形で東西が7.5m、南北が4.9mで、残存深は0.35mであった。床面で17基の柱穴を検出したが、主柱穴の特定には至らなかった。柱穴は径0.2m前後の円形掘形のもので、深さは0.2m前後である。床面に焼土痕や土坑は検出できなかった。

竪穴住居16-200(図版59-2、図18) 16次-D・E 区中央南側で検出した。中央部から東側と

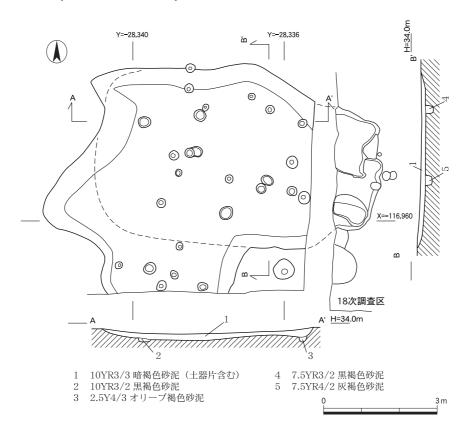


図17 竪穴住居16-149実測図(1:100)

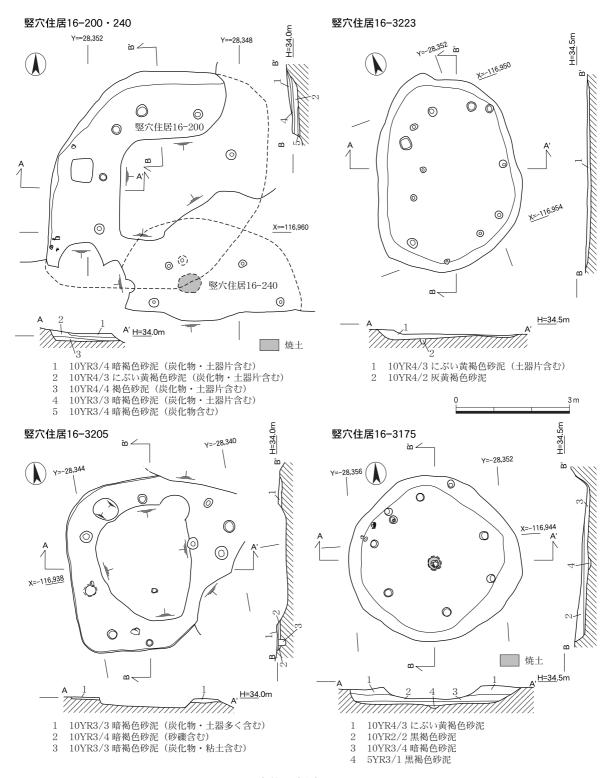


図18 竪穴住居実測図1(1:100)

南側が後世の遺構に壊されて、残存状況が良くないが、平面形は北東 - 南西方向に長軸をもつ、歪な楕円形とみられる。長軸方向で6.5m以上、深さは約0.3mである。竪穴住居16-240と重複する。柱穴は7箇所、 $1 \sim 2$ mの間隔で不整な円形に配される。柱穴の掘形は径0.25m前後の円形、深さは0.25m前後であった。床面の残存状況が良くなく、炉の痕跡は検出できなかった。

竪穴住居16-240(図版59-2、図18) 16次-D・E区中央南端で検出した。住居と認定した段

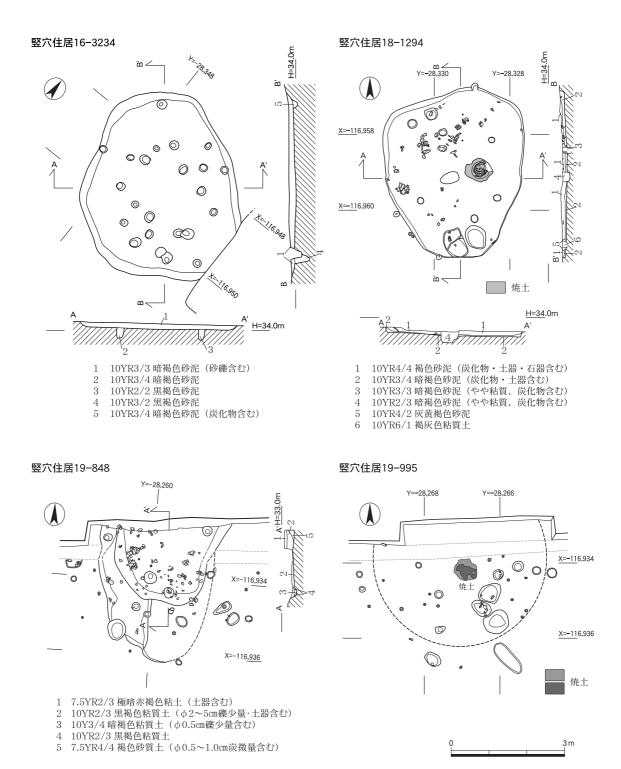


図19 竪穴住居実測図2(1:100)

階で既に上部が失われており、柱穴と炉跡とみられる焼土痕を検出した。柱穴は4箇所、1~2mの間隔で配される。掘形は径0.25m前後の円形で、深さは0.2mである。焼土痕は柱穴に囲まれた西寄りに検出している。平面形は円形と推測され、南半は調査区外に延びる。

竪穴住居16-3175(図版60-1、図18) 16次-D・E区中央で検出した。比較的残存状況は良好であり、平面形はやや歪な円形、直径が $4.4 \sim 4.6$ m、深さ0.45mである。主柱穴と考えられるものは 7 箇所確認でき、掘形は円形で径0.2m前後、深さ0.15m前後、 $1 \sim 2$ mの間隔で配される。

床面には凹凸があり、凹んだ部分には黄灰色粘土を充填している。床面のほぼ中央には、円形 (径0.3m)で、浅く凹む(深さ0.07m)地床炉が設けられる。底面は高温により黄色に変色して おり、周囲も赤変している。

竪穴住居16-3205 (図版60-2、図18) 16次-D・E 区北東部で検出した。中央部と東側を後世の遺構によって削り込まれ、北東部は流路状遺構18-1215の西肩に切られる。平面形は不整な隅丸方形で、南北4.5m、東西は4.5m以上、深さは0.2m前後である。柱穴は7箇所、いずれも掘形は径0.25m前後の円形、深さは0.15mで、間隔は1~2mとばらつく。中央部が壊されており、炉の有無は不明である。

竪穴住居16-3223(図版61-1、図18) 16次-D・E区中央で検出した。平面形は長軸5.1m、短軸3.8mの楕円形で、深さは0.3m前後である。柱穴は壁に近い位置に10箇所、掘形は20.2m前後の円形で、深さは0.3mである。間隔は $0.5 \sim 1.5$ mとばらつきがある。床面には焼土痕なく、炉は検出できなかった。

竪穴住居16-3234(図版61-2、図19) 16次-D・E区中央東寄りで検出した。平面形は長軸 5.0m、短軸4.2mの不整形な楕円形、深さは0.2m前後である。東部を後世の遺構に削り込まれる。柱穴は20基前後検出したが、主柱穴は確定できなかった。いずれも掘形は径0.2m前後の円形、深 さ0.2mである。床面には焼土痕がみられず、炉は検出できなかった。

竪穴住居18-1294(図版62-1、図19) 18次南西部で検出した。平面形はやや歪んだ楕円形で、長軸4.4m、短軸3.8mで、深さは0.1m前後である。柱穴は5箇所、掘形は径が0.15m前後の円形、深さは0.2m、間隔は1~2mと不揃いである。床面中央東寄りで炉を検出した。東西0.75m、南北0.6mの範囲に焼土が認められ、中央部が凹んで、高熱により黄色から橙色に変色して硬化する地床炉である。

竪穴住居19-848《土坑848》(図版62-2、図19) 19次- 区中央北端で検出した。本来の遺構成立面である土壌層の掘り下げ後に認識したため、遺構上部は失われている。また、北半が調査区外に延びているため、南半部のみを検出した。平面形は南北3.5m以上、東西3m以上の楕円形を呈すると思われ、中央部は南北2m、東西2.5mの不整形な土坑状に凹む。柱穴は8基検出した。土坑状凹みの床面を中心に土器が散乱した状態で検出された。炉跡は検出できなかった。

竪穴住居19-995 《焼土995》(図版63-1、図19) 19次- 区北西部の北端で検出した。前述の竪穴住居19-848と同様、土壌層の掘り下げ後に認識したため、遺構上部は失われていると考えられる。検出した炉跡を中心に土坑や柱穴、杭跡のような小型柱穴(直径0.05~0.1m)のまとまる直径4.5m前後の規模を想定した。

(2) 土器棺墓

土器棺墓16-3143(図版64-1、図20) 16次-D・E 区中央東寄りで検出した。径0.5m、深さ0.15mの円形掘形の中央に土器を据える。上部の大半が削平を受け残存状況は良くない。

土器棺墓16-3159(図版64-2、図20) 16次-D・E区中央南東寄りで検出した。径0.55mの

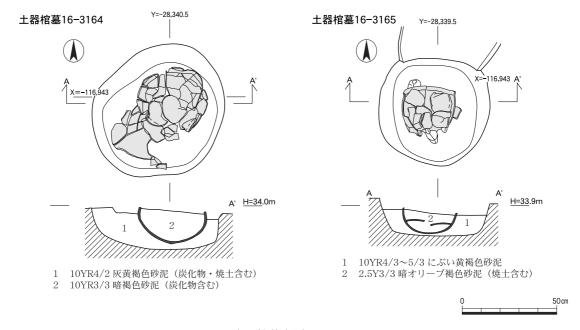
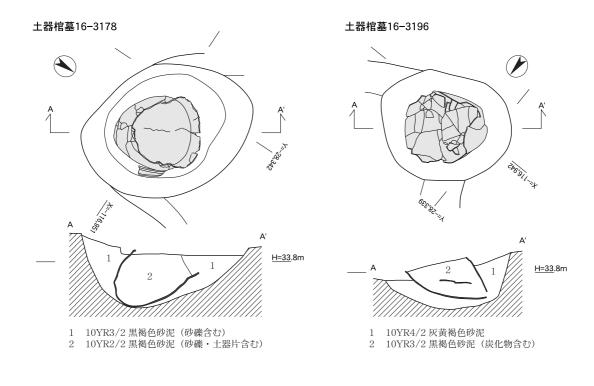


図20 土器棺墓実測図1(1:20)

不整円形の掘形のやや南寄りに、底部と体部上半を欠いた深鉢を斜位に据える。上部は削平され、 残存する掘形の深さは0.25mであった。

土器棺墓16-3164(図版63-2、図20) 16次-D・E 区北東部で検出した。長軸0.75m、短軸0.65mの楕円形掘形の西寄りに大型の浅鉢を正位に据えて棺身とし、深鉢を蓋として被せる。上部は削平され、残存する掘形の深さは0.2mであった。

土器棺墓16-3165(図版63-2、図20) 16次-D・E区北東部で検出した。径0.55mの円形掘形のほぼ中央に、底部を欠いた深鉢を口縁部を北に向けて横位に据える。横位に据えられて上半となった体部は土圧によって内側へ落ち込んだ状態で検出した。残存する掘形の深さは0.2mであった。



土器棺墓18-340

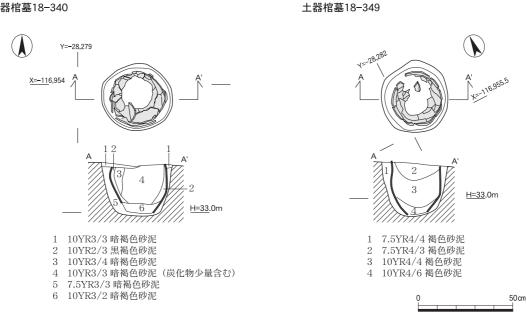


図21 土器棺墓実測図2(1:20)

土器棺墓16-3178 (図版64-3、図21) 16次-D・E 区中央南東寄りで検出した。長軸0.9m、 短軸0.7mの楕円形掘形のほぼ中央に、底部を欠いた深鉢を斜位に据える。口縁部は北方に向ける。 体部の東側に別個体の浅鉢の口縁部が検出された。浅鉢は一部のみであるため、蓋として用いた とは考えにくく、出土状況から棺としての深鉢を固定するために掘形壁面との間に差し込まれた ものと考えられる。上部は削平され、残存する掘形の深さは0.35mである。

土器棺墓16-3196(図版63-2、図21) 16次-D・E区北東部で検出した。長軸0.65m、短軸 0.6mの楕円形掘形の中央に、底部を欠いた深鉢を、口縁部を北東に向けて据える。上半となった

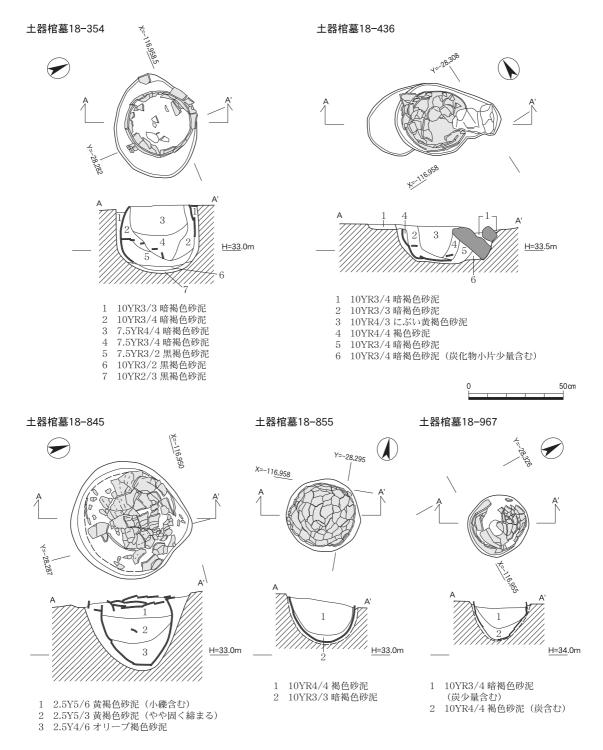


図22 土器棺墓実測図3(1:20)

南西側の体部が土圧によって内部へ傾き、一部は内側へ落ち込んだ状態で検出した。また、下側となった体部に穿孔を施し、内側に土器片を置いて穴を隠す。上部は削平され、残存する掘形の深さは0.25mである。

土器棺墓18-340(図版64-4、図21) 18次南東部で検出した。径0.38mの円形掘形の中央に、体部下半から底部を欠いた深鉢を正位に据える。上部は後世の削平を受け、口縁部の大半を失っている。残存する掘形の深さは0.28mである。

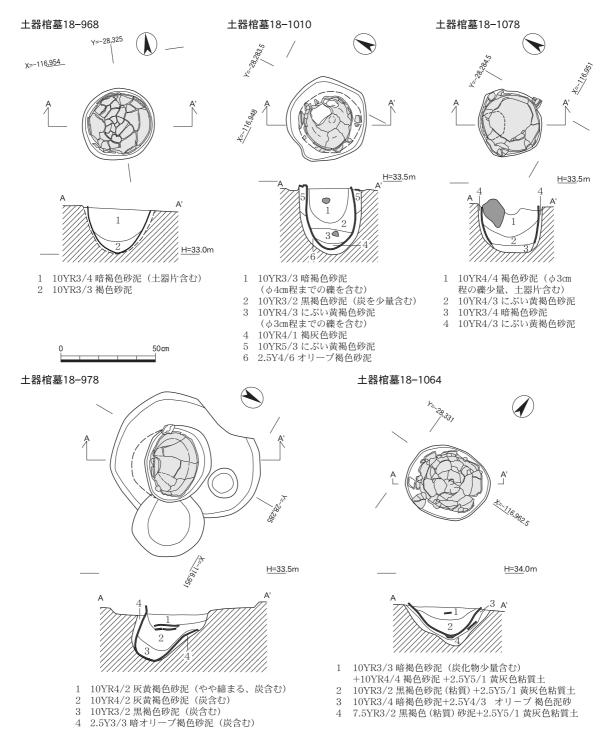


図23 土器棺墓実測図4(1:20)

土器棺墓18-349(図版64-5、図21) 18次南東部で検出した。径0.35mの円形掘形の中央に 底部を欠いた、波状口縁の深鉢を正位に据える。残存する掘形の深さは0.28mである。

土器棺墓18-354(図版64-6、図22) 18次南東部で検出した。長軸0.55m、短軸0.43mの楕円形の掘形の北寄りに、体部下半から底部を欠いた深鉢を正位に据える。口縁部は掘形埋土上面で折れてほぼ水平に開くように検出した。残存する掘形の深さは0.35mである。

土器棺墓18-436 (図版65-1、図22) 18次中央南部で検出した。長軸0.55m、短軸0.38mの

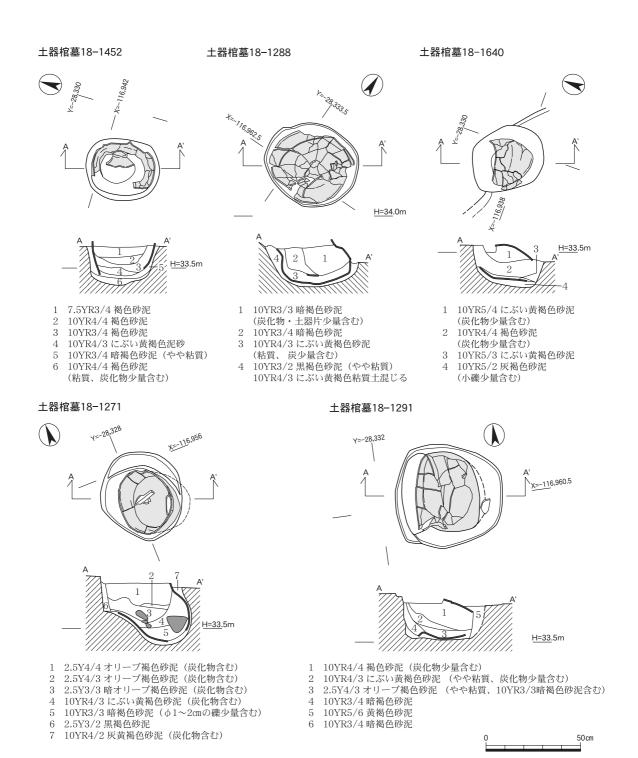


図24 土器棺墓実測図5(1:20)

楕円形掘形の西寄りに深鉢を据える。口縁部、体部、底部など1個体分の深鉢の破片があるが、 完形のまま据えられたのではなく、大きな破片を組み合わせて、掘形底部の一部を開けるように 容器状に並べたとみられる。南東部を押さえ込むように使用痕の認められる2個体の礫が据えられる。残存する掘形の深さは0.2mである。

土器棺墓18-845(図版65-2、図22) 18次東部で検出した。径0.6mの円形掘形に底部を欠いた深鉢を正位に据える。上面には別の深鉢の口縁部から体部下半の破片を水平に並べ、蓋として

用いる。蓋として用いられた深鉢は大半の部分が揃う個体と、ごく一部だけの個体の2個体あることがわかっている。残存する掘形の深さは0.5mである。

土器棺墓18-855(図22) 18次中央南部で検出した。径0.4mの円形掘形に深鉢を正位に据える。 底部は欠かない。上部は後世削平され、体部上半および口縁部を失っている。残存する掘形の深 さは0.25mである。

土器棺墓18-967(図版65-3、図22) 18次西部で検出した。径0.32mの円形掘形に底部を欠いた深鉢を正位に据える。上部は後世に削平され体部上半および口縁部を失っている。残存する掘形の深さは0.2mである。

土器棺墓18-968(図版65-3、図23) 18次西部で検出した。径0.38mの円形掘形に深鉢を正位に据える。底部は欠かない。上部は後世削平され、体部上半および口縁部を失っている。残存する掘形の深さは0.35mである。

土器棺墓18-978(図版65-4、図23) 18次東部で検出した。やや斜位に掘られた径0.4mの円 形掘形に深鉢を口縁部を北西に向け斜位に据える。底部は欠かない。残存する掘形の深さは0.3m である。

土器棺墓18-1010(図版65-5、図23) 18次東部で検出した。径0.35mの円形掘形に深鉢を正位に据える。底部は欠かない。口縁部は掘形上面で外へ折れ曲り水平に開いた状態で検出した。土器の内部には北から落ち込んだ状態で長径15cmの礫を2個検出した。残存する掘形の深さは0.38mである。

土器棺墓18-1064(図版65-6、図23) 18次西部南端で検出した。長軸0.43m、短軸0.37mの 楕円形掘形に深鉢を正位に据える。底部は欠かない。後世の削平により、体部上半・口縁部を失 う。残存する掘形の深さは0.2mである。

土器棺墓18-1078(図版65-4、図23) 18次東部で検出した。径0.35mの円形掘形に底部および体部下半を欠いた深鉢を正位に据える。口縁部は掘形の上面で外側へ折れ曲り水平に検出した。 土器の内部には北西から長径15cmの礫が落ち込んだ状態で検出された。残存する掘形の深さは0.25mである。

土器棺墓18-1271(図版66-1、図24) 18次西部で検出した。掘形は検出面で径0.4mの円形の平面形であるが、西から斜めに掘削して、底部を欠いた深鉢を斜位に据える。土器の底部には長径15cmの礫が入れられる。土器内からは土器片などとともに磨製石斧が出土した。残存する掘形の深さは0.32mである。

土器棺墓18-1288(図版66-2、図24) 18次西部南端で検出した。径0.5mの円形掘形に斜位に深鉢を据える。底部は欠かない。上部は後世の削平を受け、東半部の口縁部を失っている。残存する掘形の深さは0.2mである。

土器棺墓18-1291(図版66-3、図24) 18次南西部で検出した。径0.55mの不整円形の掘形に体部下半・底部を欠いた深鉢を横位に据える。上部は後世の削平を受け一部の口縁部が失われている。残存する掘形の深さは0.2mである。

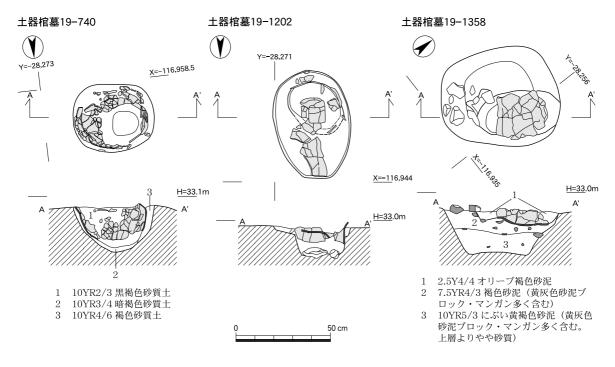


図25 土器棺墓実測図6(1:20)

土器棺墓18-1452 (図版66-4、図24) 18次北西部で検出した。長径0.38m、端渓0.32mの楕円形掘形に体部下半・底部を欠いた深鉢を正位に据える。据えられた体部は西半部を欠いた状態である。欠いた底部を体部の全面に横位に据えて置く。上部は後世に削平され口縁部を失っている。残存する掘形の深さは0.2mである。

土器棺墓18-1640(図版69-4、図24) 18次北西部で検出した。長径0.4m、短径0.32mの楕円形掘形に、底部を欠いた無頸倒卵形体部の深鉢をほぼ横位に据える。上部は削平を受けており、残存する掘形の深さは0.2mである。

土器棺墓19-740(図版66-5、図25) 19次- 区南西端で検出した。長径0.43m、短径0.36m の楕円形掘形に、底部を欠いた深鉢を正位に据える。上部は後世の削平を受け、口縁部から頸部 は失われている。残存する掘形の深さは0.24mである。

土器棺墓19-1202(図版66-6、図25) 19次- 区西端で検出した。長径0.6m、短径0.4mの 楕円形掘形の南半部に、底部・体部下半を欠いた深鉢を正位に据える。底部中央には長径15cmの 礫を置く。南端では掘形上面に口縁部が外に開いた状態で検出されている。棺として据えた体部 の北半部の破片は抜かれて、ほぼ同じ高さで上面の中央から北側に水平に置かれた状態で検出さ れた。蓋として使われたと考えられる。残存する掘形の深さは0.25mである。

土器棺墓19-1358 (図版67-1、図25) 19次- 区中央北端で検出した。長径0.6m、短径0.5mの楕円形の掘形を底部から一旦0.15m埋めた後、掘形の南東寄りに底部・体部下半を欠いた深鉢を横位に据える。後世の削平により上半部の大半は失われている。残存する掘形の深さは0.22mである。

土壙墓16-166 土壙墓16-3158 Y=-28,342 0 x=-116,961 H=34.0m H=34.2m 1 10YR4/4 褐色砂泥 (炭化物・土器片含む) 5YR3/2 黒褐色砂泥 (土器片・礫含む) 5YR4/2 灰褐色砂泥 (礫含む) X=-116,962 土壙墓18-1611 土壙墓16-3253 0 <u>H=3</u>3.5m H=33.5m 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 1 10YR4/6 褐色砂泥 (炭化物少量含む) 10YR5/6 褐色砂泥

図26 土壙墓実測図(1:40)

3 10YR3/4 暗褐色砂泥 (炭化物微量含む)

(3)土壙墓

土壙墓16-166(図26) 16次-D・E区南東部で検出した。長軸1.36m、短軸0.7m、東西方向の長楕円形の掘形で、残存する深さは0.05mであった。四周の壁は緩やかに立ち上がる。底面で土器片・石器などが出土した。

土壙墓16-3158(図版67-2、図26) 16次-D・E 区東部で検出した。長軸1.3m、短軸0.9m の楕円形掘形、残存する深さは0.27mである。底部北西寄りに小型鉢を据える。埋土は2層にわけられる。

土壙墓16-3253(図版67-3、図26) 16次-D・E 区北東部で検出した。長軸1.12m、短軸0.6 m、南北方向の楕円形掘形で、残存する深さは0.1mである。底部北端に小型鉢を据える。

土壙墓18-1611(図版67-4、図26) 18次西部南端で検出した。検出面では長軸1.05m、短軸 0.45mの東西方向の隅丸長方形を呈するが、側壁が抉れてオーバーハングする。埋土には骨片がまばらに含まれる。残存する深さは0.45mある。袋状になる断面の形状から貯蔵穴とも考えられるが、骨片があることや平面形・規模から土壙墓と判断した。

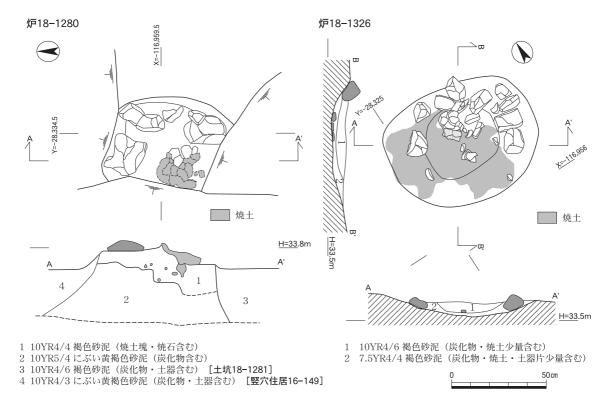


図27 炉18-1280・1326実測図(1:20)

(4)炉跡

炉18-1280(図版67-5、図27) 18次南西部端で検出した。北側を竪穴住居16-149、南側を土坑1281に切られ、また西側は断面観察のための断割によって壊されており、全貌が不詳である。炉の中央から東が残存していると考えられる。残存する範囲は東西0.35m、南北0.45mあり、東から北にかけて平面的に径15cm程度の礫が配されていて、中央に焼土痕が確認できる。かなり壊れていると思われるが、炉18-1326と同様な南へ開く一種の石囲炉と考える。

炉18-1326(図版67-6、図27) 18次西部端で検出した。長軸0.8m、短軸0.65mの楕円形、深さ0.1m程の浅くなだらかな凹みの北側の周縁部に南に開く「U」字状に長径10~15cmの礫を配する。凹み中央から南は高温を受けて、赤色から黄橙色に変色・硬化する。石囲炉の一種と考える。

(5) 土坑

土坑16-3156(図版68-1、図30) 16次-D・E 区東端部で検出した。東半は土層確認のために調査区の東壁沿いで行った断割によって失われている。南北1.0m、東西0.6m以上の平面円形の土坑の西半部である。深さは0.55mで、壁面は比較的直立する。西壁に沿って長径20cm前後の礫を3段に積んでいる。

土坑16-3195(図版2) 16次-D・E区北東部で検出した。東西・南北とも5m以上になる不整形な大型の土坑である。土坑16-3213を切り込む。深さ0.2m前後で平坦となり、北西寄りでは

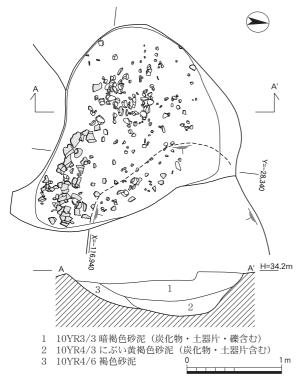


図28 土坑16-3213実測図(1:40)

さらに長軸3.5m、短軸2mの範囲が0.3m前 後楕円形に落ち込む。埋土には多量に土器・ 石器片・礫と炭化物を含む。土壙墓16-3253 を底面で検出し、土器棺墓16-3196は本土坑 の埋没後に切り込む。

土坑16-3213(図版60-2、図28) 16次-D・E 区北東部で検出した。東部を土坑16-3195に掘り込まれる。南北2.5m、東西2mの不定形な平面形で、深さは0.45mあり、壁面はなだらかな傾斜である。埋土上層に土器片と長径10cm未満の礫を多く含み、土器片は南に偏って分布する。

土坑16-3282(図版2) 16次-D・E区 北東部で検出した。竪穴住居16-3205、土坑 16-3213に切り込まれる。輪郭は不明瞭であ るが、東西6.5m以上、南北2.7m前後の長楕

円形、深さ0.8m前後の大型土坑である。暗褐色砂泥の埋土に土器片・石器片などとともに炭化物を多く含む。

土坑18-344(図30) 18次南東部で検出した。南北1.5m、東西1.3mの不整円形の土坑である。 南側は2段に緩やかに掘り込まれる。0.3mの深さがある。埋土には長径が10cm前後の礫が多く含まれ、底面には破損後に廃棄されたとみられる長径40cmの台石の破片を検出した。

土坑18-847(図版68-2、図31) 18次東部中央で検出した。径0.7mの不整形な円形の土坑である。深さは0.3m前後、四周の壁面は抉れて上面平面形より $0.05 \sim 0.1$ m程度オーバーハングした状態であった。底面は中央に向かって緩やかな傾斜面となる。埋土には土器片・石器などが含まれる。貯蔵穴と考えられる。

土坑18-1283(図31) 18次南西部で検出した。径0.5mの不整円形、深さ0.05mの土坑である。 西側は別の遺構に切られる。安定させるために破片を底部に敷き、南東隅に小型のボウル形の浅 鉢を正位に据える。

土坑18-1487(図版69-1・2、図29、表3) 18次中央北側および19次- 区南東部で検出した土坑である。19次- 区南東部で検出した土坑19-3266・3273、いずれも個別の遺構として輪

| | 1+ | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|---|-------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|
| С | 2.888 | 25.002 | 21.970 | 17.634 | 18.873 | 1.238 | 0.382 | 0.903 | 1.721 |
| b | 1.898 | 54.074 | 28.721 | 56.510 | 28.328 | 8.348 | 1.159 | 1.340 | 1.588 |
| a | 0.039 | 1.552 | 14.534 | 32.855 | 11.704 | 8.807 | 1.915 | 1.413 | 1.408 |

表3 石器剥片集計表(g)

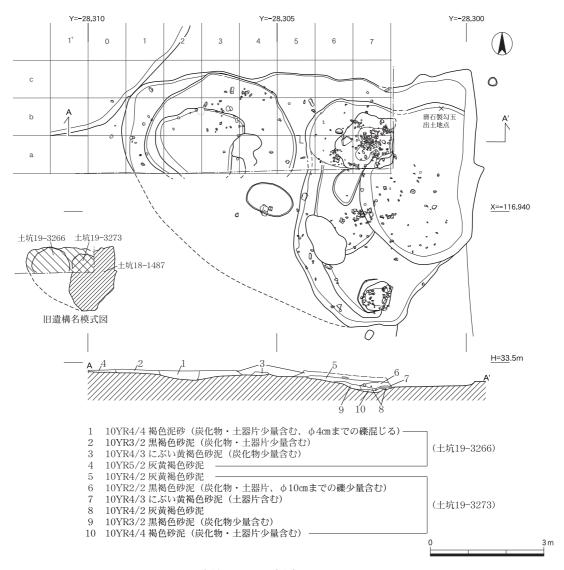
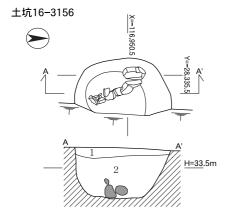


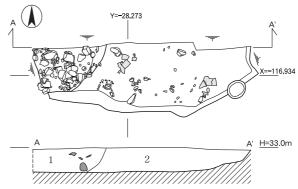
図29 土坑18-1487実測図(1:100)

郭や掘形が明確ではないことから、東西9m、南北6.5mの範囲に一連の遺構群として扱う。19次一区の調査で明らかになった土坑の北中央から西部(19-3266)では、遺構の上面でサヌカイト剥片が部分的に集中して出土する箇所があることがわかった。剥片の検出のための水洗選別を行うこととし、1m四方の小グリッドを設定して、グリッド毎に土の取り上げを行った。グリッドは図示したように、南北を南からa~cの3つ、東西を1 $^+$ ~7の9つの地区にわけ、それらを組み合わせてそれぞれのグリッドをa-1 $^+$ 、a-0、a-1・・・a-7のように呼称した。水洗選別を行って抽出したサヌカイト剥片のグリッド別の重量は、表3に示した通りである。得られた総量は346.804gであり、50gを越えるのがb-0とb-2であった。この2地点を中心とした c-0~a-3の範囲で30~10g以上の剥片が出土している。それ以外の地区では10g未満、1g前後と全く無いわけではないが極端に少なくなっている。なお、剥片の大きさは1~数㎜のものから、1~2㎝程度のものまであり、平均的な重さは1個体0.05g前後である。また、大阪・二上山産のものと、香川・金山産のものがあり、見た目には両者の比率に大きな差はないようである。b-0とb-2を中心として周囲へ減少する漸次的な分布の状況から、石器製作址とみて良いのではない

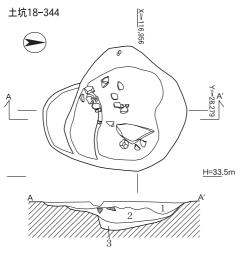


- 10YR3/4 暗褐色砂泥(土器片・炭化物含む) 10YR3/3 暗褐色砂泥



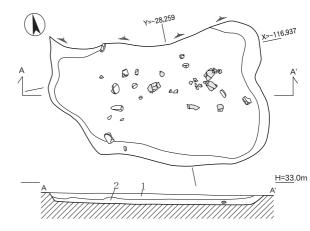


- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 (ϕ 10 \sim 15cm礫、土器多量含む) 2 10YR3/2 黒褐色粘土 (ϕ 1 \sim 3cm礫、土器中量含む)



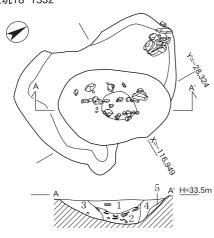
- 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(土器片混) 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥(炭化物混、 φ9cmまでの礫少量混)
- 3 10YR4/4 褐色砂泥

土坑19-1033



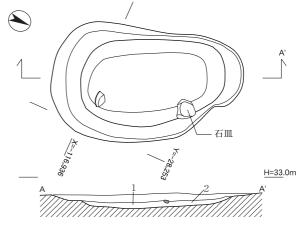
- 1 10YR4/6 褐色粘質土 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土(やや粘質、 φ0.5cm炭少量含む)

土坑18-1532



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭化物・土器片含む)
- 2 7.5YR3/1 黒褐色砂泥 (炭化物・土器片含む)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (炭化物・土器片含む)
- 4 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 (炭化物・土器片含む) 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (炭化物含む)

土坑19-1079



- 1 10YR5/6 黄褐色砂泥(やや粘質) 2 10YR3/4 暗褐色砂泥

図30 土坑実測図1(1:40)

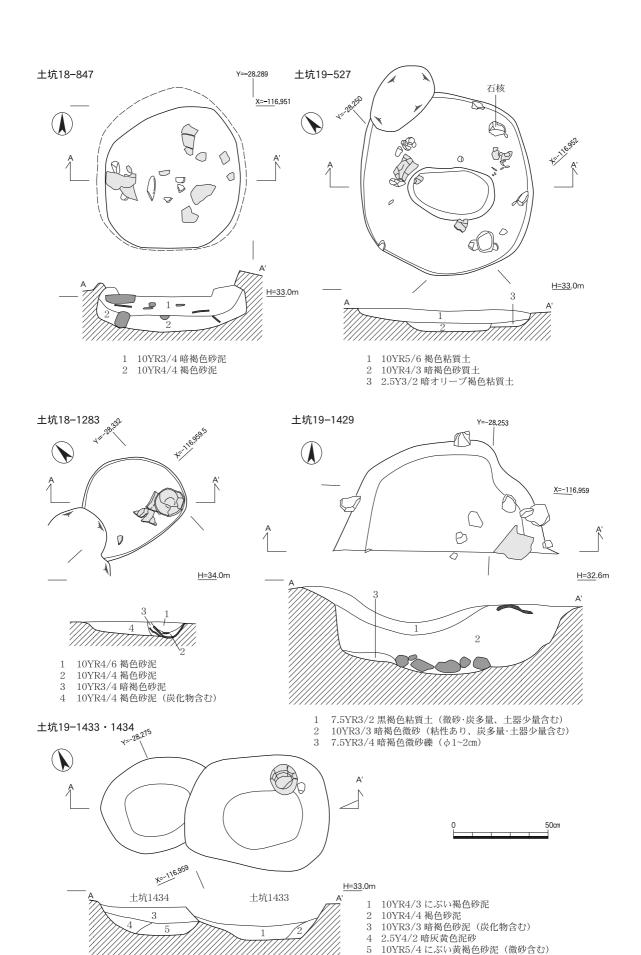


図31 土坑実測図2(1:20)



図32 土坑18-1637検出状況(北から)

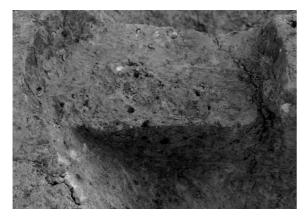


図33 土坑18-1638検出状況(北から)



図34 土坑19-1429検出状況(北東から)

だろうか。

に下がる。北部中央には径1.5mの不定形な範囲では礫などとともに廃棄された土器片を多く検出した(19-3273)。また、北東部では埋土内から滑石製の勾玉が1個出土した(図29の×印)。 土坑18-1532(図30) 18次西部中央で検出した。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ0.25m、不整楕円形の土坑である。埋土の下半部に土器片や長径10~15cmの礫を多く含む。また土坑の北西部に小規模な集石が検出された。南北0.35m、

土坑の東半部では下層でさらに浅くなだらか

土坑18-1637・1638(図32・33) 18次調査 南西部の端で検出した。18-1637は径0.2mの円 形の小土坑が2つ東西に連なる形の土坑で、 0.15mの深さがある。18-1638は竪穴住居16-149の東端で検出した、長軸0.28m、短軸0.2m の楕円形、深さ0.15mの小土坑である。両者と も埋土内に径1cm前後の楕円球形の炭化物をま ばらに含んでいる。炭化物はドングリの剥き身 である。炭化したドングリ剥き身の廃棄あるい は貯蔵用の小土坑と考えられる。

東西0.25mの範囲に9個の礫が置かれている。

土坑19-527(図版68-3、図31) 19次- 区中央南寄りで検出した。径0.9~1mの不整円形、検出面から0.1m前後で底面となる。底面中央には長軸0.45m、短軸0.38m、深さ0.05mの凹みがある。上段の土坑底面に土器、磨石とみられ

る砂岩質の石、サヌカイト石核などが散乱した状態で検出した。

土坑19-849(図版68-4、図30) 19次- 区北西端で検出した。大半が調査区の北に延びると思われる土坑の南端を確認した。西側は流路状遺構19-1155に切られる。検出した範囲は東西2.3 m、南北0.8m、深さは0.25mである。埋土は黒褐色粘土であり、上層の西側は多量に径10~15 cmの礫と土器を含み、下層の東側では径10~15cmの礫は疎らとなり、かわって径1~3cmの小礫が主体となる。少量の土器片が出土した。

土坑19-1033 (図版68-5、図30) 19次- 区北部中央で検出した。北側を後世の遺構に壊されている。東西2.3m、南北1.5m以上の不定形な土坑である。深さ0.1mで、底面は平坦で、壁は

緩やかに立ち上がる。底面に土器片や粘板岩破片などが 散乱する。

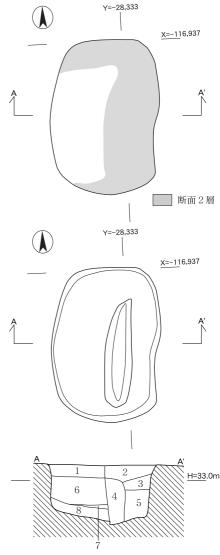
土坑19-1079(図版68-6、図30) 19次- 区北部中央で検出した。平面形は長軸2.0m、短軸1.3mの楕円形、深さ0.07mの底面が、長径1.5m、短径0.95mの楕円形に0.05m深くなる。2段に落ちる底面の北東部に砂岩質の石皿とみられる礫が、南東部に浅鉢破片が出土した。

土坑19-1327(図版4) 19次- 区北西部で検出した。 検出時輪郭は明瞭でなく、上面北側で削器と幅約20cmの サヌカイトの大型剥片を検出した。長径0.6m、短径0.4 mの楕円形掘形、深さ0.17mの土坑である。底面の北側 に寄せて土器破片を重ねて埋納する。埋土は10YR4/4褐 色砂泥で、土器片を多く含む。

土坑19-1429(図34) 19次- 区中央南端、流路状遺構19-1155底面で検出した。流路状遺構19-1155の埋土を切り込んで構築されていた。径1.0mの円形の土坑と考えられるが、南半は調査区外に延びる。底面には径5cm前後の小礫が入れられる。埋土には径1cm前後の楕円球形の炭化物を多く含む。楕円球形の炭化物はドングリの剥き身であり、炭化したドングリの実を廃棄あるいは貯蔵した遺構であると考えられる。

土坑19-1433・1434(図版68-7、図31) 19次- 区南西端で検出した。19-1433は長軸0.75m、短軸0.6mのやや歪な楕円形、0.2mの深さである。北東壁にボウル状の無文の浅鉢が伏せられた状態で出土した。19-1434は西側で19-1433に切られた状態で検出した。長軸0.5m以上、短軸0.5mの楕円形、0.15mの深さである。

土坑19-3288 (図版68-8、図35) 19次- 区の西部、 流路状遺構18-1215の底面中央で検出した。長軸0.8m、

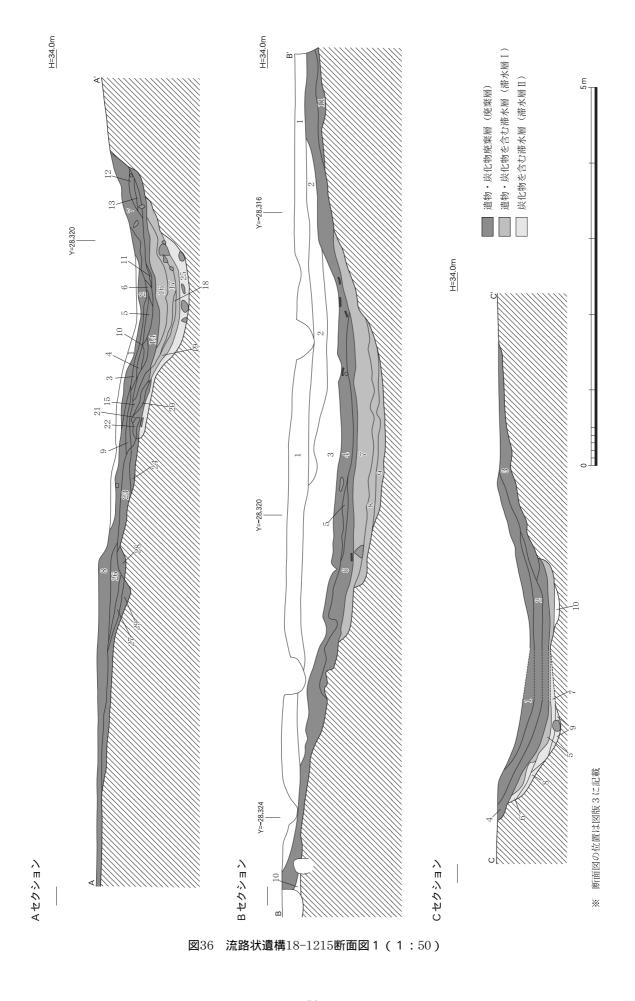


- 1 10YR4/4 褐色砂泥(炭化物・土器片含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥(やや粘質、炭化物多 く土器片少量含む)
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土(炭化物多く土器片 少量含む)
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘質土(炭化物含む)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (炭化物含む、 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト [粘質強] ブ ロック多く混じる)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(粘性、炭 化物少量含む)
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (粘性強、炭化 物少量含む)
- 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト



図35 土坑19-3288実測図(1:20)

短軸0.55m、隅丸長方形の平面形で、東西方向の流路状遺構に直交するように長軸を南北方向に向ける。検出時には上面で炭化物を多く含む黒褐色砂泥が「コ」字状に厚さ0.1m堆積しており(図35上段平面図、断面2層) これを掘り下げると、中央東寄りに東西0.15m、南北0.6mの板状に底部まで下がる黄灰色粘質土を検出した(図35の中段平面図、断面4層) 流路状遺構の方向に直交して板状のものを立てた痕跡とみられる。



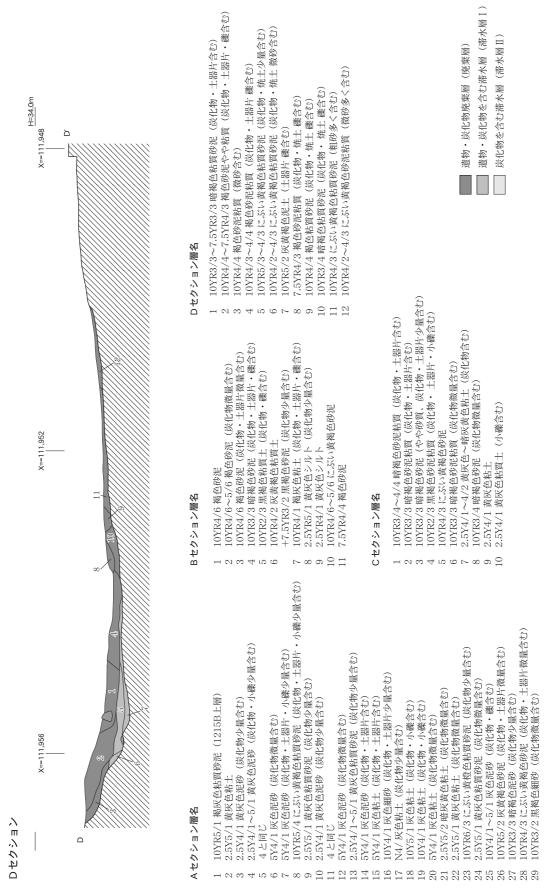


図37 流路状遺構18-1215断面図2(1:50)

断面図の位置は図版3に記載

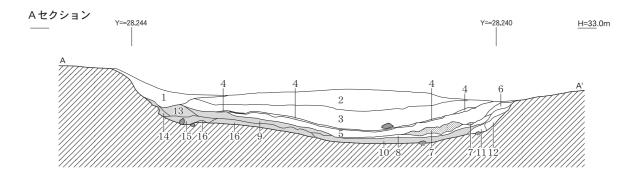
(6)溝・流路状遺構

満18-1067(図版3・70-1) 18次東部北寄りで検出した。18次東部中央にある縄文時代晩期の基盤層である砂礫堆積層高まりの北側から東辺を回り込み、流路状遺構19-1155に合流する人工的に掘り込まれた溝である。北辺の東西方向の部分では幅4m前後、検出面からの深さは0.35m前後で底面は平坦である。東部で砂礫層を回り込む辺りから、溝の幅が2mと狭く、深さも0.5m前後と深くなり、流路状遺構19-1155へ続く。埋土中には多量の土器片や石器・礫が投棄された状況で検出された。溝としての機能を失った後、廃棄坑として使用されたと考える。

流路状遺構18-1215《溝1215》(図版2・3・70-2・71-1、図36・37) 18次の北西から中央部で検出した。北延長部が19次- 区中央から西で検出した流路状遺構3263・3274、さらに北西延長部が16次-D・E区の北東部の落込み3254にあたっており、本報告ではこれらを含めて流路状遺構18-1215と扱う。北西より南東方向へ伸びる流れと、北東から南へ大きく回り込む流れが合流して東へ湾曲する。もとは縄文時代晩期以前の河川活動によって形成され、埋め残された流路状の凹み地形であったと考えられるが、部分的に手を入れて利用したと思われる。北端では東西幅が35mを越えるが、合流して10mの幅に狭まり、さらに、東へ向かうあたりでは幅8mとなってY=-28,300付近で途切れる。全体としてはなだらかな落込みであり、北半部では部分的に流水による深みが形成されている。このような深みには湧水あるいは流水による滞水状況が認められ、生活用水として利用したものと考えられる(図36・37断面図の滞水層と)。深み最深部の底で幅0.6m、長さ2.0mの範囲に部分的に集石遺構が認められる箇所があり、人為的に足場の整備が行われたとみられる。埋土には多くの土器片・石器片・礫などとともに多量の炭化物の混入が認められた。水が涸れて生活用水が入手できなくなると、廃棄坑として利用されるようになったと思われる(図36・37断面図の廃棄層)。

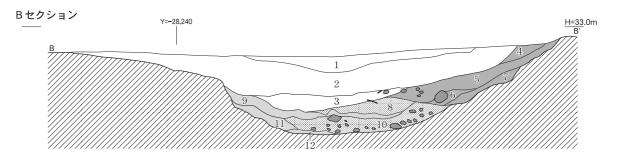
埋土中に炭化物が多量に含まれていることが明らかになり、内容物の分析の必要性が生じた。 土層観察用に設けた畦より、層序を確認しながら土壌サンプルを大量に採取し、フローテーショ ンおよび水洗選別を実施した。多量の炭化物の大半は木材の炭化材であったが、穀類や堅果類な どの種実の炭化物のほか、動物の骨片なども多く含まれており、食物残滓である可能性が高い。 成果については第5章で詳述する。また、自然環境復元のための花粉分析や年代測定などの自然 科学的分析を実施している(第6章参照)。

流路状遺構19-1155(図版3・4・71-2・72-1・73、図38~40) 19次- 区西端から南部、東部で検出した。前述の18-1215と同様に、縄文時代晩期の基盤層を形成した河川活動によって形成され、埋め残された流路状の凹み地形であったと考えられるが、部分的に手を入れて利用したと思われる。19次- 区の北西端、および18次調査区北東端から南へ、大きく東へ湾曲して、19次- 区南辺を東へ進み、再び大きく湾曲して北上し、北西へ抜けるという流路の痕跡である。地区によりそれぞれ遺構の様相が異なるため、19次- 区(図版4)を調査区全体に設けた東西・南北の大セクションによって北西部、南西部、南部、南東部、北東部にわけて記述する。

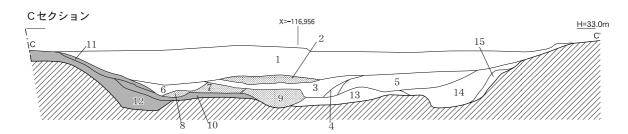


- 10YR4/4 褐色微砂 (炭少量含む)
- 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土 (炭含む)
- 2.5Y5/1 黄灰色粘土(炭多量含む)
- 4 5Y7/2 灰白色粘土 (一部5層と混じる)
- 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土 (炭多量含む、遺物少量含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 (炭少量含む)
- 10YR4/6 褐色粗砂礫(φ1cmの礫)
- 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (炭多量含む、遺物少量含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ色シルト (炭少量含む)

- 10 5Y4/1 灰色シルト粘性あり (炭多量含む)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (炭少量含む) 11
- 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土 (礫含む)
- 2.5Y5/3 黄褐色粘土シルト質 (炭少量含む) 13
- 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (炭少量含む)
- 15 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (礫少量含む、 7.5YR5/8明褐色砂質土含む)
- 16 10YR4/2 灰黄褐色シルト (礫含む、炭少量含む)



- 10YR4/4 褐色粘質土(礫・遺物含む) 10YR4/4 褐色粘質土(炭少量含む)
- 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥(粘質土、中粒砂混入、炭化物多く含む)
- 10YR4/3 褐色泥砂(礫まばらに含む、炭化物・土器片多く含む)
- 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂混礫 (礫・炭化物・土器片多く含む)
- 10YR4/2 灰黄褐色泥砂混礫 (礫・炭化物・土器片多く含む) 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂混礫 (礫・炭化物・土器片多く含む)
- 2.5Y5/4 黄褐色粗砂礫(礫・炭化物含む) 8
- 2.5Y5/1 黄褐色細砂~シルト (炭化物多く含む) 9
- 10 2.5Y4/1 黄褐色粗砂礫 (φ20~10cm以下の礫主体)
- 11 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂~シルト
- 12 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂~シルト



- 10YR4/4 褐色泥砂 (小礫まばらに含む)
- 10YR3/3 暗褐色泥砂 (粗砂多く含む)
- 10YR4/4 褐色泥砂(やや粘質、小礫含む)
- 10YR4/4 褐色泥砂(粗砂多く含む)
- 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂
- 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 (小礫含む)
- 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 (小礫~粗砂含む)
- 10YR3/3 暗褐色粗砂礫

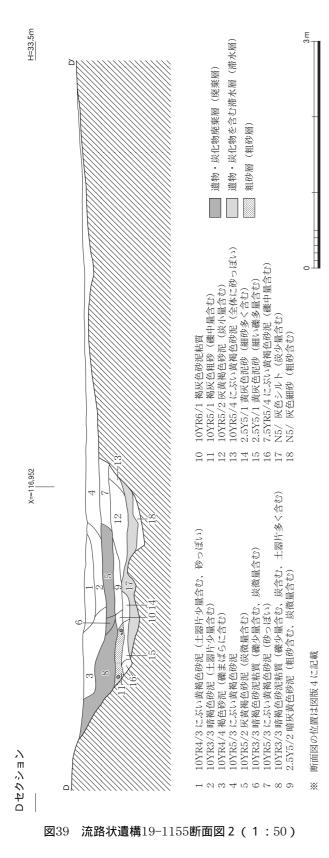
- 10 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂 (炭化物多く含む)
- 10YR4/4 褐色泥砂 (やや粘質、炭化物多く含む) 11
- 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 (やや粘質、炭化物多く含む) 12
- 13 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (粗砂主体)

10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂礫

- 14 10YR4/4 褐色泥砂 (炭化物少量含む)
- 15 10YR4/2 灰黄褐色泥砂

※ 断面図の位置は図版4に記載 遺物・炭化物廃棄層 (廃棄層) 遺物・炭化物を含む滞水層 (滞水層) 粗砂層 (粗砂層)

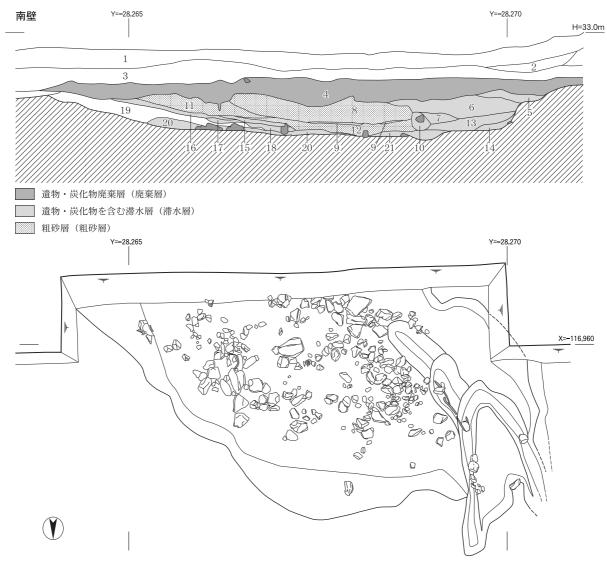
図38 流路状遺構19-1155断面図1(1:50)



北西部では東肩部を検出した。底まで の深さは0.7~0.9mあり、東肩は比較的 急峻な立ち上がりである。これに対して、 西肩となる18次調査北東部では緩傾斜の 立ち上がりである。南西部(図39Dセク ション)では、なだらかに落ちる北東肩 から、北西部の東肩から続く断面「U」 字状に落ち込む深い溝状を呈し、南西肩 は急激に立ち上がる。北西方向からは溝 18-1067が合流する。「U」字状の溝状部 分は幅3~5m、検出面からの深さは0.9 m前後であり、南東方向へ延びていくよ うであり、南壁際で集石遺構19-1430を 検出した。南部(図38Cセクション)で は、北肩はやや緩やかに立ち上がり、検 出面より0.8m前後で底面となるが凹凸が 著しく一様ではない。南側で底面は一旦 立ち上がるが、さらに南の調査区外へ広 がるとみている。南側の立ち上がり部分 に炭化したドングリの実を入れた土坑19-1429などが検出された。南東部 (図38 B セクション)では緩やかな北西肩から南 西部と同様に断面「U」字状に落ち込む 深い溝状を呈し南東肩部は比較的急激に 立ち上がる。「U」字状の溝状部分は幅5 m前後、検出面からの深さ1m前後であ る。南西方向から北東へさらに大きく湾 曲して北西へ向かう。北東部(図38Aセ クション)では東側に砂礫の高まりが存 在しており、南東部から続く「U」字状 の溝状部分は大きく迂回して北東へ向か

う。幅は5m前後、検出面からの深さは1m前後である。砂礫の高まりには土器片などが混じっており、人為的に砂礫を盛った可能性がある。

先の流路状遺構18-1215と同様に、常時流水があったとは考えにくいが、深い部分では湧水などによって滞水(図38~40滞水層)しており、これを生活用水などとして利用するために部分的



- 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土 (炭化物、焼土魂、遺物少量含む)
- 10YR4/4 褐色粘質土 (炭化物、土器片少量含む)
- 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土 (シルト質) 3
- 5Y5/1 灰色シルト (粘性あり) (炭化物含む、土器片少量含む、 4 褐色鉄分含む)
- 5Y5/1 灰色シルト (微砂混じる、炭化物含む)
- N4/ 灰色シルト (粘性あり)
- N4/ 灰色粗砂 (礫少量含む)
- N3/ 暗灰色粘土 (炭化物多量含む) 5Y4/2 灰オリーブ色微砂 (粘性あり、炭化物少量含む)
- 10 5Y4/1 灰色シルト (粘性あり)
- 11 7.5YR4/6 褐色粘土 (粗砂混じる)

- 12 7.5Y4/1 灰色細砂 (炭化物少量含む)
- 13 N4/ 灰色シルト粘性あり (炭化物含む)
- 14 N6/ 灰色細砂粘性あり (シルト含む)
- 15 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 (炭化物少量含む)
- 16 7.5Y4/3 暗オリーブ色粘土 (炭少量含む)
- 17 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土(シルト質)(粗砂少量混じる、 炭化物多量含む)
- 18 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 (粗砂混じる、炭化物含む)
- 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土 (炭化物多量含む) 19
- 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 (シルト質) (粗砂混じる、 20 炭化物多量含む)
- 21 N3/ 暗灰色粘土 (炭化物多量含む)



図40 集石遺構19-1430実測図(1:50)

に手を入れて管理したとみられる。後述する集石遺構19-1430は水利用に係る足場遺構と考えら れる。全体としては何度か洪水などによって運ばれた粗砂礫を主体とする堆積(図38~40粗砂層) により埋没して、水場としての機能を失い、その後は土器・石器・礫などとともに炭化物が大量 に廃棄(図38~40廃棄層)されるようになるとみている。

先述の流路状遺構18-1215と同様に、埋土内に土器・石器・礫などとともに多くの炭化物が廃 棄されているため、各所に設けた土層観察用の畦より、層位別に土壌サンプルを採取し、フロー

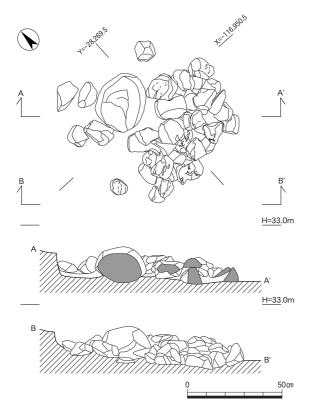


図41 配石遺構19-1412実測図(1:50)

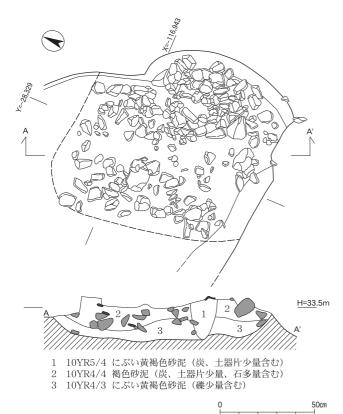


図42 集石遺構18-1631実測図(1:50)

テーションおよび水洗選別を実施し、多量の炭化物試料を採取した。成果については第5章第5節で詳述する。

集石遺構19-1430(図版72-2、図40) 19次- 区南西端部、流路状遺構19-1155 の溝状部底面で検出した。東西3.5m、南 北2m以上の範囲で長径10~50cmの礫が 散乱した状態で検出した。上面の高さが 比較的揃っており、一部面を揃えて列状 に並べた箇所や使用痕のある石器なども 含まれる点で、人為的に施された足場遺 構が崩壊したものであると考えられる。 さらに南に広がる。集石の西端では灰色 粘土で埋まる北西から南東方向の幅0.4m の溝状の落込みを検出した。粘土に密封 されて全く腐食していない木枝や葉、種 実などが出土した。湧水のあった痕跡と みられる。また、全面を覆うオリーブ黒 色粘質土 (20層)には土器・石器片とと もに多量の炭化物を含んでいる。

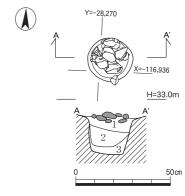
(7)配石・集石遺構

配石遺構19-1412 (図版69-3、図41)
19次- 区南西部、流路状遺構19-1155の
北東肩部で検出した。南北0.9m、東西
0.8mの範囲の北西寄りに径25~30cm、
高さ20cmの扁平球状の大型の砂岩を据え、
その周囲、特に南西部に長径20~40cmの
砂岩、チャートを集中して配置する。掘
形はなく、地表面に直に置いたもので、
礫の配置に規則性はみられない。中心と
みられる大型の砂岩は部分的に面を持つ
ことから、面取りの研磨加工が施された
とみられる。石の下面の断割を行って下
層遺構の確認をしたが、遺構は検出でき

なかった。

集石遺構18-1631(図版69-4、図42) 18次北西部で 検出した。長径1.15m、短径1.0mの不整形な方形の土坑 に長径5~20cmの礫を多量に廃棄する。礫の配置に規則 性はみられない。土器片も少量含まれる。

その他の集石遺構(図43~47) これらの他に小規模な集石遺構を18次調査で3基、19次- 区で1基検出している。集石遺構18-870(図44)は18次東部で検出した径0.6m、深さ0.08mの円形掘形に長径10~15cmのチャートを中心とする亜角礫8個を入れる。集石遺構18-1540・1541(図45・46)は18次南西部、集石遺構19-1422(図



- 1 10YR4/4 褐色砂泥~泥砂
- 2 10YR4/6 褐色微砂 (炭化物少量含む)
- 3 2.5Y4/6 オリーブ褐色微砂

図43 集石遺構19-1422実測図(1:50)

 $43 \cdot 47$)は19次 - 区北西部で検出した。これら 3 つの集石遺構はいずれも、40.2m前後の掘形をある程度埋めた段階で、長40.2m前後の掘形をある程度埋めた段階で、長40.2m前後の掘形なある。いずれも用途は不明である。



図44 集石遺構18-870(北北西から)



図45 集石遺構18-1540(南から)

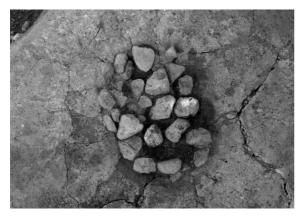
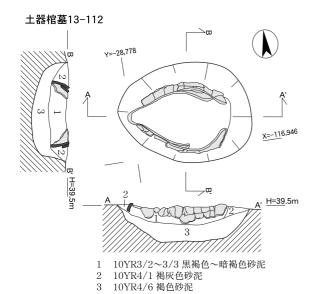


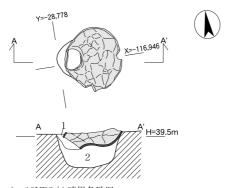
図46 集石遺構18-1541(南から)



図47 集石遺構19-1422(東から)



土器棺墓13-113



1 10YR3/4 暗褐色砂泥 2 10YR5/2 灰黄褐色砂泥(やや粘質)

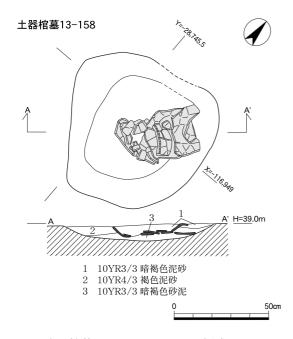


図48 土器棺墓13-112・113・158実測図(1:20)

2 縄文時代晩期後半の遺構

縄文時代晩期後葉の遺構は、遺跡西寄りの13次調査A1~3・B1区で検出した。後世の長岡京期や古墳時代の遺構と同一面で検出され、遺構密度も低く、当時の生活面はかなり削平を受けているものと思われる。遺構には、土器棺墓3基、土坑6基がある。これらとは離れて、19次- 区で土坑を1基検出した。

(1)土器棺墓

土器棺墓13-112《土器棺墓3》(図版74-2、図48) 13次-A3区西部で検出した。検出時には既に上面は削平を受け、土器棺の上部は失われている。長軸0.7m、短軸0.55mの楕円形掘形の中央に幅10cm程度の深鉢の縦方向にスライスされた土器が横たわった状態で検出された。底面に土器片は検出されなかった。深さ0.2mの掘形を0.1m褐色砂泥で埋めた後、縦に半截した深鉢の半身を横位にして、うつ伏せに設置したと考えられる。口縁部は東を向く。

土器棺墓13-113《土器棺墓2》(図版74-2、図48) 13次-A3区西部で検出した。検出時に既に上面は削平を受けて、土器棺の上部は失われている。径0.3m、深さ0.18mの円形掘形を底面から0.1m灰黄褐色砂泥で埋めて、口縁部を欠いた壷の頸部を斜め下方に向けて据える。上部となる体部下半は大半が後世の削平により失われている。

土器棺墓13-158《土器棺墓1》(図版74-1、図48) 13次-A1・2区の西部で検出した。径0.8m前後の不整円形掘形の北東寄りに深鉢の破片が重なって検出された。体部下半および底部を欠く。下側の土器は口縁部を北東に向けるが、上側の土器は反対の南西に口縁部を

向けた状態で検出した。同一個体の破片に底板と天板に用いた土器棺墓と考えるが、単に土器の破片を埋納した遺構という可能性も考えられる。上部は削平を受けており、深さは0.08mである。

(2) 土坑

土坑13-33《土壙墓3》(図49) 13次-A 1・2区西部南寄りで検出した。径0.55mの円形掘形で、深さ0.9mである。深さ0.5m辺りで長径10~15cmの礫を数個検出した。本来少なくともこの辺りで層位が分かれると思われるが、明確にし得なかった。

土坑13-53《土壙4》(図50) 13次-B 1区西部で検出した。長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形、深さ0.1mの底面の中央が径0.3~0.4mの範囲でさらに0.1m凹み、焼けて赤変硬化していた。焼面の上面には炭化物・焼土塊を多く含む層が覆っていた。屋外炉と考えられる。遺物がなく時期を確定しがたいが、当該期の遺構と考える。

土坑13-143《土壙墓1》(図版74-5、図50) 13次-A 1・2区西部で検出した。土坑の北半を後世の遺構によって切られ失う。東西0.9m、南北は0.5m以上の方形の掘形とみられる。深さは0.35mである。上面より0.2mで土器片と長径10~15cmの礫数個を検出した。

土坑13-145《土壙墓2》(図版74-5、図50) 13次-A 1・2区西部で検出した。土坑の南部が後世の遺構に切り込まれる。径0.6m前後の円形掘形で、0.55mの深さがある。上面より0.3m辺りの深さで土器片や長径10cm前後の礫数個を検出した。

土坑13-149《土壙墓4》(図版1) 13次-A 3 区西部で検出した。長軸1.4m、短軸0.8~1.0 mの不整楕円形の掘形で、深さ0.5mである。

土坑13-200《土壙3》(図版74-3、図50) 13次-B 1 区東部で検出した。径0.8~0.9mの不整円形の掘形で、深さは0.65mある。0.3mの深さまで埋めた後、長径15~20mの礫4個を据える。礫を据えた面に炭層(第8層)が堆積し、土坑の南東辺が熱によって赤変して硬化することなどから、屋外炉として使われたと考えられる。遺物がなく時期を確定しがたいが、当該期の遺構と考える。

土坑19-3109(図版74-4、図50) 19次- 区中央部で検出した。長軸0.4m、短軸0.32mの楕円形掘形で、深さは0.1mである。深鉢の口縁部から体部の破片を平らに3段重ねて置き、埋納する。弥生時代前期の遺構基盤層上面で検出した。つまり、先行する流路状遺構18-1215が廃棄・埋没して弥生時代前期の遺構基盤層が堆積した後に営まれた遺構である。弥生時代前期の遺構基盤層の堆積の時間を示す重要な遺構であると考える。

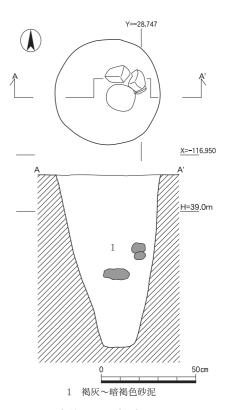
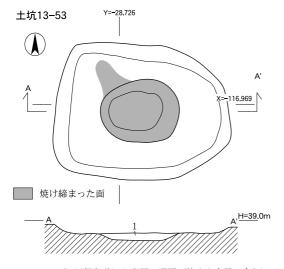
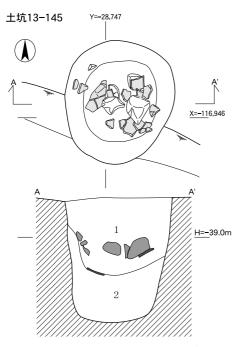


図49 土坑13-33実測図(1:20)



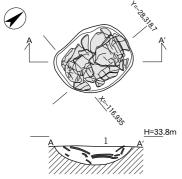
1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥と炭層の混層 (焼土を多量に含む)



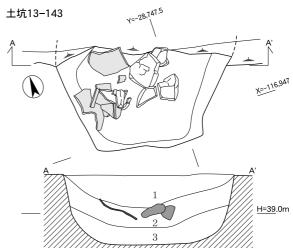
1 10YR3/2~2/2 黒褐色砂泥 (炭化物含む)

2 10YR4/2~3/2 灰黄褐色砂泥

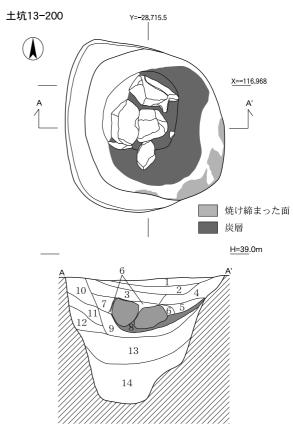
土坑19-3109



1 10YR3/4 暗褐色砂泥(炭化物少量含む) 50 cm



- 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 10YR2/3 黒褐色砂泥(粘質、炭化物含む)
- 3 10YR2/2 黒褐色粘土



- 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 2 10YR4/1 褐灰色砂泥
 3 10YR5/1 褐灰色砂泥
 4 10YR5/1 褐灰色砂泥 (炭化物少量混じる)
 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭化物少量混じる)
 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭化物少量混じる)
 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭化物少量混じる)
 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭化物少量混じる)
 7 .5YR1.7/1 黒色炭層
 9 2.5Y/3 暗オリーブ褐色砂泥
 10 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
 11 10YR2/3 黒褐色砂泥

- 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 13 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (黄褐色粘土ブロックをやや多く含む)
- 14 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥(黄褐色粘土ブロックをやや多く含む)

図50 土坑実測図(1:20)

第5章 遺物

1 遺物の概要

遺物は土器・石器・土製品をあわせて、コンテナ総数にして約450箱である。土器は体部の破片が大半を占めており、器種や器形が不明なものが多い。石器は製品の他に、サヌカイトの剥片と粘板岩および頁岩の剥片が大量に出土している。この他に、水洗選別のために取り上げた土壌の中から検出した遺物が19箱ある。自然遺物の採集が主目的であったが、土器破片や微細剥片、石鏃なども採集している。

縄文時代の遺構面や包含層は弥生時代前期遺構基盤層と呼ぶ黄褐色土に覆われていたため、遺構面が深い部分では後世の攪乱を受けることなく、遺物についてもこれより新しい時代の遺物の混入は見られなかった。また、16次-D・E区では、後世の遺構から縄文時代の遺物は出土しなかった。ただし、地山相当層の礫層が弥生時代の遺構面まであがっていた18次調査区東端、中世以降の雛壇造成に伴って縄文時代遺構面が削平された19次- 区東端については、後世の遺構から縄文時代の遺物が出土している。

2 土器

土坑などから出土する土器の個体数は多くなかったが、流路状遺構18-1215・19-1155などの大きな遺構からは時期的にまとまった遺物が大量に出土した。深鉢や浅鉢の胴部片が目立ち、流路状遺構では遺構の特性上、細片になっているものも多い。流路状遺構19-1155ではその堆積状況を物語るかのように、特に南東や中央西寄りに完形に近い土器が集中していた。また、残りの良かった竪穴住居16-3175からは床面直上の遺物が出土しているだけでなく、埋土上部の堆積層に突帯文土器が含まれていた。その他の竪穴住居については、埋土から遺物が少なからず出土している。土器棺墓の土器は底部を欠くものが多かった。また、後世の攪乱などによって胴部上半が取り除かれて底部と胴部だけが残存する、時期が限定できないものもあった。口縁まで残っていた土器棺墓の土器の中には、土質の影響を受けて劣化し、取り上げ時に細片になったため、接合ができなくなったものも数個体ある。今回の報告では、各遺構の様相が捉えられると考えた土器をなるべく細片に至るまで拾い上げた。しかし、時間的な制約から流路状遺構18-1215・19-1155出土土器については復元実測が可能であったものを優先的に抽出対象としたため、小破片までは掲載できず、時期的な偏りが生じたことは否めない。

出土土器の型式が数型式に及ぶことから、土器の時期については上里 1 ~ 7期として記述した。 上里 1 期は滋賀里 式、上里 2 期は滋賀里 a式古段階、上里 3 期は滋賀里 a式新段階、上里 4 期は篠原式古段階、上里 5 期は篠原式中段階、上里 6 期は滋賀里 式、上里 7 期は船橋式から長原式である。また、出土土器は口径と器高の対比から深鉢と浅鉢、器形に特徴のある壷や注口土器、蓋の 5 器形に分けた。基本的に口径が器高より小さくなるものを深鉢、大きくなるものを浅 鉢としている。深鉢と浅鉢は口縁部形態などによって細分が可能であったものについてはさらに分類した。底部については、口縁部付近の形態が判明したもの以外、底部を一括して扱い、接地面の 形態などから分類している。異系統土器は系統が多岐にわたるとみられることから、一括すること とした。突帯文土器は深鉢と壷のみであったため、あえて記号を付していない。

以下では、分類の基準を記したのち、遺構ごとに各土器の概要を述べる。個別の分類や調整など については観察表を参照。

(1)深鉢の分類

A 形態 口縁部から胴部上半が1段ないし2段に屈曲するもの。2段に屈曲するとみられる土器 についても、破片であったため、1段屈曲として扱った。

A 1類: 頸部から外反しながら立ち上がる口縁を持つもの。口縁部は真直ぐ立ち上がるものと 内湾しながら立ち上がるものがある。

A 2 類: すぼまった頸部に直立する口縁部が付くもの。

A3類:内屈した頸部に緩やかに外反する口縁部が付くもの。口縁部は直立に近いものもある。

A 4 類:屈曲部が明瞭でないもの。1段屈曲である。

A5類:屈曲部が湾曲するもの。

B形態 長い頸部に短い口縁部が立ち上がるもの。口縁部と頸部の境目が段をもつ。

B 1 類: 頸部幅が広く、肩部に2本の平行沈線を施文するもの。口縁部内面には強いユビナデによる沈線がある。岩田第4類土器の系譜を引くとみられる土器。

B2類:B1類の内面沈線がないもの。破片のため、頸部以下の形態は不明である。

B3類:頸部を二枚貝で調整するもの。口縁部と胴部との境目が明瞭である。

B 4 類:口縁部直下で頸部がすぼまるもの。口縁部は外反し、胴部と頸部の境目が明瞭である。

B 5 類:口縁部外面の段を口縁部の外反とユビナデによって表現したもの。これによって頸部との境目を作るが、明瞭でないものも含む。口縁部の外反が B 4 類に比べて緩い。

B6類:内面に2本の平行する沈線、外面に3本の平行する沈線を引くもの。

C 形態 口縁部幅が広く、外反するもの。 B の外面の段がなくなったもの。 頸部は二枚貝条痕調整が主体である。

C 1 類:胴部の屈曲は緩やかで、内湾する。口縁端部が内湾する。端部が肥厚するものも含む。

C 2 類:口縁端部がさらに外反するもの。端部外面は粘土がバリ状にはみ出す。

C3類:C2類の屈曲部がほとんどなくなったもの。

D形態 頸部のユビナデ調整が明瞭なもの。ユビナデは指1本分が基本である。

D 1 類:口縁端部がわずかに内湾するもの。胴部の最大径は上部より少し下がった位置である。

D 2 類: 口縁部が外反するもの。胴部の最大径は肩部直下である。

D3類:口縁部の外反度がD1・2類よりも大きくなるもの。胴部の張りは小さい。

D4類:口縁部はD2類、口縁部の胴部への取り付きがD1~3類よりも屈曲するもの。

D5類:D4の口縁部幅が狭くなったもの。

D 6 類:波状口縁で、口縁端部に刻みを施すもの。胴部は寸胴。

D7類:頸部と腰部の2箇所が括れた土器に、短い口縁部が付くもの。

E形態 D形態同様に頸部にユビナデを施すが、なでた痕跡が不明瞭またはないものが多い。

E 1 類:口縁部が湾曲することなく立ち上がるもの。

E 2 類:口縁部が緩やかに内湾するもの。

E3類:口縁端部が肥厚するもの。

E 4 類:波状または突起が付く口縁部をもつもの。口縁端部に刻みを施す。

F 形態 頸部から口縁部が外反し、胴部上半が張り出すもの。基本的に口縁部から肩部は二枚貝 条痕である。

F 1 類:口縁部と胴部の境目が明瞭なもの。

F2類:頸部が緩やかに屈曲し、胴部中央付近に最大径があるとみられるもの。

F 3 類:波状口縁をもつもの。

G 形態 F 形態の口縁部幅が広くなるものや、口縁部が大きく外反するもの。二枚貝条痕を施さない土器が増える。

G 1 類:口縁部幅が広いもの。

G2類:口縁部幅がG1より狭いが、頸部から口縁部全体が強く外反する。

G3類:口縁部幅が広く、緩やかに大きく外反するもの。胴部と頸部の境目が不明瞭である。

H形態 口縁部から胴部にかけての屈曲がほとんどなくなるもの。頸部がナデ、胴部がケズリ調整を施すものが多い。

H 1 類:口縁部幅が広いもの。

H2類:口縁部幅が狭いもの。

I 形態 G 形態またはH 形態の口縁端部に刻みを施すもの。

I 1 類:G形態の口縁端部に刻みを施すもの。口縁部幅に長短がある。

I2類:H形態の口縁端部に刻みを施すもの。口縁部幅に長短がある。

J形態 屈曲部を持たないもの。

J 1 類:口縁部が内湾する、いわゆる砲弾形を呈するもの。

J2類:口縁部が内湾しないもの。

(2)浅鉢の分類

A 形態 皿状の胴部に、内湾しながら大きく広がる口縁部がつくもの。頸部は内屈する。口縁部 外面に平行沈線文や橿原式文様を施すものが主流である。

B 形態 皿状の胴部に、内屈する頸部がつく。口縁部は頸部からさらに大きく外反し、短い端部が立ち上がるもの。

B 1 類:口縁端部外面に沈線を施すもの。

B 2 類:口縁端部外面に沈線を施さないもの。

C形態 B形態の口縁端部の立ち上がりがないもの。

C 1類:口縁部幅が広いもの。

C 2 類:口縁部幅が C 1 より狭いもの。

C 3 類:幅が狭く、屈曲部と同程度しか張り出さない口縁部をもつもの。

C4類:扁平な丸底に、大きく外反する幅広の口縁部をもつもの。

C 5 類:丸底に、幅の広い口縁部がつく。頸部にユビナデを施すため、境目が段化する。

C6類:胴部の屈曲が緩くなり、幅の広い口縁部がつくもの。口縁端部内面に沈線を施す。

D形態 内屈する胴部に短い口縁端部が立ち上がるもの。

D 1類:胴部が特に張り出すもの。

D 2 類:胴部最大径と口径が同じくらいのもの。口縁端部内外面に沈線を施すものもある。

D3類:口縁部が頸部から外反し、口縁端部内面に沈線が入るもの。

E 形態 算盤玉形の胴部に、外反する短い口縁部が付くもの。

E1類:口縁部が内湾する。口縁端部が段化する。

E2類:E1類より口縁部が直立し、波状口縁を呈するもの。肩部に斜格子文を施す。

E3類:頸部で内湾し、緩やかに口縁部が外反するもの。口縁端部内面に沈線を2本、外面 に沈線文を施す。

F 形態 椀状の胴部に短い口縁部が立ち上がるもの。

G形態 椀形を呈する土器の頸部を強くなでて、短い口縁部を作りだすもの。

H形態 椀形を呈するもので、大型のもの。

I形態 椀形を呈する小型のもの。

Ⅰ 1 類:丸底を呈するもの。

I2類:平底を呈するもの。

I3類:丸底で、器高がI1よりも低いもの。

I 4 類: I 1 であるが、上面観が舟形を呈するもの。いわゆる舟形土器。

」形態 椀形よりも器高が高いもの。

J 1類:ボウルのように全体が内湾するもの。

J2類:口縁部は内湾し、底部は丸底になるとみられるもの。

J3類:底部が尖底に近い丸底を呈するもの。

J4類:平底を呈するもの。

J 5 類:丸い底部から口縁部が大きく開きながら真直ぐに立ち上がるもの。

K形態 皿形を呈するもの。

(3)底部の分類

凹底、丸底、尖底に近い丸底、平底、台付鉢の脚部に分かれる。

凹底 凹部の形態と接地面からの立ち上がり部分によって、8つに分類できる。

凹1類:凹部が深く、中央が特に粗く削られるもの。接地面から広がりながら立ち上がる。

凹2類:凹部が緩やかなもの。接地面から凹1類よりも角度が大きく立ち上がる。

凹3類:凹部が緩やかで、接地面に高台状の幅があるもの。立ち上がり角度は小さい。

凹4類:凹部があまり凹まないもの。接地面から少し立ち上がった部分に調整工具の当たりがあり、粘土が削り取られたため、湾曲しながら立ち上がる。

凹5類:凹部があまり凹まず、接地面の幅が広いもの。立ち上がり角度は小さい。

凹6類:凹部が深い。立ち上がりは凹2類に近い。

凹7類:凹部が深い。接地面直上にユビナデや指頭圧痕を施すため、この部分が直立したような形状をとる。

凹8類:浅鉢の底部。接地面から高台状に直立し、そこから広がりながら立ち上がる。

丸底 器厚が均一なものと底が厚いものがある。削る際の工具の当て方などに影響されたとみ られる尖底に近い丸底も含む。器厚は厚いものから薄いものがある。

平底 丸底に近いものや中央をわずかに凹ませるものがある。

台付鉢脚部 鉢部と脚裾部は欠損しているため、形状は不明である。脚部は中実である。

(4)縄文時代晩期前半の土器

竪穴住居16-149(図版7・8・77 66~84) 66~75は深鉢、76~82は浅鉢、83・84は異系統の深鉢と浅鉢である。66・67は深鉢B4類の波状口縁で、68~75は深鉢C2・D1~3・E1・H1類の平口縁である。深鉢は頸部にはユビナデを施すものを含むが、口縁外面と胴部の調整は二枚貝条痕よりもナデやケズリによるものが多い。76は浅鉢J4類で波状口縁をなす。外面をケズリのちナデによって調整する。77は浅鉢D1類で、口縁部から頸部にかけて朱を塗布する。78は浅鉢E1類の口縁部とみられ、口縁端部がわずかに立ち上がる。79は口縁端部外面に沈線をもたない浅鉢B2類である。80は浅鉢E1類の胴部とみられる。外面に幅広の沈線が入る。81はA形態の浅鉢口縁とみられ、外面に浅い沈線を平行に2本施文する。82は浅鉢I2類で内外面に細かいミガキを施す。83は皿形になるとみられる。上里3期に属する。

竪穴住居16-200(図版6・76 31~42) 31・32・34~36は深鉢、37~39は浅鉢、40~42は異系統の深鉢、33は深鉢底部である。31は4単位の波状口縁を持つ深鉢I2類で、頂部を軽く押圧したのち爪形の縦刻み、口縁端部にD字刻みを施す。32は粘土の積み上げ痕が内外面に明瞭に残る深鉢J1類である。35は深鉢D1類の波状口縁で、口縁外面にケズリ痕が残る。口縁端部を丁寧に面取りする。深鉢J2類の36は、端部を平らに面取りしたのち、D字刻みを施す。37はF形態で、橿原式文様の線状化が著しく進んだものとみられる。38は浅鉢C3類の胴部である。生駒西麓産とみられる胎土である。39は外面を二枚貝で調整し、口縁端部に突起を貼り付けた浅鉢J2類である。内面は板ナデである。40は波状口縁の頂点部分に、垂下する突帯を貼り付ける。突帯頂点を凹ませ、突帯外面を刻む。中部地方の土器とみられる。41・42は羊歯状文をもつ大洞

BC式である。時期は上里2~5期に属し、主体は上里5期である。

竪穴住居16-3175(図版5・6・75 1~30) 2は炉、3は床面から出土した。1~4・11~ 19は深鉢、5・6・20~24は浅鉢、25~27は異系統の浅鉢や壷、7~10は深鉢底部、28~30は 突帯文土器である。深鉢H形態の $1 \cdot 14$ 、同I 形態の $2 \cdot 18$ は胴部が特に球状に張り出す。肩部 を強くなでるこれらの土器は、内面の頸部と肩部の境に明瞭な稜をもつ。3・16・19(I2類)・ 4 (H 1 類)・17 (I 1類)は口縁の立ち上がりが長く、比較的まっすぐ立ち上がる 4 以外は大きく 外反する。3の内面口縁と胴部の境に稜がある。深鉢I形態の2・3・16~19と深鉢F形態の15 は口縁端部に小D字、D字、小O字やO字の刻みを施す。16・19は内面側にO字刻みを施すため、 刻みが内傾する。17の刻みは頂点の両側に7つ単位で入れる。18は突起状に一部が高くなり、長 方形の刻みを刻む。16・17は波状口縁である。深鉢A3類の11は口縁外面を巻貝状の工具でナデ 調整する。深鉢B2類の12は口縁外面を二枚貝条痕で調整する。口縁端部外面に細いナデ調整が 確認できる。5は外面に粘土紐痕が残る浅鉢」2類で、20は浅鉢H類である。6は内外面を丁寧 に磨くK形態である。21は口縁内側に沈線を持つ浅鉢C6類である。浅鉢C1類の22は直線的な 口縁端部にリボン状突起が付く。23は浅鉢C2類である。24は浅鉢D1類になるとみられる。25 は外面に沈線と工字文のような文様を持つ壷である。 $26 \cdot 27$ は外面にLR縄文を施す。 $7 \sim 9$ は凹 底、10は小型深鉢の丸底である。28・29は口縁外面にO字とD字の刻目突帯が付き、30は胴部片 にO字の刻目突帯が付く。後世の混入である。時期は上里2~7期、主体は上里5期である。

竪穴住居16-3205(図版 7・76 50~65) 50~55は深鉢、56~61は浅鉢、65は底部、62は異系統の注口土器または壷、63・64は異系統の深鉢である。50は深鉢 B 4 類の波状口縁、53・54は深鉢 I 形態で口縁端部にO字刻みを行う。53の刻みは内面に向かって押し出される。55は波状口縁の頂部に器面に対して直交する押圧を加える。深鉢 F 3 類とみられる。56は深鉢 D 3 類で口縁内面に沈線状の凹みをもつ。浅鉢 C 1 類の57は口縁端部に突起が付く。58は浅鉢 B 1 類である。59は G 形態、60・61は浅鉢 D 2・D 1 類の口縁部である。62は内外面に朱漆を塗った注口土器とみられる口縁部片で、外面に沈線と刻み状の押圧文、渦巻文を施す。63は口縁部外面に縄文が施される。64は口縁部外面を二枚貝で調整したのち、半截竹管文を縦方向に施文する。65は丸底である。時期は上里 3~5 期で、主体は上里 5 期に属する。

竪穴住居16-3223(図版7・76 43~49) 43~47は深鉢、48は浅鉢、49は深鉢底部である。 深鉢 E 6 類の43は口縁が波状を呈する。口縁端部に平面は長方形、断面は「レ」字の刻みを施す。 外面はケズリ調整であるが、頸部は削る方向をかえ、強めに削るので、境目が段状になる。44~ 46は口縁端部を楕円形、細かいV字、O字に刻む深鉢 I 形態である。45の刻み目は波頂部のみの 可能性がある。深鉢 C 1 類の47は外面口縁下部に条痕が残る。48は浅鉢 B 1 類である。49は外面 を縦方向に削り、内面をなでる凹 2 類である。上里 3~5 期に属する。

竪穴住居16-3234(図版10 129) 深鉢D5類の口縁部で、内面はナデ、外面はケズリのちナデである。上里3期に属する。

竪穴住居18-1294(図版8・77 85~99) 85~87・89~94は深鉢、95~99は浅鉢、88は深

鉢底部である。85は深鉢B5類である。深鉢F1類の86は外面を二枚貝条痕で調整する。94は口縁端部外面が工具の当て方によってバリ状に突出する深鉢C2類である。深鉢H1類の87は胴部が張らない。粘土紐痕が明瞭に残る。口縁部に両側から開けられた孔があり、補修孔とみられる。深鉢F1類の92は山形突起をもつ。二枚貝条痕のち頸部を強くなでる。93は山形突起をもつ深鉢J2類である。外面を縦方向にケズリ、頸部あたりでヨコナデを行う。95・96は浅鉢B1類で、97は浅鉢B2類である。98・99は浅鉢A形態である。98は頸部から大きく広がる波状口縁で、山形文とみられる沈線がある。99は4本の平行した沈線が施文される。88は凹1類で、窪みの中央が凹凸に剥離する。使用痕とみられる。主体は上里4期で、土器は上里3~4期に属する。

竪穴住居19-848(図版9・10・78 100~127) 床面や埋土から出土した。100~102・110 ~119・126は深鉢、103~106・120~125・127は浅鉢、107は注口土器、126は異系統の深鉢、 108は深鉢底部、109は浅鉢底部である。深鉢B3類またはB4類とみられる胴部の100は外面を 二枚貝条痕で調整し、頸部をなでる。 $101 \cdot 102$ は深鉢C1類で、101の胴部外面はケズリのち一 部ミガキである。ミガキは2~3mmの棒状工具を使用している。102の口縁端部付近が肥厚する。 外面肩部付近にふきこぼれ痕とみられる付着物がある。いわゆる生駒西麓産の胎土とみられる。 103は浅鉢E2類で、4単位の波状口縁になる。胴部屈曲部上に沈線を引き、斜格子文を施す。 104は浅鉢I1類である。外面は丁寧なミガキ、内面はナデで、口縁端部を丁寧に面取りする。 105は大型の浅鉢G形態である。口縁は緩やかな波状口縁で、4単位になるとみられる。外面口縁 から内面はナデ、頸部を横ナデ、胴部を二枚貝条痕で調整する。106は浅鉢J5類である。107は M形態で、全体の器形は胴部下半で内屈する土瓶形になるとみられる。器厚は一定ではない。 110・111は有文深鉢である。深鉢A1類の前者は口縁外面に2本単位で菱形文様を描く。線の集 中部に竹管文を押圧する。深鉢A5類の後者は屈曲部に沈線文を施したものである。112は深鉢C 2類で、口縁が外反するが、肩部はあまり張らないとみられる。113は深鉢A3類、114は深鉢A 4類、115は深鉢H1類である。 $116\cdot117$ の口縁は波状をなす深鉢B4類である。深鉢E3類の 118、深鉢B4類の119は頸部のナデによって、口縁が外反する。120・121・124・125は浅鉢E 1類で、すべてに沈線文がある。124には沈線上に半月状の竹管文が押圧され、この文様と沈線内 に朱が残る。125は円形文を沈線状に押圧する。浅鉢E2類の122は沈線と斜線文、同123は斜線 文と刻みを施す。126は羊歯状文とLR縄文をもつ大洞系土器である。上里2~3期に属する。

竪穴住居19-995(図版10 128) 深鉢D5類で、頸部に強いナデによる沈線状の凹みをもつ。 口縁部外面はナデ、胴部外面はケズリとみられる。上里3期である。

土器棺墓16-3159 (図版13・80 137) 深鉢J2類である。内外面ともに良くケズリが行われている。口縁内外面は丁寧なナデ、胴部下半外面の一部にオサエを施す。口縁外面に段差ができている。下部欠損が故意かどうかは不明である。上里3~4期とみられる。

土器棺墓16-3164(図版11・79 130・131) 130は土器棺の蓋で、深鉢G1類である。胴部下半を欠く。口縁から頸部にかけて緩やかにすぼまり、胴部中央にかけて丸く出っ張る。口縁部は突起状の波状を呈し、4単位になるとみられる。口縁部外面は二枚貝のちナデ、胴部はケズリ、

胴部上半はケズリのちナデ調整を加える。内面はナデである。深鉢G2類の131は土器棺の身にあたる。口縁部は欠損する。頸部から胴部上半にかけて膨らみ、中央付近から底部にかけて球のように丸くすぼまるため、底部が径約4cmと非常に小さい。外面はミガキ、内面はナデである。類似器形は滋賀里遺跡から出土しているが、口縁部の立ち上がりが推測できなかった。上里4期におさまる。

土器棺墓16-3165(図版13・79 136) 深鉢H1類であるが、特に胴下部の器形が歪む。口縁部外面は二枚貝で調整するが、指頭圧痕やナデによって不鮮明になっている。胴部外面は器面の凹凸が著しいが、ナデは非常に丁寧に行う。内面には粘土紐痕が残る。底部付近の欠損は故意に行われたとみられる。上里4期に属する。

土器棺墓16-3178 (図版12・79 133・134) 133は土器棺を安定させる支えとして使用されたとみられる浅鉢D 2 類である。口縁外面に沈線、内面に沈線状の凹みがめぐる。全面を丁寧に磨く。口縁端部外面から内面にかけて朱を塗布する。134は深鉢H 1 類である。胴部上半に最大径をもち、すぼまった頸部から口縁は緩やかに立ち上がる。底部は尖底に近い形態になるとみられる。口縁端部には斜め方向から刻まれた平面が杏仁形に近い刻みが3個1単位でほぼ等間隔に配置されている。内面は板ナデ、口縁部外面はナデであるが粘土紐痕が残り、胴部はケズリ調整である。内面胴部下半に炭化物が付着し、煮炊きに使用された痕跡が残る。底部付近の孔は故意によるものである。時期は上里5期の最終段階とみられる。

土器棺墓16-3196 (図版11・79 132) 深鉢H 1 類で、肩部には稜ができる。底部は径が小さな凹底になるとみられるが、故意に打ち欠かれており、詳細は不明である。内外面の口縁はナデ、内面胴部は板ナデ、外面胴部はケズリである。上里 4 期に相当する。

土器棺墓18-340(図版13・80 138) 長胴形の深鉢 E 2 類である。底部は打ち欠かれたとみられる。内面を板ナデ、口縁部外面はナデ、胴部外面はケズリ調整する。上里 3 期に相当すると考えられる。

土器棺墓18-349 (図版14・80 141) 波状口縁を持つ深鉢 F 1 類である。波頂部は4単位で、 頂部外面に円形押圧文を施す。口縁部外面から肩部にかけて二枚貝条痕、胴部外面はケズリであ る。内面調整は不明瞭であるが、頸部付近にユビオサエ痕が残る。底部は打ち欠かれている。上 里3~4期に属する。

土器棺墓18-354(図版13 140) 頸部を強くユビナデする深鉢D1類である。口縁部外面と 胴部外面を二枚貝にて調整したのち、胴部外面の特に下半分をケズリ調整する。内面は板ナデで、 粘土紐痕が残る部分を中心にして所々にユビオサエが確認できる。底部は埋設時に打ち欠かれた とみられる。上里3期に属する。

土器棺墓18-845(図版14・80 142・143) 142は土器棺の蓋、143は身として利用されていた深鉢である。いずれの土器も深鉢D1類である。前者は二枚貝による調整にケズリがはいるが、後者は二枚貝条痕が主体である。また、後者の胴部上半には、帯状になでられた部分があり、そこには粘土紐痕が明瞭に残る。底部は故意に打ち欠かれている。142は胴部下半が欠損しており、

こちらも故意である。上里3期に属する。

土器棺墓18-978 (図版12・79 135) 深鉢 E 2 類である。接合はできなかったが、底部は凹 2 類が出土している。口縁部外面はナデ、胴部外面はケズリ、胴部上半から肩部にかけてはナデ 調整の下に二枚貝条痕が確認できる。内面はナデである。類例がないため正確な時期は不明であるが、上里 3 ~ 4 期に相当すると考えられる。

土器棺墓18-1010(図版15 149) 深鉢の底部凹4類である。底面はわずかに窪む。外面はケズリ調整を施す。口縁部片も残るが、細片になっているため詳細は不明である。上里3~4期とみられる。

土器棺墓18-1271 (図版14・81 144) 深鉢G 3 類である。口縁部外面はナデ、胴部外面はケズリ、内面はナデである。口縁端部は端部を外面から内面に小刻みに押すため、襞状を呈しており、一種の刻みを表現したとみられる。上里 4 ~ 5 期とみられる。

土器棺墓18-1288(図版15・81 145) 深鉢I2類、底部は凹2類である。口縁は緩やかな波状を成し、端部に細かい刻目が施される。口縁から肩部外面はナデ、胴部外面はケズリ、内面はナデ調整である。頸部外面は特に強くなでる。上里5期に属する。

土器棺墓18-1291 (図版15・81 146) 深鉢I 2類で、わずかに波状を成す口縁部の端部に小 D字の刻みを施す。外面調整は磨滅が著しいため不明瞭であるが、内面はナデや板ナデである。 底部は打ち欠かれている。上里5期に属する。

土器棺墓18-1452 (図版15 147) 深鉢の胴部である。胴部上半に最大径があり、底部は凹7類となる。外面調整は上半がケズリ、下半が二枚貝条痕である。内面は板ナデであるが、胴部上半は剥離しているため、不明瞭である。上里3期とみられる。

土器棺墓18-1640 (図版 $13 \cdot 80 \quad 139$) 深鉢 J 1 類である。底部は打ち欠かれてなくなっている。内外面はケズリ調整のち丁寧にナデ調整が行われている。口縁端部は平坦になでられている。正確な時期は不明であるが、上里 3 ~ 4 期におさまるとみられる。

土器棺墓19-1358(図版15・81 148) 4単位の波状口縁を呈する深鉢F3類である。頸部を強くなで、胴部を削る。底部は打ち欠かれたとみられる。上里3期に属する。

土壙墓16-3158(図版15・81 150) 粘土紐積み上げ痕跡が明瞭に残る深鉢J1類の小型品である。胴部上半が欠損している。平底で、器形の歪みが著しい。時期は上里2~4期とみられる。

土壙墓16-3253(図版 $15\cdot81$ 151) 深鉢 J 2 類で平底の小型品である。底面はわずかに窪む。 内外面はミガキに近い丁寧なナデを施す。時期は上里 2 ~ 4 期に入るとみられる。

土坑16-3195 (図版18 206~217) 206~210は深鉢、211~213は浅鉢、214・215は異系統の深鉢、216は注口土器、217は丸底の深鉢底部である。206~208は深鉢 B 4 類である。深鉢 G 1 類の209は口縁部外面を板ナデし、端部をなでる。深鉢 I 形態とみられる210は口縁端部に楕円形の刻みを施す。211は浅鉢 B 1 類である。212は浅鉢 B 2 類で、口縁端部の立ち上がりが少なく、一部に 2 つの山形突起を有する。浅鉢 A 形態の213は橿原式文様とみられる文様を外面に施文する。214・215は沈線と縄文を施す。216は全面をなでる。時期は上里 2~5 期、主体は上里 3 期に属

する。

土坑16-3213(図版16・18・81・83 152~174) 152~154・159~165・167は深鉢、155・166・168~170は浅鉢、171~174は異系統の深鉢と注口土器、156~158は深鉢底部である。152・153・159・162~165は深鉢D形態である。口縁部と胴部が二枚貝条痕調整のもの(152・159など)、胴部をケズリ調整するもの(153)、口縁部外面をナデ調整するもの(164・165など)がある。深鉢A4類の154は二枚貝条痕やケズリで器形を調整したのち、外面胴部は棒状の工具でミガキ状の調整を加える。166・167は深鉢J形態とみられる。155は浅鉢B2類であるが、くびれに沈線があるものの肩部が屈曲しない。内面に沈線が入り、端部との間に段を形成する。168・170は椀形の浅鉢I2類で、器厚が分厚い。169は浅鉢G形態である。171・172は北陸系の深鉢とみられる。173はLR縄文を施す。174は注口土器の注口部で、全面を丁寧になでる。注口端部と胴部とのつなぎ目にリング状の粘土の盛り上がりがあり、沈線文が描かれる。大洞式系の可能性がある。時期は上里2~3期、主体は上里3期に属する。

土坑16-3282(図版17・81 175~193) 175・178~182は深鉢、183~192は浅鉢、193は異系統の深鉢、176・177は深鉢底部である。175・178~181は頸部を横方向になでるため、一部口縁との境目が段化する。175・178・179は深鉢B4類である。180は深鉢D1~3類、181は深鉢F1類である。深鉢I1類の182は外反する口縁の端部をV字に刻む。浅鉢B2類の183は口縁部外面に斜格子文、内面に沈線を施す。浅鉢B2類の184は外面に平行する沈線が2本施文され、内面に沈線を施す。185は浅鉢B1である。186は浅鉢D3類で、肩部に沈線と刻みが施文される。187は浅鉢B形態になるとみられ、肩部に爪形の刻みが施される。188は受口状口縁の浅鉢E2類である。189は浅鉢D2類である。口縁部内面に沈線を引く。外面屈曲部を工具を使ってミガキ調整するため、沈線化している。190・191は浅鉢E2類である。190は頸部近くに沈線と爪形の刻み、それらの下に数本の斜線でジグザグ文または菱形文をあしらったものである。191は斜格子文を施す。浅鉢F形態の192は胴部上半に沈線文、その下に爪形の刻みを施す。193は沈線間に縄文を施し、口縁端部近くに沈線文を施文する。上里2期に属する。

土坑18-847(図版17・81 194) 浅鉢D1類である。全面をミガキ調整し、口縁部と頸部の 境目を強く磨いたことにより、段化する。胴部最大径は下半にあるため、下膨れの器形となって いる。内面にこげ痕が認められる。上里2~3期に属するとみられる。

土坑18-1283 (図版17・82 195) 浅鉢J1類である。口縁端部を丸く面取りする。全面を丁寧に磨く。上里1~3期とみられる。

土坑18-1487 (図版18・82 218~223) 218・219・222は深鉢、220・223は浅鉢、221は蓋である。深鉢 F 1 類の218は口縁部外面に二枚貝条痕を施し、胴部をケズリ調整する。219は深鉢 D 5 類、222は深鉢 E 3 類である。220は浅鉢 J 4 類で、残存部分が少ないため、口縁端部が波状になるのか、突起の有無は不明である。221は径0.6cmの孔を 4 箇所にもつ蓋である。全面を二枚貝で調整したのちミガキを施すが、丁寧ではない。223は浅鉢 B 2 類である。上里 3 ~ 4 期に属する。

土坑18-1532 (図版17 196~205) 196~199は深鉢、200~202は浅鉢、203は注口土器、204は浅鉢底部、205は深鉢底部である。深鉢D1~3類の196・198は口縁部外面をナデや二枚貝で調整し、頸部を強くナデ、胴部を二枚貝条痕やケズリ調整する。197は深鉢C1類、199は深鉢B5類である。200は内面が段化する浅鉢B2類である。201・202は沈線文をもつ浅鉢A形態である。注口土器の203は土瓶形の胴部に内湾しながら立ち上がる。204・205は外面を二枚貝やケズリで調整する凹底である。上里3期に属する。

土坑19-527(図版19・82 234) 口縁端部に山形突起を2個もつ深鉢E2類である。口縁外面を二枚貝条痕で覆う。上里3~4期とみられる。

土坑19-849 (図版19・83 224~230) 224・227・228は深鉢、225・226・229・230は浅鉢である。224は4単位の波状口縁を呈する深鉢B5類である。口縁部と頸部の境目は段化しないが、頸部が帯状に幅をもつため、各部位の境目が明らかである。227・228は深鉢B4類である。225は壷形を呈する浅鉢D1類である。外面肩部と口縁内面に沈線が施される。口縁端部に2個1対の山形突起が付く。226は波状口縁の浅鉢E2類である。肩部全面に斜格子文、胴部屈曲部上に沈線が施文されている。229は浅鉢I1類で、口縁外面に直線化した橿原式文様が描かれる。浅鉢G形態の230は頸部を工具によって強くナデ、胴部をケズリ調整する。口縁端部を丁寧に面取りする。時期は上里1~3期、主体は上里2~3期に相当する。

土坑19-1033(図版19・82 231) 破片が土坑内全体に散らばって出土した。すべての破片は接合しないが、同一個体と考えられる。浅鉢C1類で、底部は丸底になるとみられる。口縁端部に山形の突起が連続して3個付くが、詳細は明らかではない。突起の断面は隅丸台形である。全面をミガキ調整し、内面胴部の屈曲部や外面の屈曲部は丁寧になでたのち磨く。上里4期である。

土坑19-1327(図版19・82 232・233) 232は深鉢G2類である。口縁部は二枚貝、頸部はナデ、胴部はケズリ調整をする。内面は粘土紐痕が残る。233は2箇所にくびれをもつ深鉢D7類である。扁平な団子を重ねたような形状の胴部に、外反する短い口縁部が付く。底部は凹底である。全面を丁寧に磨く。類例は奈良県西坊城遺跡から出土している。上里3~4期に属する。

土坑19-1433 (図版19・82 235) 浅鉢I 1 類である。平面形は歪み正円ではない。ミガキ調整ではあるが粘土紐痕が所々に残る。口縁端部は丁寧に面取りする。上里 2 ~ 3 期に属する。

満18-1067(図版20・21・84 236~287) 236~241・257~274は深鉢、242~248・250・275~284は浅鉢、249は注口土器、286は異系統の深鉢、285・287は異系統の浅鉢、251~256は深鉢底部である。深鉢F1類の236は口縁部外面を二枚貝で調整し、胴部外面をケズリのち棒状工具でミガキ調整する。237~240は深鉢D形態である。胴部の調整は二枚貝とケズリを併用するものもある。241は深鉢J1類である。257~263は有文深鉢片である。257は波状口縁をもつ深鉢A3類で、外面に沈線と刻みを施文する。深鉢A2類の258は屈曲部外面に貝殻復縁による刻みを施す。深鉢A1類の259は波状口縁で、外面に口縁に沿った沈線が施される。260は深鉢A3類で、2本単位の沈線文で波状文を描く。深鉢A1類の261は2段屈曲の深鉢胴部外面に、縦方向の二枚貝の殻で押圧を行う。深鉢B6類の262は内外面に平行沈線を施す。263は3本の平行沈線を

口縁外面に引く。深鉢 C 1 類である。264~267は1段ないし2段に屈曲する深鉢 A 3 類である。 268・269は深鉢 D 形態、270・271は深鉢 B 4 類である。深鉢 F 1 類の272は外面全面を二枚貝で 調整する。深鉢E1類の273は端部に細かいD字の刻目を施す。深鉢D5類の274は頸部を強く磨 く。242は有文の浅鉢A形態である。口縁端部外面の沈線間に刻目を入れ、その下に線化した木の 葉文を描く。文様同士のつなぎ目には三角形の刳り込みが入れられ、肩部の屈曲上に刻目を施す。 275は同様の器形であるが、口縁部内面に段をもつ。文様も似ているが、文様帯の幅が狭く、木葉 の形が明瞭である。浅鉢 A 形態の276は外面に 3 本沈線をもつ。243・244は浅鉢 F 形態で、前者 は口縁部内面に沈線、胴部外面に沈線と刻目で木の葉文を描く。後者は胴部外面を沈線で区画し て、斜格子文を施す。245·281は浅鉢 E 1 類である。245は菱形文、281は数条の平行沈線に巻 貝で円形押圧を施す。277~279は浅鉢B形態である。278·279は口縁端部外面に沈線をもつB 1類である。280は242と同器形であるが、ほとんど屈曲しない。波状口縁端部の頂点に平面長方 形の刻目を施す。浅鉢I1類の282は斜格子文をもつ。283は浅鉢G形態である。246は浅鉢J3 類で、内外面を磨く。247は浅鉢K形態、248は浅鉢I4類、284は浅鉢I1類である。注口土器 の249は注口接合部が丁寧に面取りされている。250は浅鉢J1類に、大きく広がる口縁部が立ち 上がる。口縁部には突起が付く東日本系の土器である。285~287は北陸系の土器とみられる。底 部は251・252は凹6類、253・254は凹5類、255・256は凹3類にわかれる。上里1~3期に属

流路状遺構18-1215 (図版 $22 \sim 27 \cdot 85 \sim 87 \quad 288 \sim 423$) 3年度にわたって調査した結果、調査地点によって時期差があることが明らかとなった。資料数も膨大であることから、18次調査区を南部、16次調査区を北西部、19次調査区を北部とし、さらに層位が分かれたものについては分けて記載した。

288~322は遺構南部から出土した。288~297・300は深鉢、298・299・311~315は浅鉢、316・317・322は異系統の浅鉢、319~321は異系統の深鉢、301は台付鉢脚部、302~307は深鉢底部、308~310は浅鉢底部、318は異系統の台付鉢脚部である。288は深鉢F1類、289は同E3類、290・292は同E1類、291は同H1類、293は同F3類、294~297は同G1類、300は同J1類である。胴部外面調整はケズリが多い。292~296は口縁端部に外面からの押圧や楕円形の刻みを施す。297は295と同形態であるが、口縁端部は刻まない。298・299は浅鉢H形態である。311は浅鉢C6類、312は浅鉢C3類で頸部をなでる。313は波状口縁または突起をもつ浅鉢I4類である。口縁端部を丁寧に面取りする。314・315は底が丸い浅鉢K形態である。316・317は胴部屈曲部に突起が付く。316は突起の中央をへこませ、さらに丸い押圧を加える。318は東日本系の台付鉢脚部の可能性がある。内面はナデであるが、外面は丁寧に磨く。319は波状口縁の頂部に垂下する突帯を貼り付け、その上に押圧文を施す。中部地方にみられる土器に類似する。320・321は羊歯状文が描かれ、胴部下半に縄文を施文する東日本系の深鉢である。320は口縁端部にB突起と呼ばれる2個単位の丸い突起が連続して付く。321は口縁端部に刻みを入れる。322は算盤玉形の胴部をもつ浅鉢で、北陸地方の土器である。沈線の区画帯の中に玉抱三叉文が描かれる。

玉は沈線で描かれていることから、御経塚 3 式に相当すると見られる。301は台付鉢の脚部とみられるが、鉢部・脚裾部が欠損しており詳細は不明である。 $302 \sim 306$ は深鉢の凹底、307は深鉢の丸底、309は浅鉢の丸底、310は浅鉢の平底である。308は浅鉢の底部で、接地面中央を削って窪ませている。

323~335は遺構北部上層から出土した。323~324は深鉢、325~327・333・334は浅鉢、331は異系統の浅鉢底部、332は異系統の深鉢、335は異系統の浅鉢、328・329は深鉢底部、330は浅鉢底部である。323は深鉢F1類で、調整は二枚貝とケズリである。324は深鉢J1類である。325は深鉢C5類である。頸部が強くなでられて、段化する。丸底の椀形底部を持つとみられる。332~334は口縁端部に楕円形や円形の刻みを施す。332は深鉢I形態、333・334は浅鉢K形態である。326は盤形を呈する平底の浅鉢I2類である。外面は全面ケズリ調整を施す。327は薄い皿形を呈する浅鉢K形態である。335は北陸系の皿形土器とみられる。外面に縄文を施し、口縁端部を斜めに刻む。内外面に朱が塗布されている。328・329は凹底、330は丸底、331は高台付き底部で、高台から2本の平行する突帯が対向するように貼り付けられている。東日本系土器とみられる。

336~363は遺構北部下層から出土した。336~341・348~354は深鉢、342・343・355~358 は浅鉢、359~363は異系統の深鉢・浅鉢・壷、344~347は深鉢底部である。336~338は深鉢 F 1類である。336の胴部は棒状工具による条痕調整を行い、口縁部外面は工具によってなでたのち 指でなで、頸部を横方向になでている。内面は磨滅しているが、ナデ調整とみられる。337は外面 全面に右から左への二枚貝条痕を施し、頸部を板のような工具で横方向になでる。内面はナデで ある。338の口縁部外面は左から右への二枚貝条痕、胴部外面は同方向のケズリ、口縁部内面は横 ナデ、胴部内面は二枚貝による右から左へのナデである。339は深鉢C2類で、口縁部外面に横方 向の二枚貝条痕を施す。胴部外面は右から左へのケズリ後に、棒状または繊維状工具によるミガ キを密に施している。深鉢J1類の340は外面を下から上、右から左へのケズリで、内面をナデ、 口縁端部はナデによる面取りを行う。341は深鉢J1類であるが、頸部に段をもつ。磨滅が著しい ため、調整は不明である。348~353は貝殻条痕が明瞭に残る。348・353は深鉢E3類、349・ 351・352は深鉢F1類、350は深鉢E1類である。354は深鉢A形態で、屈曲部上に刻みを施す。 浅鉢B1類の342は内外面を丁寧に磨く。浅鉢B2類の343は内面を指のような幅広のもので磨き、 口縁部内面に沈線を引く。355は浅鉢B2類である。356は浅鉢J1類で、外面に沈線間を刻む文 様を描く。357は浅鉢E2類の胴部に文様を施文する。屈曲部に刻みを入れ、その上に斜格子文を 施す。358は浅鉢D1類である。359は羊歯状文、360は沈線と縄文を施す東日本系土器、361は 口縁端部が波状になる北陸系とみられる土器である。362は外面に付加縄文を施文する中期末また は後期中葉の土器、363は頸部に刻目突帯を貼り付ける壷である。344・345は底部凹2類である。 344は内面を板状工具でなでるが、その他は磨滅して不明である。345は外面を下から上に向かっ て削る。346は底部凹7類、347は同凹3類である。

364~376は遺構北部中層から出土した。364~368・373は深鉢、369・370・374・375は浅鉢、

376は東日本系の注口土器または壷、371・372は深鉢底部である。364・365は深鉢 E 1 類、366は深鉢 D 2 類である。何れも胴部はあまり張らない。367は深鉢 C 3 類で、外面は二枚貝で調整を行う。368は深鉢 J 2 類の 4 単位波状口縁をもつ土器である。373は二枚貝を使用して頸部をなでる深鉢 B 2 類で、口縁端部との境目に段を形成する。369・370は浅鉢 B 2 類の口縁部である。内外面を丁寧な横方向のミガキで調整する。浅鉢 F 形態の374は口縁が外反し、内面に屈曲部の稜と口縁端部内面に沈線をもつ。375は浅鉢 B 形態になるとみられる。外面に斜格子文状の沈線文が確認できる。376は羊歯状文とみられる文様の描かれた注口土器または壷の口縁部と考えられる。口縁端部に突起が付く。371は凹 2 類の底部である。接地面近くの外面に指跡が残るが、それ以外は磨滅が著しいため調整は不明である。372は底部凹 3 類で、外面調整は二枚貝条痕で調整する。

377~415は遺構北西部下層から出土した。377・378・385~395・398・407・408は深鉢、379・380・396・397・399~406・409・410・412・414は浅鉢、411は壷、413は注口土器、384は異系統の深鉢または注口土器、415は異系統の浅鉢、381~383は深鉢底部である。377は深鉢D2類である。385~395は深鉢B4類である。口縁との境目が段化するものと、明瞭でないものがある。396は浅鉢C6類で、口縁部が大きく外反する。397は浅鉢G形態である。398は深鉢D7類で、233と同形になるとみられる。378は小型の深鉢G2類で、口縁部が欠損する。底部は平底である。399・403は浅鉢B1類である。403は口縁の屈曲部に、2本の沈線間を刻む文様をもつ。400~402は浅鉢B2類である。404は浅鉢B形態の胴部屈曲部上に、刻目を施すものである。379は底部が尖底に近い丸底をもつ浅鉢J3類である。406は浅鉢J2類、407は浅鉢D1~3類、408は浅鉢D5類、409は工字文のような沈線文を持つ浅鉢I1類、412は浅鉢D3類である。浅鉢E2類の410は肩部に斜格子文を施文する。411は橿原式文様を施文する壷である。413は浅鉢E形態に注口がつく土器で、橿原式文様になるとみられる沈線と刻みが施される。414は沈線文をもつ浅鉢F形態を呈するとみられる。380は浅鉢K形態である。415は三叉状の文様に縄文を施し、口縁端部に楕円の押圧文を加える。東日本系の浅鉢とみられる。

416~423は遺構北西部上層から出土した。416~420・422・423は深鉢、421は浅鉢である。 深鉢 E 1 類の416は外面全面を二枚貝にて調整し、内面を板ナデする。深鉢 E 1 類の417は口縁端 部に山形突起が付く。深鉢 B 4 類の418は波状口縁、419・420は平口縁の深鉢 F 1 類である。 421は浅鉢 B 2 類、422は浅鉢 G 2 類とみられ内面屈曲部に稜をもつ。

時期は上里1~5期、主体は上里3~5期である。

流路状遺構19-1155 (図版28~34・88~91 424~518) 遺構中層から下層付近で出土した。 424~457・487~507は深鉢、462~478・508~512は浅鉢、479~483・514~517は異系統の深 鉢、484・486・513は異系統の浅鉢、485は異系統の注口土器、458~461は深鉢底部、518は縄 文時代後期中葉の土器である。

424~434は波状口縁で、1~2単位の431以外は4単位になるとみられる。424は深鉢B2類、426・427は同E2類、428は同D1類、429は同D6類、430は同E6類、431は同E1類、432~434は同F3類である。425は頸部がくびれ、幅の広い口縁部が立ち上がる。丹後地方の土器と

みられる。426は頂部を円く窪ませるため、突起状になる。427は426と異なり、頸部はなでない。 428は口縁部をなでて、口縁との境目に段を形成する。429は口縁端部に刻目を施す。平面観はD 字に近いが断面はU字形で、いわゆる「D字刻み」ではない。波頂部に他の刻みより少し大きな 刻みを付ける。口縁部外面は二枚貝条痕で、口縁端部まで調整したのち刻目を入れている。頸部 には横ナデ、胴部は右から左方向のケズリ、内面は全面ナデである。口縁内面に刻目の影響によ る凹凸が認められ、外側から内側に向かって刻まれたことがわかる。430は429と同器形であるが、 調整が異なり、二枚貝条痕を使用しない。431は口縁部外面に二枚貝条痕を施す。胴部外面はケズ リとみられるが、磨滅が著しい。432は口縁端部に細かな刻みを施す。口縁部外面をナデ、頸部を 二枚貝調整、胴部をなでる。433は頸部ナデが太い沈線状になっている。434の外面は全面ケズリ で、一部頸部に横ナデを施す。435~437は深鉢G2類である。435は突起が付く平口縁である。 突起は口縁外面から粘土を貼り付け、端部上に山状の盛り上がりを作りだす。3個1組とみられ る。口縁部はナデ、胴部は右から左、右下から左上へのケズリ調整を施す。胴部内面の一部に幅 広の横ナデ痕跡が認められる。436は435の口縁が長いものである。口縁端部には2個単位の突起 が付く。437は口縁外面と頸部直下付近を右から左への二枚貝条痕を施し、頸部をなでて条痕を消 す。胴部は右下から左上へのケズリを行ったのち、胴部上部を二枚貝でなでたような痕跡が認め られる。438は深鉢H2類で、口縁端部に台形の突起があり、上辺が凹む。口縁外面上部は工具に よってナデまたはケズリを施し、下部から肩部までは横ナデ、胴部はケズリ調整である。439・ 440は深鉢F1類である。439は口縁外面を二枚貝条痕、頸部を横方向とみられるナデ、胴部を右 下から左上へのケズリ、内面は一部工具痕の残るナデ調整を行う。440は二枚貝条痕が主体である。 441は深鉢F2類で、口縁端部は緩やかな波状を呈する。442~445は口縁部幅が広い。444は口 縁端部に角の丸い台形状突起が付く。胴部はケズリ、口縁部は突起から垂下する3本沈線と突起 に集約する沈線文が描かれる。445は口縁部外面を横方向になでており、その単位幅が明瞭に残る。 肩部には右から左へのケズリ調整が認められる。内面はナデであるが、何らかの工具による痕跡 がある。446は深鉢H1類で、明瞭ではないが頸部にナデを施す。447・448は深鉢H1類で、頸 部にナデ調整を施さない。449は深鉢H2類である。口縁部外面はナデ、頸部に強い横ナデが入り、 胴部には基本的に下から上へのケズリを施す。肩部には右から左へのケズリがある。450~452は 深鉢J2類である。450は口縁端部をなでるが、粘土接合痕が所々に残る。胴部上部は右から左へ のケズリ、下部は下から上へのケズリである。ただし、ほとんど砂粒の動きが認められない。451 は外面すべてケズリ調整である。453は深鉢E2類、454は深鉢G2類である。455は深鉢J2類 であるが、器形は大きく歪み、口縁の平面形態が楕円形をなす。深鉢J1類の456は口縁部に突起 が付く。口縁が内湾する。突起は台形で、頂点に刻み状の凹みがある。全面を丁寧にミガキ調整 する。457は深鉢J2類で、丸底である。深鉢A3類の487は肩部に3本沈線を引く有文土器であ る。488は深鉢B2類、489・490は深鉢A3類である。491~507は口縁端部に刻目を施す。D字 やO字、楕円、四角など様々な種類がある。491・492・494・495・497~507は深鉢 I 形態であ る。493は深鉢 F 2 類、496は同 J 2 類である。

462~470は丸底になる浅鉢である。462は浅鉢B2類で、口縁端部に山形突起が付く。463~ 467は浅鉢C1類である。468・469は浅鉢C2類、470は浅鉢C4類である。470は上面観が隅丸 方形を呈する。口縁端部に3つの山をもつ突起が付く。471は浅鉢 E 1 類で、肩部に沈線文と爪形 文、刻目を施す。472は浅鉢D2類、473は浅鉢D1類である。474・475は2個1対の突起をも つ浅鉢J2類である。474は口縁部直下に穿孔がある。476は外面を二枚貝で調整する平底の浅鉢 I 2 類である。477は浅鉢 K 形態で、内面に朱が付着する。朱の付着は器として使用されていた痕 跡と考えられる。478は浅鉢I3類である。479は東日本系の深鉢で、口縁部に山形の突起が付く が、半分が欠損しているため正確な形は不明である。口縁部から肩部にかけて、半截竹管状工具 による押し引き文と、竹管状工具による沈線文を施している。口縁端部直下から沈線、半截竹管 状工具による左から右への押し引き文、横長楕円に半円形やL字形の沈線を引いた文様、押し引 き文、2本の平行沈線という順番に文様が施文されている。胴部はRL縄文を施文する。481は胴 部に沈線で半月を描き中に縄文を重点する北陸系の土器である。御経塚式と中屋式の中間の土器 とみられる。480~484は玉抱三叉文や細かい波状口縁などをもつ東日本系の深鉢および浅鉢であ る。483・484は口縁端部を細かく刻む。485は瓢箪形を呈する。ほぼ全面に縄文を施文し、縄文 の上から文様を描き、撚糸を転がす。下部付近に粘土が剥離した痕跡があり、注口土器の可能性 がある。486は皿形の浅鉢で、口縁部内面に段を有する。口縁端部には突起があり、中央を棒状工 具または巻貝の殻頂を使って円形に窪ませる。それを中心に、楕円文を配する。楕円文内面には 朱塗りの痕跡が残る。北陸系の土器である。508は浅鉢E2類で、口縁端部を細かく刻む。波状口 縁である。浅鉢A形態の509は爪形文と沈線、浅鉢E2類の510は斜線文、浅鉢E3類の511は平 行する3本沈線で文様を描く。512は突起をもつ浅鉢D1類である。513は胴部屈曲部に付く円形 突起で、中心を円形に窪ませ、周りを沈線で囲む。円文および沈線内面に朱を塗布する。514は木 の葉文と玉抱三叉文が合わさったような文様に縄文を施す。搬入された御経塚式のバケツ形深鉢 片とみられる。外面に朱を塗布する。515は深鉢B1類である。516·517は頸部に爪形文を配す る西日本系の土器である。517は口縁外面に刻目を施す。518は沈線内に刺突文を配する橋状把手 で、後期中葉の深鉢口縁部に付く。461は丸底で、456のような深鉢」形態の底部になるとみられ る。外面は下から上へのナデに近いケズリで、内面はナデである。458は底部凹7類で、外面を下 から上に向かってケズリ、立ち上がる部分に横ナデを施し、接地面近くは指オサエで成形する。 459は底径5.0cmの底部凹5類である。接地面近くの外面を横になで、胴部下半に二枚貝条痕を施 す。内面はナデである。底部凹2類の460は外面下部を左から右、上部を下から上へ削る。内面と 凹み部分はナデである。

時期は上里1~4期、主体は上里3~4期に属する。

集石遺構19-1430 (図版35 519~531) 519~521は深鉢、522~526・529は浅鉢、527・528は異系統の浅鉢、530・531は深鉢底部である。519は深鉢F1類、520は同G2類、521は同G1類、522は浅鉢C1類、523~526は浅鉢D1類である。527は波状口縁の頂部内面に三叉文を施文する皿形の浅鉢で、内面に沈線状の段があり、北陸系の土器とみられる。528は外面を丁寧に

磨く。小型の浅鉢とみられるが、詳細は不明である。529は浅鉢I3類の小型品である。内面にユビオサエの痕跡が残る。530は小型の深鉢丸底、531は底部凹4類である。上里3~4期に属する。遺物包含層出土土器(図版35 532・533) 532は深鉢B3類で、頸部を二枚貝条痕で調整し、口縁端部外面はなでる。19次調査区北中央付近で出土した。533は浅鉢K形態である。口縁端部を幅広く半月形に抉りとり、平らに調整した襞状のものを何個も配置する。この半月形の口縁部内面はこの形に沿って強くなでるため、窪んでいる。18次調査区で出土した。

(5)縄文時代晩期後半の土器

土器棺墓13-112(図51 536) 突帯が口縁直下と肩部に貼り付けられた二条突帯文深鉢である。口縁部突帯は直下に貼り付けられ、断面は下膨れの三角形で、小D字の刻目を施す。肩部の突帯は断面三角形で、上部に小D字の刻目を施す。内外面をナデ調整するが、粘土紐痕が残る。接合しなかったが、底部が出土しており、わずかに凹む平底で、外面との付け根部分をユビオサエする。上里7期に属する。

土器棺墓13-113 (図版92、図51 535) 頸部が細く締まる壷である。胴部は球状に張り出す。 胴部下半は打欠かれて存在しなかった。外面は横ナデ、内面は調整が磨滅しているため不明であ る。上里7期に属する。

土器棺墓13-158 (図版92、図51 534) 砲弾形の深鉢である。口縁から少し下がった位置に、断面が台形になる突帯を貼り付け、その上をD字に刻む。口縁端部も面取りしたのち、間延びしたO字刻みを施す。外面胴部を削り、口縁部をなでる。所々に粘土紐痕があり、なで消した痕跡がある。内面は板ナデである。底部は打ち欠かれていた。上里7期に属する。

土坑13-143(図版92、図52 537~540) 537は口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼り付ける一条突帯文深鉢である。突帯上と口縁端部に小D字の刻目を施す。口縁部をナデ、胴部をケズリ調整する。内面はナデである。538は537とは別個体の刻目突帯文土器口縁部片である。口縁部外面の端部から離れた位置に、断面台形の突帯を貼り付け上部をD字に刻む。口縁端部もD字刻みを施す。539は同様の突帯文土器で、突帯上を二枚貝とみられる工具でD字刻みを施す。口縁端部には刻みを入れない。540は平底底部であるが、537とは別個体である。外面にケズリ調整を行う。上里6期に属するとみられる。

土坑19-3109 (図版92、図52 541) 口縁端部から下がった位置に、突帯を貼り付ける。突帯上は半截竹管状の工具を使用して刻むため、突帯の粘土を潰す形になっている。口縁部外面および内面はナデ、胴部外面を削る。上里6期に属するとみられる。

遺物包含層出土土器(図版92、図52 542~551) すべて貼り付け突帯文土器である。548・549は刻みを入れないが、542・544・546は小D字、543・547はD字、550は間延びしたD字、545は間延びしたO字の刻目を突帯上に施す。542~544は口縁端部が尖る。口縁端部に近い位置に突帯が貼り付けられている。545~549は口縁端部外面に接して突帯が貼り付けられている。550は胴部上半に刻目突帯を貼り付ける。551は砲弾形の器形を呈し、口縁端部に粘土を貼り付け、

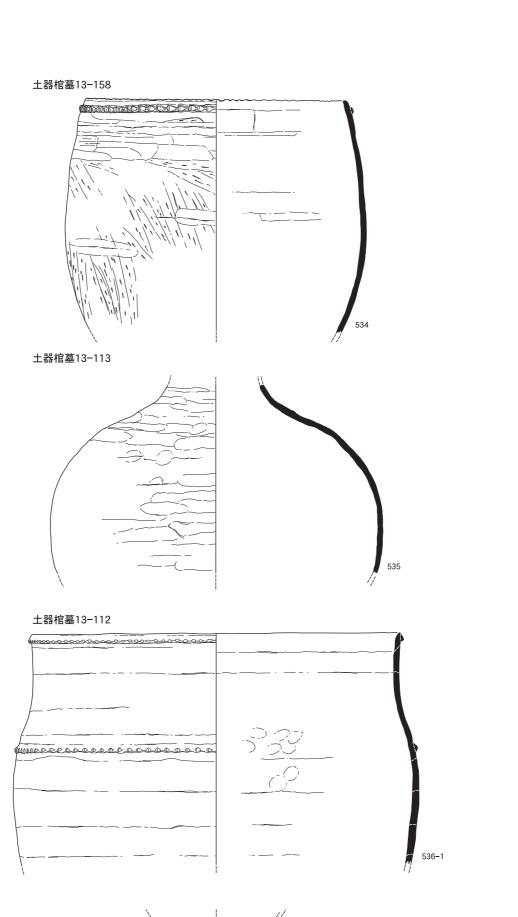




図51 土器実測図32(土器棺墓13-112・113・158出土土器)

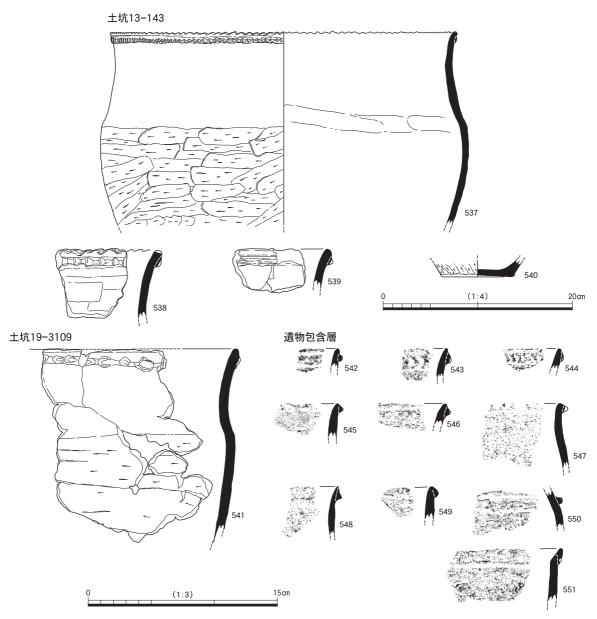


図52 土器実測図33(土坑13-143、19-3109、遺物包含層出土土器) 537・540(1:4) 他(1:3) 突帯上に竹管状工具を使用した刺突を施す。542~550の時期は上里7期に属するが、551については帰属時期および系統が不明である。19次 ・ 調査区、18次調査区の弥生時代前期遺構基盤層から主に出土した。

註

- 1) 家根祥多「篠原式の提唱 神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討 」『縄紋晩期前葉 中葉の広域編年』 (『平成4年度 科学研究費補助(総合A)研究成果報告書』)北海道大学文学部 1994年、家根祥多 「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器 』雄山閣出版 1994年を参考に、器形分類と時 期設定を行った。
- 2) 潮見 浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号 1960年
- 3) 奈良県立橿原考古学研究所『大和高田市西坊城遺跡 』(『奈良県文化財調査報告書』第90集) 2003年

3 石製品

石器には、生産具として石鏃、石錐、削器、石錘、石斧、磨石、凹石、敲石、石皿、台石など、祭祀具として石刀、石棒など、装飾品の勾玉、丸玉といった製品の他に、石核、剥片などの素材や製作途中の未製品、土坑18-1487北西で大量に出土した石器製作時に廃棄された微細剥片(チップ)などがある。また、欠損した石斧を敲石として使用するといった転用された石器も多い。

各器種別の掲載点数は、石鏃97点、石錐1点、削器6点、楔形石器7点、石核5点、大型剥片1点、その他サヌカイト製品3点、打製石斧15点、横刃型石器10点、磨製石斧21点、穿孔具1点、石錘3点、磨石・敲石・凹石26点、異形石製品2点、石皿・砥石・台石13点、石刀未製品15点、石刀17点、丸玉3点、勾玉1点、石棒(石柱)5点、黒曜石1点、不明石製品1点である。未掲載で遺構出土の石鏃は他に300点以上あり、他器種のものについても、数点から数10点が存在する。

使用石材は、石鏃・石錐・削器などが奈良県の二上山または香川県の金山から産出するサヌカイト、石錘は堆積岩、磨製石斧は蛇紋岩や砂岩、磨石・凹石・敲石・石皿・台石は砂岩や砂岩質の岩石、輝石安山岩など、打製石斧や横刃型石器、石刀は頁岩を含む粘板岩、石棒は緑泥片岩や凝灰岩、ミニチュア石棒は粘板岩、玉は翡翠や滑石である。朱の付着した磨石の中には、石英で作られたものもあった。

サヌカイトについては、二上山産と金山産が6対4の割合であることを肉眼観察で確認しているが、その肉眼観察と自然科学分析の結果が一致していることを別項で明らかにしている(第6章参照)。また、石核は二上山産、大型剥片は金山産とわかれ、搬入された石の形態が産地によって異なる可能性を指摘できる。その他に、肉眼観察では大分県姫島産とみられる黒曜石剥片や、チャートの剥片(緑灰色が主流)も出土している。チャートの剥片には人為的に剥離を行った痕跡が認められるものの、製品は出土していない。チャート剥片の出土遺構は流路状遺構18-1215に集中している。石器は縄文時代の遺構や包含層から多量に出土しているが、地山相当層の礫層が高くなる18次調査区東半や遺構面上部が削平されている19次- 区東半の状態が示すように、後世の遺構や包含層に混入していたものも少なくない。膨大な量であることから、縄文時代の遺構や包含層から出土したものを中心として、図化して掲載している。

石鏃(図版36~38・93 石 1~97) 形態から15種類に分類し、さらに側縁部や脚部の形態で数種類に分けた。全面押圧剥離のものと、側縁部にのみ押圧剥離を施し、中央部に素材剥片の剥離面を残すものがあるが、全面に加工を施すものが大半である。基部形態には中茎のある凸基有茎鏃、尖基鏃、無茎鏃があり、無茎鏃には基部形態が凹基と平基がある。基部は最後に作られることが多く、凹基と平基が決まるのも最終段階と考えられることから、基部より全体器形の分類を優先した。そのため、分類記号の最後に凹基の「凹」、平基の「平」を付して観察表に記した。法量では、小型は長さが2cmまで、重さが1gまでのもの、中型は長さが3.2cmまで、重さが2.5gまでのもの、大型は長さが3cmを超え、重さが2g以上のものと大まかに分けることができた

(観察表参照)。形態でサヌカイトの産地は分類できなかったが、相対的には小型品には金山産、 長さのある中型品には二上山産が使用されているといえる。

A形態 正三角形またはそれに近い形態をもつものである。石 1 ~ 4・95の脚部先端が尖るもの(1類)と、石 6 ~ 9の脚部先端が丸いもの(2類)に分かれる。1類は正三角形で基部中央の少し凹ませるだけで凹基にしているが、2類は少し長軸が長く、基部も深く明瞭という違いがある。石 1 ~ 3 は小型品、石95は大型品、石 5 は中 ~ 大型品でA 1 の平基である。

B形態 A類の幅はかわらず、長軸が長くなったもので、長さと幅の比率は、約3:2となるものが中心となる。石 $10 \sim 16$ の脚部先端形状は明瞭に分けられないが、石 $17 \sim 19$ の基部近くの側縁部が丸く、凹基が緩やかな弧を描くものは脚部が尖る。石 $20 \sim 23$ は平基である。石 $10 \cdot 11 \cdot 13 \cdot 16 \cdot 20 \cdot 21$ は小型品である。

C形態 幅が長さの半分以下で、二等辺三角形状のものである。側縁部が丸みを帯びるもの (1類、石25・29・30) 側縁部が直線的なもの (2類、石26~28)に分かれる。石24はC1の 平基で、その他は凹基で脚部先端が尖る。石28は全面を細かく押圧剥離を施し、その後、主要剥離面の下半部に縦方向の研磨を加える。研磨が入る石鏃はこれだけである。すべて中型品である。

D形態 C形態と同じ形であるが、側縁部がさらに直線的になるもの。脚部先端が細く尖る 1類(石31・32) 基部付近で側縁が少し膨らむため脚部先端が太くなる 2類(石36・37)があり、D1平基は石34・35、D2平基は石33である。石35は大型品、その他は中型品である。

E 形態 二等辺三角形で脚部付け根から大きく広がり、基部の両側縁が切断されたような形を呈する。石38~40の脚部先端が丸みを帯びるため、明確でない凹基になる。石41は平基である。石40・41の作りは他のものに比べて粗雑であり、厚みがあることから、未製品の可能性がある。石42は13次調査で出土したもので、前期から中期のものとみられる。脚部が尖り、基部も深く抉られ、押圧剥離が丁寧に行われている。石38は小型品、石40は大型品である。

F形態 幅は広いが、長さが二等辺三角形のものより短いため、ずんぐりとした形態を呈する。 石 $43 \sim 46 \cdot 48$ は先端部が尖り、基部の両側縁を切断している(1類)。石47は先端部が尖り、脚部先端が丸い(2類)。石 $49 \sim 51$ は先端部が丸い(3類)。石52は3類の基部の両側縁を切断したもの(4類)である。石 $44 \cdot 48 \cdot 49$ は小型品である。

G形態 二等辺三角形で、基部の両側縁を長めに切断したもの。脚部付け根が突出する。基部の抉りが深い。石 $53 \cdot 54$ は側縁部が直線的なもの(1類)石 $55 \sim 59$ は先端部付近に陵があるもの(2類)石 $60 \cdot 61$ は先端部付近が丸いもの(3類)石 $62 \sim 64$ は1類より大振りで、長さに対して幅が広くなるもの(4類)である。すべて中型品である。

H形態 脚部の先端ないし付け根が外側に突出するもの。石65・66は側縁が直線で、脚部先端が突出し(1類)、石67・68は脚部付け根から大きく突出するもの(2類)で、先端部付近に陵をもつもの(石67)ともたないもの(石68)がある。

I 形態 五角形を呈する。石 $69 \cdot 70$ は側縁部が直線的なもの(1類) 石 $71 \sim 73$ は側縁部が先端に行くほど細くなるもの(2類) 石 $74 \cdot 75$ は側縁部にくびれが生じるもの(3類) 石76はI

3の側縁部がさらに強くくびれたもので、人形を呈する(4類)。石77はI1の平基、石78はI 2の平基である。石74は小型品、その他は中型品である。

J 形態 I 形態に近いが稜は明瞭ではなく、基部を切断するもの(石79・82)や、基部を深く 抉るもの(石80)がある。石81は小型品である。

K形態 I形態の胴部が短くなったもの(石84~87・89)。石84は先端が錐状に尖る。石89は脚部を切断する。石89は中型品、その他は小型品である。

L 形態 先端から胴部が長く、脚部が広がるもの。石90は脚部先端が跳ね上がる。石91は脚部 先端を切断するもので、平基である。石92は脚部が太く、先端が尖る。石90は大型品、その他は 中型品である。

M形態 石93は凸基有茎鏃である。茎部周辺の調整は最後に加えている。

N形態 石94は尖基鏃である。先端部の欠損は使用時とみられる。

O形態 石96・97は大型品で、上記の分類に入らなかったものである。石95はほぼ正三角形を 呈する凹基鏃である。石96は不整形で、中央付近が分厚い。調整が全体的に粗いため、未製品の 可能性が高い。石97は縦長の菱形を呈するとみられる。側縁のみに交互剥離を加えるため、腹背 面に剥片時の剥離痕が残る。石鏃としたが、器種は不明である。

石錐(図版38・93 石98) 二上山産出のサヌカイトである。両側から押圧剥離を全面に施す。 厚みは基部が薄く、先端に近い方が厚い。稜に磨滅痕が認められることから、使用されていると 考えられる。溝18-1067下層から出土した。

石匙(図版38・101 石99) 縦型の石匙で、左側縁部に刃が付く。右側縁はほとんど調整を加えていない。基部が大きく、頸部の部分に調整を加えて少し細くする。二上山産サヌカイトを使用する。流路状遺構19-1155南西から出土した。

異形石製品(図版38・101 石100) 流路状遺構18-1215南部から出土した。先端部が二又に別れた石器である。長い方の先端部は両側縁に交互剥離によって刃を付ける。短い方の外側は表裏面に押圧剥離痕があるものの、交互剥離ではない。この内側は主要剥離面側のみ剥離を施す。基部側には整えるための剥離がある。二上山産サヌカイトである。全く同じ類似品はないが、奈良県の橿原遺跡の報告書に雁股式の石鏃として掲載された石製品があり、現段階では関連があると考えられる形態を呈している。滋賀県滋賀里遺跡でも橿原遺跡と同形態のものが出土しており、それに準じて石鏃としている。。

ナイフ形石器(図版38・94 石101) 剥片の右側縁に刃部を取り付けたものである。剥離痕はそれぞれ風化の度合いが異なっており、新旧2通りがあることがわかる。古い方は旧石器時代の国府型のナイフ形石器のもので、当初の器種を示す。新しい方(図にトーンを貼っている部分)は剥離痕に規則性がなく、人為的につけられた可能性が低いものである。風化の度合いから、縄文時代のどこかの時期に剥離痕が付いたとみられる。石材の一つとして二上山から持ち込まれたサヌカイトの一つと考えるのが妥当であろう。

楔形石器(図版 $38\cdot 94$ 石 $102\sim 108$) 石105は金山産で、それ以外は二上山産サヌカイトで

ある。流路状遺構19-1155からは石103・105・108、流路状遺構18-1215からは石102・104・107、竪穴住居16-3223埋土上層からは石106が出土した。石102は下部に細かい剥離が入る。側面に剪断面が入る。上部には打点の入る剥離痕がある。石103は刃部を細かく調整する。側面に剪断面と風化した剥離面があり、上面を剥離で調整している。主要剥離面の打点側に細かい剥離が施される。石104は背面および主要剥離面、剪断面のない側縁以外の面はすべて剥離によって調整が加えられている。特に側縁には細かい剥離が入り、縦および横断面がレンズ状になる。石105は上下部に細かい調整が入る。片側に剪断面がある。石106は背面と主要剥離面を調整し、すべての側縁にツブレ状の細かい剥離が入る。石107は主要剥離面に多くの剥離痕、剪断面以外の側縁に細かいツブレ状の剥離痕が付く。石108は背面上部に階段状剥離、表裏面下部に細かい剥離がある。片側の側縁には剪断面ができている。上部は自然面である。

削器(図版39・40・94 石109~114) 石109・113・114は金山産、石110~112は二上山産サヌカイトである。石109は流路状遺構19-1155、石110~112・114は流路状遺構18-1215、石113は柱穴19-1327から出土した。石109は横長の剥片に刃部を取り付けたものである。上部側縁に剥離痕が付く。刃部が一部磨滅している。石110は刃部に規則正しく剥離を加え、上部の刃部にはさらに細かく剥離をするため、ツブレ状になっている。石111は主要剥離面の側縁部を細かく剥離する。背面は石核の外面であり、剥離面と自然面が混在する。この剥離面には未風化面と風化面の2つが確認できる。打面にも自然面が残る。剥離の稜が丸く磨滅していることから、使用痕とみられるが、刃自体に磨滅痕は認められない。石112は背面と主要剥離面から交互に細かい剥離を加えて刃部を作る。上部に打点と自然面が残る。所々磨滅している。石113は剥片の打点側を除去したものに、細かい剥離を加えて刃部を作り出している。除去する際に、熱を利用したと見られ、本来の打面側が白く変色している。石114は刃部に剥離を加えて調整するが、剥離痕が大きいため刃先が揃っていない。両端および上部の割れは、割れ面の一部に剥離痕が認められ、使用時のものとみられる。

石核(図版40・99 石115~119) 石115~119はすべて二上山産のサヌカイトである。石115・116は流路状遺構19-1155、石117は流路状遺構18-1215北部下層、石118は土坑19-527、石119は竪穴住居16-3175から出土した。石115は様々な方向から剥離を加えているため、自然面が一部に残るのみである。全体的にある程度の大きさの剥片を採ったのち、稜を調整したとみられ、その痕跡であるツブレ痕が確認できる。特に打点側に細かい剥離を何度も入れるため、剥離が階段状を呈する。石116は少なくとも4回にわたる剥離痕が確認できる。剥離の順番は(1)裏面下部、(2)左側縁の大きな剥離、(3)その上の小さい剥離、(4)表面の大きな剥離である。表面の上下部の剥離は(2)と同時期とみられる。(1)~(3)の剥離面は剥離の稜線が磨滅して丸くなっており、(4)との間に時間差が認められる。自然面が多く残る。石117は外面に石核に加工するための調整剥離を施す。主要剥離面は上部から打撃が加えられ、下部からも細かい剥離が入る。風化が著しく、白色を呈する。石118の背面は上下左右あらゆる方向から剥片を採取しており、剥片の大きさも様々とみられる。背面以外には全く調整を加えておらず、すべて自然面

が残る。石119はあらゆる方向から打割しているため、ほとんどの剥離面に打点が確認できない。 図示していない部分は自然面である。

大型剥片(図版40・94 石120) 金山産サヌカイトの大型剥片である。下部の側縁にのみ剥離 痕が認められる。背面の右側縁に風化して白くなった古い剥離面が観察できる。原材として持ち 込まれたとみられる。土坑19-1327から石113と重なった状態で出土した。

サヌカイト原石(図版99 石121) 表と側縁の一部が自然による剥離痕で、それ以外の2分の1以上は自然面である。剥離面は風化している。小型で、中央付近に摂理があることから、石材としての利用が難しい。流通の実体を知る上で貴重な資料である。二上山産とみられる。

打製石斧(図版41・42・95 石122~136) 石122は金山産のサヌカイト、石123~136は粘板 岩または頁岩である。石123~136は全体を剥離によって成形する。使用痕は刃部だけでなく、磨滅という形でほとんど全面に確認できる。縦方向の線状痕は刃部に集中する。平面形態は短冊形(石123・124・126・130~133)、撥形(石125・127・129・134)、撥形~分銅形(石136)、分銅形(石128)がある。粘板岩および頁岩の剥片や、また石刀の未製品と区別のつかない未製品が多く出土しており、製作、使用、廃棄または使用、補修といった行為を繰り返していたとみられる。

石122は打製石斧状のものまたは石核とみられる側縁部を大きな剥離で加工したものである。細かい調整が入っていないので、上部の欠損は、製作時の可能性がある。石斧状のものであれば、おそらく両刃である。石123は表面と側縁を敲打痕によって成形するが、裏面は作成時に摂理で割れたとみられ、目立った調整痕がない。全体が磨滅し、特に側縁部のものが著しい。石124は小型である。刃先よりも刃部側面が良く磨滅する。石125は刃先の磨滅が著しい。石126は刃先と裏面が欠損する。表面下半部の磨滅が著しく、線状痕が明瞭に付く。石127は最も長い。器面や側縁を大きな剥離で調整する。刃部とその周辺の磨滅が著しい。石128は側縁中央部を両側から細かい敲打痕によって弧状に抉る。石129は剥離で両側縁を緩やかに抉る。刃先の調整痕が磨滅によって不明瞭になっている。石130は線状痕を確認できたが、ほとんど磨滅していない。石131は両側縁を剥離によって調整する。刃部周辺に磨滅および線状痕が広がる。石132は先端が欠けたのちも使用されていた痕跡が残る。縦方向の線状痕が著しい。石133は両側縁を直線的に剥離加工する。石134は右側縁を敲打と剥離で弧状に成形する。刃部の磨滅が明瞭である。石135の側縁は剥離のち敲打を加える。部分的に磨滅痕と線状痕が認められる。石136は剥離と敲打で両側縁を調整する。刃部周辺が磨滅する。

横刃型石器 (図版42・95 石137~146) 長軸側縁に細かい剥離を施し、刃部を作るものである。表裏面の磨滅に加え、刃部にも長軸方向の擦痕をもつ磨滅痕が確認できる。石137・138・144・146は流路状遺構19-1155、石143・145は流路状遺構18-1215、石141は竪穴住居16-3223、石142は竪穴住居16-164、その他は遺物包含層から出土した。石137は刃部に磨滅痕がほとんど認められないが、表面は磨滅し、横方向の細かい擦痕が見える。石138は何度も同じ場所を細かく剥離してできるツブレがある。下部の刃部と表面の一部に著しい磨滅痕が確認できる。石139の表

面は大きな剥離であるが、裏面は自然面である。刃部を細かく剥離加工する。石140は表裏面に粗割加工の面が残る。石141は表裏面に剥離痕が残る。石142は表裏面に粗割の面が残る。刃部には磨滅痕があり、上側の刃部に剥離痕が集中する。石143は刃部と表裏面に磨滅痕が認められるが、あまり明瞭ではないため使用頻度は低いと見られる。石144の表面には敲打痕があり、他のものとは異なる調整が入ることから、転用された可能性がある。石145は下方の刃部とその周辺に線状痕と磨滅痕が確認できる。表面は粗割の剥離面、裏面は自然面である。石146は裏面に粗割の剥離痕が残り、刃部を剥離で調整する。刃部はほとんど磨滅していない。

磨製石斧(図版43~45・96 石147~167) 平面形態は短冊形(石147・148) 撥形(石149~153) 乳棒形(石160) 釣鐘形(石162・166) 楕円形(石154)があり、断面には中央が膨らむ長方形(石147~149など) 楕円形(石159など) 円形(石160) 杏仁形(石164)がある。大きさは小型(石147・148) 中型(石149~155・157・159・167) 大型(石156・158・160~166)に分けられる。小型から中型のものには石材が砂岩以外のものが多く、石147は緑泥片岩、石148~150・152・159などは蛇紋岩またはそれに近いもの、石154は乳白色を呈する泥岩である。 刃は欠損しているものについてもすべて両刃とみられる形態を示す。割れ面はいずれも古い。

石147は全面を研磨するが、特に刃部を丁寧に研ぐ。刃先に使用痕である縦方向の線状痕が付く。 裏面に成形時の剥離痕または使用時の剥離痕があり、その後に研磨している。石148は全面を丁寧 に研磨する。刃先に縦方向の線状痕が多く入り、中央部分が顕著である。石149は刃毀れが生じ、 刃先が凹凸になっている。石150は刃先が欠けているが、刃部が磨滅しており、使用頻度が高かっ たとみられる。石151は蛤刃だが、横から見ると片刃のように片側の厚みがない。また、向かって 右側の刃が短くなっていることから、使用による磨滅と考えられる。基部には敲打痕が残る。刃 縁に縦方向の使用痕とみられる擦痕が確認できる。石152は側縁に敲打痕が残るが、全面を丁寧に 研磨する。基部の敲打痕はほとんどなく、刃部の使用痕もほとんどみえない。石153は大半が剥離 面に覆われている。剥離面には研磨痕は確認できないが、部分的に磨滅している。刃部は横方向 の研磨痕のみであり、研いだ後の使用はないようである。石154は全面を割って調整する。刃部や 側縁は細かく剥離を入れる。部分的に研磨しており、磨製石斧の未製品の可能性が高い。石155の 表面は丁寧に磨くためか研磨痕が見えない。裏面は自然面または剥離面で、縁に細かな調整痕が ある。表面の一箇所にのみ縦方向の陵線が入ることから、破損した道具を修復しようと試みたと 考えられる。石156は成形を丁寧に行っている。基部に大きな剥離痕があり、磨滅している。石 157は緑色を呈する泥岩とみられる。敲打によって成形し、刃部と裏面を中心に粗い研磨を施す。 刃先には刃毀れと刃に対して斜め方向の擦痕が確認できる。158は乳棒形を呈するが断面は楕円形 である。表裏面に残る凹みから、刃部が欠損したために敲石・凹石として転用されたとみられる。 基部はほとんど敲かれていない。石159は刃部の一部が欠けたのちも、使用されていた磨滅痕と擦 痕が残る。欠けていない刃部にも刃毀れの痕が確認できる。敲打によって成形したのち、刃部と 基部周辺を研磨して調整する局部磨製である。石160は刃部と基部裏面が欠損している。基部や表 裏面は敲打によって細かく調整されている。いわゆる乳棒形である。石161は刃先の大半が使用に

よって失われている。石162はほぼ全面に敲打痕が残るが、磨滅している。特に表裏中央の磨滅が著しい。基部、刃部共に欠損している。石163は全面に線状の粗い研磨を施す。刃部には刃毀れと擦痕、剥離痕が認められる。石164は刃部のみを丁寧に磨く局部磨製である。刃先が0.2mm程の幅で平らになり、擦痕がある。側縁に成形時の敲打とは別の敲打痕が認められる。石165は刃部と基端が欠損している。敲打ののち全面を研磨するが、側縁は少し粗い研磨である。石166は刃部が欠損する。全面を研磨し、基端も平らに研磨する。所々に凹凸部分が確認でき、製作時の敲打痕とみられる。石167は丁寧に磨かれているため、研磨痕がほとんど確認できない。基部や刃部など大半を欠損する。

穿孔具(図版46 石168) 粘板岩の縦長剥片の先端を研磨したものである。上部断面は三角形、 先端は面取りを行っており、断面が楕円になっている。石の稜には研磨痕や剥離痕、磨滅痕が 所々に認められる。先端が欠損しているため、使用痕の有無は不明である。竪穴住居16-149から 出土した。

石錘(図版46・101 石169~171) 石169は砂岩で、側縁に剥離痕や敲打痕がある。上部には 紐を掛ける切り目が2箇所で確認できる。18次調査の縄文時代遺構面で出土した。石170は堆積 岩製である。明確な加工痕がないので、自然石をそのまま利用しているとみられる。部分的に磨滅痕が認められる。断面形状は扁平である。流路状遺構18-1215北部下層から出土した。石171は 長軸両端に切り目がある。断面 V 字形の溝の周辺には細かな擦痕が認められ、また表裏面の至る 所に使用痕とみられる傷が付く。流路状遺構18-1215北部下層から出土した。

磨石・敲石・凹石(図版 $47 \sim 51 \cdot 97$ 石 $172 \sim 186 \cdot 189 \sim 199$) 磨石としてだけの利用が認められるもの(石 $172 \sim 174 \cdot 176 \cdot 177 \cdot 181 \cdot 183$) 磨石と敲石を併用しているもの(石 $175 \cdot 178 \sim 180 \cdot 182 \cdot 184 \sim 186$) 凹石と敲石を併用しているもの(石 $189 \sim 199$)の3種類がある。基本的には敲石の表裏面中央付近が特に凹むものを凹石としているため、敲石と凹石を分類することは敢えてしていない。石 $172 \cdot 175 \cdot 177$ は平面形が円形で、石186は石鹸形、その他のものは楕円形である。全面を丁寧に研磨したものが多い。磨石・敲石の石材は粗粒から中粒の砂岩が主体であるが、花崗岩(石 $172 \cdot 177$)や輝石安山岩(石174) 石英(石184)なども使用されている。凹石・敲石の石材は粗粒から中粒の砂岩や泥岩などである。

石172は球状を呈する。全面を丁寧に面取りしており、側面の約半分に使用痕が確認できる。石173は使用痕とみられる傷が数箇所にあり、被熱した痕跡が残る。石174・175は欠損して廃棄されたとみられる。石175は断面が饅頭形を呈する。表裏面を磨面とし、側縁に使用痕とみられる剥離痕がある。磨面以外に敲打痕が確認できる。石176は表面に作成時の敲打痕、側縁から裏面にかけて研磨痕がある。石177は表面が平滑で、使用痕とみられる細かい擦痕が付く。成形時の敲打痕が所々に残る。石178は上部に敲打痕が少しみられる程度で、その他は研磨を施し、特に中央付近の平滑度が著しい。石179は表裏面中央と右側縁に敲打痕が集中する。石180は全面が良く磨かれる。上部に敲打の痕跡が残る。石181は接合した2片が同じ遺構内から出土した。平坦に研磨された面に使用痕である擦痕が集中する。側縁および裏面は敲打と研磨で丸く加工されている。石182

は表裏面中央が平滑で磨面として使用され、左右両側縁が敲石として利用されたとみられる。石 183は所々に成形時の敲打痕が残るが、全面を平滑に研磨する。火を受けた可能性があり、部分的に赤褐色を呈し、炭化物が付着する。石184~186は側縁に朱の付着がみられ、朱専用の道具とみられる。いずれも磨石と敲石の併用がみられる。石184は両端部に敲打痕があり、それ以外には線状の研磨痕が確認できるが、非常に丁寧な研磨を行う。朱の付着する左下側縁には横方向の明瞭な線状痕が認められる。石英製であり、同じ石材で作られた磨石の類例は和歌山県鳴神遺跡にあり、同様に朱が付着する。石185は表裏面中央に凹みをもつ。左側縁に朱が付く。敲打痕が朱付着部分の上から重なっている部分と下になっている部分とがあり、朱専用磨石から敲石に転用された可能性が考えられる。朱付着部分には擦痕が確認できる。石186は花崗岩とみられる石材で作られている。持ち手部分とみられる箇所が良く磨滅している。敲打痕と研磨痕それぞれに朱が付いていることから、朱の塊を潰しながら磨った痕跡とみられる。

石190・193~195の4点は研磨痕がほぼ全面に認められ、磨石からの転用が考えられる。形態は石197が棍棒の柄が折れた形、石198・199が円形、それ以外が楕円形を呈する。石189は左側縁に線状の使用痕がある。石190は上部側縁に残る剥離痕の稜線が磨滅している。しかし凹みが浅く、凹石としての使用は短期間であったとみられる。石191は側面に多くの敲打痕がある。裏面の一部に成形時の研磨痕が残っている。石192は表裏面中央だけではなく、両側縁の利用も顕著である。石193は側縁の利用が著しい。表面には溝状の凹みが付く。石194は全面を丁寧に研磨する。表裏中央と側縁に敲打痕が認められるが、使用頻度は低いとみられる。被熱によって、欠損した可能性がある。石195は表面の凹みと右側縁に線状の使用痕が確認できる。石196の表面は同じ箇所を集中的に敲くため、一部が深くなっている。側縁や裏面の敲打痕は浅い。表面が平滑なので、磨石として利用されていた可能性もある。石197は長い石材が欠損したものを利用する。全体的に研磨痕と敲打痕が認められ、部分的に研磨を集中して行う。側縁には他より平滑な部分があり、磨滅しているとみられる。凹みは深い。石198は表面の中央に顕著な敲き痕があり、その周辺は平坦になっている。裏面も凹みの周辺は平坦であることから、据え置かれた状態で使用されたとみられる。石199は裏側が平坦である。表裏面には2つの楕円形凹みが平行する。側縁部に敲打の痕が残る。

異形石製品(図版48・97 石187・188) 石187・188は砂岩で、全面を研磨し、上下縁を丸く加工する。石187は左側縁に6箇所、右側縁には5箇所、右側縁下部には3箇所の刻みを施す。刻み後はほとんど成形した痕跡が認められない。上部中央に径約0.5cm程度の敲打痕があり、裏面の同位置にも同じ形状のものがある。断面は山形である。磨石としては集中的に使用した痕跡がなく、また敲石としては敲打部分の傷みがないに等しい状態である。三重県天白遺跡出土の岩偶に類似形態のものがあるが、異なる点もあるため正確な用途は不明といわざるを得ない。流路状遺構18-1215北部下層から出土した。石188は両側縁に細かい刻みが入り、表面上部中央に敲打痕がある。左側縁下部に粗い研磨痕が確認できる。18次調査の縄文時代遺構検出中に出土した。

砥石・台石・石皿 (図版 $50 \cdot 51 \cdot 97 \cdot 98$ 石 $200 \sim 212$) 砥石は研ぐものや部位、使用目的に

よって大まかに3つに分けられる。細い溝が線状に付くもの(石204)は細かい道具の刃を付ける小型道具加工用、幅の広い凹みがあるもの(石200・208)は磨石や磨製石斧の形を作る成形用、平らな面をもつもの(石203・210)は全体を平滑に加工または幅の広い刃部を研ぐ加工用と考えられる。石200は両面に幅3.2~6.7㎝の凹みがある。凹み同士は平行で、研磨痕もそれらに平行である。側縁はすべて割れており、四角く成形されたとみられる。砥面は平坦で、窪みの中も平滑である。窪みの幅から磨石や磨製石斧の成形に使用されたとみられる。石201は小型の砥石で、中央が幅2㎝程度に凹む。数カ所に深さ0.1㎜程度の線状痕が使用痕として残る。側縁に細かい剥離が集中する。石202は側縁の一部に成形痕である敲打痕や研磨痕が残る。砥面はわずかに凹み、細かい単位が認められる。石203は杏仁形を呈する。全面を敲打して成形したのち、両面を砥面として利用する。両端に剥離痕があることから、敲石としての使用があった可能性がある。石204は砥面に浅い凹みや研磨痕があり、摂理で割れて一段下がったところに、3本の平行な溝が使用痕として残る。溝の断面はV字状を呈する。石208は表面に擦痕や研磨痕が確認でき、磨石や磨製石斧のための砥石と考えられる。砥面には凹凸があり、凹面が特に使用頻度が高い。側面の一つには研磨痕があるが、その他は自然面や割れ面である。石210はほとんど全面に砥面としての利用が顕著に認められる。長軸に平行して細かい擦痕が多く確認できる。

石205・206は砥石と台石としての使用が確認できる。石205はきめの細かい砂岩製で、中心の一部がわずかに凹む。表面は側縁近くまで平滑で、側縁は角をとる加工がされている。側縁には剥離または割れた痕跡があるが、使用のため擦れて丸くなっている。裏面には加工痕らしき痕跡は確認できない。焼土19-995北側で調査区を拡張した際に出土した。石206は表面が端まで平滑で、平坦になっており、全面が使用されている。特に当初中央部分であった箇所はよく磨滅している。側縁は研磨加工しているところとしていないところがあり、欠損部の角が研磨または擦れて丸くなったところがある。一部剥離痕が残る。裏面は未加工である。泥岩とみられる淡緑色の堆積岩が使用されている。土坑18-1487から出土した。

石207は石皿または台石とみられる砂岩製品である。一部を除いて側縁はすべて欠損している。 表面は平滑であるが、部分的差異がある。また、端へ近くなるほど研磨痕が確認できるが、逆に 平坦さがなくなる。側縁は面取りの研磨加工が行われている。裏面は平坦で、使用面である。側 縁部に被熱したような痕跡があるが、使用状況を示しているかは不明である。流路状遺構19-1155から出土した。

石209は砥石・石皿とみられるが、表面手前側に敲打痕が集中していることから、台石としての使用も考えられる。石材は砂岩で、表面は全面研磨する。一部が径8.0cm、深さ0.5cm程度にわたって凹むが、凹みの底はあまり平滑ではない。側縁は簡単に研磨されたか、または使用時に擦れて角が取れたとみられる。裏面は平坦になっており、砥面である一方、敲打面にもなっている。19次調査の縄文時代遺物包含層直上から出土した。

石211・212の石皿は、いずれも朱を擦り潰すためのものである。石211は側面などに擦痕が多数認められ、全体的に磨滅が著しい。中央に朱が付着するが、付着範囲の中央左寄りにほとんど

朱が付かない部分がある。裏面は自然面である。石212は花崗岩製で両面が良く研磨されている。 表面中央下寄りに朱が広範囲にわたって付着しており、磨面の平滑さから精製するのに使用され ていた可能性が高い。一方、右上に敲打痕が確認できるが、塊を潰した際の使用痕とみられる。 側縁は明らかに成形されており、朱が所々に付着している。図面下側の側縁には朱が付かず、ま た表面の朱の広がりが途切れたようになっていることから、この側縁が割れたために廃棄された 可能性が考えられる。裏面には朱は付着していない。

石刀・石刀の未製品(図版52~54・100 石213~245) 露頭または転石から採取されたとみられる大型剥片(石213)、大型剥片から分割され剥離による成形が行われたもので一部稜などを敲打したもの(石214~218)、剥離成形後に成形のための敲打が加えられたもの(石219~223)、敲打痕が残り研磨が行われているもの(石224~228)、研磨が進んだ段階で折損したもの(石233・234・241・244)などがあり、製作行程が辿れる未製品が多く出土している。完成後に使用して遺棄した(折損が故意によるものかは不明)とみられるもの(石229~232・235~240・242・243・245)には、文様のある部位と刃部が出土しているが、接合するものはなかった。その他、石刀が作りやすい大きさまで剥離を繰り返した際に出る粘板岩の剥片は大量に出土しており、明らかに製作していたことを物語る資料となっている。また、石刀の未製品・製品ともに完形品やそれに近いものは出土していないことから、別の場所(集落)で消費された可能性が考えられる。使用材質は粘板岩または頁岩であるが、石231のみ蛇紋岩かそれに近い石材で作成されている。流路状遺構18-1215・19-1155を中心に、遺物包含層などから出土した。

石213は粗割によって採取された粘板岩の大型剥片である。長軸に対して垂直方向から打撃が加 えられている。裏面は自然面で、両端は折割している。現地である程度の大きさに粗割されたも のが遺跡に持ち込まれたと考えられる。石214は荒割した剥片を石刀の大きさに近づけるため、側 縁部を剥離して形状を整えた過程のものである。のちの加工をしやすくするために、剥離の際に できた稜線を敲打によって取り去っている。下部は欠損している。石215は剥離による成形段階で 折損し、廃棄されたとみられる。部分的に厚さがあることから、厚みの調整段階で割れ損じた可 能性もある。所々に敲打痕が残る。石216~218は剥離による成形を行っている途中で割れて廃棄 したものと考えられる。側縁部に剥離が集中する。石216・217の稜線は敲打によって除去されて いる。石218は剥離調整の段階で厚みを失い、両端部を欠いていることから、打製石斧の素材に転 用された可能性もある。石219は刃部先端の未製品である。上部を欠損、裏面が割れている。両側 縁を細かく敲打して成形する。断面形状は扁平な水滴形である。石220・221は剥離によって幅と 厚み、長さを決めたのち、敲打によって表面を成形する段階で割れたとみられるものである。端 部の欠損、裏面剥離による投棄である。石222は石刀または石棒の未製品である。全面を敲打痕で 成形する。下部は敲打によって欠損したとみられる。石223は両側縁を細かい剥離と敲打によって 調整する。敲打のあとに剥離が行われた部分が確認できる。石224は先端部の未製品である。剥離 と細かい敲打を行った後中央から上下方向に研磨したとみられる。先端部や裏面は摂理剥離のあ とで研磨を行っている。石225は刃部近くの未製品で、上部と裏面の大半を欠損する。右側縁下部 と左側縁に押圧剥離を加え、表面を細かく敲く。その後、左上から右下への研磨と、縦方向の研磨を行う。石226は上下端が折損し、裏面が摂理で割れた未製品である。右側縁に横方向の粗い研磨、左側縁に押圧剥離や細かい敲打痕のあとで研磨された痕跡が確認できる。断面形は隅丸方形に近い。石227は上端を欠損し、部分的に摂理で剥離している。押圧剥離や敲打痕のような痕跡もあるが、明瞭でない。左側の背部は上下方向に研磨されている。その他は左上から右下への研磨痕がある。石228は敲打のち研磨後に、左側に再度剥離を行っている未製品である。石229は先端部分に相当し、柄部側が折損している。上下方向の研磨痕と研磨した単位幅が残る。上部近くに横方向の粗い擦痕がある。先端は丸く研磨されている。石230は刃部で、柄部側は欠損している。中央付近で2つに割れた状態で出土した。割れ面がよごれていることから、廃棄時に折れていた可能性がある。全面を横・縦・斜め方向に丁寧に研磨している。石231は刃部で、柄部を欠損する。先端部を丸く研磨する。石229・230に比べて全体的に太い。石232~234は途中の刃部や基部とみられる。断面形状は水滴または倒卵形である。割れ面はいずれも古い。石232は使用時、石233は制作時、石233は所々に剥離痕と敲打痕が残り、傷に近い深い研磨痕があることから、製作途中に割れたと考えられる。

石235~240は柄部またはその近辺の破片である。2本単位の平行沈線で区画した中に、様々な 文様を施す。石235~237は区画帯に右上から左下への斜線文を充填する。石238は斜格子文、石 239・240は斜格子文と綾杉文を交互に配する。それぞれの文様は厚みが薄い擦り切るための道具 を使用して施文されている。石235は敲打痕と剥離痕が残るが研磨を丁寧に施し、浅い沈線文を施 す。石236上端は欠損しているが、柄頭に近い部分とみられる。2本平行の区画線と無文帯、区画 線と左上がりの斜線文が交互に施文されている。区画線が先で、斜線文が後続、ただし一番下の 線のみ斜線より後で引く。斜線は上から下まで1本で引くが、途中で継ぐ箇所もある。研磨痕の 大半は横方向の細かい筋状の沈線を伴っている。断面形状は扁平な楕円形である。石237は刃が左 側で、上下端が欠損している。上下方向と刃を付けるための横方向の研磨は細かく見えにくいが、 その後に付いたとみられる背と中央付近にみられる縦方向の研磨痕が明瞭に残る。上部の区画線 は斜線文より先、下部の区画線は先後が統一されてない。裏面は全面摂理で剥離している。断面 形状は扁平な水滴形とみられるが、厚みが他のものの2分の1と薄い。被熱しているためか、白 く変色している。石238は折損後に裏面も剥離した。丁寧に研磨したのち、斜線文と区画沈線を施 文する。斜線の前後関係に規則性はみられない。石239は断面が楕円に近い形を呈する。頭部は丁 寧に研磨されており、文様は深く明瞭に刻まれている。沈線は途中でつなぎながら施文されてい る。石240は柄から刃の部分である。表面全体に上下方向の研磨痕があり、所々に筋状の擦痕が確 認できる。柄の部分には区画線間に綾杉文と間隔の狭い格子文を施す。区画線は右下がりで、引 き始めは浅いが最終的に深く彫り込む。綾杉文は初めに下段の左下がりの沈線を引いた後で、上 段の右下がりの沈線を引く。正確な上下一対ではない。格子文の施文順序は綾杉文と同様で左下 がりの沈線が先である。いずれの文様も部分的に区画線からはみ出して描かれている。上下端は 折損し、裏面の半分以上が摂理で割れている。断面は水滴形である。石241は断面が楕円形を呈す る刃部で、先端部が幅広で丸い。研磨痕の中に大きな剥離痕が多く残るため、製作途中に折損した可能性が高い。折損部分は研磨した痕跡があり、折れたあとも何かに使用する予定であったとみられる。石242は先端部片である。全面を上下方向に研磨する。所々に研磨した単位幅が残る。背部は平らに成形、先端部は平らに切断して研磨する。裏面は大半が摂理によって剥離している。先端部の剥離は研磨された痕跡が残るため、一度補修されている可能性がある。断面は筍形である。石243・244は剥離痕が所々に残る刃部先端である。前者は使用時に、後者は製作時に折損して廃棄されたとみられる。石245は刃部で、上下部を欠損しており、廃棄は使用時とみられる。全面を丁寧に研磨する。

丸玉(図版55・101 石246~248) 石246~248は丸玉である。石246は乳白緑色で、石247は風化が著しいため表面が剥離しているが、いずれも翡翠の比重(3.24~3.43)内に収まる。すべて片側からの回転穿孔で、内面に回転研磨痕が残る。孔の最大径約0.5cm、同最小径約0.2cmとなり、断面形態は逆円錐形である。石246は平面形態が歪み、正円形を呈していない。また、断面も二等辺三角形を横倒ししたような形状である。全面を丁寧に研磨する。19次調査区の縄文時代包含層中から出土した。石247は風化が著しいため、調整は不明瞭である。上面観はほぼ円形である。流路状遺構18-1215北部中層から出土した。石248は緑色に白色と筋が入る翡翠を使用している。外面は面を替えながら研磨する。流路状遺構18-1215と土坑18-1487に囲まれた包含層中から出土した。

勾玉(図版55・101 石249) 滑石製のJ字形勾玉である。頭部に垂直方向の穿孔があり、回転研磨痕(横)とは別に使用痕の擦痕(縦)が確認できる。また、玉の長軸に沿って開けられた孔には、孔の円が2つ重なっている部分や断面形態が倒卵形の部分があり、紐ずれの痕跡とみられる。この孔の内面には横方向の研磨痕と縦方向の擦痕が明瞭に認められる。孔はいずれも2方向から穿孔されている。全面を丁寧に研磨する。不定な擦痕は使用痕で、側面にはほとんど見られない。土坑18-1487から出土した。

石棒・石柱(図版55・99 石250・251・253~255) 石250は緑泥片岩製の石棒先端部である。 敲打によって成形したのち、先端部以外を研磨している。研磨は縦方向が主で、部分的にあとから横方向の研磨が行われている。先端部は敲打痕の上に長さ0.5~1 cmの深い刻みが斜め方向に細かく施されている。先端頂部には剥離痕があり、使用痕とみられる。上部は古い欠損である。16次調査の包含層中から出土した。同じ石材・作り方(先端の刻み以外は同じ)をしている石棒先端部が流路状遺構19-1155からも出土しており、同一個体の可能性が高く、投棄の状況を知る上で重要である。石251は石棒のミニチュアである。側面および両先端部を丁寧に研磨する。側面は研磨の単位が約9面ある。流路状遺構18-1215から出土した。石253は断面が隅丸三角形を呈する石棒または石柱とみられる。敲打痕と線状の凹みが部分的にあり、後に研磨が行われたとみられる。研磨には単位が認められる。上下部は使用時に欠損したとみられる。流路状遺構19-1155から出土した。石254は凝灰岩製の大型石棒の棒部である。全面を敲打して成形したのち、丁寧に研磨する。上下部が欠損し、出土した時は3つに割れて、直径約1mの範囲に散らばっていた。石

材と太さが約12cmで酷似していることから、次の石棒頭部と同一個体である可能性が高い。流路 状遺構19-1155東端の肩口付近から出土した。石255は凝灰岩製の大型有頭石棒である。頸部が締 まり、棒の部分が下方にいくほど少しずつ太くなっていることから、中央付近が膨らむ形態とみ られる。頭頂部は平坦になっている。全面を研磨する。縦方向に半分と棒部分は欠損している。 流路状遺構19-1155南東から出土したが、混入の可能性が高く、時期は縄文時代中期末から後期 初頭に該当するとみられる。

不明石製品(図版55・99 石252) 平面形態は石刀の刃部が欠損したようであるが、右下は斜めに加工されている。斜めに加工された側縁は研磨されているが、剥離などによる凹凸が残る。それ以外のほぼ全面は丁寧に研磨されている。頭部は敲打によって成形したのち、研磨によって丸く加工されている。頭部の剥離は研磨以降である。左下部の欠損は使用時のものとみられる。断面は扁平な台形を呈する。石刀類未製品からの転用の可能性があるが、器種・用途ともに不明である。16次調査の遺構検出中に出土した。

黒曜石剥片(図版55・101 石256) 黒曜石の剥片である。肉眼観察では白色部分が大半を占めることから、大分県姫島産とみられる。主要剥離面に加工痕はなく、背面には石核外面でよく観察される様々な方向から行われた剥離痕が残る。主要剥離面の打点は打割されている。19次調査区北東の弥生時代遺構面を検出中に出土した。

辰砂鉱石(図版101 石257) 2~3 cmの鉱石で、基本は乳白色を呈するが、所々に赤色の粒や筋が入る。分析をかけたところ、辰砂であることが明らかになった(第6章1節)。流路状遺構18-1215南部から出土した。

註

- 1) 奈良県教育委員会『橿原』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第17冊) 1961年
- 2) 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』 1973年
- 3) 縦型の粘板岩製打製石斧に対して、横型で刃が付く粘板岩製品という意味で「横刃型石器」という 名称を使用した。そのため、第6章第2節の分析とは異なる名称となっている。

4 土製品

土製品には土器片円盤、耳栓、有孔球状土製品、輪状土製品、半輪状土製品、粘土塊がある。 土器片円盤は竪穴住居や流路状遺構を中心に出土している。耳栓は16次調査の北半にある柱穴 3218、有孔球状土製品は18次調査区北にある土坑18-1487の北西寄り上層、輪状土製品は流路状 遺構18-1215から出土した。半輪状土製品は流路状遺構18-1215や流路状遺構19-1155の埋土、 また流路状遺構18-1215と溝18-1067に挟まれた地区の包含層から出土しており、出土範囲が限 定される遺物である。その他に、指痕のついた粘土塊が竪穴住居内などから少量ではあるが検出 されている。

土器片円盤(図版 $56\cdot102$ 土 $1\sim19$) 土 $1\cdot8\cdot11\cdot13\cdot16$ は溝18-1067、土 $2\cdot6$ は竪穴住居16-3205、土4は流路状遺構19-1155、土7は土坑16-3282、土14は土坑16-3213、土17は竪穴住居16-3175、土19は竪穴住居19-848、土 $3\cdot9$ は16次調査区包含層、土 $5\cdot12\cdot15\cdot18$ は18次調査区包含層、土10は19次調査区包含層から出土した。深鉢の体部片を再利用しているものが多く、外面調整が二枚貝条痕またはケズリ、内面調整がユビナデまたは工具によるナデである。浅鉢を使用しているものは3点で(土 $12\cdot13\cdot16$)、調整はナデとミガキである。その内の2点(土 $12\cdot13$)は横方向の沈線や米粒形の刻みなどの文様をもつ。孔の開けられていないもの(土 $1\sim13$)は13点、有孔のもの(土 $14\sim19$)は13点の文積をもつ。孔の開けられていないもの(土 $1\sim13$)は13点、有孔のもの(土 $14\sim19$)は13点の中心径は $13\sim16$ 0、元におさまる。円盤の直径は $13\sim16$ 0、元におさまる。円盤の直径は $13\sim16$ 0、元におさまる。円盤の直径は $13\sim16$ 0、元に関する。

耳栓(図版56・101 ±20) 上面観はほぼ円形を呈する。表面の中心を径0.2cm、深さ0.2cm窪ませ、細い棒状工具で刺突を行う。窪みの周辺には、5~7本単位の沈線が放射状に施文され、端部近くでは工具の当て直しによる施文方向の変化が部分的に認められる。裏面も平面形態は円形を呈し、表面と同じ工具を使用して方向をかえながら施文する。表面最大径2.4cm、裏面径1.9cm、高さ1.65cmを測る。表面と裏面に朱を塗布する。

有孔球状土製品(図版56・101 土21) 直径6.8~7.1cmの球形で、中央に径1cmの孔が貫通している。外面にはこの孔にほぼ直交する幅0.35~0.5cm、深さ約0.1cmの沈線が施文されている。この沈線はまっすぐではなく、わずかに右上がりではあるが、最終的には外面を一周して始点に収まる。全体はミガキに近いナデで調整されている。孔内面の中央付近に粘土の接合痕が確認できることから、半球を接合して製作されたとみられる。重さは334gである。近畿地方での類例は奈良県大和高田市の西坊城遺跡にあるが、沈線が施文されていない点で異なっている。

輪状土製品(図版56・102 土22) 完全な輪になるとみられる土製品である。内側の器厚が薄い部分が欠損している。断面の最大径0.9cm、内側寄りの中心部に径0.4cmの孔があり、この孔は土製品の中心部を管状に全周していたとみられる。孔が芯のような状態であることから、木の枝のようなものに粘土を巻き付けて成形したと考えられる。表面は丁寧に面取りを行っており、全面に朱を塗布している。孔の内側は平滑である。

半輪状土製品(図版56・102 土23~31) 直径1.9~3.2cmの粘土紐で半分の輪を作り、半輪の 先端に近い部分に器面に直交した孔を開けたものである。縦は約11cm、横は6cm前後、太さは2 cm前後の法量をもつものが多い。欠損していない土製品の重量は70g前後で、太いものでは100 gを超えるとみられる。両端部に開けられた孔は細いもので径0.2cm、太いもので径0.6cmを測る。 内側から外側に向かって穿孔している土25以外は、全て2方向から穿孔されたとみられる。表面 は全面をミガキに近い丁寧なナデで面取りを施す。土25の内側のみ、強くなでたことによって砂 粒が動きケズリ状になっている。土27には両端部の縦方向に開けられた孔以外に、貫通していな い2つの孔が上部の先端にのみある。貫通した孔と同じ方向の孔がより先端部に近い方にもうー つ開けられ、またこの孔に直交する孔があけられていた。開け損じとみられる。土27・28は流路 状遺構19-1155西端から、図に示した輪の状態で出土した。このことから、2つは両端の孔にそ れぞれ紐を通して互いにくくって使用されていたと考えられ、腕輪や脚輪といった輪状の装飾品 であったとみられる。この土製品の上層から、同じものが1組半(半輪で3個、土29~31)出土 している。また、土23・24についても18次調査区の同一地点で検出された。奈良県橿原市の橿原 遺跡や滋賀県大津市滋賀里遺跡などの集落遺跡から、同形態のものが出土している。

粘土塊(図版101 土32・33) いずれも焼成粘土の塊である。土32は竪穴住居19-848から出土した。板状の粘土にまるめた粘土が接着したもので、縦約5cm、横約7cm、高さ約4cm、砂粒がほとんど入っておらず焼き締っている。土33は流路状遺構19-1155東端で出土した。縦横約6.5cm、高さ約4.5cmで、指痕が残る。砂粒を多く含み、焼き締まりはあまり良くない。

註

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所『大和高田市西坊城遺跡 』(『奈良県文化財調査報告書』第90集) 2003年
- 2) 奈良県教育委員会『橿原』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第17冊) 1961年
- 3) 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』 1973年

5 自然遺物

調査中より土坑や溝などから炭化種 実や骨片などの自然遺物が検出されて おり、土サンプルを採取して内容物の 抽出・検討の必要性が指摘された。こ れを受けて、特に埋土中に炭化物が多 く含まれていた18次調査の流路状遺構 18-1215、19次調査の流路状遺構19-1155を中心として、整理用コンテナに 土サンプルを採取することとした。

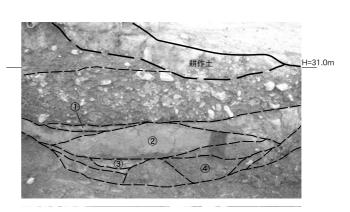


図53 19次- 区 中央断割断面 (Y=-28,320付近)

18次調査では、流路状遺構18-1215(土層観察用の畦 7 箇所、 A ~ D・e ~ g セクション、図版 3)から、それぞれ層位別に土サンプルを整理用コンテナに計342箱を採取した。19次調査では、流路状遺構19-1155(土層観察用の畦11箇所、 A ~ D・e ~ kセクション、図版 4)集石遺構19-1430、流路状遺構18-1215(19次- 区)と、19次- 区中央断割で確認した縄文時代晩期遺構基盤層(図53)などから整理用コンテナに計約500箱を採取した。18次調査で採取した342箱すべてと、19次調査で採取した500箱については時間的な制約から優先順位が高いと判断した195箱について分析を行った。整理用コンテナ 1 箱の土量は、直接土サンプルが入っているものは平均 $7 \sim 8$ 、遺物用のビニール袋に小分けされている場合は 1 袋あたり約1.5 の袋が 5 袋入っている。

(1)分析の方法

分析の方法は、「フローテーション法」と「水洗フルイ選別法」を併用した。まず採取した土を水に入れて軟化させ、浮遊する炭化物を茶漉しで掬い取る「フローテーション法」により、採取した炭化物をコーヒーフィルターに入れて乾燥させた。これに続いて、沈殿した土分やその他の残滓を水で土分を流しながら、4mm・2mm・1mmの目のフルイに順にかけそれぞれ残存物を取り分け、乾燥させた。今回の分析では時間的制約により、これらのうちコーヒーフィルター分と4mm・2mm目のみの選別を行った。目視の範囲では、1mmの選別分にも微細な炭化物や骨片・石器剥片が見られる。選別・抽出した試料は目視と実体顕微鏡下で観察し同定を行った。

(2)試料の概要

18次調査 植物遺存体は混入以外ほぼ炭化物であった。木本の幹・枝部、種実類とその果種皮などである。動物遺存体はすべて骨類であり、いずれも被熱し白色化したものであった。被熱による収縮・亀裂などにより洗浄後は細片化しているものが多い。

19次調査 18次調査とほぼ同様の内容を検出しているが、流路状遺構19-1155の最下層、集石

遺構19-1430と19次- 区中央断割で確認した縄文時代晩期遺構基盤層(図53)などからは、粘土質の土壌に密封されて炭化していない種実・果種皮・自然木片・葉片などが出土した。

なお、本節では主として植物遺存体を扱う。動物遺存体は丸山真史氏に同定をお願いしたが、 上述のようにほとんどが細片化した骨類であり、種や部位がわかるものは少数であった(第6章 第5節)。

(3)種実類

炭化種実 穀類ではイネ・マメ類(ササゲ属)、堅果類ではコナラ亜属のドングリ類・オニグルミ・クリなどがある。その他には、大型種子ではトチノキが多くみられ、種実ではサンショウ・カラスザンショウ・アカネ科などを比較的多く検出した。

イネ(図54) 18次・19次調査ともにすべて流路状遺構18-1215から19個出土している。18次調査区のC・f・gセクションから集中して15個と同区東側から1個、19次- 区では3個の内1個が流路状遺構18-1215北西の底面で検出した土坑19-3288から検出している。イネは形状からみて大きく2種類に判別できる。一つは普通によくみられる現在のイネに近いタイプ、もうつは中央部が横に膨れ丸みをおびた極短粒タイプである。短軸の長さからみると現在のイネに近いタイプはさらに、2.4mm前後のものと3.0mm前後のものに分けられる。極短粒タイプは3.7mm前後と突出する。

ドングリ類(図58・59・60 - 1 ~ 3) ドングリ類は炭化した殻斗や果皮頂部の形状からコナラ亜属にあたる。完形のものは170個以上、半截のものは136片以上、破片は121g以上(個数に換算すると約630個)あり、総計では868個以上となる。ドングリ類は多くが流路状遺構18-1215 e セクション、流路状遺構19-1155の南部で検出した土坑19-1429周辺とhセクション西側の炭化物集中部から集中して出土している。hセクション西側の炭化物集中部で得た完形44個の平均重量は0.192gであった。

クルミ類(図60 - 4 ・ 5) 大部分がオニグルミである。ほとんどが細片化しており、半截のものはわずか 1 個のみであった。18次調査区ではBセクションあたりが多い。19次調査区は全体から偏りなく出土している。

クリ(図60 - 7 ~ 9) ほとんどが細片化し全体の形状がわかるものはない。流路状遺構18-1215のeセクション、流路状遺構19-1155のAセクションから多く出土している。

トチノキ類似種子 トチノキ種子に似た大型種子が流路状遺構18-1215と流路状遺構19-1155 のA・i・k セクションから出土している。

表 4 自然木樹種一覧表

| | 層名 | | | | 樹種名 | | | |
|---------|----------------|-------|--------|------|------|------|------|-------|
| 集石遺構 | 灰色シルト (21層) | モミ属 | アカガシ亜属 | ムクノキ | サクラ属 | トチノキ | | |
| 19-1430 | 下層粗砂礫(溝状落込み埋土) | ヒノキ科 | アカガシ亜属 | ムクノキ | サカキ | サクラ属 | トチノキ | ニシキギ属 |
| 縄文晩期基盤層 | 図53-3層 | クスノキ科 | サクラ属 | | | | | |
| (粘質土) | 図53-④層 | ムクノキ | サクラ属 | | | | | |

果種皮(図60 - 6) 分析したすべての土サンプルから細片化した破片を検出した。一番多いのはトチノキ種皮であり、次いでドングリやクリのものがある。

その他の炭化種実(図60) アカネ科・サンショウ・カラスザンショウ・クマノミズキが多く、次いでアカメガシワが多い。アカネ科は流路状遺構18-1215とその下層の土坑19-3288から、サンショウは流路状遺構18-1215のB・fセクションが多く、カラスザンショウは流路状遺構18-1215のB・fセクションと流路状遺構19-1155のB・f・g・hセクション、クマノミズキは流路状遺構18-1215のfセクション、アカメガシワは流路状遺構18-1215のBセクションと流路状遺構19-1155のkセクションで出土している。その他にキハダ・ムクノキ・エゴマ・シソ属・ミズキ・ノブドウ・キク科などが出ている。オオムギが1点出ている。

炭化していない種実(図61・62) 流路状遺構19-1155のkセクション最下層(17層)集石遺構19-1430の溝状落込みと19次- 区中央断割で確認した縄文時代晩期遺構基盤層の粘土層(図53の ~)から出土している。流路状遺構19-1155の最下層はキイチゴ属が一番多く、次いでボントクタデ・フユイチゴ・カジノキ・ニワトコ・サルナシ・マタタビ・シソ属・カヤツリグサ属(扁平形)が多い。その他の主なものはヤマグワ・カラスザンショウ・アカメガシワ・タラノキ・ヤナギタデ・オオイヌタデ・カナムグラ・カヤツリグサ属(三稜形)がある。種実以外ではモミ属の葉が出ている。集石遺構19-1430の溝状落込み埋土もキイチゴ属が一番多く、次いでヤマグワ・カジノキ・フユイチゴ・ニワトコ・サルナシが多い。木本は19次- 区縄文時代晩期遺構基盤層の粘土層 層が種類も豊富でムクノキ・ニワトコ・カエデ属・マタタビなどが多い。クワ属とカエデ属は全層で出ている。草本は下層より上層の方が種類が多く、 層でミズ属が特に多い。

(4)自然木樹種同定(図63~65)

19次- 区縄文時代晩期遺構基盤層の粘土層と集石遺構19-1430の溝状落込み埋土は種実とともに自然木の木片もよく残存していた。周辺の植生復元に利用するため、自然木の樹種同定を行った(表4)。樹種同定は両刃の剃刀で樹種切片を作成し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートにし生物顕微鏡で同定した。

縄文時代晩期の集石遺構19-1430埋土からは、針葉樹はヒノキ科・モミ属、広葉樹はサクラ属・ムクノキ・アカガシ亜属・トチノキ・サカキ・ニシキギ属があった。晩期以前である基盤層の粘土層では広葉樹のサクラ属・クスノキ科・ムクノキのみが検出された。

(5)小結

以上、抽出・分析した結果を記した。これらは土壌すべてを採取して処理した結果ではなく、 任意の箇所から部分的に取り出した結果であること、また様々な要因から運良く残存したもので あることを留意する必要があるものの、当時の状況をある程度反映した成果であることは評価さ れるであろう。

出土自然遺物から見ると、主要な炭化種実のうち、ドングリ類・トチノキなどは食用にするためにはアク抜きが必要であるが、他のクリ・クルミはそのまま食用になるし、マメ類は調理すれば食べる事ができる。炭化していない種実でもキイチゴ属・フユイチゴ・カジノキ・ニワトコ・サルナシ・マタタビ・ヤマグワなど食用になるものが多い。当遺跡で当時、食用にされていた種実の概要が見えてきたと思われる。出土状況から見ると、果種皮ではトチノキが最も多いのに比して、かなり種子が少ない。これは種子が食され果皮のみが主に廃棄されたことを示す、あるいは炭化した種子を見るとマメ類・ドングリ類・クリなどと比較して硬く焼き締まらず粉状の様子が見て取れることから炭化しても残存しにくいものとも考えられる。ドングリ類・クリは集中して出土しているが、マメ類は全体に均等に出土している傾向がある。これが何を反映しているのか現時点では不明である。今後は調査区周辺の土地の利用方法が解明されることを期待したい。

註

- 1) 国立歴史民俗博物館の住田雅和氏考案の方法。微細試料の掬い取りや保管に有効であるとご指導頂いた。
- 2) 後世に形成された段丘下である19次- 区の中央東西方向の断割で確認した縄文時代晩期遺構基盤層の粘土層(図53)のうち 層から採取したトチノキ果皮の炭素14年代測定により、5591±32yBP (cal BC 4465-4354年)の年代が得られており、縄文時代晩期遺構基盤層の形成年代の一端を示す。いずれも自然堆積層。 10YR3/2黒褐色泥土(炭化物層状に堆積) 5Y5/1灰色シルト(下部に炭化物層状に堆積) 2.5Y3/2黒褐色シルト(木葉・茎など入る) 10Y3/1オリーブ黒色中粒砂~シルト(木葉・茎など入る)。

参考資料

中山至大・井之口希秀・南谷忠志『日本植物種子図鑑』東北大学出版会 2000年 石川茂雄『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 1994年

(独) 森林総合研究所 日本産木材データベース

京都大学生存圏研究所 生存圏データベース 材鑑データベース

表 5 18次調査 流路状遺構18-1215 炭化種実一覧表

| | | | | | | | 表 5 | 1 | 8次 | - 前上 | | 流路 | 小 児 | 3件 | L 8 – . | | o , | 炭化 | ·性ヲ | ₹ . | 覧表 | ξ | | | | | | |
|-----------------------------|-----------|-------|-------|-------------------|--------|--------|---------|----------------------------|--------|-----------------------------|----------|-----------|------------|---------|---------|--------------------------|-------------|---------|----------|---------------|--------|----------|-------|---|---------|------------|---------------|----------------------------|
| キク科 果実 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| ツン属 | 個数 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | П |
| エゴマ無実 | 個数 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| アカネ科 | 個数 | | 1 | | | | 2 | | 1 | 9 | - | | | | | | | | 1 | - | 4 | | | | | | | 17 |
| クミ マズ核 ノキ | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 2 | | | 6 | | | | | | | | 12 |
| キハダ | 個数 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| カラスザ ンショウ 種子 | 個数 | | | | | | | | 2 | 1 | | | 1 | | | П | | | | 23 | П | - | | | | | | 10 |
| サッ ショ ヴェ 子 | 個数 | | | 1 | | 1 | | | 1 | 2 | | | 4 | 8 | | 1 | | | | 9 | 19 | | | | | | | 48 |
| アカメ ガシワ 種子 | 個数 | | | | | | | | | 2 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| ムケノキ核 | 個数 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| 果皮 | 重量(g) | 0.262 | 1.748 | 2.070 | 1.858 | 0.470 | 0.505 | 0.737 | 16.921 | 19.187 | 0.713 | 6.458 | 0.947 | 1.251 | | 6.483 | 1.830 | 2.056 | 1.196 | 6.276 | 1.948 | | 0.009 | 0.018 | | 0.004 | | 72.947 |
| 不明大型 種子 | 重量(g) | | | | 0.257 | | | 0.046 | 1.244 | 1.200 | | | 0.154 | 0.035 | | | 0.476 | 0.068 | | 0.090 | 0.664 | 0.139 | | | | | | 4.373 |
| A 種子 | 重量(g) | | | 0.044 | 0.063 | 0.011 | 0.038 | 0.115 | 3.020 | 5.041 | 0.038 | 0.121 | 1.008 | 0.971 | 0.035 | 1.561 | 1.497 | 0.108 | 0.100 | 4.365 | 0.710 | 0.054 | 0.094 | 0.016 | | 0.035 | | 19.045 |
| トチノキ 類似 種子 | 重量(g) | | | | | | | 1.506 | 0.464 | 3.145 | | | | | | | | | | 0.019 | | | | | | | | 5.134 |
| クリ 種子 | 重量(g) | 0.672 | 1.845 | 1.879 | 0.335 | | 0.015 | | 0.448 | 0.718 | 0.077 | | | 0.089 | 0.115 | 78.908 | 1.996 | 1.080 | 0.290 | 1.038 | 0.382 | 0.016 | | | | | | 89.903 |
| | 重量(g) | 0.018 | 0.169 | 1.341 | 0.369 | | 0.389 | 0.160 | 1.828 | 7.691 | 0.949 | 10.255 | 2.042 | 1.983 | 0.018 | 0.333 | 0.754 | 1.552 | 0.244 | 5.140 | 2.577 | 0.036 | | | | 990.0 | | 37.914 |
| オニグルミ核果 | 個数 | | | | | | | | | | | 1/2 | | | | | | | | | | | | | | | | 1/2 |
| Ū. | 重量(g) | 0.083 | 0.520 | 1.612 | 1.474 | 0.091 | 0.528 | 0.510 | 2.891 | 6.378 | 0.422 | 0.589 | 0.510 | 0.444 | 0.322 | 4.701 | 0.525 | 0.434 | 0.256 | 2.979 | 1.715 | | | | | 0.103 | | 27.087 |
| ドングリ種子 | 個数 | | | 1/2 | | | 1/2 | 1/2 | 1/2 | | | | 1/2 | | | 5, 1/2×8 | 1, 1/2×4 | | 1/2×2 | 1, 1/2 | 2 | | | | | | | 9, 2×20 2 |
| | 重量(g) | 0.005 | 0.035 | 0.117 | 0.073 | 690.0 | 0.122 | 0.277 | 0.134 | 0.352 | | 0.105 | 0.084 | 0.081 | 0.004 | 0.171 1. | 0.084 | 0.135 | 0.051 1. | 0.429 | 0.405 | 0.045 | | | 600.0 | 0.008 | | 2.795 9, 1/2×20 |
| と 無 大 土 | 個数車 | 0 | 1/2 0 | $\frac{2}{1/2}$ 0 | | | 1/2×3 0 | $\frac{3}{1/2 \times 2}$ 0 | | $\frac{3}{1/2 \times 10}$ 0 | | 1,2×4 0 | 1/2×3 0 | 0 | 0 | $\frac{1}{1/2\times2}$ 0 | 1,2×3 0 | 1,2×2 0 | 1/2×2 0 | 5, 1/2×9 0 | | | | | 1 0 | 0 | | 40, 1/2×63 ² |
| / 単 / 栄 / 栄 / 栄 / 栄 / 栄 / ポ | 個数 | | 1 | | | П | 1/ | 1/ | 1/ | 1/2 | | 1/ | 1 1/ | | | 1/ | 1/ | 1/ | 1/ | 8 | 5 1/2 | 1/ | | П | | | 1 | 16 1/2 |
| 名 | | | | | | | | | | | | | 10 | | 61 | | | | | | 0 | | | | | | 4 | |
| <u> </u> | 地点 総箱数 | | | | 57 | | | | | 2 | | | 200 | | 12 | | 66 | | | | 100 | | - | | · · | | | 1, 331, 4 1/4 |
| 箱数 | | 4 | 111 | 11 | 12 | 9 | 0層 5 | 8 | 14 | 38 | 9 | 6 | 15 | 層 20 | 12 | 13 | 4 | 60 | 2 | 222 | 图 40 | 7層 5 | 10 | 22 | 4 | 2 | 1/4 | 331, 1/4 |
| 層名 | | 1層 | 8・9層 | 14層 | 16層 | 17層 | 19・20層 | 25層 | 國9 | 2厘 | <u>8</u> | 國6 | 圈9 | I 7~31層 | 1・2層 | 2層 | 3層 | 4~6層 | 圈9 | 2・6層 | 8~11層 | Ⅱ 12~17層 | 38 | 3~5層 | | 2・3層 | 1 | |
| | | | 産 | | | I 毙 | | II 樂 | I 能 | | 能 | | 盤 | II・I 報 | 産 | ح | I 能 | 非 | Ē | | | I·I 能 | 産 | 搬 | 屈 | I 毙 | 墨 | |
| サンプル採取地点 | | | | | Aセクション | | | | | \\ -\?\40 | D-F/O/E | | 7.57.40 | (F) (F) | ベモベクユロ | | 1 1 1 | פרט | | | 「セクション | | 1 1 |) H / / H / H | 7.17.44 | 11 67 7 11 | B・Cセク ション間 | THE THE |

※廃:廃棄層 滞]:滞水層] 滞Ⅱ:滞水層Ⅱ

表 6 19次調査 炭化種実一覧表

| | | | | | | | | | | | 表 (| | 10, | 火部 | | | ~10 | 俚ラ | _ | 覚 | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|-------|-------|---------|--------|---------------|--------|-------|--------|-------|----------|---------|--------|--------|-----------|-------------|---------|--|-----------|-----------|--------|-------------|-------|-------|--|------------|--------|--------|-------|-------|--------|----------|-------|
| アカネ科 種子 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| バ友 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ノブドウ 種子 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| キハダ核 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| カラスザ ンショウ 種子 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | | | | |
| サンジ ョウ 種子 | 個数 | | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| エノキ グサ 種子 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| アカメ ガシワ 種子 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| サクラ属核 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| マタタビ種子 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| カジノキマタタビ サクラ属 果実 種子 核 | 個数 | | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| クワ属 果実 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 下大 種 野型上 | 重量(g) | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大 一 一 一 一 一 | (宮)喜重 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| オム果木半実 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| トチノキ 類似 種子 | 重量(g) | | 0.518 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0.384 |
| クミダル類数 | 重量(g) | | 0.033 | 0.113 | | | | | | | 0.622 | | 0.252 | | | | | | | 0.244 | | | | | | | | 0.015 | | | | |
| かり | 重量(g) | 0.875 | 1.349 | | 0.137 | 0.926 | 0.399 | 0.190 | 0.102 | | 0.122 | | | | | | 0.061 | | | | 0.298 | 0.098 | 0.107 | | | 0.025 | 0.113 | 0.675 | 0.170 | 0.119 | | 0.114 |
| ングリ類種子 | 重量(g) | 3.686 | L 4.836 | 0.706 | 0.490 | 0.381 | 0.281 | | | 0.038 | 0.722 | 0.640 | 0.171 | 0.094 | | 0.024 | 0.239 | 0.420 | 0.735 | 2.027 | 0.888 | | 0.083 | 0.070 | | 0.055 | 0.103 | 1.943 | 0.220 | 0.062 | 0.230 | 0.217 |
| デ ン <u>価</u> | 個数 | 16以上 | 25以上 | 2 | 1以上 | П | | | | | 2W.E | 1以上 | | | | | П | 1 | 2以上 | 5以上 | 2, 1/2×2 | | | | | | | 4以上 | | | | |
| マ暦人子 | (宮)曹重 | 0.103 | | 0.054 | 0.486 | 0.030 | 0.008 | | 0.023 | | 0.017 | | 0.109 | | 0.076 | 0.005 | | 0.026 | 0.008 | 0.018 | 0.200 | | | 0.050 | 0.082 | | | 0.034 | | 0.020 | 0.019 | |
| N. ME | 個数 | 5以上 | | 1, 1/2 | 9以上, 1/2×5 | п | 1/2 | | - | | 1/2 | | 2ULE | | 3以上 | | | 1 | | | 7ULE | | | 1以上 | 3 | | | 1以上 | | 1/2 | 1/2 | |
| /県 | 個数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 箱数 袋数 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 種業 | | 2 | 5 | 4 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 2 | 2 | 2 | C3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 65 | 2 | | 1 | 2 | | 1 | 1 | 1 | 4 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 图名 | | 5層 | 10層 | 4~7層 | 图8 | 園6 | 10層 | 11・12層 | 2~5層 | 暑6~9 | 10~12層 | 13~15層 | 2・6・8層 | 9~11層 | 12層 | 17層 | 4~6・9層 | 16~18層 | 19層 | 2・3層 | 10~12層 | 3層 | 4・5層 | 國2・9 | 8・9層 | 10・11層 | 12・13層 | 2~4層 | 5層 | 199 | 7層 | 图8 |
| | | | 搬 | 壓 | a | 柴 | 愈 | 蜌 | 念 | a | 産 | 仓 | 壓 | 多 | | 搬 | 無 | @ | 疟 | 麗 | 继 | 鑑 | 壓 | 熊 | 多 | 继 | 愈 | 弼 | 産 | 無 | a | 念 |
| サンプル 抽出地点 | | 1 | トレンション | | | Bセクション | | | | 1 1 | (元) (当) | | | 7. F/2.47 | , , , | | eセクション | _ =/244J | 1 (5 / 1) | , , | 留代シンヨノ | | | 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1 | II FO 7 3. | | | | | 1セクション | | |
| 遺構名 | | | | | | | | | - | | | | - | | | 4 40 11 | 高 記 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | ccii | | | | | | | | | | | | | | |
| | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 3 | 区 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 26 | 47 |
|----------|------------|----------|----------|----------|------|----------|--------|---------------|---------------------|-----------------|--------|---|----------------|----------|----------|-----------|-----------|------------|------------------|-------------------|-------|-------|-------|-------|------------|--------------|-------|----------|----------|----------|-----------|---------------|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | п | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | - | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | - | | - | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | - | |
| | | | | П | П | e | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | П | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | \dashv |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 8 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1.041 | |
| | | | | | | 0.204 | | | | | | | 0.938 | 1.355 | 0.564 | 0.447 | 0.016 | | | 0.047 | 0.335 | 0.002 | 0.002 | | 900.0 | 0.001 | | 0.197 | 0.088 | 0.043 | 11.052 1 | 5.069 |
| | | | | | | | | | | п | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 17 | 43 |
| | | 0.245 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0.429 | |
| | 0.071 | 0.014 0. | 690.0 | 0.078 | | 0.197 | | | 0.049 | 0.032 | | | 0.086 | 0.013 | 0.083 | | | 0.080 | | 0.352 | 0.392 | | 0.074 | | | 960.0 | | 660.0 | 3.082 | | 0.032 0. | 3.635 |
| 0.132 | 0.103 0. | 0. | 0.256 0. | 0.224 0. | | 0.374 0. | | | 0.578 0. | 0.140 0. | | | 0.719 0. | 2.238 0. | 0.794 0. | 0.500 | | 0.175 0. | 0.113 | 0. | 0. | | 0. | | | 0. | | 0. | 0.299 3. | | 23.549 0. | 0.501 3. |
| 0.112 0. | 0.591 0. | 0.030 | 0.512 0. | 0.829 0. | | 0.623 0. | 0.077 | 52.946 | | 8.979 0. | 0.241 | 1.932 | 2.730 0. | 0.284 2. | 0.152 0. | 0.240 0. | 0.072 | 0.127 0. | 0.044 0. | 0.294 | 0.072 | 0.003 | | 090.0 | | 600.0 | 0.005 | 0.063 | 0.225 0. | 0.159 | 4.212 23. | 3.081 0. |
| 0 | 2以上 0. | Ö | 2以上 0. | 3以上 0. | 1以上 | 1/2 0. | |)5 | XE, 1.932 | + 1 | 1以上 0. | | 3, 1/2×5 2. | | 0 | 1/2 0. | 0 | 1/2 0. | 0. | $1/2 \times 2$ 0. | Ö | Ö | | Ö | | 0 | Ö | 0 | o o | 0 | 1/2 4. | 1/2 3. |
| 0.082 | 0.039 22 | 0.007 | 372 | 0.020 31 | 11 | 0.018 | | 44, 1/2×1(| 0.011 $10 % 1 / 2$ | 0.087 2811 | 11 | 0.036 | 1/2 | | | T | | ī | | 1/2 | 0.002 | | | | | | | | 0.024 | | 0.630 1. | 1.373 1. |
| -1 | 1, 1/2 0.0 | 1/2 0.0 | | 1 0.0 | | 0.0 | | | | 3以上,0.0 | | 0.0 | | | | | | | | | 0.0 | | | | | | | | 0:0 | | 1,2×9 0.6 | 1/2 1.3 |
| 3以上 | ń | 1, | | | | | | | 1, | 38 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 33 | 00 | | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 9 | 2 | 284 2 | 1 1 |
| 00 | 2 | | e | 00 | н | 2 | | | 2 | 9 | - | П | 9 | က | 2 | | 1 | 4 | 2 | | | | | | | | | | | | 64 | 14 |
| 6~8・12層 | | | | 14・15層 | | | | | | | | | | _ | (国) | (20層) | (五0屋) | ト(21層) | ※ (か) | | 3・7層 | | 團 | | | | | B. S. S. | (S) | | (4) | |
| 8~9 選 | 國6 能 | 砂 10層 | 新 11 图 | 新 14 | 16 | 滞 17層 | | | | | | | 1曆(19曆) | 2層(20層) | 最下層(20層) | 南北断割(20層) | 土器周辺(20層) | 灰色シルト(21層) | 下層粗砂礫 (溝状落込み) | <u>m</u> | 2 · 3 | 2厘 | 8・9 | 图2 | BB6 BB7 | 11層 | 16層 | 18層 | (3263) | 21層 | (3274) | |
| 80 | 來 | 争, | kセクション 淵 | 本 | 本 | 水 | 1セクション | 西側 | + 10 14 10 | 工机19- 1429付近 | | 最下層青灰色泥土 | | 2) | <u></u> | 世 | +1 | <u> </u> | 4 | | | | | _1 | <u>4</u> | | | | | <u> </u> | _ | |
| | | | | | 47.4 | 1.19 | | 1 | | | | lilet. | | | } # | | 1430 | | | | | | | | 1283年 | 1715 1215 | | | | | | 土坑19 -3288 |
| | 2 | | | | | | | | | | | 8.2 海過 2.2 2.1 5.1 5.1 5.1 5.1 5.1 5.1 5.1 5 | | | | | | | # [| | | | | | | | | | | | | |

表7 19次調査 炭化していない種実一覧表

| 報名 報名 記述 記述 記述 記述 記述 記述 記述 記 | | | | | 維 | | ベースル | 督 | 流路状遺構 19-1155 | | 集石 | 5遺構19−1 | 430 | | |
|--|-----|---------------|-----------------------|------|------|-----|------|-----|------------------|-----|-------|---------|-----|-----|----------|
| 1 日本 2前 1 日本 2前 1 日本 2 日本 | | 種名 | 科名 | | ①層 | ②層 | ③層 | 4)層 | kセクシ | | | | | | 備考 |
| 주일 | | | | HAIN | | - | | - | | | | | | | |
| 分字 イ子子格 イ子子 イ子子格 素 日本子子 イ子子格 素 日本子子 イ子子格 オート イ子子 イ子子 イ子子 イ子子 イ子子 イ子 イ子 イ子 イ子 イ子 イ子 イ | | エン屋 | 7111 | 本 | 1 3% | 2 箱 | | | | 3 稍 | 2 和 | L箱 | 4 箱 | 2 箱 | |
| | | | | | | | | 4 | 3 | | | | 1 | | |
| オニグルミ | | | | | | | | 2 | | | | | | | |
| A 2 5 7 | | | | | | | | | | | | | | | |
| サインター サイ | | | | | | | | | | 1 | | | 2 | 3 | |
| 大学 | | | | | | | | 2 | | | | | 1 | | - |
| 大クマネ コレ 業度 2 4 1 2 2 3 1 1 2 2 3 1 1 2 2 4 2 1 2 4 2 1 2 4 2 1 2 4 2 1 2 4 2 1 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2< | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| AD / P | | | | | | | 2 | 4 | | | | | 1 | | |
| オックラークラフラフラクラフラクラフラクラフタークラフタークラフタークラフタークラフ | | | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | |
| カラノキ フウツ クワ ツグラフジ 収容 グラクジ 1 2 2 3 3 3 3 1 1 2 2 3 3 1 1 2 2 3 8 1 1 1 2 2 3 8 1 1 2 2 3 8 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 | | | | | 4 | 2 | 3 | 6 | | | | | 3 | 1 | |
| 고 '''''''''''''''''''''''''''''''''''' | | | | | | | | | | | | | 1.0 | - | |
| サルナシ マタタビ 報子 1 24 2 2 1 6 マタタビ マクタビ 報子 1 6 32 2 3 9 サカキ ウバキ 銀子 1 1 6 32 2 3 9 サカキ ウバキ 銀子 1 1 2 3 9 1 サンラ電信 10 1 2 3 1 1 2 オルダ 10 1 2 1 1 2 1 2 オルダ 10 2 1 1 2 2 | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | | 1 | | 1 | |
| サルナシ マタタビ 報子 日 24 2 21 6 サカキ フバキ 発子 日 1 1 32 2 3 9 1 とサカキ フバキ 競子 1 2 1 2 1 1 1 2 1 1 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 2 1 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 3 3 1 1 2 1 3 3 1 1 2 1 2 1 3 3 1 2 1 2 2 1 3 3 1 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 2 1 2 <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td>3</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> | 1 | | | | | 1 | | 1 | 3 | | | 1 | | | |
| 力弁 ツバキ 前子 1 2 1 1 2 1 1 2 1 2 2 2 2 2 2 2 2 3 3 1 24 1 1 1 2 2 1 2 2 1 2 2< | | | | | | | | | 24 | | 21 | | | | |
| Reth サクラ陽 ツバラ 機庁 1 2 日本イデス保 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 4 5 3 3 1 1 2 4 5 3 3 1 2 4 5 3 3 1 2 4 5 3 3 1 2 4 5 3 3 1 2 4 5 3 3 1 7 7 7 2 1 4 1 1 2 4 5 3 3 1 4 2 2 1 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 2 1 1 2 2 1 1 2 2 1 1 2 | | マタタビ | マタタビ | 種子 | 1 | | 1 | 6 | 32 | 2 | 3 | | 9 | | |
| ★ キイチゴ属 バラ 核 3 1 1 199 80 348 8 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| * ★ 千子三国 | | | | | | | | _ | 2 | | | | 1 | 1 | - |
| ## 24.4 デジック 1.7 | H | | | | 2 | | 3 | 1 | 190 | 30 | 3.4.9 | R | | 1 | |
| ### Pay | 本 | | | | - | | | | | | | | | | |
| # カンショウ まカン 様子 2 1 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | アカメガシワ | | | | 2 | | 4 | | | | | | 1 | |
| # サンショウ属 | | | ミカン | 核 | | | 1 | | | | | | | | |
| カテブ語 カエデ 果実 1 2 3 8 8 1 4 2 2 カエデ | | | | | | | | | | 2 | 1 | | | 1 | |
| カエデ酸 カエデ 東東 1 7 2 12 | | | | | | 0 | | 2 | | -1 | A | | | | |
| Aクロジ MP子 1 ○ ○ ○ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ | | | | | 1 | _ | 9 | | 8 | 1 | | | 2 | | - |
| トチノキ | | | | | 1 | - ' | | | | | 1 | | | | |
| プドウ属 プドウ 千字 日 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | トチノキ | | | | | | | 0 | | | | | | |
| Jブドウ ガイターネズキ 3 グキ 1 2 1 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 0 2 1 0 2 1 0 1 0 1 0 0 1 0 0 1 0 | | | | | | | | | | | | | | | |
| まズキ 数 1 2 1 クライネ 2 1 1 2 クラノキ ウコギ 種子 1 7 2 1 エゴノキ ウフキ 村子 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 2 1 1 1 2 1 1 2 1 2 2 1 2 | | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| ウマノミズキ ミズキ 核 7 1 1 クラノキ ウコギ 66 子 2 1 6 スプノキ カテノキ カウコギ 66 子 1 1 7 2 1 6 スプノキ カナムグキ ムラサキシキブ属 クマツソラ 検 1 2 1 2 1 <t< td=""><td> </td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>-</td><td></td><td></td><td>1</td><td></td><td>1</td><td></td><td></td></t<> | | | | | | | | - | | | 1 | | 1 | | |
| ウコギ科 ウコギ 橋子 1 2 1 6 メラナキフィス 女子 女子 1 7 2 1 6 エゴノキ 女 1 2 1 1 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 4 2 1 | | | | | | | | | 2 | | 1 | | | | |
| タラノキ ウコギ 柚子 1 7 2 1 6 1 2 1 1 2 1 1 2 1 1 2 1 2 1 1 3 2 1 1 3 2 1 1 3 2 1 1 4 4 2 2 1 1 1 4 4 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 1 2 2 | 1 | | | | | | | ' | 2 | | _ | | | | |
| ムラサキシギブ属 クマツララ 核 3 3 3 4 25 1 21 カナムグラ クテイト ファウ 果実 1 1 5 8 タデ科 (三後) タデ 果実 1 1 83 1 1 1 6 12 9テ科 (三後) 9デ 果実 1 1 83 1 1 1 6 12 9テ科 (三後) 9デ 果実 1 1 83 1 1 1 6 12 9テ科 (三後) 9デ 果実 2 23 1 <t< td=""><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td></td><td>2</td><td>1</td><td></td><td>6</td><td></td><td></td></t<> | | | | | | | | 1 | | 2 | 1 | | 6 | | |
| カナムグラ | | | | | | | | | 1 | | | | 1 | 1 | |
| カナムグラ クワ 果実 13 2 1 5 8 タデ科 (三稜) タデ 果実 1 1 83 1 1 6 12 タデ科 (三稜) タデ 果実 1 1 83 1 1 6 12 タデ科 (三稜) タデ 果実 2 23 1 | | | | | | | | | 0.0 | | 0.00 | | 0.4 | | |
| まズ属 イラクサ 果実 1 1 1 6 12 タデ科 (届平) タデ 果実 1 1 83 1 1 6 12 タデ科 (届平) タデ 果実 1 23 1 1 1 スペリヒュ スペリヒュ 種子 1 1 4 4 4 4 4 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 2 1 1 1 2 1 2 1 2 1 2 <td></td> <td>ーントコ</td> <td>[317/3]</td> <td>伙</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td>0</td> <td>30</td> <td>4</td> <td></td> <td>1 1</td> <td>21</td> <td></td> <td></td> | | ー ン トコ | [317/3] | 伙 | | | 1 | 0 | 30 | 4 | | 1 1 | 21 | | |
| 夕デ科 (福平) 夕デ 果実 1 1 83 1 1 1 6 12 夕デ科 (福平) クデースペリヒコ スペリヒコ スペリヒコ スペリヒコ スペリヒコ 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 <td></td> <td>カナムグラ</td> <td>クワ</td> <td>果実</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>13</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> <td>5</td> <td>8</td> <td></td> | | カナムグラ | クワ | 果実 | | | | | 13 | 2 | 1 | | 5 | 8 | |
| 夕テ科 (届平) 夕デ 果実 23 1 スペリヒコ スペリヒコ 種子 ハコペ属 ナデシコ 種子 ノミノフスマ ナデシコ 種子 上国属 ヒュ 幡子 ヒュ | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| スペリヒュ スペリヒュ | | | | | 1 | | 1 | | | 1 | 1 | 1 | | 12 | |
| ハコベ属 ナデシコ 種子 1 4 4 1 1 4 4 1 1 1 3 4 1 | | | | | | | | | 23 | | | 1 | 1 | | <u> </u> |
| ノミノフスマ ヒユ属 ナデシコ モュスークが 東東 1 1 1 3 キンボウゲ属 キケマン属 フウロケマン アブラナ科? ケシ ・ 種子 アブラナ科? 1 <td>1 1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>4</td> <td></td> | 1 1 | | | | | | | | 1 | | | 1 | | 4 | |
| ヒュ属 ヒュ 種子 1 1 1 3 キンボウゲ属 キンボウゲ 果実 1 2 2 2 1 2 1 2 2 2 1 1 1 2 2 2 1 1 2 2 1 2 1 2 2 1 2 1 2 2 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 | | | | | | | | | | | | | | 1 | |
| キケマン属 ケシ 種子 1 2 1 2 1 1 2 2 1 2 2 2 | | | | | | | | | | | 1 | | | 3 | |
| フウロケマン アブラナ科? ヘビチゴ属かキジムシロ属 スノキグサ スミレ属? スミレ属? スズメウリ ウリ 柚子 マガジラミ セリ 果実 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | キンポウゲ属 | キンポウゲ | 果実 | 1 | | | | | | | | | | |
| アプラナ科? アプラナ 種子 ハビイチゴ属かキジムシロ属 バラ 果実 1 1 1 5 1 エノキグサ トウダイグサ 種子 スミレ属? スミレ 種子 1 1 1 1 1 1 1 2 スズメウリ ウリ 種子 ヤブジラミ セリ 果実 アカネ科 アカネ 果実 2 セリ 果実 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 2 1 2 </td <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> | | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | | |
| ペピイチゴ属かキジムシロ属 パラ 果実 1 2 ススメウリ ススシレ 2 2 ススメウリ 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 2 1 2 | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| エノキグサ トウダイグサ 稲子 1 2 2 1 2 1 2 1 2 2 2 1 2 <td> </td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>5</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td> | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | 5 | | 1 | | |
| スミレ属? スミレ 種子 りり 種子 カスメウリ ウリ 種子 カンジラミ セリ 果実 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 | | | | | | 1 | | | | 1 | | 1 | | | |
| 草 ヤブジラミ セリ 果実 2 1 オカネ科 アカネ 果実 2 1 キランソウ属 シソ 果実 1 1 シソ科 シソ 果実 2 メハジキ シソ 果実 1 シソ属 シソ 果実 2 イヌコウジュ属 シソ 果実 2 エゴマ シソ 果実 1 ナス科 ナス 種子 1 オンキミ キク 果実 1 ヤブミョウガ ツユクサ 種子 2 イネ科 イネ 瀬 1 2 イスジエ イネ 瀬 1 2 エノコログサ属 イネ 瀬 4 1 1 カヤツリグサ属(三稜形) カヤツリグサ 果実 11 1 カヤツリグサ属(扁平形) カヤツリグサ 果実 2 7 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | | スミレ属? | スミレ | 種子 | | | 1 | | | | | | | | |
| 本 アカネ科 アカネ 果実 2 1 キランソウ属 シソ 果実 1 1 シソ科 シソ 果実 2 1 シソ科 シソ 果実 1 2 メハジキ シソ 果実 1 2 エゴマ シソ 果実 1 2 エゴマ シソ 果実 1 2 ナス科 ナス 種子 1 1 2 オース科 ナス 種子 1 2 イネ科 イネ 類 1 2 2 イスピエ イネ 類 1 2 2 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 1 カヤツリグサ属(扁平形) カヤツリグサ 果実 1 1 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 27 1 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 27 1 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 1 | [[| | | | | | | | | | | | | | |
| キランソウ属 シソ 果実 1 シソ科 シソ 果実 2 メハジキ シソ 果実 1 シソ属 シソ 果実 1 イヌコウジュ属 シソ 果実 1 エゴマ シソ 果実 1 ナス科 ナス 種子 1 オース科 ナス 種子 1 オース科 イネ 展 1 イネ科 イネ 類 1 イスピエ イネ 類 2 エノコログサ属 イネ 類 4 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 27 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 27 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | · | | | | | | | | | | - | | | | |
| シソ科 シソ 果実 1 シソ属 シソ 果実 1 シソ属 シソ 果実 1 イヌコウジュ属 シソ 果実 1 エゴマ シソ 果実 1 ナス科 ナス 種子 1 オンス科 サス 1 1 メナモミ キク 果実 1 ヤブミョウガ ツユクサ 種子 2 イネ科 イネ 類 1 2 イスミビエ イネ 類 2 混 アワ? イネ 東実 1 1 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 | 本 | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | |
| メハジキ シソ 果実 1 シソ属 シソ 果実 39 3 4 イヌコウジュ属 シソ 果実 1 2 エゴマ シソ 果実 1 2 ナス科 ナス 種子 1 1 3 1 2 メナモミ キク 果実 1 2 2 イネミョウガ ツユクサ 種子 2 2 イネ科 イネ 類 1 2 2 アワ? イネ 果実 1 2 2 エノコログサ属 イネ 瀬 4 1 1 1 カヤツリグサ属(三稜形) カヤツリグサ 果実 11 1 1 1 カヤツリグサ属(扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| シソ属 シソ 果実 39 3 4 イヌコウジュ属 シソ 果実 1 2 エゴマ シソ 果実 1 1 2 ナス科 ナス 種子 1 1 3 1 2 メナモミ キク 果実 1 1 2 2 イネ目 イネ 類 1 2 2 混 イスピエ イネ 類 1 2 混 アウ? イネ 果実 1 1 1 1 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 1 カヤツリグサ属(三稜形) カヤツリグサ 果実 11 1 カヤツリグサ スゲ属 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| エゴマ シソ 果実 1 1 2 ナス科 ナス 種子 1 1 3 1 2 メナモミ キク 果実 1 2 ヤブミョウガ ツユクサ 種子 2 2 イネ科 イネ 類 1 2 2 イスピエ イネ 果実 1 2 混 アワ? イネ 果実 1 1 1 1 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 1 1 カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | | シソ属 | シソ | 果実 | | | | | | | 3 | | 4 | | |
| ナス科 ナス 種子 1 1 3 1 2 メナモミ キク 果実 1 1 2 ヤブミョウガ ツユクサ 種子 2 2 イネ科 イネ 類 1 2 2 アワ? イネ 果実 1 2 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 カヤツリグサ国(扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 スゲ国 カヤツリグサ 果実 5 1 | | | | | 1 | | | | 2 | | | | | | |
| メナモミ キク 果実 1 ヤブミョウガ ツユクサ 種子 2 イネ科 イネ 類 1 2 イヌビエ イネ 類 2 混 アワ? イネ 果実 1 1 1 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 1 1 カヤツリグサ 果実 27 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | | | | | 1 | - | | - | | - | - | | 1 | 2 | |
| ヤブミョウガ ツユクサ 種子 イネ科 イネ イヌピエ イネ アワ? イネ エノコログサ属 イネ カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 スゲ属 カヤツリグサ 果実 スゲ属 カヤツリグサ 果実 カヤツリグサ 果実 27 スゲ属 カヤツリグサ 果実 | | | | | 1 | _ | | 1 | 3 | 1 | 2 | | | | |
| イネ科 イネ 類 1 2 イヌビエ イネ 類 2 混 アワ? イネ 果実 1 1 1 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 1 1 カヤツリグサ属(扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | 2 | |
| イヌピエ イネ 類 2 混 アワ? イネ 果実 1 1 エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 11 カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 1 | | | | | | | | | 1 | | 2 | | | | |
| エノコログサ属 イネ 類 4 1 1 カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 11 カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 | | イヌビエ | イネ | 穎 | | | | | | | | | | | 混入か |
| カヤツリグサ属 (三稜形) カヤツリグサ 果実 11 カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 27 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 | | | | | | | | | | | | | | | |
| カヤツリグサ属 (扁平形) カヤツリグサ 果実 27 1 スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | | |
| スゲ属 カヤツリグサ 果実 5 1 | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| | | | | | | | | | | | | | - | | |
| 「蘇類 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 | ш | 2 × 2 1149 | [/V 1 / J / J / J / J | 小大 | | | | | | | | 1 | 1 1 | 1 | 1 |
| | | 蘚類 | | | 0 | | 0 | | 0 | | | | | | |

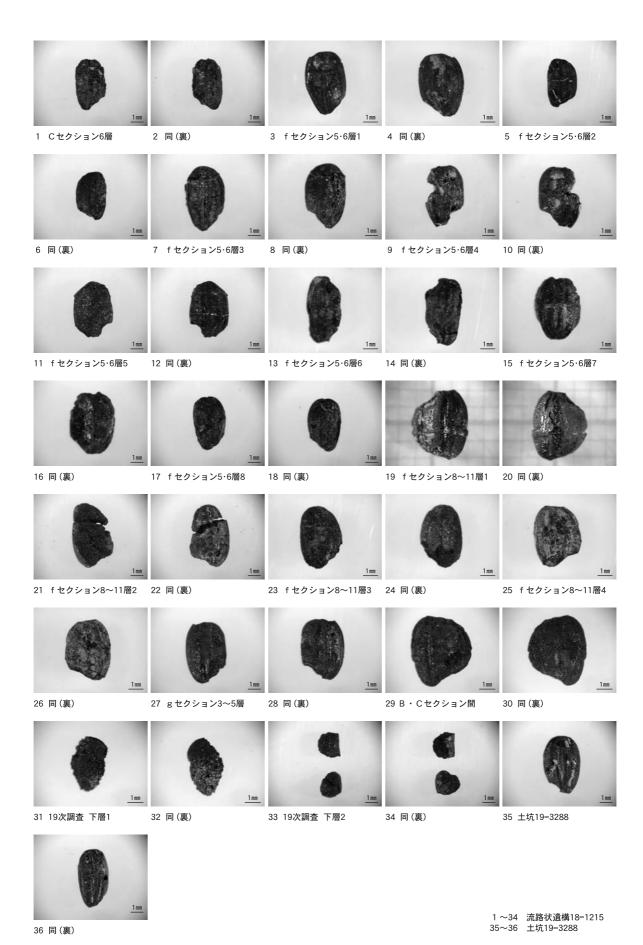


図54 炭化イネ



図55 炭化マメ類1(流路状遺構18-1215出土)

スケール _2㎜_



図56 炭化マメ類2(流路状遺構18-1215出土)

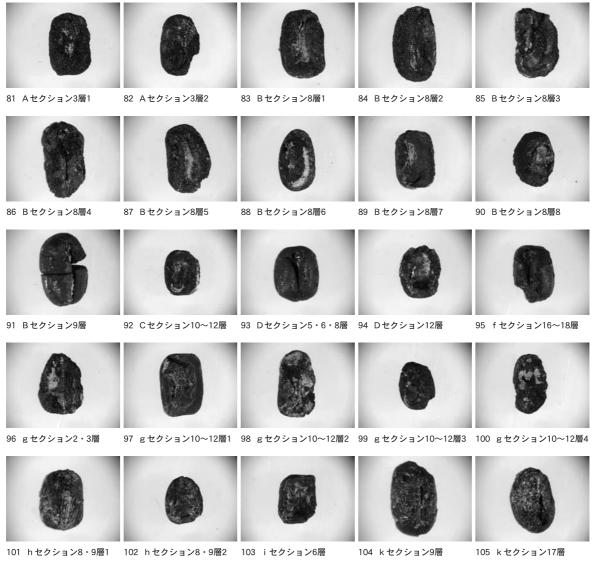


図57 炭化マメ類3(流路状遺構19-1155出土)

スケール _2mm_

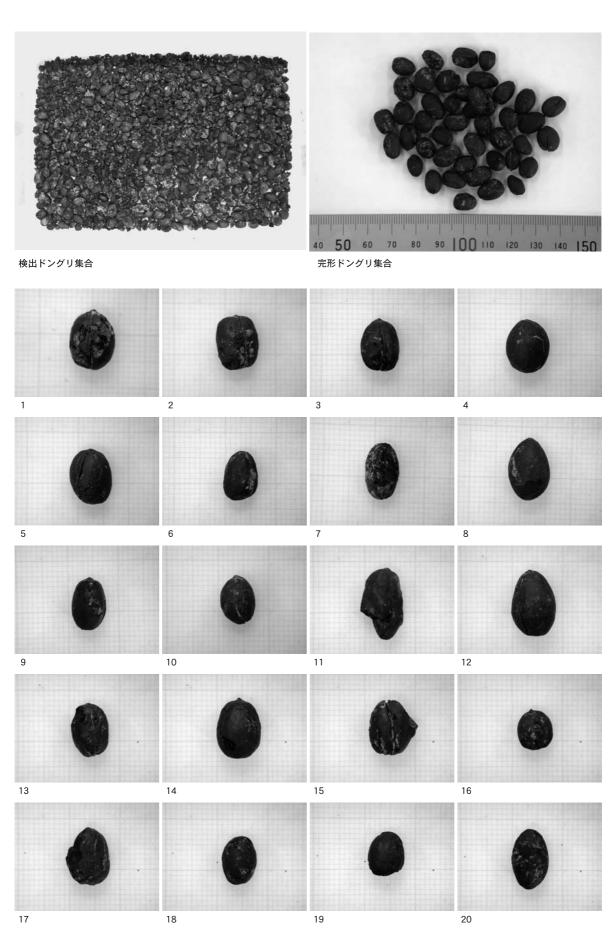


図58 炭化ドングリ類1(流路状遺構19-1155出土)

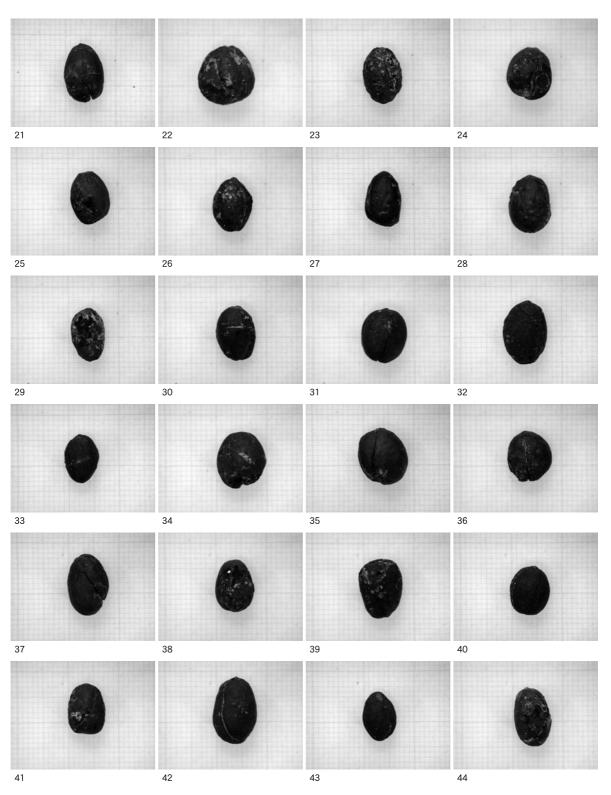


図59 炭化ドングリ類2(流路状遺構19-1155出土)

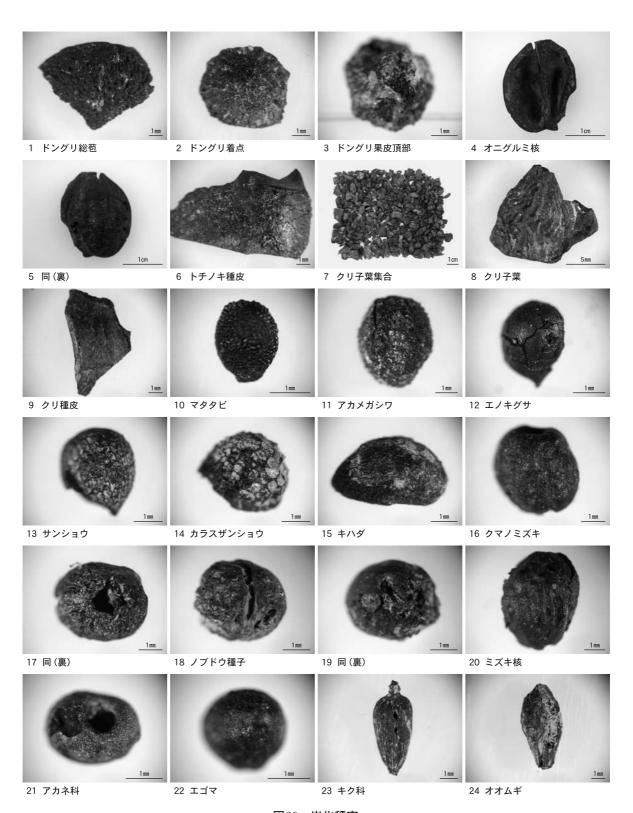


図60 炭化種実

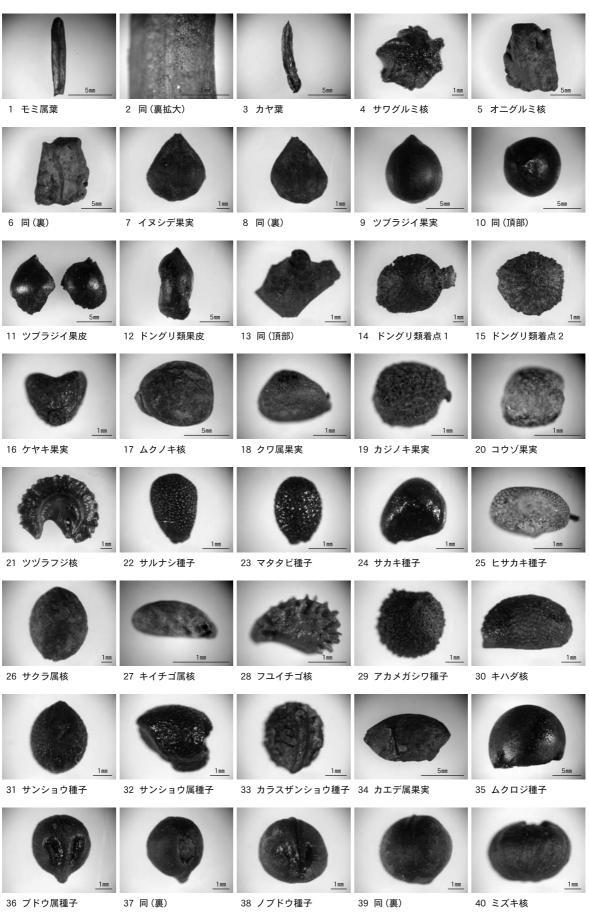


図61 炭化していない種実1

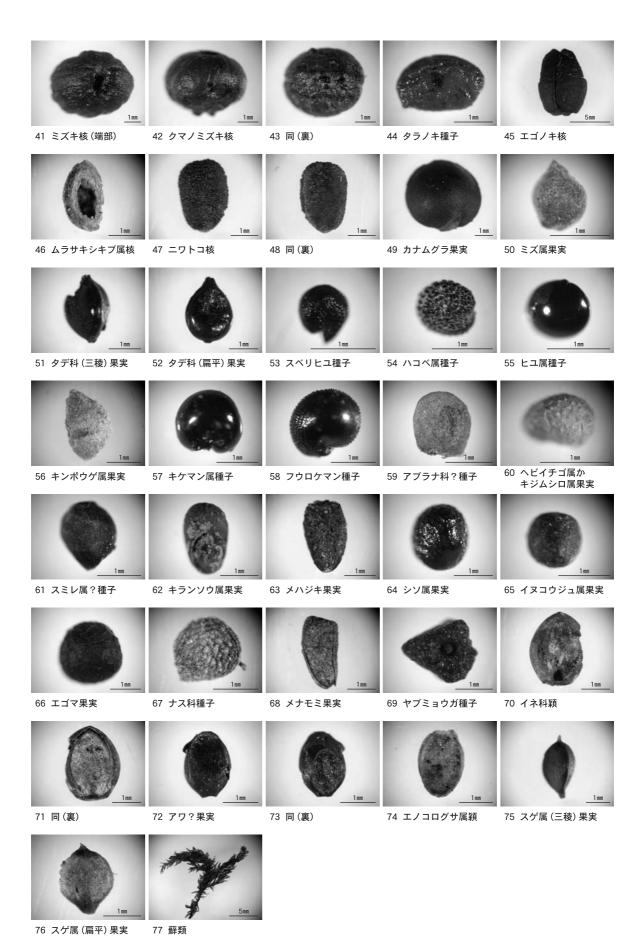


図62 炭化していない種実2

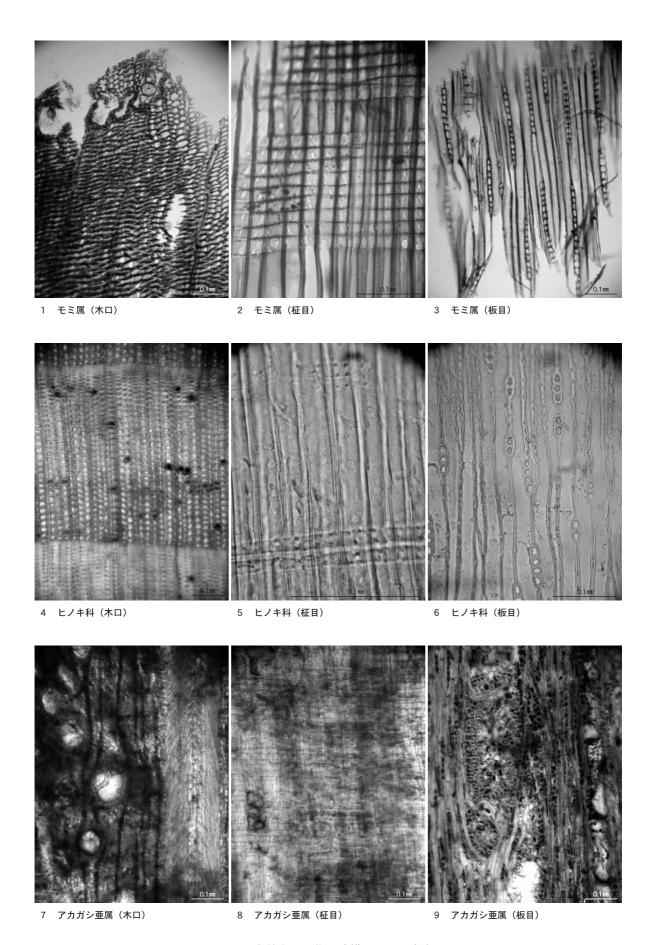


図63 自然木1 (集石遺構19-1430出土)

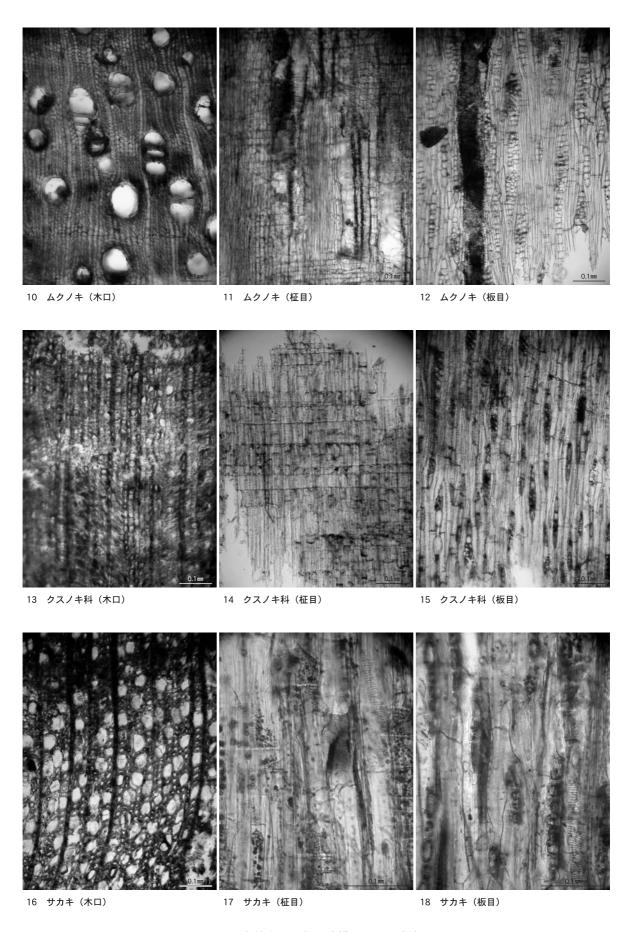


図64 自然木2(集石遺構19-1430出土)

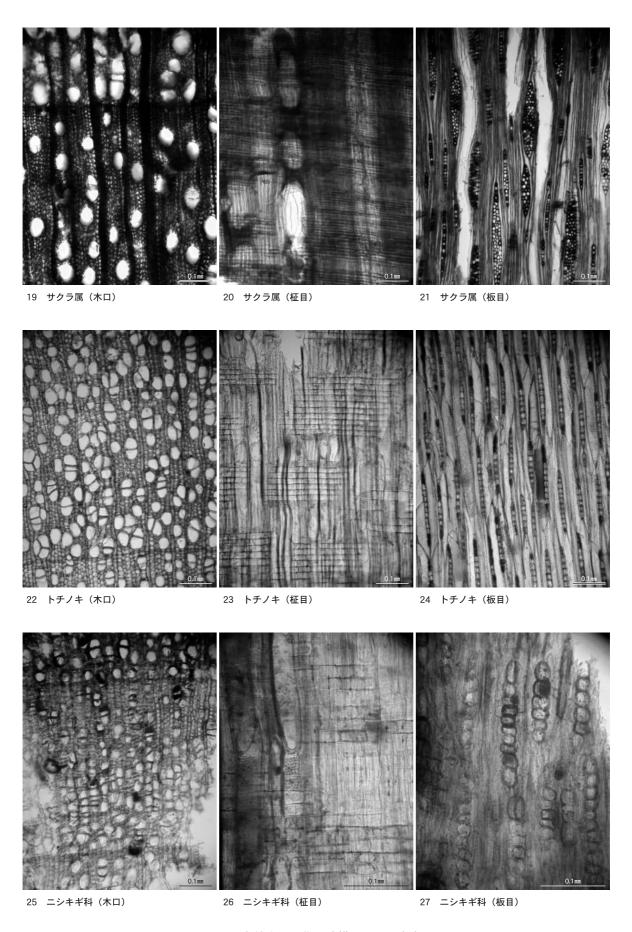


図65 自然木3(集石遺構19-1430出土)

第6章 自然科学的分析の成果

1 流路状遺構18-1215出土の朱鉱石の鉱物学的検討とその産地の推定 豊 遙秋(東京大学総合研究博物館)

(1)京都市西京区上里遺跡より出土した朱鉱石の鉱物学的検討

実体顕微鏡による観察では、石257 (23mm×22mm、8.7g)は、水銀の硫化物である辰砂 (Cinnabar;HgS)を含む朱鉱石であることを確認した。赤色の辰砂の結晶は最大0.2mmの粒状結晶またはその集合として母岩中に点在し、いわゆる浅熱水性の鉱脈鉱床の特徴を持つ。辰砂を含む母岩は石英及び粘土鉱物よりなり、辰砂の生成にかかわった酸性熱水溶液によって花崗岩が変質したものである。鏡下では粒状の石英とともに白色絹糸状光沢のセリサイト(絹雲母)が主成分で部分的には粗粒のセリサイトが濃集する部分が見られる。セリサイトにはカオリンが伴う可能性が高い。鉱石にはごく微量の黄鉄鉱が含まれる。

(2) 辰砂鉱石の原産地についての検討

鉱石試料の原産地の推定は近世のものについては旧廃止鉱山から該当する鉱山を絞り込むことは可能であるが、古代以前の遺跡から出土した試料については比較検討すべき鉱山に関する試料、情報が殆どないため、原産地(鉱山)を特定することは困難である。したがって、この報告では現在国内で見られる辰砂を産出した鉱山のうち、特に畿内と周辺地域の辰砂を産出した鉱床を対象に本試料を比較検討することとした(比較試料は東京大学総合研究博物館所蔵標本を使用した)。

【辰砂を産出する鉱床】

- () 奈良県櫻井市、宇陀地方に分布する水銀鉱床で大和水銀鉱山に代表される領家帯の花崗岩中の浅熱水性鉱脈鉱床がある。鉱床の露頭に近い部分ではセリサイト化が著しく、この地域の水銀を伴う鉱床はしばしばセリサイトの鉱床として稼行されていた。しかし、歴史的にはこの地域には古代から水銀を稼行していた鉱床が存在することが知られている。例;櫻井市針道(多武峰鉱山)、飯盛塚、音羽水銀鉱山、御所市塩家、宇陀郡大澤(大和水銀鉱山)、駒帰、(神生水銀鉱山)、向崎、東郷、藤井、黒木、大東、栗野(大蔵鉱山)、本郷(神戸鉱山)、岩清水
- () 三重県松阪市丹生地域に見られる水銀鉱床で領家帯の花崗岩、三波川変成岩中に熱水性鉱脈鉱床をなすもの。丹生水銀鉱山、佐奈鉱山に代表されるように砒素の硫化物を伴うことが特徴である。セリサイトを伴うが顕著ではない。
- () 徳島県阿南市水井鉱山(若杉山遺跡)に見られる水銀鉱床は、石灰岩中の鉱床で方解石を伴う。
 - () 岡山県和気郡和気水銀鉱床は流紋岩中の鉱染鉱床でセリサイトを伴わない。
 - () 四国の三波川変成岩、または層状マンガン鉱床(穴内鉱山等)中に脈状に産する。

上記の鉱床に産する鉱石の特徴、即ち鉱物の組み合わせ、鉱石の組織等から出土した試料と最も近似する鉱床は()に属する鉱床群と考えるのが妥当である。しかし、()に例示したように多くの水銀鉱床が分布しこの中から資料の原産地を特定することは不可能である。現段階では、本試料は奈良県櫻井市、御所市、宇陀地方の水銀鉱床から供給されたとのみ結論する。

(3)結語

京都市上里遺跡出土の朱鉱石(石257 辰砂鉱石)の原産地は鉱石の構成鉱物、鉱石の組織から 奈良県櫻井市、御所市、宇陀市に分布する領家帯の花崗岩を母岩とする浅熱水性の鉱脈鉱床に産 出したと考えられる。現在残っている鉱床(鉱山)のいずれかに該当するかもしれないが確定す ることは出来ない。

位置的にも遺跡の南方約80kmの鉱床地域の立地は極めて供給地として妥当であろう。

今後、本試料中の辰砂の硫黄同位体値の測定を行い、これまでに得られている我国の辰砂の硫 黄の同位体値との比較を行う必要がある。

2 石器の使用痕分析と磨石・石皿類の残存デンプン分析

上條信彦(弘前大学人文学部)

はじめに

上里遺跡出土石器は、縄文時代晩期と弥生時代前期の遺構面の間に自然堆積層があり、他時期の資料の混入が限定される点で、分析に際して有効な資料である。調査では種子など食料獲得活動に関連する資料が検出されており、本遺跡出土の石器の分析結果との比較が可能である。本分析では、縄文時代晩期の遺構出土の大型剥片石器と磨石・石皿類を対象に使用痕観察と残存デンプン分析を行った。

(1)分析資料

大型剥片石器とは、打製石斧および横刃型石器を含む大型刃器である。両者とも粘板岩・頁岩といった板状節理の発達した素材が使用されている。これらの石材は本遺跡周辺で採集可能であり、石刀の素材にもなっている。

分析は、まず大型剥片石器を肉眼で観察し、分析に有効な資料を抽出した。抽出した資料のうち打製石斧10点、大型刃器10点の観察結果を示した。観察した打製石斧の大きさは長さ9.2~16.5cm(平均13.0cm)、幅3.8~5.6cm(平均4.8cm)、厚さ1.0~1.5cm(平均1.3cm)である。外形で短冊形(1~8)と、やや開く撥形(9・10)に二大別される。組成上では短冊形がほとんどであり、撥形は少ない。撥形は頭部幅に対し刃部幅が若干開く程度で、刃部幅が頭部幅の1.5倍以上に開く撥形はない。やや開く撥形は、刃部を円形に、胴部を直線状に外形を整える点で基部と刃部の意識がうかがえる。

大型刃器の大きさは長さ7.2~14.6cm(平均11.4cm)、幅3.5~6.3cm(平均4.3cm)、厚さ0.6~1.5cm(平均1.0cm)である。刃部位置に着目すると、いわゆる横刃型を中心とするが、外形・大きさから 長楕円~長方形で長さ10~15cmの剥片を使用した「大型」(11~16) 長さ5~7cmの掌に入る程の「小型」(17・18) 鎌状の「細形」(19・20)に三大別可能である。打製石斧と異なり、いずれも長軸一辺を刃部としている。 の大型は、更に刃部を剥離調整するもの(11~13)と、しないもの(14~16)の二区分できる。刃部を調整するものは刃部側の長軸が長くなる傾向があり、調整しないものはより大型で不定形である。 の小型は、半円状あるいは小判形の長楕円形に外形を整える(17・18)。 の細形は刃部の形成が長辺の一部に偏る傾向にある。

磨石・石皿類は、本遺跡周辺で採集可能な楕円礫が使用されている。使用痕観察時には、磨耗 痕のほかに、敲打痕や敲打の集中による凹み(敲打集中痕)などがみられた。本分析では肉眼で 磨耗面が観察できた個体を対象にしている。

(2)分析方法

1)使用痕分析

使用痕分析の方法には、ルーペや実体顕微鏡を使用して倍率50倍までの範囲で観察を行う低倍率法と、金属顕微鏡などを用いて倍率200倍以上で観察する高倍率法の二つの方法がある。本分析では双方の視点で観察を行った。しかし、大型剥片石器は石質の影響で風化面に覆われており、光沢は確認できなかった。そのため、低倍率法により磨耗痕と線状痕・剥落・付着物を中心に観察を行った。

低倍率法では、デジタル一眼レフ【EOS10D】に、マクロコンバージョンレンズ【レイノックス CM 2000×2.5】を装着した。なお、使用痕の凹凸を見やすくするために撮影時は資料に対し水平方向から照明を当てた。

2)残存デンプン分析

残存デンプン分析は、近年進展しつつある分野であり、日本でも実施されている。残存デンプン分析の有効性については渋谷2010aにまとめられている。関西においても低地帯での分析の結果、残存デンプンが検出され、有効性が指摘されている(渋谷2007)。

本分析では検証可能かつできるだけ資料を傷めないよう、薬品類の使用を控え、最も簡便でかつ効果的な方法を使用した(Fullager2006)。方法は以下のとおりである。

資料の観察 ルーペを使用して総合倍率10倍で観察を行い、試料を採取する部分を観察、記録した。使用痕の確認された範囲のうち、付着物あるいは表面汚染の少ない礫孔の奥から試料を採取した。

試料の採取 マイクロピペットにチップをはめ込み、精製水を吸入し、採取する対象に注入する。洗浄しながら試料(20 µ分)を吸引する。

プレパラートの作成 試料を遠心後(1500rpm・1分) 試料 8 µ を水性封入剤(アクアテックス)で封入する。

試料の観察 偏光・位相差顕微鏡 (オリンパスBX50 - P)を使用し総合倍率200~800倍で観察を行う。偏光顕微鏡は、直交・開放双方のポーラーで観察を行う。

なお、一連の作業はデンプンを含む物質をできるだけ避けた室内にて行い、 を実地で行い、 は研究室で行った。また試料を入れないプレパラートを毎回作成し、試料採取時・プレパラート作成時の汚染の有無を確認している。

(3)分析結果

1)大型剥片石器の使用痕(表8・図66~69)

打製石斧(1~10) 表面の刃先とみられる先端部から両側辺の下部にかけてU字状の磨耗痕が 分布する。磨耗痕は製作時の剥離面上に分布するうえ、ひとつの剥離面のなかに磨耗痕の分布境 界が観察される。また側辺部に比べ刃部には幅の狭い階段状の剥落が多く認められ、それらの稜 は丸みを帯びる。なかには線状痕が各剥離面を通してつながっているものもある(3)。磨耗痕の範囲は1点(7)を除き、裏面より表面のほうが大きく、刃部先端から20~45mmの深さに広がる。剥落は先端部を中心に、全て認められる。特に外形に影響を与えるほどの大きな剥落は、表面に多い。剥落後も使用されたとみられ、剥落面にも磨耗・線状痕がみられる。線状痕は磨耗痕の分布範囲と同じ範囲を中心に広がり、全てが長軸に平行する縦方向である。線状痕は長さ20mm以上と長く傷状に引っ掻いたようなものが多い。線状痕は磨耗の発達する先端部ではキズ状が少なく波状になり、先端部からやや離れたところでキズ状が多く分布する(9a・10a)。これは線状痕の集合が波状に発達していく過程を示しているとみられる。自然礫面上でも、礫面(自然風化面)と使用痕との違いが見分けられる(2・4)。裏面は表面よりも磨耗の分布が小さい傾向にあるが、ほぼ同程度のものもある(3・5・6・9・10)。特に撥形のうち大型品(9・10)は、表裏面の磨耗痕の分布範囲がほぼ同じで、裏面の胴部の一部に磨耗痕がある点でも他の打製石斧とは異

表 8 観察石器一覧表

| | Sale at C. | | | | E 1: | 100 | rest No. | | | |
|----|------------|------------------|------|----------|------------|-----------|------------|-----|---------|---|
| 番号 | 遺物 番号 | 出土遺構 | 器種 | 形態 | 長さ (mm) | 幅 (nn) | 厚さ (mm) | 石質 | 刃部 角 | 使用痕 |
| 1 | 石131 | 流路状遺構 18-1215 | 打製石斧 | 短冊形 | 150 | 55 | 10 | 粘板岩 | 45 | 表面: U字状。刃先より22mm磨耗・線状痕。胴部頭部やや磨耗。 裏面: U字状。刃先より7mm磨耗・線状痕。 |
| 2 | 石126 | 流路状遺構 18-1215 | 打製石斧 | 短冊形 | 138 | 50 | 13 | 粘板岩 | 75 | 表面:U字状。刃先より45mm磨耗・線状痕。胴部やや磨耗。 裏面:刃先より12mm磨耗・線状痕。 |
| 3 | 石132 | 流路状遺構 18-1215 | 打製石斧 | 短冊形 | 139 | 53 | 15 | 粘板岩 | 75 | 表面:U字状。刃先より38mm磨耗・線状痕。 裏面:U字状。刃先より30mm磨耗・線状痕。 |
| 4 | 石133 | 流路状遺構 19-1155 | 打製石斧 | 短冊形 | 141 | 51 | 14 | 粘板岩 | 70 | 表面: U字状。刃先より22㎜磨耗・線状痕。胴部やや磨耗。 裏面: 刃先より5㎜磨耗。 |
| 5 | 石130 | 遺物包含層 | 打製石斧 | 短冊形 | 123 | 48 | 13 | 粘板岩 | 45 | 表面: U字状。刃先より27mm磨耗・線状痕。胴部やや磨耗・線状痕。 裏面: 刃先より25mm磨耗・線状痕。 |
| 6 | 石134 | 流路状遺構 18-1215 | 打製石斧 | 短冊形 | (77) | 40 | 10 | 粘板岩 | 60 | 表面: U字状。刃先より24mm磨耗・線状痕。胴部やや磨耗。 裏面: U字状。刃先より21mm磨耗・線状痕。 |
| 7 | 石124 | 流路状遺構 18-1215 | 打製石斧 | 短冊形 | 92 | 38 | 10 | 粘板岩 | 35 | 表面: U字状。刃先より2mm磨耗。胴部・胴部頭部やや磨耗。 裏面: 刃先より31mm磨耗・線状痕。 |
| 8 | 石125 | 流路状遺構 19-1155 | 打製石斧 | 短冊形 | 112 | 40 | 12 | 粘板岩 | 70 | 表面:U字状。刃先より33㎜磨耗・線状痕。 裏面:U字状。刃先より12㎜磨耗・線状痕。胴部やや磨耗。 |
| 9 | 石129 | 流路状遺構 19-1155 | 打製石斧 | やや開く撥形 | 108 | 49 | 15 | 粘板岩 | 70 | 表面:U字状。刃先より21㎜磨耗・線状痕。胴部・頭部やや磨耗。 裏面:U字状。刃先より18㎜磨耗・線状痕。 |
| 10 | 石127 | 流路状遺構 18-1215 | 打製石斧 | やや開く撥形 | 165 | 56 | 13 | 粘板岩 | 90 | 表面: U字状。刃先より35㎜磨耗・線状痕。 裏面: U字状。刃先より30㎜磨耗・線状痕。胴部一部磨耗。 |
| 11 | 石138 | 流路状遺構 19-1155 | 大型刃器 | 大型 (楕円形) | 135 | 43 | 12 | 粘板岩 | 45 | 直刃、表面:刃部磨耗痕長85mm。刃先より最大 5 mm磨耗。端部先端磨耗。 裏面:刃先より最大 1 mm磨耗、端部刃先より20mm磨耗。 |
| 12 | 石139 | 遺物包含層 | 大型刃器 | 大型(長方形) | 100 | 42 | 15 | 粘板岩 | 55 | 外湾刃、表面:刃部磨耗痕長99mm、刃先より最大5mm弧状に磨耗。 裏面:刃先より最大10mm弧状に磨耗。 |
| 13 | 石140 | 遺物包含層 | 大型刃器 | 大型(長方形) | (101) | 39 | 8 | 粘板岩 | 45 | 内湾刃、表面:刃部磨耗痕長85mm、刃先より1mm磨耗。 裏面:刃先より最大7mm弧状に磨耗。 |
| 14 | 石141 | 竪穴住居 16-3223 | 大型刃器 | 大型(長方形) | (113) | 41 | 9 | 粘板岩 | 55 | 直刃、表面: 刃部磨耗痕長67mm残存、刃先より最大8mm磨耗。刃部右側の 方が発達。裏面: 欠損により不明。 |
| 15 | 石142 | 竪穴住居 16-149 | 大型刃器 | 大型(長方形) | 146 | 53 | 11 | 粘板岩 | 45 | 直刃、表面: 刃部磨耗痕長128mm、刃先より最大13mm弧状に磨耗。磨耗部 は変色。裏面: 欠損により不明。 |
| 16 | 石143 | 流路状遺構 18-1215 | 大型刃器 | 大型 (楕円形) | 128 | 63 | 13 | 粘板岩 | 50 | 直刃、表面: 刃部磨耗痕長50mm、刃先のみ磨耗。刃部左側は敲打による刃 つぶし。裏面: 刃先より5mm磨耗。 |
| 17 | 石144 | 流路状遺構 19-1155 | 大型刃器 | 小型(半円形) | 72 | 41 | 8 | 粘板岩 | 20 | 外湾刃+直刃、表面:刃部磨耗痕長55mm(直刃部)・55mm(外湾部)。刃先より5mm(直刃部)・10mm(外湾部)磨耗。 裏面:刃先より1mm(直刃部)・10mm(外湾部)磨耗。 |
| 18 | 石137 | 流路状遺構 19-1155 | 大型刃器 | 小型(楕円形) | 85 | 36 | 6 | 粘板岩 | 35 | 外湾刃、表面: 刃部磨耗痕長66mm残存、刃先より最大14mm磨耗。 裏面: 刃先より最大8mm磨耗。全面的にやや磨耗。 |
| 19 | 石145 | 流路状遺構 18-1215 | 大型刃器 | 細形 (鎌状) | (110) | 41 | 9 | 粘板岩 | 45 | 内湾刃、表面:刃部磨耗痕長108mm残存、刃先より7mm磨耗。 裏面:刃先より最大3mm磨耗。 |
| 20 | 石146 | 流路状遺構 19-1155 | 大型刃器 | 細形(鎌状) | 134 | 35 | 9 | 粘板岩 | 35 | 内湾刃、表面:刃部磨耗痕長83mm、刃先より最大8mm弧状に磨耗。 裏面:刃先より最大1mm磨耗。 |
| 21 | 石182 | 流路状遺構 18-1215 | 磨石 | 楕円礫 | | _ | | 砂岩質 | | : 綾をもつ磨耗面を形成。硬質鉱物が平滑に磨耗。平滑部に点状の光沢。 : 使用痕無 |
| 22 | 石176 | 竪穴住居 16-3175 | 磨石 | 楕円礫 | | _ | | 深成岩 | | : 稜をもつ磨耗面を形成。硬質鉱物が平滑に磨耗。平滑部に点状の光沢。 : 使用痕無 |
| 23 | 石196 | 流路状遺構 19-1155 | 磨石 | 楕円礫 | | _ | | 深成岩 | られ | : 中央部に敲打により鉱物の欠損・剥落が集中、敲打痕は線状。これらに切るように磨耗面が広がる。平滑に磨耗し、不定方向の短い線状痕。光沢無。 : 使用痕無 |
| 24 | 石207 | 流路状遺構 19-1155 | 石皿 | 扁平 | | _ | | 深成岩 | | : 磨耗部は変色。硬質鉱物の高所が丸みを帯びる。高所に点状の光沢。 : 使用痕無 |

^()内は残存値

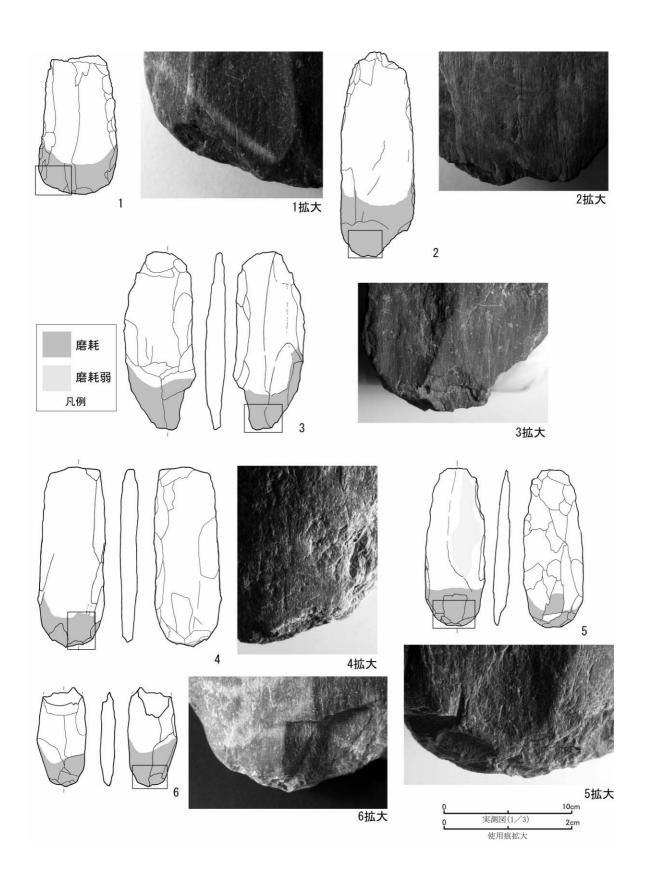


図66 打製石斧使用痕 1

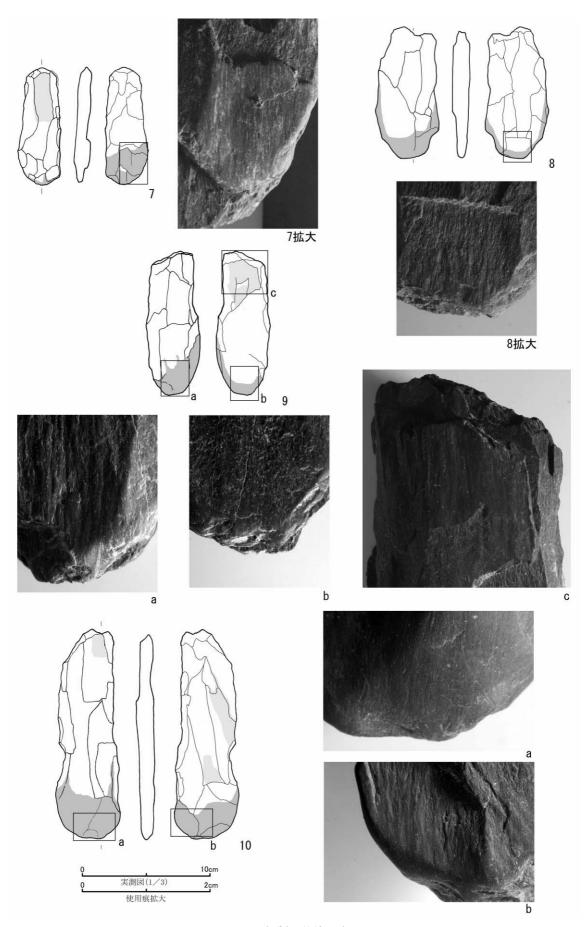


図67 打製石斧使用痕 2

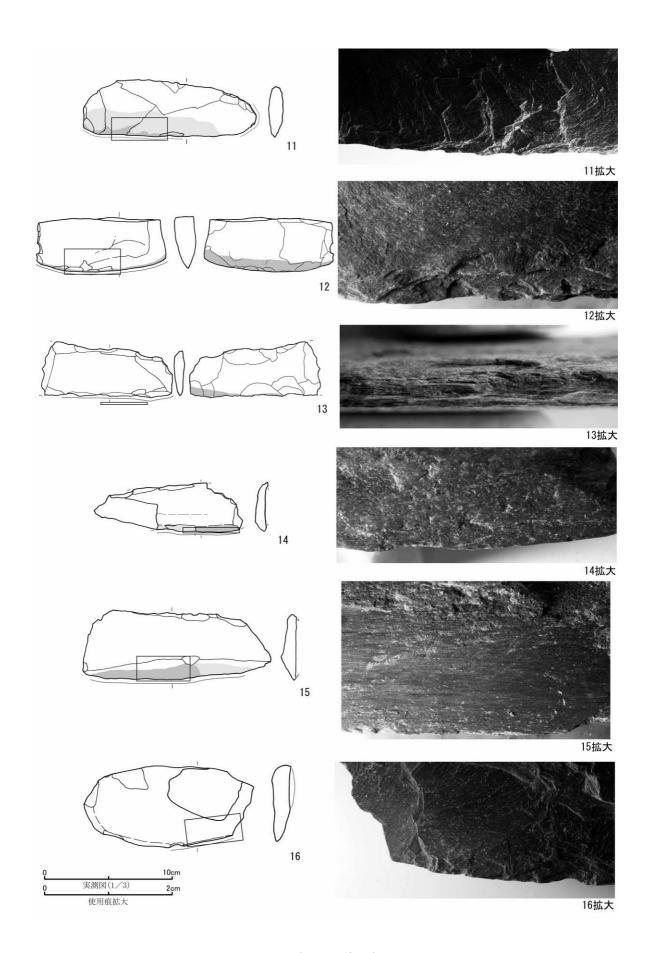


図68 大型刃器使用痕 1

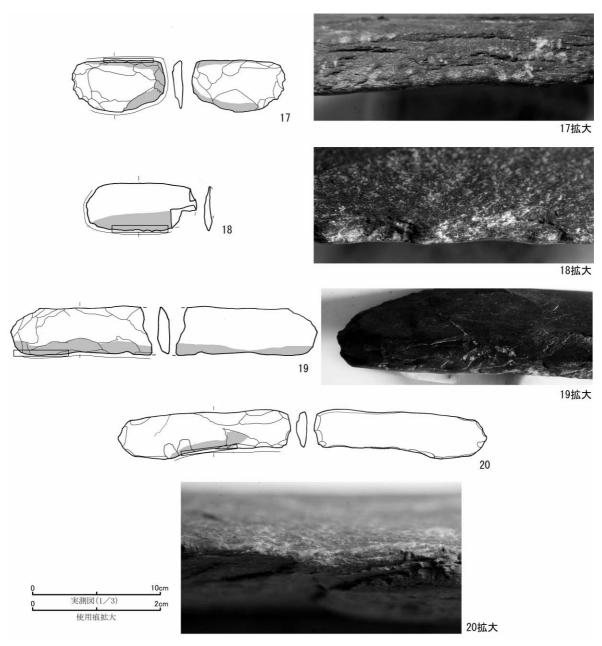


図69 大型刃器使用痕2

なる傾向を示す。

表面の胴部や頭部の一部にも磨耗痕が認められる(5・7・9・10)。この磨耗痕は、先端部の磨耗に比べ平滑でなく、礫面の凹凸を残しやや粗い(9c)。磨耗の発達が弱いことに関連して線状痕の観察できる資料も少ない。胴部の磨耗痕の分布は面の高所を中心に稜線上に認められる。また頭部の磨耗痕は端部の稜が丸みを帯びる程度で、U字状に分布しない。また胴部の磨耗とは連結しないことから、頭部と胴部の磨耗痕の形成要因は別々であったとみられる。胴部側辺には磨耗痕はなかった。

大型刃器(大型、11~16) 刃部の平面形状は直刃・内湾刃、刃部角は45度前後が多く、刃部角が打製石斧よりも小さく鋭い。磨耗痕は、長辺の刃部中央を中心に長弧状に広がる。刃部の磨耗痕の長さは80mm以上で一側辺全体に及ぶ。深さは刃先から1~13mmで、裏面よりも表面のほう

が広い。刃先は他部位よりも剥離面の稜の丸みが強く、エッジが緩やかになっている。磨耗面は石材の粒子が平滑になっているが、礫面やリングの凹凸が残っていることから、打製石斧に比べ発達程度が弱いとみられる。線状痕も弱くほとんど観察できない。ただし15のように、磨耗痕が比較的広いものには長軸に並行する線状痕が認められる。この線状痕は打製石斧より細く短い。また磨耗痕の発達程度に差がみられる場合もある。11・14・15の磨耗痕には、粒子の高所は丸みを帯びるものの、平滑な面にはなっていない発達程度の弱い部分ある。発達程度の弱い磨耗痕は磨耗部を取り巻くように分布するもの(11)、刃部中央よりやや離れた部分に分布するもの(14・15)がある。なお15の刃部は変色している。変色は礫の色より黒色化しており、付着物のような厚みはなく、石材に染みこむようである。刃縁からやや離れた部分に刃縁方向に沿ってのびる。16は刃部左半を刃つぶししている。

大型刃器(小型、17・18) 刃部の平面形状は直刃・外湾刃、刃部角は20~35度で先に述べた 大型のものより鋭利である。刃部は左右側辺のどちらかを巡っている。磨耗痕の深さは外湾する 刃部中央で刃先から最大14mm(18)である。大型と同様、刃先は他部位よりも剥離面の稜の丸み が強く、エッジが緩やかになっている(17・18拡大)。線状痕は確認できない。刃部の磨耗痕の

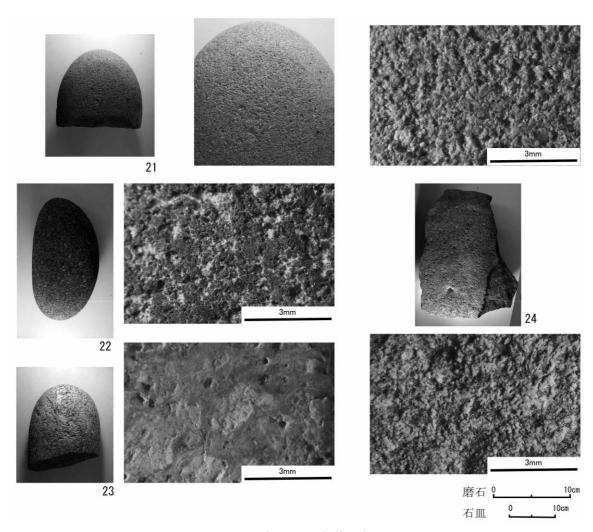


図70 磨石・石皿類使用痕

広がりは表裏面双方同程度である。

大型刃器(細形、19・20) 刃部の平面形状は内湾刃である。ただしこれらの内湾刃は磨耗の程度から使用の結果であり、使用当初は直刃だったとみられる。刃部角は35・45度で、大型刃器(大型)と同じ傾向をもつ。刃部の磨耗痕は長さ80mm以上である。磨耗痕は刃部中央から弧状に広がる。その範囲は裏面よりも表面のほうが広く、また磨耗痕の発達程度の違いが認められる。磨耗痕の深さは刃先から最大8mmである。磨耗痕は剥離面の稜や高所で発達し、刃先は丸みを帯びる。線状痕はない。

2)磨石・石皿類の使用痕(図70-21~24)

磨石には表面に稜を伴う平坦面をもつもの(21)と平坦面はないが他部位に比べ磨耗痕のみをもつもの(22・23)がある。平坦面をもつものは砂岩や安山岩に多く、磨耗痕のみをもつものは花崗岩質の硬質な岩石に多い。したがって、平坦面の形成は石質に左右されているとみられる。拡大すると平坦面は水平ではなく、中央部を頂点に長軸方向へ緩やかに傾斜する。傾斜方向は長軸に平行ではなくやや左右へ斜行する。磨耗痕は鉱物の高所が平滑になり、脱落も多い。明瞭な線状痕や光沢面は認められない。磨耗痕のみをもつものは、岩石中の主体である基質が広範囲で平滑になっている。細く短いキズ状の線状痕(23拡大)が認められたが、複数が同じ方向を向くような傾向はなく、使用時に形成された線状痕なのかは不明である。24の石皿は、板状の平坦な素材がそのまま使用されており、成形されていない。使用痕は磨耗痕が広範囲に均一的に広がっている。磨耗痕を拡大すると硬質鉱物の高所が平滑でその間の軟質鉱物が脱落している(24拡大)。

3)磨石・石皿類の残存デンプン分析

分析の結果、7点の資料から11点のデンプンを確認した(図71-1-11)。大きさは長径11-29 μ mで平均16 μ mである。外形は円形が5点と最も多く、続いて多角形が3点である。確認したデンプンは、大きさと形状から A タイプに該当する平均長径13 μ mの円形~長楕円形、 A タイプに該当する長径20 μ m以上の大型の短楕円形、 C タイプに該当する平均長径13 μ mの多角形、に三区分できる(渋谷2010b)。図71のうち、2 は隅丸三角形に近く、6 は二つの角があり釣鐘状を呈す。11は他に比べ突出して大きい。

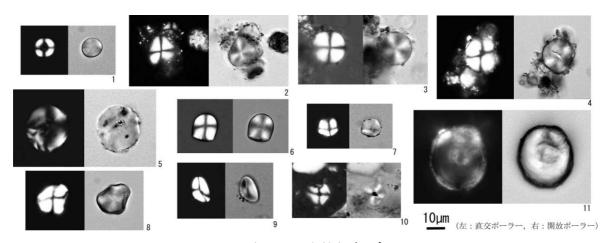


図71 磨石・石皿類検出デンプン

表 9 検出デンプン観察表

| 番号 | 遺物番号 | 器種 | 形状 | 渋谷分類 | 長径 (µm) | 短径 (μm) | 備考 |
|----|------|----|---------|------|---------|---------|---------------|
| 1 | 石175 | 磨石 | 円形 | ΑII | 11 | 10 | 中央部分解、裂け |
| 2 | 石175 | 磨石 | 円形 | ΑII | 15 | 14 | 同形状の小デンプン2点付着 |
| 3 | 石199 | 磨石 | 円形 | ΑII | 16 | 16 | |
| 4 | 石199 | 磨石 | 円形 | ΑII | 16 | 15 | 同形状の小デンプン3点付着 |
| 5 | 石199 | 磨石 | 短楕円形 | ΑШ | 22 | 20 | |
| 6 | 石180 | 磨石 | 円形(釣鐘状) | ΑII | 14 | 13 | |
| 7 | 石178 | 磨石 | 多角形 | CII | 11 | 9 | |
| 8 | 石182 | 磨石 | 多角形 | CII | 18 | 15 | |
| 9 | 石182 | 磨石 | 長楕円形 | ΑII | 13 | 9 | |
| 10 | 石207 | 石皿 | 多角形 | СП | 11 | 11 | 中央部分解 |
| 11 | 石196 | 磨石 | 短楕円形 | AⅢ | 29 | 26 | 中央部凹み |

(4)考察

上里遺跡出土大型剥片石器と磨石・石皿類の使用痕分析を行った結果、器種・形態・使用痕との相関性が認められた。また磨石・石皿類の残存デンプン分析を行った結果、残存デンプンを検出することができた。以下、近年の分析結果との比較を行いながら、上里遺跡出土大型剥片石器、磨石・石皿類の位置づけを考えてみたい。

1)本遺跡出土打製石斧の使用痕の特徴

まず打製石斧について、概して中部高地と比較すると半月形で刃部の左右どちらかが磨耗する偏刃が少ない。線状痕の方向が一定していることもふまえると、長軸に対して真っすぐに突き刺していたことが想定される。また晩期後半に一定量みられる長さ20cm以上の大型品は分析資料にはほとんどなかった。刃部の磨耗痕や線状痕は、複製石器の使用実験例との比較から土掘り具の特徴をもっている。特にU字状の磨耗痕分布から少なくとも深さ5cm以上の掘削が想定される。着柄の有無については頭部・胴部の磨耗痕だけなので不明だが、左右両側辺の磨耗が少ないことから、この部分への摩擦は弱く、頭部・胴部への摩擦や圧力が想定される。

次に、同時期の良好な分析事例が少なく今後の資料増加が待たれるが、打製石斧出土遺跡との 比較によって、本資料との共通点と差異点を見出したい。ここでは周辺地域で有効な分析が行わ れている後期中葉縁帯文期の桑飼下遺跡例を挙げたい(鈴木1975)。

両遺跡とも打製石斧の石質は緻密な板状素材である粘板岩を使用している点で共通する。大きさは桑飼下遺跡で長さ10~14cm、幅4~6cm、厚さ1~2.5cmが主体であり、上里遺跡とほぼ同じである。磨耗痕は両遺跡とも刃部でU字状を呈し、表面胴部中央では稜部や高所に分布する。また磨耗痕の左右側辺の広がりや刃先からの深さ、表裏面の分布の違いも類似する。土掘り具として想定した場合、上里遺跡の対象物は砂礫層をベースとした砂質土によって充填される土壌であり、桑飼下遺跡と類似する。したがって磨耗痕の発達する打製石斧が多い点は、石質や対象土壌との関連性がうかがえる。ただし、桑飼下遺跡例では「擦痕」として短軸方向に平行する線状痕(Y擦痕)が類型化されているが、本分析ではこれらに該当する明瞭な資料は見出せなかった。

したがって、着柄については検討課題となろう。

2)本遺跡出土大型刃器の使用痕の特徴

大型刃器については、打製石斧とは異なる磨耗痕の分布を示した。また全体的に磨耗痕・線状痕ともに打製石斧よりも発達程度が弱い。大きさ・形状によって三区分されたが、このうち刃部角の鋭い小型のものが磨耗の分布範囲が表裏面とも刃先より奥へ伸びる傾向があった。一方で大型や細形のものの刃部角はやや鈍く、磨耗面の範囲が裏面よりも表面で発達する傾向があった。よって、大型刃器のなかでも、大きさ・形状によって機能・用途が異なっていたとみられる。なお、線状痕は大型1点で長軸に平行する線状痕が認められた。このことから、大型刃器のうち大型のものに関しては、長軸方向と同じ方向に動かすことによって対象物を「切る」機能が想定できる。特に刃部磨耗痕の長さから、7㎝前後のものが対象となっていたと考えられる。

3) 大型剥片石器のまとめ-近年の動向に関して-

さて、近年打製石斧と横刃型石器に関しては、風化浸食痕との区別が問題点として提起されている(板倉2007)。また板倉2007では双方の区分基準として刃部の位置(使用痕)・成形・サイズ・石材の違いが示されている。本分析の結果、他事例の増加を待つ必要もあるが、刃部の位置(使用痕)・サイズ・石材の面で板倉氏の意見と大きく異なる結果を得た。

厚さ (cm) 地域 遺跡名 時期 石材 標本数 文献 平均 最小 最大 石英安山岩・ 2.46 1.2 4.4 81 凝灰岩主体 石川 東市瀬 中期後半 『金沢市東市瀬遺跡』金沢市教育委員会 1985 頁岩・泥岩 1.98 0.9 4.0 11 後期前葉~ 『鳴鹿手島遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査 鳴鹿手島 石英安山岩主体 1.76 福井 0.8 3.1 81 中華 **センター 1988** カクシクレ 後期中葉~ 『カクシクレ遺跡』岐阜県文化財保護センター 凝灰岩 2.09 0.9 3.5 73 C地点 後葉 岐阜 凝灰岩 2.59 1.1 4.1 73 後期中葉~ 『西田遺跡』岐阜県文化財保護センター 1997 西田 晚期 緑色片岩 1.40 0.6 41 『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター1991 麻生田大橋 粘板岩系主体 愛知 晩期 1.68 1.0 29 52 砂岩 1.96 1.3 2.4 3 『小川原遺跡3』滋賀県教育委員会文化財保護課 滋賀 小川原 後期中葉 滋賀県文化財保護協会 1996 フォルンフェルス 1.63 09 3.8 25 上里 晩期 粘板岩 1.30 1.0 1.5 10 本分析結果 粘板岩 1.53 0.7 2.9 120 凝灰岩 1.69 0.7 2.7 112 『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館 1975 桑飼下 後期中葉 泥質砂岩 1.81 0.9 3.4 41 結晶片岩 1.46 1.7 5 1.1 京都 砂岩 3.50 1 流紋岩 2.30 2.1 2.5 2 『目久美遺跡』加茂川改良工事関係埋蔵文化財 目久美 前・中期 結晶片岩 2.20 1 発掘調查団 米子市教育委員会 1986 泥板岩 3 1.30 1.0 1.9 百岩 1.0 1.7 5 0.9 3 安山岩 4.00 1.4 ホルンフェルス 1.30 0.6 1.9 7 『津島岡大遺跡』岡山大学埋蔵文化財調査研究 岡山 津島岡大第 後 · 晚期 センター 1994 シルト岩 1.10 1 泥質片岩 0.80 2

表10 打製石斧の厚さと石材との関係

岩石名は、報告書に従い統一していない。

前提として、上里遺跡では、刃部の位置(使用痕)に風化浸食痕は認められなかった。製作以前に風化浸食痕が形成された場合、製作時の剥離によりなくなるはずである。また製作後に形成された場合、土石流や水流の影響が遺物分布や他の資料にも認められるはずである。しかし、磨石・石皿類などの他器種だけでなく同素材の石製品・剥片にもそうした強い水流の痕跡はないうえに、使用痕の確認された資料も砂礫層や溝など水流の影響を受けるような場所に集中してみられる傾向はない。したがって、本分析で使用痕の分布やその特徴に規則性があることも加えると、観察された磨耗痕は使用痕であると断定できる。

次にサイズについてである。板倉論文では長軸11~20cm、短軸5~8cm、厚さ1~3cmを中心に分布する大型圧型を打製石斧の特徴とする。しかし、本分析では大型刃器のなかには小型や細形の類型が含まれるが、この小型を除けば、打製石斧と極端な差は認められず、サイズでは大型刃器と打製石斧を区分することはできない。特に短冊状の打製石斧は、大型刃器の大型のものとほぼ同じ大きさである。なお、本分析における大きさの分布は、中部高地の遺跡例でもほぼ同様の結果が得られるほか、関西・東海地域の典型的なサイズであり、むしろ板倉論文で示されるサイズは、後期中葉・晩期後葉に増加する特別なものである(瀬口2004)。

さらに板倉論文では石材の傾向について、「凝灰岩・砂岩が主体をしめる」一群を打製石斧、「泥岩・頁岩・粘板岩の亜円礫素材が主体をしめる一群を横刃型石器と認定できる」(板倉2007p44.16~18行目)と述べている。しかし、上里遺跡では打製石斧と大型刃器の石材のほとんどは粘板岩・頁岩であり、母岩に亜円礫素材も含まれる。また関東・中部高地例でも打製石斧には粘板岩・頁岩などの板状素材が多用されている(上條2006)。板倉論文では粘板岩製の薄い打製石斧は、そもそも使用に耐えないことを指摘しているが、本分析で得られた打製石斧の厚さ平均は1.3cmであり、板倉論文では薄いとされる厚さである。

そこで、他遺跡の打製石斧の石材と厚さとの関係をまとめてみた(表10)。北陸の遺跡などでは砂岩・凝灰岩・石英安山岩主体の場合が多く、東海・近畿ではフォルンフェルス・粘板岩・片岩系の板状節理を持つ素材の場合が多い。これは遺跡周辺の石材環境に起因している。厚さをみると砂岩・凝灰岩・石英安山岩では2cm前後と厚く、フォルンフェルス・粘板岩・片岩系では1.5cm前後と薄い。この傾向は桑飼下遺跡のような双方の石材が採取可能な遺跡では、石材差と厚さが相関する。また形態差による厚さの違いはほとんどなく、時期的な厚さの変化も小さい。したがって、打製石斧の厚さの違いは主に石質に起因しているのであり、機能差を反映しているのではないと考えられる。むしろ、砂岩系と粘板岩系の双方の石材が得られる場合、粘板岩や片岩などの板状素材が使用されることが多く、打製石斧に適した石材とみることもできる。また使用痕分析の結果では、地面に対し垂直方向からの突き刺しによる、ある程度の深さまでの掘削が想定された。実験例をふまえてもこの範囲の作業ならば十分使用に耐えうるとみられる。

本分析の結果における、外形以外に見出された打製石斧と大型刃器との使用痕の違いは、これまでにも指摘されてきた刃部角および使用痕の分布とその特徴である。打製石斧は磨耗の進行の速さとも関連して刃部角が45度以上になる一方、大型刃器は切断を目的とするためそれよりも鋭

利である。また打製石斧の使用痕は刃部にU字状の磨耗痕をもち、その内部に長軸に平行する線 状痕がある。線状痕は比較的長いもので、キズ状からそれが発達した波状まである。これは磨耗 痕の発達程度と相関する。

一方、大型刃器は長辺を刃部とする磨耗痕の範囲が狭いものが主体である。磨耗痕は弧状を呈し、長軸に平行する細く短い線状痕が認められる場合もある。この線状痕はかなり小さいため、高倍率による観察(総合倍率200倍前後)が有効である。本分析では石質の影響によって、観察することができなかったが、石質の異なる資料において、顕微鏡下で光沢や線状痕が確認されるとみられる。線状痕や磨耗痕の発達過程については実験でも確認されており、土壌の場合は鉱物どうしの擦れ合いとなるため線状痕が発達しやすいが、植物や肉類などの軟質物の場合は発達しにくい。さらに、形状、磨耗痕の分布・特徴にいくつかのまとまりがみられることから、大型刃器のなかでも機能・用途の違いがあったと推定される。また本分析では触れられなかったが、製作時の痕跡として両極打撃法の有無が挙げられる。これについて今後の観察が期待される。

このように、打製石斧と大型刃器は刃部の位置だけでなく、使用痕の形状・分布・特徴を捉えることによってより具体的な違いが明確になる。これに高倍率法の使用痕観察を加えることによって、各器種のなかにおける機能・用途の違いも明らかになると考えられる。現在問題視されている桑飼下遺跡の分析結果は、本分析の使用痕分析の結果からでは、従来の報告書における分析結果を支持している。ただし、晩期の上里遺跡例には後期中葉の桑飼下遺跡例とは異なる部分もいくつかあった。それは、大型刃器が桑飼下遺跡では少なく本遺跡では比較的多い点、胴部下半部の短軸方向に平行する線状痕(Y擦痕)は桑飼下遺跡ではみられたが本分析では確認できなかった点である。これらの要因が今後課題なってこよう。

4)磨石・石皿類について-使用痕と残存デンプン分析-

使用痕分析の結果、磨石・石皿類に共通する使用痕の特徴が明らかになった。その特徴とは硬質鉱物が平滑で脱落も多く、光沢面や一定方向に動かしたことを示すような線状痕が認められないことである。これは、平坦面の形成程度に関わらず、磨石・石皿双方でみられた。また平坦面の形成程度の差は石材の硬さが関連しているとみられる。なお、このような特徴を有する磨石・石皿が検出される遺跡は、西日本では縄文時代中期後半に増加しはじめ、後期前葉に最多となり、後期後葉になると減少しはじめる。したがって、分析に用いた磨耗痕の顕著な磨石は中期後半以降の技術系列のなかにおいて位置づけができると考えられる。ただし、このような磨石は、本遺跡磨石・敲石類全体のなかでは少ない。この点は、後期後葉以降の減少傾向に加え、打製石斧多出遺跡では磨耗痕を持つ磨石が減少するという中・四国の状況に類似する。

残存デンプン分析の結果ではデンプンが検出されたことにより、分析資料が植物質食料加工具である可能性が高くなった。デンプンが検出された資料は全てに表面に磨耗痕が認められ、敲打痕や敲打集中痕(凹み)の有無とは相関しないことから、デンプンの検出と磨耗痕の存在に相関性があるのではないかと考えられる。周辺遺跡の分析例と比較すると(渋谷2010a)、大阪府更良岡山遺跡(後~晩期)では、A タイプ、なかでも特に長楕円状が多く、A ・B タイプが続く。

円形に近いA ・A ・C タイプが多い本分析とは明らかに傾向が異なる。ただし図71 - 9 は、 更良岡山遺跡で最も多く検出された長楕円状のA タイプに類似する。

兵庫県佃遺跡(後期後半~晩期前半)では、B タイプが最も多く、A ・A ・C タイプが続く。特に滋賀里 a・篠原式期に該当する石皿からはC ・C タイプが検出されている。B タイプが多い点では異なるが、検出されたタイプの傾向は類似する。特に晩期の石皿からC タイプが検出された点は本分析と一致する。また釣鐘状の図71 - 6 はB タイプに近い。なお、佃遺跡出土磨石・石皿類の使用痕分析の結果も本遺跡例に類似している。したがって、検出デンプンのタイプの多さから佃遺跡例でも考察されているような比較的広範囲な対象物が想定される。ただし、デンプン分析についてはまだ緒についたばかりの研究法であり課題も多く、本分析で得られたデンプンも少量であることから、遺跡の植物採集活動の復元までには、今後良好な遺跡との比較が必要となってこよう。

註

1) 大型刃器の定義および計測部位・呼称は町田2002による。「横刃型石器」の呼称については収穫具や石包丁との系統性など機能・用途を前提とした議論を含み、使用痕の観察に重点を置いた本分析にはなじまないため用いていない。

参考文献

板倉雄大 2007「打製石斧と横刃型石器の器種認定」『考古学研究』53-4 pp.37-55

上條信彦 2006「松本盆地南部における石器石材の流通」『長野県考古学会誌』118 長野県考古学会pp.83-103

久保浩一郎・鈴木忠司「打製石斧の使用実験 - 機能・用途復元に向けての予察」『朱雀』21 京都文化博物館 pp.37 - 50

渋谷綾子 2007「佃遺跡・更良岡山遺跡の石皿および三宅西遺跡の土器付着物における残存デンプン」 『古代文化』59-2 古代学協会 pp.116-126

渋谷綾子 2010a『日本の先史時代における植物性食料の加工と利用:残存デンプン分析法の理論と応用』 総合研究大学院大学提出博士論文

渋谷綾子 2010b「日本列島における現生デンプン粒標本と日本考古学研究への応用 残存デンプン粒の 形態分類をめざして」『植生史研究』18-1 pp.13-27

鈴木忠司 1975「打製石斧」『桑飼下遺跡発掘調査報告書(渡辺誠 編)』平安博物館 pp.149-190

瀬口眞司 2004「関西地方における縄文後晩期の打製石斧 - 諸傾向の地域的差異と時間的推移」『縄文時代の石器 - 関西の縄文後期・晩期 - 』関西縄文文化研究会 pp.55 - 64

町田勝則 2002 「『刃器』研究に向けて」『環瀬戸内海の考古学 - 平井勝氏追悼論文集 - 』 pp.153-172 Fullager, R.2006.Starch on artifacts. Ancient Starch Research. (R.Torrence, H.Barton eds.), pp.177-203

3 放射性炭素年代測定値について

- 放射性炭素年代測定によるマメ・イネの年代齟齬について -

辻本裕也(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

上里遺跡18・19次調査で検出された縄文時代晩期の流路(流路状遺構18-1215・19-1155)充 填堆積物中の人為的堆積物からは縄文時代晩期前半の滋賀里 式から篠原式期の土器とともに、多量の炭化材・種実が出土している。このうち炭化種実には、栽培種ないしその可能性があるマメ類種子やイネ胚乳が認められている(第5章第5節参照)。これら炭化種実の産出は縄文時代の生業活動を考える上で重要であり、放射性炭素年代測定による年代学的検証を行った(京市研2008・2010)。その結果、炭化マメ類種子と炭化イネ胚乳で年代値が異なり、炭化マメ類種子は縄文時代晩期前半、炭化イネ胚乳は縄文時代晩期末から弥生時代前期頃の年代値が得られている。本節では、この年代値の齟齬について、調査区で実施した堆積層の微細形態学的検討や植物珪酸体分析による検討結果に基づいて複合的に検討する。なお、本文において表記する年代値は、補正年代値と括弧内に暦年較正年代値(2 の計算結果のうち、確率1位のデータ)である。

(1) 上里遺跡で得られている放射性炭素年代測定値について

上里遺跡で行った年代測定の実施地点・層準を図72、測定結果および暦年較正結果を表11・12、図73に示す。以下に示すように、縄文時代晩期前半頃に形成された、流路内の人為的堆積物から産出した炭化マメ類種子の年代値は誤差範囲内でほぼ一致する年代値を示している。これに対して、炭化イネ胚乳の年代値は炭化マメ類種子よりも400~500年程度新しく、かつ年代値のバラツキが大きいことが認識される。

炭化マメ類種子 2940±31yBP (cal BC 1264-1041年) ~ 2860±25yBP (cal BC 1115-974年) 炭化イネ胚乳 2562±30 yBP (cal BC 804-747年) ~ 2365±25yBP (cal BC 511-391年)

一方、流路を充填する堆積物中、流水の影響下で形成された10層、縄文時代晩期前半の遺物を 包含する土壌生成がみとめられる5層、増水ないし氾濫時の堆積物である4・3層、3層を母材 とする土壌生成がみとめられる弥生時代前期の遺物を包含する2層の各層の炭化材の示す年代値 は次の通りである。

10層 2950±31yBP (cal BC 1269-1049年)・2933±31yBP (cal BC 1222-1038年)

5層 2890 ± 30yBP (cal BC 1134-977年)

4・3層 3041±31yBP (cal BC 1407-1252年)・2923±31yBP (cal BC 1134-977年)

2層 2823±31yBP (cal BC 1056-900年)

このように流路を充填する堆積物中の炭化材の年代値は、4・3層で多少逆転するものの、10層から2層にかけて新しくなる傾向が確認される。一方、2層上面で検出される弥生時代前期新

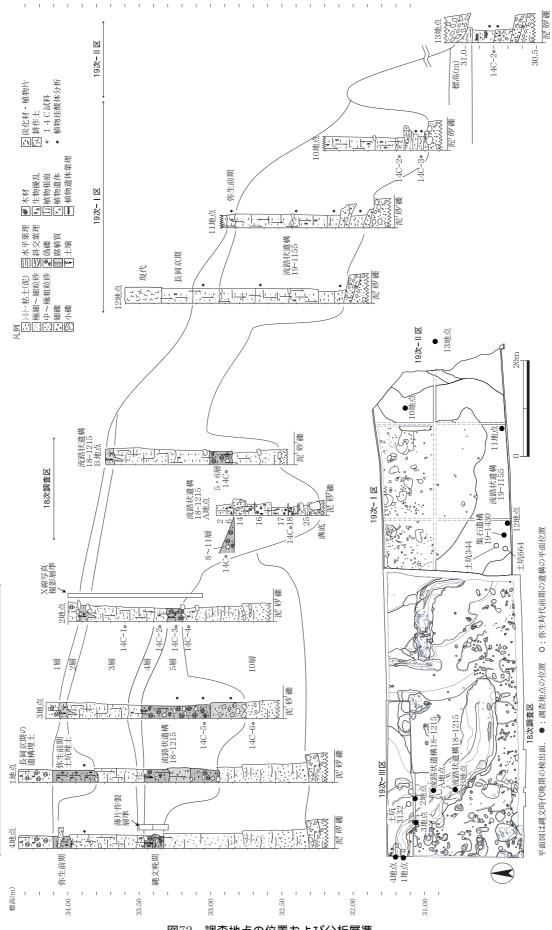


図72 調査地点の位置および分析層準

19次-||区

表11 放射性炭素年代測定および暦年較正結果表1

| 地点名 | 試料名・層位 | 性状 | 測定年代 (BP) | 和本 | ı | | | 01 F | | 年較正 | E年代 | (cal |) | aclDD | | 40-41 U | Code No. | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-------------------|----------------------|---------------|------------|------------|----------------|----------------|------------|------------|--------------|----------------|------------|---------------------|----------------|--------------------|--|-------------------------|-----------------|--|-----|----|-------|-----|----|-------|--|--|--------|
| | | | (LM.) | 誤差 | cal | ВС | 1,207 | al.E - | | ВС | 1,204 | cal | BP | calBP 3,156 | - 3,153 | 相対比 | 1 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | BC | 1,195 | | cal | BC | 1,140 | cal | BP | 3,144 | | 0.455 | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 流路状遺構 | fセクション | 炭化種子 | | σ | cal | ВС | 1,134 | - | cal | BC | 1,108 | cal | BP | 3,083 | - 3,057 | 0.219 | IAAA- | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 | 5・6層 (77) | マメ | 2929 ± 30 | | cal | BC | 1,104 | | cal | BC | 1,071 | cal | BP | 3,053 | | 0.235 | 91138 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | (11) | | | - | cal | BC BC | 1,066 | | cal cal | BC BC | 1,056 | cal | BP BP | 3,015 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 2 σ | cal | ВС | 1,217 | | cal | BC | 1,023 | cal | BP | 3,166 | | 0.932 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | ВС | 1,187 | - | cal | ВС | 1,183 | cal | BP | 3,136 | - 3,132 | 0.032 | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | file has a second | | | σ | cal | BC | 1,153 | | cal | BC | 1,146 | cal | BP | 3,102 | | 0.057 | PI D- | | | | | | | | | | | |
| 流路状遺構 | fセクション 5・6層 | 炭化種子 | 2915±20 | | cal | BC | 1,129 | | cal | BC | 1,052 | cal | BP | 3,078 | | 0.911 | PLD- 14737 | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 B地点 | (84) | マメ | | 2 σ | cal cal | BC BC | 1,208 1,196 | | cal cal | BC BC | 1,199 1,140 | cal cal | BP BP | 3,157 3,145 | | | 14/3/ | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | BC | 1,134 | | cal | BC | 1,020 | cal | BP | 3,083 | | 0.749 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | ВС | 799 | - | cal | ВС | 758 | cal | BP | 2,748 | - 2,707 | 0.570 | IAAA- | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | file has a second | | | σ | cal | ВС | 683 | - | cal | ВС | 670 | cal | BP | 2,632 | - 2,619 | 0.161 | | | | | | | | | | | | |
| 流路状遺構 | fセクション 5・6層 | 炭化種子 | 2562 ± 30 | | cal | BC | 804 | | cal | BC | 747 | cal | BP | | - 2,696 | 0.649 | | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 B地点 | (56) | イネ胚乳 | | 2 σ | cal | BC BC | 688 644 | | cal cal | BC BC | 665 588 | cal cal | BP BP | 2,637 2,593 | | | 91137 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | BC | 583 | | cal | BC | 554 | cal | BP | 2,532 | | 0 0.235 0 0.070 1 0.068 0 0.932 0 0.032 0 0.050 0 0.076 1 0.016 0 0.235 0 0.749 7 0.570 0 0.161 0 0.665 0 0.694 1 0.152 0 0.075 0 0.066 0 0.030 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.066 0 0.075 0 0.075 0 0.075 0 0.063 0 0.075 0 0.07 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | ВС | 731 | _ | cal | ВС | 691 | cal | BP | 2,680 | | 0.307 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | ВС | 660 | | cal | ВС | 651 | cal | BP | 2,609 | | | | | | | | | | | | | | |
| 10分割大口 | | | | σ | cal | ВС | 544 | | cal | BC | 486 | cal | BP | 2,493 | | | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 流路状遺構 | fセクション | 炭化種子 | 0445 90 | | cal | BC | 462 | | cal | BC | 450 | cal | BP | 2,411 | | | PLD- | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 | 5・6層 (84) | イネ胚乳 | 2445 ± 20 | | cal | BC BC | 441 749 | | cal cal | BC BC | 417 687 | cal cal | BP BP | 2,390 2,698 | | | 14738 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | | | | 2 σ | cal | ВС | 666 | | cal | BC | 643 | cal | BP | 2,615 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 20 | cal | BC | 592 | - | cal | BC | 577 | cal | BP | 2,541 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | ВС | 568 | | cal | BC | 410 | cal | BP | 2,517 | | | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | fセクション | HI 11.255 -> | | | cal | BC | 1,254 | | cal | BC | 1,239 | cal | BP | 3,203 | | | TA A A |
| 流路状遺構 18-1215 | 8~11層 | 炭化種子 マメ | 2940 ± 31 | σ | cal | BC BC | 1,214 1,098 | | cal cal | BC BC | 1,113 1,090 | cal cal | BP BP | 3,163 3,047 | | | IAAA- 91140 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | (141) | | | 2 σ | cal | BC | 1,264 | | cal | BC | 1,041 | cal | BP | 3,213 | | + | 1 | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | fセクション | - 単ル番ヱ | | σ | cal | ВС | 1,054 | - | cal | ВС | 980 | cal | BP | 3,003 | - 2,929 | 1.000 | DI D= | | | | | | | | | | | |
| 流路状遺構 18-1215 | 8~11層 (122) | 炭化種子 マメ | 2860 ± 20 | 2 σ | cal | BC | 1,115 | | cal | BC | 974 | cal | BP | 3,064 | | | PLD- 14739 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | (122) | | | | cal | BC BC | 956 1,122 | | cal cal | BC BC | 940 | cal cal | BP BP | 2,905 3,071 | | + | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 流路状遺構 | fセクション | 炭化種子 | | σ | cal cal | BC | 1,122 | | cal | BC | 1,039 | cal | BP | 2,982 | | | .028 PLD- .093 10283 | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 | 8~11層 | マメ | 2895±25 | 2 σ | cal | ВС | 1,193 | | cal | ВС | 1,143 | cal | BP | 3,142 | | | | | | | | | | | | | | |
| B地点 | | | | 20 | cal | ВС | 1,132 | - | cal | ВС | 1,003 | cal | BP | 3,081 | - 2,952 | 0.907 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | BC | 751 | | cal | BC | 686 | cal | BP | 2,700 | | | 0.146 | | | | | | | | | | | |
| | | | | σ | cal | BC BC | 667 619 | | cal cal | BC BC | 638 615 | cal cal | BP BP | 2,616 2,568 | - 2,587 - 2,564 | | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 流路状遺構 | fセクション | 炭化種子 | | " | cal cal | BC | 594 | | cal | BC | 508 | cal | BP | 2,543 | | | IAAA- | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 | 8~11層 (138) | イネ胚乳 | 2460 ± 32 | | cal | ВС | 438 | | cal | ВС | 420 | cal | BP | 2,387 | | | 91139 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | (100) | | | | cal | BC | 756 | | cal | BC | 684 | cal | BP | -, | - 2,633 | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | 2 σ | cal cal | BC BC | 669 473 | | cal cal | BC BC | 477 413 | cal cal | BP BP | 2,618 2,422 | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | BC | 509 | | cal | BC | 437 | cal | BP | | - 2,386 | - | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 流路状遺構 | fセクション | 炭化種子 | | σ | cal | BC | 421 | | | BC | 408 | cal | BP | 2,370 | | | PLD- | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 | 8~11層 (122) | イネ胚乳 | 2410 ± 20 | 2 σ | cal | ВС | 717 | - | cal | ВС | 695 | cal | BP | 2,666 | - 2,644 | 0.041 | 14740 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | \/ | | | L | cal | ВС | 539 | | cal | ВС | 403 | cal | BP | 2,488 | | | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | | ш п. ~ = | | _ | cal | BC | 485 | | cal | BC | 463 | cal | BP | 2,434 | | | DLD | | | | | | | | | | | |
| 流路状遺構 18-1215 | fセクション 8~11層 | 炭化種子 イネ胚乳 | 2365 ± 25 | σ | cal cal | BC BC | 449 417 | | cal cal | BC BC | 442 392 | cal cal | BP BP | 2,398 2,366 | | | PLD- 10282 | | | | | | | | | | | |
| B地点 | | | | 2 σ | cal | BC | 511 | | cal | BC | 391 | cal | BP | 2,460 | | | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | | | | σ | cal | ВС | 1,256 | - | cal | ВС | 1,236 | cal | BP | 3,205 | - 3,185 | 0.206 | | | | | | | | | | | | |
| 流路状遺構 | Aセクション | 炭化材 | 2955±30 | Ľ | cal | ВС | 1,215 | | cal | ВС | 1,126 | cal | BP | 3,164 | | | IAAA- | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 A地点 | 18層 | | | 2σ | cal | BC BC | 1,289 1,269 | | cal | BC BC | 1,282 1,053 | cal cal | BP BP | 3,238 3,218 | | | 71969 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal cal | BC | 1,269 | | cal cal | BC | 1,256 | cal | BP | 3,346 | | | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 流路状遺構 | eセクション | 炭化種子 | 3040 ± 60 | σ | cal | BC | 1,237 | | cal | BC | 1,215 | cal | BP | 3,186 | | | PLD- 11926 | | | | | | | | | | | |
| 18-1215 | 1~6層 | オニグルミ | | 2 σ | cal | ВС | 1,433 | | cal | ВС | 1,121 | cal | BP | 3,382 | | 1.000 | 11970 | | | | | | | | | | | |
| | | | | σ | cal | ВС | 1,257 | | | ВС | 1,234 | cal | BP | 3,206 | | 0.102 | | | | | | | | | | | | |
| 18次調査区 | 造構押士 | 遺構埋土 炭化種子 2930±60 —— | 2930 + 60 | <u> </u> | cal | BC | 1,216 | | cal | BC | 1,046 | cal | BP | 3,165 | | 0.898 | PLD- | | | | | | | | | | | |
| 土坑18-1637 | /S/冊/生工 | | 2σ | cal cal | BC BC | 1,369 1,315 | | cal cal | BC BC | 1,358 973 | cal cal | BP BP | 3,318 3,264 | | 0.007 | 11927 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | BC | 957 | | | BC | 939 | cal | BP | 2,906 | | 0.015 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | cal | ВС | 504 | - | cal | ВС | 494 | cal | BP | 2,453 | - 2,443 | 0.095 | | | | | | | | | | | | |
| | | | | σ | cal | ВС | 489 | | cal | ВС | 461 | cal | BP | 2,438 | | 0.352 | 2 | | | | | | | | | | | |
| | 弥生前期 | 弥生前期 | 炭化材 | 2379±25 | ı | cal | BC | 451 | - | cal | BC | 440 | cal | BP | 2,400 | - 2,389 | 0.122 | IAAA- 100075 | | | | | | | | | | |
| 19次- I 区 土均664 | | 炭化材 | 2379 ± 25 | | | PC | 410 | | co1 | PC | 207 | 001 | рD | 2 267 | 9946 | 0.491 | 100075 | | | | | | | | | | | |
| 19次- I 区 土坑664 | 弥生 前期 遺構埋土下層 | 炭化材 | 2379±25 | 2σ | cal cal | BC BC | 418 532 | - | cal cal | BC BC | 397 531 | cal cal | BP BP | 2,367 2,481 | | 0.431 | 100075 | | | | | | | | | | | |

表12 放射性炭素年代測定および暦年較正結果表2

| 地点名 | 試料名・層位 | 性状 | 測定年代 | | | | | | 暦年 | 較正年 | ₹ (ca | ıl) | | | | Code No. |
|-------------------------|--|----------------|---------------|-----------|------------|----------|--------------------|------------|----------|----------------|------------|----------|--------------------|----------------|----------------|----------------------------|
| - CANCEL | PATTE ALE | 13.04 | (BP) | 誤差 | | D.0 | cal. | | 200 | 10.5 | | D.D. | calBP | 0.440 | 相対比 | 00001101 |
| | | | | | cal | BC BC | 503 - | | BC | 497 | cal | BP BP | 2,452 - 2,437 - | 2,446 | 0.053 | |
| 19次- I 区 | 弥生前期 | 炭化材 | 2374±25 | σ | cal | BC | 488 - 451 - | | BC BC | 461 440 | cal cal | BP | 2,400 - | · / | 0.320 0.097 | IAAA- |
| 土坑344 | 遺構埋土3層 | JA 1644 | 2314±23 | | cal | BC | 418 - | | BC | 396 | cal | BP | 2,367 - | 2,345 | 0.530 | 911897 |
| | | | | 2 σ | cal | BC | 517 - | | BC | 393 | cal | BP | 2,466 - | 2,342 | 1.000 | |
| | | | | | cal | BC | 503 - | | BC | 497 | cal | BP | 2,452 - | 2,446 | 0.053 | |
| | at at 37 Hz | | | _ | cal | BC | 485 - | cal | BC | 463 | cal | BP | | 2,412 | 0.211 IAAA- | |
| 19次-Ⅲ区 土坑3132 | 弥生前期 遺構埋土下層 | 炭化材 | 2364 ± 25 | σ | cal | BC | 448 - | cal | BC | 442 | cal | BP | 2,397 - | 2,391 | 0.046 | 100076 |
| 1.9[0102 | 返147年工17日 | | | | cal | BC | 416 - | cal | BC | 392 | cal | BP | 2,365 - | 2,341 | 0.743 | 100010 |
| | | | | 2σ | cal | BC | 511 - | cal | BC | 390 | cal | BP | 2,000 - | 2,339 | 1.000 | |
| 10.74 III EZ | | | | | cal | BC | 1,193 - | cal | ВС | 1,172 | cal | BP | 3,142 - | 3,121 | 0.154 | |
| 19次-Ⅲ区 流路状遺構 | 14C-1 | 14 71.44 | 0000 1 04 | σ | cal | BC | 1,168 - | | BC | 1,142 | cal | BP | | 3,091 | 0.200 | IAAA- |
| 18-1215 | 3層 | 炭化材 | 2923 ± 31 | | cal | BC BC | 1,133 - 1,257 - | cal | BC BC | 1,053 1,235 | cal | BP BP | 3,082 - 3,206 - | 3,002 | 0.646 | 90754 |
| 2地点 | | | | 2σ | cal | BC | 1,215 - | cal cal | BC | 1,016 | cal cal | BP | 3,164 - | 3,184 2,965 | 0.048 0.952 | |
| 101/ 775 | | | | | cal | BC | 1,378 - | cal | BC | 1,337 | cal | BP | 3,327 - | 3,286 | 0.932 | |
| 19次-Ⅲ区 流路状遺構 | 14C-2 | | | σ | cal | BC | 1,321 - | cal | BC | 1,266 | cal | BP | 3,270 - | 3,215 | 0.567 | IAAA- |
| 18-1215 | 4層 | 炭化材 | 3041 ± 31 | | cal | BC | 1,407 - | | BC | 1,252 | cal | BP | 3,356 - | 3,201 | 0.932 | 90755 |
| 2地点 | | | | 2σ | cal | ВС | 1,241 - | | ВС | 1,213 | cal | BP | | 3,162 | 0.068 | |
| 19次-Ⅲ区 | | | | σ | cal | ВС | 1,118 - | cal | ВС | 1,020 | cal | BP | 3,067 - | 2,969 | 1.000 | |
| 流路状遺構 | 14C-3 | <i>≌/\v+</i> ± | 2000 20 | | cal | ВС | 1,207 - | cal | ВС | 1,202 | cal | BP | 3,156 - | 3,151 | 0.005 | IAAA- |
| 18-1215 | 5層 | 炭化材 | 2890 ± 30 | 2σ | cal | BC | 1,195 - | cal | BC | 1,141 | cal | BP | 3,144 - | 3,090 | 0.103 | 90756 |
| 2地点 | | | | | cal | BC | 1,134 - | cal | BC | 977 | cal | BP | 3,083 - | 2,926 | 0.892 | |
| | | | | | cal | BC | 1,210 - | | BC | 1,111 | cal | BP | 3,159 - | 3,060 | 0.812 | |
| 19次-Ⅲ区 | | | | σ | cal | BC | 1,103 - | | ВС | 1,081 | cal | BP | | 3,030 | 0.137 | |
| 流路状遺構 | 14C-4 | 炭化材 | 2933 ± 31 | | cal | BC | 1,065 - | | BC | 1,056 | cal | BP | | 3,005 | 0.051 | IAAA- |
| 18-1215 2地点 | 10層上部 | | | 0 ~ | cal | BC | 1,260 - | cal | BC | 1,226 | cal | BP | 3,209 - | 3,175 | 0.094 | 90757 |
| 2,2,1,1 | | | | 2σ | cal | | 1,222 - | | BC | 1,038 | cal | BP | 3,171 - 2,983 - | 2,987 | 0.895 | |
| | | | | | cal cal | BC BC | 1,034 - 1,248 - | cal cal | BC BC | 1,028 1,245 | cal cal | BP BP | | 2,977 3,194 | 0.010 | |
| | | | | | cal | BC | 1,212 - | | BC | 1,111 | cal | BP | | 3,060 | 0.844 | IAAA- 90758 |
| 19次-Ⅲ区 流路状遺構 | 14C-5 | | | σ | cal | BC | 1,102 - | | BC | 1,084 | cal | BP | | 3,033 | 0.103 | |
| 18-1215 | 140 5 | 炭化材 | 2936 ± 31 | | cal | BC | 1,064 - | | BC | 1,057 | cal | BP | | 3,006 | 0.035 | |
| 3地点 | | | | _ | cal | BC | | | BC | 1,040 | cal | BP | 3,211 - | 2,989 | 0.999 | |
| | | | | 2σ | cal | ВС | 1,032 - | | BC | 1,030 | cal | BP | | 2,979 | 0.001 | |
| 19次-Ⅲ区 | | | | | cal | ВС | 1,257 - | cal | ВС | 1,236 | cal | BP | 3,206 - | 3,185 | 0.155 | |
| 流路状遺構 | 14C-6 | 岸/V+t+ | 9050 91 | σ | cal | BC | 1,215 - | cal | BC | 1,122 | cal | BP | 3,164 - | 3,071 | 0.845 | IAAA- |
| 18-1215 | 10層下部 | 炭化材 | 2950 ± 31 | 2 σ | cal | BC | 1,288 - | cal | BC | 1,283 | cal | BP | 3,237 - | 3,232 | 0.005 | 90759 |
| 3地点 | | | | 20 | cal | BC | 1,269 - | cal | BC | 1,049 | cal | BP | 3,218 - | 2,998 | 0.995 | |
| | 2層 | | | σ | cal | BC | 1,009 - | | BC | 928 | cal | BP | 2,958 - | 2,877 | 1.000 | |
| 19次-Ⅲ区 | 弥生前期 | 炭化材 | 2823 ± 31 | | cal | BC | 1,108 - | cal | BC | 1,105 | cal | BP | 3,057 - | 3,054 | 0.003 | IAAA- |
| 4地点 | 包含層 | × 11=11 | | 2σ | cal | BC | 1,076 - | | BC | 1,065 | cal | BP | | 3,014 | 0.009 | 91136 |
| | | | | | cal | BC | 1,056 - | cal | BC | 900 | cal | BP | 3,005 - | 2,849 | 0.986 | |
| | | | | | cal | BC BC | 1,193 - 1,166 - | cal | BC BC | 1,173 1,142 | cal | BP BP | 3,142 - 3,115 - | 3,122 3,091 | 0.174 0.213 | |
| 19次- I 区 | 集石遺構 | | | σ | cal | BC | 1,132 - | | BC | 1,142 | cal cal | BP | | 3,057 | 0.213 | IAAA- |
| 流路状遺構 | 19-1430 | 炭化材 | 2926 ± 26 | | cal | BC | 1,105 - | cal | BC | 1,056 | cal | BP | 3,054 - | 3,005 | 0.386 | 91723 |
| 19-1155南西部 | 上層シルト | | | _ | cal | BC | 1,256 - | cal | BC | 1,236 | cal | BP | 3,205 - | 3,185 | 0.043 | |
| | | | | 2σ | cal | BC | 1,215 - | | BC | 1,026 | cal | BP | | 2,975 | 0.957 | |
| 19次- I 区 | 集石遺構 | | | - | cal | ВС | 1,254 - | - 1 | ВС | 1,239 | cal | BP | | 3,188 | 0.122 | TA A A |
| 流路状遺構 | 19-1430 | 炭化材 | 2951 ± 27 | σ | cal | ВС | 1,214 - | | BC | 1,125 | cal | ΒP | 3,163 - | | 0.878 | IAAA - 91724 |
| 19-1155南西部 | 下層シルト | | | 2σ | cal | ВС | 1,263 - | cal | ВС | 1,055 | cal | ΒP | 3,212 - | 3,004 | 1.000 | J1144 |
| 19次- I 区 | 14C-2 | | | σ | cal | BC | 1,253 - | cal | BC | 1,240 | cal | BP | 3,202 - | 3,189 | 0.101 | IAAA- |
| 流路状遺構 19-1155北東部 | 埋土下部 | 炭化材 | 2946 ± 27 | | cal | ВС | 1,213 - | | ВС | 1,121 | cal | BP | | 3,070 | 0.899 | 91725 |
| 10地点 | 1 | | | 2σ | cal | BC | 1,260 - | | BC | 1,055 | cal | BP | | 3,004 | 1.000 | |
| | 1 | | | | cal | BC | 1,208 - | | BC | 1,139 | cal | BP | | 3,088 | 0.597 | |
| 19次- I 区 | | | | σ | cal | BC | 1,135 - | | BC | 1,111 | cal | BP | | 3,060 | 0.213 | TA A A |
| │ 流路状遺構 19-1155北東部 | 14C-3 埋土最下部 | 炭化材 | 2931 ± 26 | | cal | | 1,102 - | | BC | 1,083 | cal | BP | 3,051 - | · · | 0.135 | IAAA- 91726 |
| 19-1155北東部 | 生工取下的 | | | | cal cal | BC BC | 1,064 - 1,259 - | | BC BC | 1,057 1,231 | cal cal | BP BP | 3,013 - 3,208 - | 3,006 | 0.055 | 91140 |
| | 1 | | | 2σ | cal | BC | 1,218 - | | BC | 1,041 | cal | BP | | 2,990 | 0.069 | |
| | | | | | cal | BC | 4,454 - | | BC | 4,439 | cal | BP | 6,403 - | | 0.206 | |
| 19次-Ⅱ区 | 14C-2 | | | σ | cal | BC | 4,425 - | | BC | 4,369 | cal | BP | | 6,318 | 0.794 | IAAA- |
| 13地点 | 縄文晩期 | トチノキ果皮 | 5591 ± 32 | | cal | BC | 4,488 - | | BC | 4,470 | cal | BP | | 6,419 | 0.043 | 91727 |
| 1 | 基盤層②層 | | | 2σ | cal | ВС | 4,465 - | | BC | 4,354 | cal | BP | 6,414 - | · · | 0.957 | |
| | 1 | 1 | | 1 | 1 | | -, | | | -,501 | | | -, ± | 2,200 | 2.20. | |

 $^{1)\}sigma$ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

²⁾暦年較正計算は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright1 986-2005 M Stuiver andPJ Reimer) を使用。計算には補正 年代の括弧内の丸める前の値を使用。結果は 1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすい ように、 1 桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が σ 、 2σ のそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

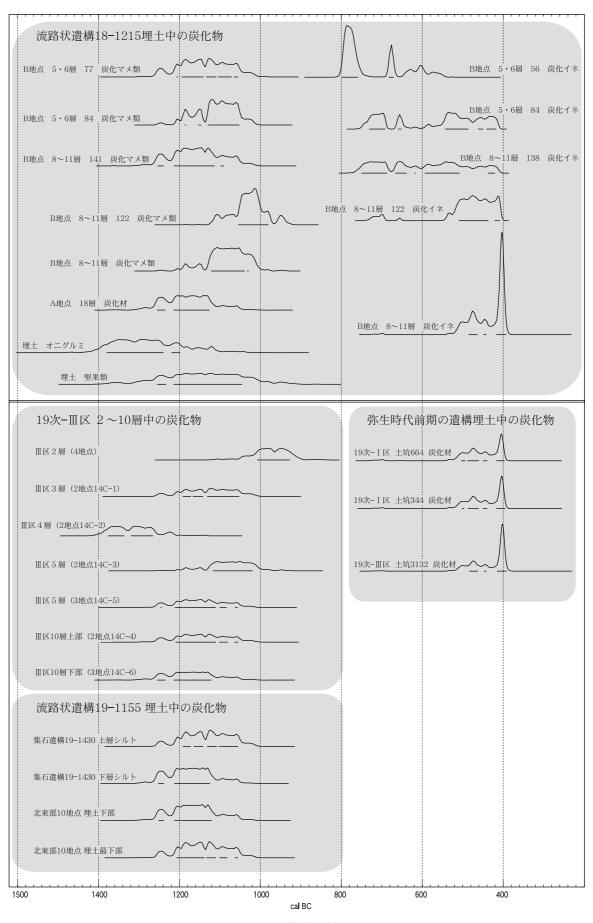


図73 暦年較正結果

段階の遺構埋土の出土炭化材の年代値は、

2364 ± 25yBP (cal BC 511-390年) ~ 2379 ± 25yBP (cal BC 523-393年)

と近似する値を示す。この年代値は上記した2層中の炭化材の年代値と大きく異なっている。これは弥生時代前期の遺構のベースをなす2層の土壌生成が弥生時代前期より古い時期に始まっていることを示唆するが、2層の成因を踏まえると氾濫堆積時に再堆積した古い時期の炭化材の年代値を示している可能性もある。2層は長岡京時代の人為的削平などの影響により上部の構造が不明瞭となっているが、場所によって下方に凸な外形をなす砂礫の流入により侵食されている状況が確認されることから、そのような場所では土壌層位のA層部分がなくなっており、砂礫堆積後に再び土壌発達する状況が存在したことが想定される。

本地域および周辺地域で確認されている縄文時代後期から晩期の土器付着物の年代測定結果 (西本編,2006・2007)を概観すると、京都盆地では、縄文時代後期から晩期の土器付着物の年代 測定例は少ないものの、盆地北部の北白川追分町遺跡において、得られた土器付着物による各土 器型式の年代値は以下に示す通りである。

滋賀里 b式 2760 ± 40BP (calBC 1000-825年)

滋賀里 b~ 式 2640 ± 50BP (calBC 915-755年)

滋賀里式(船橋式) 2480±50BP(calBC 770-480年) 2410±50BP(calBC 595-395年) 琵琶湖の湖東地域では滋賀県安土町の竜ヶ崎A遺跡、滋賀県守山市所在の赤野井湾遺跡で比較的多くの年代値が得られている。これらの年代値を整理すると次のようになる。

滋賀里 式 2905 ± 25BP (calBC 1135-1010年) ~ 2990 ± 25BP (calBC 1315-1125年)

滋賀里 a式 2985 ± 25BP (calBC 1310-1125年) · 3085 ± 25BP (calBC 1420-1295年)

滋賀里 b式 2710 ± 25BP (calBC 905-810年)~2860 ± 25BP (calBC 1120-970年)

滋賀里 式 2650 ± 25BP (calBC 840-790年)

長原式 2580 ± 40BP (calBC 820-740年) ~ 2360 ± 40BP (calBC 545-375年)

また、河内平野では、大阪府八尾市の池島・福万寺遺跡で縄文時代後期の元住吉山 式期の土 器付着物の年代値がわかっている。

元住吉山 式期 3520 ± 40BP (calBC 1950-1740年)

東大阪市の宮ノ下遺跡では次のような年代値が得られている。

滋賀里 ~ 船橋式 2620 ± 40BP (calBC 850-755年)

滋賀里 ~ 長原式 2550 ± 40BP (calBC 690-540年)

長原式 2570 ± 40BP (calBC 810-735年)

本遺跡における縄文時代晩期の滋賀里 式から篠原式期出土層準の炭化物の年代値は約2900~3000年代に集中することから、周辺遺跡で確認されている土器付着物の年代値とも同調的といえる。なお、加藤(2009)によると、滋賀里 a式期は、東北地方の縄文時代晩期の土器の実年代(小林2008)と、関西の縄文時代晩期の土器との併行関係から、約70年程度の期間であることが推定されている。栽培種の炭化種実が出土した人為的堆積物は、流路充填堆積物の5~4層に相

当する。炭化種実のうち炭化マメ類種子の年代値は、流路充填堆積物中の炭化材の年代値とも層位的に矛盾しないが、炭化イネ胚乳の年代値は大きく齟齬が生じている。炭化イネ胚乳の年代値は、近畿地方における縄文時代晩期末から弥生時代前期の年代(春成2007)に相当する。この時期の炭化イネ胚乳の年代測定事例は少ないが、生駒山西麓の讃良川が形成した扇状地扇端に位置する讃良郡条里遺跡において、突帯文土器と弥生時代前期の土器が出土する6-143土坑での事例が存在する。この土坑最下部には土坑機能期に形成された灰や炭化物の集積層が確認されており、その灰層から出土した炭化イネ胚乳の年代測定値は以下の値である(大府セ2009)。

2450 ± 25vBP (cal BC550~480年:25.3%)

枚方台地の開析谷に位置する私部南遺跡では、多量の炭化イネ胚乳が炉跡付近で検出された、弥生時代前期後半(河内 - 期)の竪穴住居跡の構築材の年代測定値が以下の値である(大府セ2007)。

2350±50~2480±50yBP(暦年代でcal BC 6~7世紀)

これらのことから、今回の炭化イネ胚乳は、縄文時代晩期末から弥生時代前期の所産である可能性が高い。炭化イネ胚乳の年代値のうち最も新しい年代値は、検証された弥生時代前期の遺構埋土中の炭化材の年代値と近似するが、多くの炭化イネ胚乳の年代値はそれよりも古い年代値を示している。年代測定で2350年から2400年BPの間(較正年代で760~400年BCの間)の約350年間は、炭素14の変化が少ない時期にあたり、較正曲線が平坦になるため、較正年代を絞り込むことが難しい、いわゆる2400年問題の時期に相当する(春成2007)。今回の炭化イネ胚乳の年代値の多くが、この2400年問題の時期にかかっているために、時期差が生じている可能性がある。そうだとすると、人為的堆積物中の炭化イネ胚乳は同時期の所産ではなく、異なる時期のものが混在していることになる。

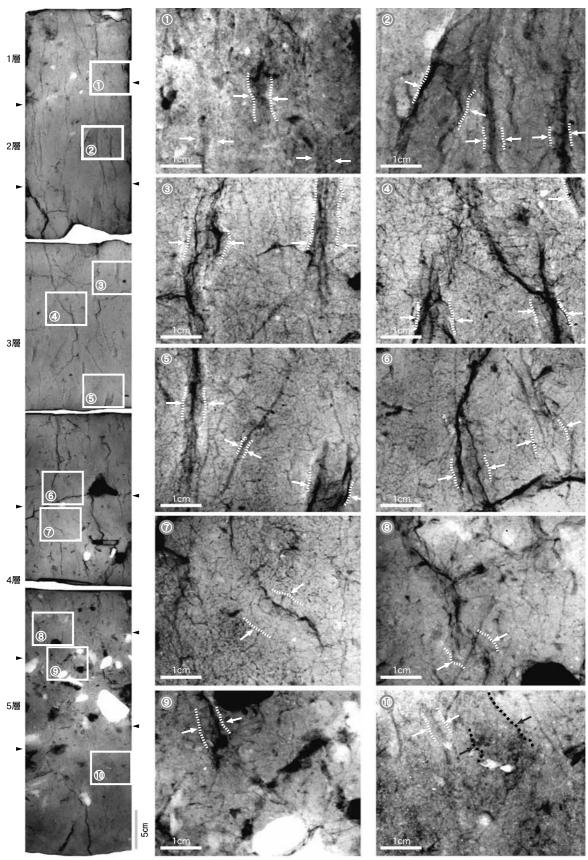
(2)縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて形成された堆積物の微細堆積・土壌構造

人為的堆積物中の炭化イネ胚乳は、上述の年代値の検討から、新しい時代に混入したことが推定される。ここでは流路状遺構18-1215を埋積する堆積物について実施した、X線写真および土壌薄片観察結果に基づいて、栽培種の炭化イネ胚乳の混入に関わった可能性がある根系の発達状況等について検討する。

1)X線写真観察結果

X線写真は、19次- 区 2 地点の流路状遺構を埋積する10層から 1 層について実施した(京市研2010)。このうち、長岡京期の堆積層である 1 層から10層上部までの X 線写真および各層の拡大 X 線写真を図74に示す。なお、 X 線写真は、明るい部分がより高い密度の物質(ここではおもにシルトと砂・礫、酸化鉄や酸化鉄)からなり、暗い部分が低密度の物質(水分の多い粘土、細粒のシルト、植物性の炭片、植物遺体、孔隙など)からなる。

1層~10層上部のX線写真をみると、縄文時代晩期の層準(5層)に達する上位層準からの根系とみなせる孔隙が顕著で、かなり高密度に発達することが確認される。孔隙の太さは1~2 cm



線状の黒色部分が新しい植物根痕跡に相当。白矢印で挟まれた部分は古い植物根痕などの間隙に相当。黒矢印は棲管の可能性がある部分。

図74 縄文時代晩期から弥生時代前期堆積物の X 線写真

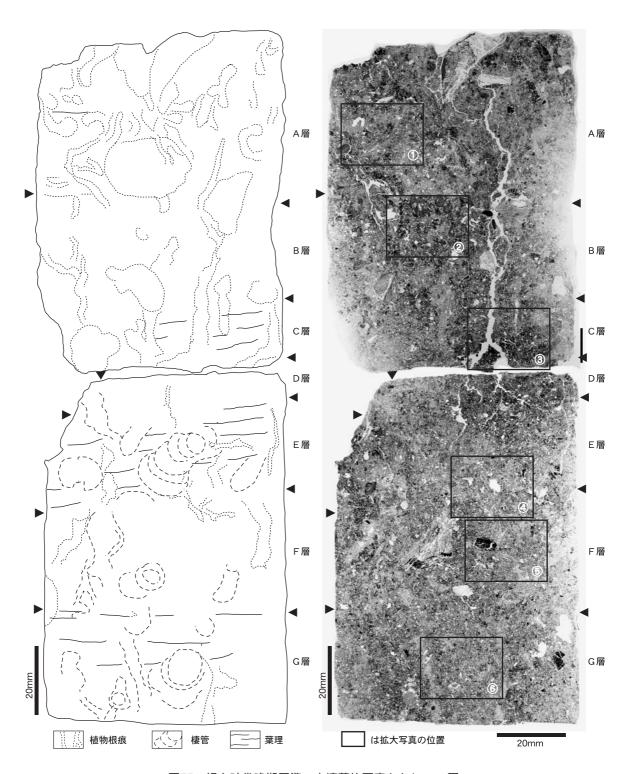
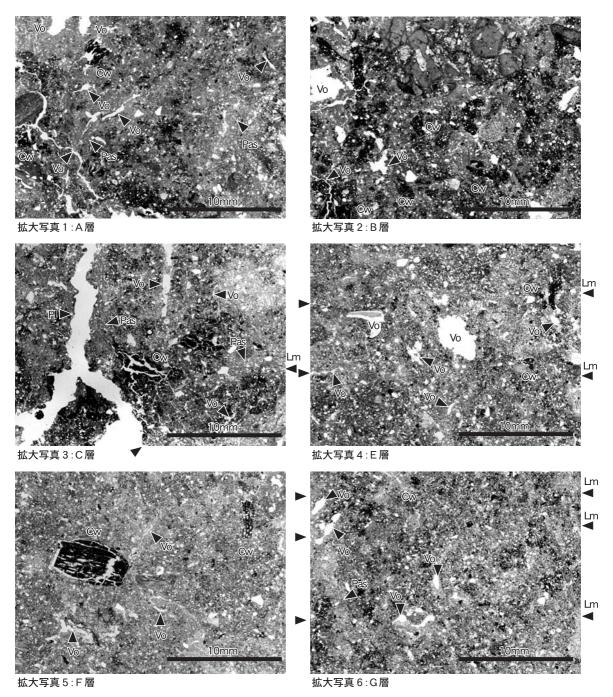


図75 縄文時代晩期層準の土壌薄片写真とトレース図

程度のものから、数mm程度のものまで存在する。 1~2 cm程度の孔隙は、泥で充填されており (拡大写真の矢印と点線で挟まれた範囲) 孔隙の周囲は砂勝ちの堆積物からなり、酸化鉄が沈着 している (X線写真では白く写る)。また、新しい根が軟らかい泥の部分に発達している (X線写真で黒い孔隙部分)。 1層から10層上部にかけてみられる孔隙は、ほとんどがこのタイプである。

これらの根系とみられる孔隙の発達状況からみて、上位層準からの物質移動が起こっている可能性は充分考えられる。孔隙は、弥生時代前期の遺物を包含する2層の上位層準から連続するも



凡例 Vo:孔隙, m:葉理, Pas:通路状ファブリックペフィーチャー, Cw:炭化材, PI:面状孔隙(試料調整時の割れ) 画像は透過光

図76 縄文時代晩期層準の土壌薄片拡大写真

のまである。先述したように2層は3層を母在とする土壌化層準に相当するが、X線写真撮影地点では、土壌層位のA層に相当する顕著な土壌発達層準は確認されない。これは長岡京時代の人為的攪拌や削平の影響による。3層・2層の年代測定結果をふまえると、2層の土壌化は縄文時代晩期以降、弥生時代前期にかけて起こっていることが想定される。また、2層は場所によって、氾濫時の侵食を受けており、その領域では氾濫堆積後にも土壌発達している。さらに長岡京時代の開発前にも土壌発達し、これらが重複している可能性もある。このように縄文時代晩期末から弥生時代前期以降の土壌生成期の植生が、X線写真で確認された孔隙の由来と判断される。縄文

時代晩期末から弥生時代前期の年代を示した人為的堆積物中の炭化イネ胚乳は、炭化マメ類種子よりも絶対数が圧倒的に少ないことを合わせ考えると、縄文時代晩期末から弥生時代前期以降の土壌生成期に下方移動したものの可能性がある。

2)土壌薄片観察結果

土壌薄片観察は、縄文時代晩期前半の滋賀里 式から篠原式期の遺物を包含する 5 層の構造を 把握することを目的として、19次- 区 4 地点の10層上部から 4 層下部層準にかけて実施した (図75・76)。

土壌薄片観察範囲では、葉理が発達する層準と塊状ないし壁状をなす層準との互層を主体とし、層準A~Gの7層に細分される。このうち層準Aが4層下部、層準B~Fが5層、層準Gが10層上部に相当する。葉理発達層準では平行葉理が認められ、層準C・E・Gが該当する。塊状ないし壁状層準は、層準A・B・D・Fに相当する。このうち、層準Aでは、他の層準に比べ泥質で淘汰も相対的に良い。層準B・Fでは、粗粒な炭化材片が多く含まれる。堆積物は、層準Aで砂混じりの泥、それ以外の層準が泥混じりの砂で構成されるが、この泥混じり砂には母材の異なる堆積物の粉砕により生じた、大きさ1mm以下の亜角~亜円状を主体とする微小ブロックが集合した、大きさ1~2mm程度の未発達の集合体が多く認められる。層内では、生物擾乱が著しく、特に上半部の層準A~Dでは1~2cm程度の孔隙が確認される。孔隙内は、周囲より粒系の細かい堆積物で充填されている。また、拡大写真に示すように1mm前後のチャンネル孔隙や生痕起源である通路状のペドフィーチャーが発達する。一方、E~F層準では、土壌動物の移動により生じた、輪状の模様をなす、棲管が発達する。

土壌薄片作製地点の5層は、埋積の進行した流路内である。このことおよび層相を考慮すると、5層は降雨時などに流路内が冠水し、堆積物の再移動が比較的弱い営力で起こった段階に形成されたと推定される。塊状ないし壁状層準は、流路内の水位が下がり、地表が大気に曝されるようなる平常時に、発達した土壌と考えられる。これらのことから、B~G層については、冠水を繰り返す堆積環境下での土壌発達により形成されたと解釈される。A層については、葉理が認められないが、相対的に淘汰の良いことから、流路の冠水により累重したものとみなされる。土壌薄片では、上半部の試料において、特に生物擾乱が発達することが確認される。これらには、上位へと連続する管状のものも多く、土壌薄片観察範囲やその前後の層準は、上位層準からのコンタミネーションの可能性が想定される。

3)栽培植物のイネ属植物珪酸体の産状について

栽培植物のイネ属の産状を確認することを目的として、調査区で確認されている流路状遺構および弥生時代前期の土坑堆積物を対象として植物珪酸体分析が実施している(京都市埋蔵文化財研究所2010)。その結果をみると、栽培植物のイネ属は縄文時代晩期に形成された堆積物からは産出せず、弥生時代前期の土坑埋土中からわずかに産出しただけである。産出した植物珪酸体の保存状態が全体的に悪く、多くのものが分解消失している可能性があるものの、縄文時代晩期前半における調査区でのイネの生育の可能性は極めて低いと判断される。

(3)小結

上述してきた1~3の結果を整理すると、次のようになる。

- 1)流路状遺構内の人為的堆積物中の炭化マメ類の年代値は、共伴する縄文時代晩期前半の遺物出土層準の年代値に近似するが、炭化イネ胚乳は縄文時代晩期末から弥生時代前期の年代値を示した。
- 2)縄文時代晩期の層準およびその上位の堆積物には、縄文時代晩期以降の複数時期の土壌生成期に形成された植物根系が密に発達する。その根茎には幅2~1cm程度のものも多く認められる。
- 3)栽培植物のイネ属の植物珪酸体は、弥生時代前期後半の遺構埋土からわずかに産出するだけである。

以上の状況のほか、流路の人為的堆積物から出土した炭化イネ胚乳の絶対数は、炭化マメ類に 比較して極めて少ないことを合わせ考えると、炭化イネ胚乳とマメ類種子の年代値の齟齬は、両 者の人為的堆積物への取り込まれる過程が異なっていたことに起因すると推定される。すなわち、 炭化イネ胚乳は縄文時代晩期前半の滋賀里 式から篠原式期に栽培されていたものではなく、縄 文時代晩期末以降の土壌生成期に発達した植物根により混入した可能性が高い。ただし、上記し たように炭化イネ胚乳の年代値は縄文時代晩期末から弥生時代前期の年代値を示すことから、縄 文時代晩期末に本遺跡周辺にイネが存在した可能性がある。乙訓地域では、弥生時代前期以前の 稲作に関する情報は存在せず、今回の炭化イネ胚乳の産出は本地域における稲作の開始時期を検 討する上で重要である。今回の調査では、調査区における弥生時代前期頃の地形発達についての 検討が充分ではなかったため、当期の人間と自然の複合動態については今後の課題としたい。

引用文献 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 = 京市研、(財) 大阪府文化財センター = 大府セと省記する 春成秀爾 2007「近畿における弥生時代の開始年代」『新弥生時代のはじまり 第2巻 縄文時代から弥生 時代へ』雄山閣 20-34p。

加藤雅士 2009「墓から復元する関西の縄文晩期集落」『第10回関西縄文文化研究会発表要旨 資料集』 77-86p。

小林謙一 2008「縄文時代の礫年代」『縄文時代考古学2』同成社。

西本豊弘 編 2006『新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代』雄山閣 143p。

西本豊弘編 2007『新弥生時代のはじまり 第2巻縄文時代から弥生時代へ』雄山閣 185p。

京市研 2008『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12) 64p。

京市研 2010『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-9) 74p。

大府セ 2009 『讃良郡条里遺跡 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵 文化財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書第187集 504p。

大府セ 2007『私部南遺跡 一般国道 1 号バイパス (大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化 財発掘調査報告書』(財)大阪府文化財センター調査報告書第154集 227p。

4 サヌカイトの産地推定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1)目的

上里遺跡で出土するサヌカイトには、目視によってより緻密な大阪・二上山産のものと白色のスジが目立ち、やや粗質な香川・金山産のものと判断される2種類が認められる。当時の交易の状況を把握する上でも、目視による分類の確からしさを裏付ける必要があると考え、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を実施した。

(2)試料と方法

分析対象資料は上里遺跡より出土したサヌカイト剥片8点で、いずれも縄文時代晩期前半の包含層より出土している。目視により8点のうち、1~4は大阪・二上山産、5~8は香川・金山産と判断した試料である。試料は風化層に覆われていたため、サンドブラストを使用して一部新鮮な面を表出させ、測定箇所とした。分析装置は、(株)セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管はRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10mm、電流1~63μA(デッドタイムが20%未満になるよう設定)、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において使用されている蛍光 X 線分析による X 線強度を使用した判別図法(例えば望月2004)を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(X)、マンガン(X) 、鉄 (Y) とルビジウム(X) 、ストロンチウム(Y) 、イットリウム(Y) 、ジルコニウム(Y) の合計 Y 元素の X 線強度 Y (cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1). Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2). Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3). Mn強度×100/Fe強度
- 4). log (Fe強度/K強度)

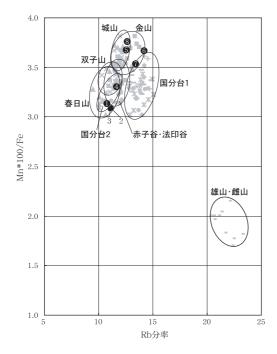
そしてこれらの指標値を使用した2つの判別図、図77 (横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度×100/Fe強度)と図78 (横軸Sr分率 - 縦軸log [Fe強度/K強度])を作成し、各地の原石データと遺跡出土

表13 原石採取地と判別群名称表

表14 産地推定結果表

| 判別群 | 原石採取地 (試料点数) | | | | | | |
|---------|---|--|--|--|--|--|--|
| 春日山 | 春日山みかん畑内 (10) | | | | | | |
| 国分台1 | 自衛隊演習場付近(5)、神谷神社前(13)、高産霊神社 | | | | | | |
| 国分台2 | 谷 (12)、国分台下みかん畑 (5)、蓮光寺 (10) | | | | | | |
| 赤子谷·法印谷 | 赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10) | | | | | | |
| 金山 | 北峰道路脇 (10)、金山南麓 (10) | | | | | | |
| 城山 | 城山南側(5)、城山北側(5) | | | | | | |
| 雄山·雌山 | 雄山(5)、雌山(5) | | | | | | |
| 双子山 | 双子山南麓 (10) | | | | | | |
| | 春日山 国分台 1 国分台 2 赤子谷·法印谷 金山 城山 雄山·雌山 | | | | | | |

| 資料No. | 判別群 | エリア |
|-------|-----|-----|
| 1 | 春日山 | 二上山 |
| 2 | 春日山 | 二上山 |
| 3 | 春日山 | 二上山 |
| 4 | 春日山 | 二上山 |
| 5 | 金山 | 讃岐 |
| 6 | 金山 | 讃岐 |
| 7 | 金山 | 讃岐 |
| 8 | 金山 | 讃岐 |



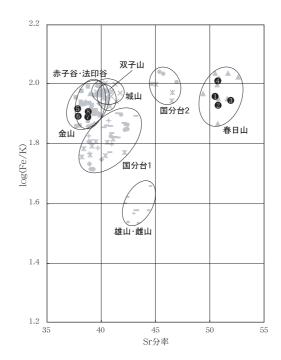


図77 サヌカイト産地推定判別図1

図78 サヌカイト産地推定判別図2

試料のデータを照合して、産地を推定するものである。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表13に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

(3)結果

分析結果を図77・78に示す。図中にはサヌカイト原石の判別図と遺跡出土試料をプロットした。 なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

判別図では、讃岐エリアに属する原石は一部を除き非常に近接しており重複部分も多く、明確な区別は難しい。しかし、二上山エリアの原石と讃岐エリアの原石は明確にプロットされる位置が異なり、充分に区別可能である。

遺跡出土試料のうち、資料 1~4が春日山(二上山)の範囲、資料 5~8が金山(讃岐)の範囲にプロットされた。表14に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少ないため、他の産地の可能性が全く無いとは言い切れないが、少なくとも判別図とは一致している。

(4) 小結

上里遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光 X 線分析を用いた判別図法による産地推定を 行った結果、 8 点の資料のうち、 1~4の4点は二上山産、 5~8の4点は讃岐(金山)地 方産の可能性が高いと推定され、目視による産地推定と齟齬の無いことが明らかになった。

望月明彦 2004 「用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定」『用田大河内遺跡』(かながわ考古学財団調査報告167)511-517p 財団法人かながわ考古学財団。

5 動物遺存体の分析

丸山真史(奈良文化財研究所 客員研究員)

(1)概要

上里遺跡では、18・19次の2年度にわたる発掘調査において動物遺存体が出土した。出土した動物遺存体はすべて強く被熱し、変形、変色している。採取した土サンプルを、1mm目のフルイを使用した水洗選別し、動物遺存体を採集した。5mm以下の微細片となっているものが大部分であり、破片総数を数えることは困難である。その中で、種類や部位などを同定したものは、流路状遺構18-1215・流路状遺構19-1155・土坑19-3288・集石遺構19-1430から出土した26点で、魚類5点、両生類1点、鳥類6点、哺乳類14点を数える。流路状遺構19-1155からはイノシシ遊離歯・指骨、イノシシやニホンジカといった大型哺乳類の指骨、土坑19-3288からはナマズ目と思われる鰭棘、ムササビの距骨、魚類の椎骨、集石遺構19-1430からはイノシシの中手骨/中足骨・指骨、イノシシやニホンジカといった大型哺乳類の指骨、タイ科の遊離歯、魚類の椎骨が出土している。それ以外はすべて流路状遺構18-1215から出土している(表15・16)。

(2)種類別の特徴

魚類はコイ科の椎骨3点、タイ科の遊離歯、ハゼ科の前上顎骨(左)1点ずつ、計5点が出土している。このほかコイ科と思われる椎骨1点、フナ属と思われる椎骨1点、ナマズ目と思われる鰭棘1点が出土している。また、種類が判明しなかった椎骨12点、方骨および角骨と思われるものが1点ずつ出土している。内陸部の京都において、海水魚のタイ科が出土したことは交易などを考える上で注目される。ハゼ科には海水産と淡水産の両方が含まれるが、当資料で区別することが困難である。

表15 種名表

脊椎動物門 Vertebrata キジ目 Galliformes 硬骨魚綱 Osteichthyes キジ科 Phasianidae キジ科の一種 Phasianidae gen. et sp. indet. コイ目 Cyprinida コイ科 Cyprinidae スズメ目 Passeriformes コイ科の一種 Cyprinidae gen. et sp. indet. スズメ目の一種 Passeriformes fam., gen. et sp. indet. ナマズ目 Siluriformes 哺乳綱 Mammalia ナマズ目の一種? Siluriformes fam., gen. et sp. indet. ウサギ目 Lagomorpha スズキ目 Perciformes ウサギ科 Leporidae タイ科 Sparidae ノウサギ Lepus brachyurus タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet. 齧歯目 Rodentia ハゼ科 Gobiidae リス科 Sciuridae ムササビ Petaurista leucogenys ハゼ科の一種 Gobiidae gen. et sp. indet. 両生綱 Amphibia 食肉目 Carnivora 無尾目 Anura イヌ科 Canidae 無尾目の一種 Anura fam., gen. et sp. indet. イヌ科の一種 Canidae gen. et sp. indet. 鳥綱 Aves 偶蹄目 Artiodactyla カモ目 Anseriformes イノシシ科 Suidae イノシシ Sus scrofa カモ科 Anatidae カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet. シカ科 Cervidae ニホンジカ Cervus nippon

表16 動物遺存体集計表

| | 種類 | 部位 | 流路状遺構 18-1215 | 流路状遺構 18-1215北西部 | 流路状遺構 19-1155 | 集石遺構 19-1430 | 土坑19-3288 |
|-------------|------------|---------|------------------|---------------------|------------------|-----------------|-----------|
| | コイ科 | 椎骨 | 3 | | | | |
| | コイ科? | 椎骨 | 1 | | | | |
| | フナ属? | 椎骨 | | | | | 1 |
| Ar Nert | ナマズ目? | 鰭棘 | | | | | 1 |
| 魚類 | タイ科 | 遊離歯 | | | | 1 | |
| | ハゼ科 | 前上顎骨 | 左1 | | | | |
| | | 椎骨 | 8 | 2 | | 1 | 1 |
| | 不明 | 方骨/角骨 | 不明1 | | | | |
| | 3 vi stre | 上腕骨 | 右1 | | | | |
| 両生類 | カエル類 | 橈骨・尺骨 | 不明1 | 左1 | | | |
| | カモ科 | 手根中手骨 | 左1 | | | | |
| | | 脛足根骨 | | 右1 | | | |
| | キジ科 | 尺骨 | | 左1 | | | |
| and a store | | 肩甲骨 | 右1 | | | | |
| 鳥類 | 7710 | 足根中足骨 | 左1 | | | | |
| | スズメ目 | 脛足根骨 | | 左1 | | | |
| | スズメ目? | 手根中手骨 | 右1 | | | | |
| | 不明 | 烏口骨 | 右1 | | | | |
| | ノウサギ | 下顎骨 | 不明1 | | | | |
| | | 橈骨 | 右1 | | | | |
| | ムササビ | 大腿骨 | 右1 | | | | |
| | | 距骨 | | | | | 右1 |
| | ムササビあるいはテン | 大腿骨 | 不明1 | | | | |
| | 齧歯目 | 遊離歯 | | 不明1 | | | |
| | 1 - N | 椎骨 | 2 | | | | |
| nd toda | イヌ科 | 指骨 | 不明1 | | | | |
| 哺乳類 | | 遊離歯 | | | 2 | | |
| | | 中手骨 | | 右1 | | | |
| | イノシシ | 中手骨/中足骨 | 不明1 | | | 不明1 | |
| | | 指骨 | 不明1 | | | 不明1 | |
| | ニホンジカ | 指骨 | 不明1 | | | | |
| | | 指骨 | 不明2 | | 不明1 | 不明2 | |
| | イノシシ/ニホンジカ | 肋骨 | 不明1 | | | | |
| | | 不明 | 2 | 1 | | 1 | |

両生類はカエル類の上腕骨(右)1点、橈骨・尺骨(左1・不明1)が2点出土しており、大きさは現代のアマガエル程度と推定される。

鳥類はキジ科の肩甲骨(右)尺骨(左)脛足根骨(右)が1点ずつ、スズメ目の足根中足骨(左)脛足根骨(左)が1点ずつ、カモ科の手根中手骨(左)1点、計6点が出土している。これらのほかスズメ目と思われる手根中手骨(右)が1点出土している。また種類の判明しなかった鳥口骨(右)が1点出土している。キジ科はキジあるいはヤマドリ程度、スズメ目はムクドリ程度、カモ科はカモ類に相当する大きさである。

哺乳類はムササビの橈骨(右)大腿骨(右) 距骨(右)を1点ずつ、計3点が出土している。

イノシシの遊離歯(左右不明)2点、中手骨(右)1点、中手骨/中足骨(左右不明)2点、指骨(左右不明)2点、計7点が出土している。ニホンジカの指骨(左右不明)1点が出土している。イヌ科の椎骨2点、指骨(末節骨)1点、計3点、ノウサギの下顎骨(左右不明)1点が出土している。このほか齧歯目の遊離歯(左右不明)1点、ムササビあるいはテンの大腿骨(左右不明)1点、イノシシやニホンジカといった大型哺乳類の指骨(左右不明)5点、肋骨(左右不明)1点が出土している。イノシシの遊離歯は破片となっており、計測は困難である。イヌ科と同定したものは、イヌのほかにタヌキ、キツネの可能性がある。

(3)縄文時代の焼獣骨

縄文時代後晩期の東日本の内陸部では、被熱した骨片が出土することが多い。このような焼獣骨について、食料残滓、動物祭祀、人の埋葬にかかわるものなどの議論がある。これら大部分の焼獣骨の共通点は、イノシシとニホンジカを主体としていることであり、食料とならない鹿角やその加工品が含まれている例もある。高山純は配石遺構から出土した焼獣骨を集成し、死者に持たせるために焼き、砕いて遺構あるいはその周辺に撒いたと解釈している(高山1976・1977)。また、金子浩昌は縄文時代晩期にイノシシ、ニホンジカの出土量が増加することから、狩猟儀礼との関連を指摘している(金子1984)。これらのほかにも焼獣骨が、動物骨を焼くことによる祭祀・儀礼の遺物であることが指摘されてきた(西本1983、新津1985など)。

一方、当遺跡において出土した動物遺存体は、魚類、鳥類、哺乳類が一様に出土しており、いずれも食用になる種類である。イノシシとニホンジカに集中した出土は見られず、流路状遺構18-1215からは動物遺存体以外にも土器、石器、植物質遺物も大量に出土している。動物骨を焼いた痕跡はなく、焼けた骨を投棄したと考えられる。当遺跡では魚類、両生類、鳥類、哺乳類の全てが被熱した状態であり、食料とした後に骨を火中に投げ込んで焼けたものを、再びゴミとして投棄したことが考えられる。ただし、当遺跡の動物遺存体には、種類を同定できなかった哺乳類の微細な骨片が大量に含まれており、イノシシ、ニホンジカの骨が砕かれた可能性もある。

被熱した骨は保存状態に恵まれることが知られており、被熱していない骨が土中で分解され、 遺跡に保存されなかった可能性もある。また、竪穴住居、土壙墓、炉など他の遺構では動物遺存 体を採集しておらず、今回、種類を同定した動物遺存体だけで結論を導くことは難しく、今後の 西日本における焼獣骨の出土例の増加を待ちたい。

参考文献

金子浩昌 1984「動物遺存体」『なすな原遺跡-No.1地区調査-』なすな原遺跡調査会 pp.580-596

高山 純 1976「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義・上」『史学』47-4 pp.301-334

高山 純 1977「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義・下」『史学』48-1 pp.49-74

新津 健 1985「縄文時代後晩期における焼けた獣骨について」『日本史の黎明』大興出版 pp.125-153

西本豊弘 1983「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』94 雄山閣 pp.52-56

第7章 まとめ

1 縄文時代晩期の上里遺跡

上里遺跡の調査において、縄文時代晩期の遺構・遺物を検出したのは本報告で取り上げた遺跡西部の13次-A1~3・B1区と東部の16次-D・E区、18次、19次-・・区である。東部では晩期前半、西部では晩期後半の遺構群を検出した。晩期前半には小畑川に近い東向きの緩傾斜面に多数の遺構が営まれ、多量の遺物が出土しており、続く弥生時代前期の遺構基盤層となる自然堆積層に厚く覆われて保護されたため良好に検出された。一方、晩期後半の遺構群を検出した遺跡西部では、小畑川より西へ離れ比較的高位に位置するために後世に削平を受けたと考えられ、検出できた遺構の分布状況は疎らであった。

出土土器などの検討により、本遺跡における縄文時代晩期遺構群は晩期前半が上里1~5期の5期、後半が上里6・7期の2期に分けて捉えることができた。検出した遺構のすべての所属時期を決めることは困難であったが、所属時期を明らかにし得た遺構は表17に示した。

(1)晩期前半の集落変遷

遺跡東部で検出した晩期前半の遺構群は、流路状遺構18-1215・19-1155の周囲に展開しており、竪穴住居を主体とする居住域に土壙墓・土器棺墓による墓域が伴う集落跡である。遺構群を検出した範囲は東西約120mであった。東側については後世(長岡京期以降)の小畑川・善峰川による氾濫作用によって、現状では遺構面が大きく損なわれて河岸段丘崖が形成されているが、当時は小畑川河床へなだらかに続く遺構面が東へ広がっていたと考えられる。西側は、16次-D・E区以西で全く遺構・遺物が検出されず、遺構群(集落)の西限とみて良い。検出した遺構の分布状況をみる限り、調査区の北側と南側にも遺構面が広がっていることは確実である。

図79に示したように晩期前半の遺構群は、蛇行流路の河跡部分(流路状遺構)に沿うように形成されていた。居住域は、流路状遺構18-1215の西側に竪穴住居8棟を中心とする居住域と、流路状遺構19-1155の北側に竪穴住居2棟を含む居住域とに分けられる。土器棺墓・土壙墓群は、居住域と流路状遺構18-1215の間に位置し、土器棺墓14基と土壙墓4基からなる墓域と、

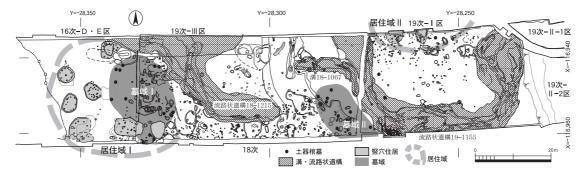


図79 縄文時代晩期前半遺構分布図(1:1,000)

居住域 ・ とは対応関係はなく溝18-1067の南で流路状遺構19-1155の西に位置し、土器棺墓8基からなる墓域 に分けられる。これ以外に土器棺墓を4基検出している。後述するように、居住域 と墓域 は位置的にも時期的にも密接に対応するが、居住域 と墓域 には対応関係はなく、流路状遺構18-1215や19-1155への土器・石器などの廃棄状況からみて、居住域 に対応

する墓域は調査区の北外側に、墓域 に対応する居住域は調査区の南外側に展開していると想定できる。

以下に、所属時期の明らかな遺構を中心とした集落内での遺構変遷の状況を各時期毎にまとめて説明する(図80)。

上里1期(滋賀里 式) この地域の最初の遺構としては、溝18-1067が掘削され、居住域に小規模な土坑18-1283が設けられる。後に利用される流路状遺構18-1215・19-1155は蛇行流路の埋没し残った痕跡であり、自然地形の凹みとして残存していた。深い部分には常時湧水などによる滞水があったとみられ、これを生活用水として利用するためにこの周囲に集落が営まれたと思われる。溝18-1067は流路状遺構19-1155への排水のために掘られた人為的な溝と考えられる。調査範囲内では当期の住居は見つかっておらず、遺物の出土量も少ない。

上里2期(滋賀里 a式古段階) 居住域 ・ ともに竪穴住居1棟や土坑が営まれ、本格的 に生活が開始される。墓域 には土壙墓2基が 築かれる。墓域 には貯蔵穴と考えられるもの 1基を含め土坑が2基設けられるが、墓域とし ての利用はまだ開始されていない。

 上里3期(滋賀里 a式新段階) 居住域・ともに住居が増加し、墓域・に土器棺墓
 竪穴住居16-3203

 が築かれるようになり、流路状遺構18-1215・19-1155では本格的に水の利用が開始される。居住域には竪穴住居2棟・土坑2基、居住域には竪穴住居2棟・土坑2基、居住域には竪穴住居2棟(うち1棟は上里2期から
 土器棺墓18-1291

 継続)・土器棺墓1基、やや離れた位置に土坑1
 土器棺墓13-112

 土器棺墓13-158
 土器が出土

表17 出土土器からみた遺構の変遷表

| 请 <u></u> | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
|---------------------------|---|---|---|---|---|---|----------|
| 遺構名 期 溝18-1067 | ' | | J | - | - | | ' |
| | | | | | | | |
| 土坑18-1283 | | | | | | | |
| 土坑16-3282 | | | | | | | |
| 竪穴住居19-848 | | | | | | | |
| 土坑18-847 | | | | | | | |
| 土坑19-1433 | | | | | | | |
| 土坑19-849 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-240 | | | | | | | |
| 土壙墓16-3253 | | | | | | | |
| 土壙墓16-3158 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-149 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-3234 | | | | | | | |
| 竪穴住居19-995 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-340 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-354 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-845 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-1452 | | | | | | | |
| 土器棺墓19-1358 | | | | | | | |
| 土坑16-3213 | | | | | | | |
| 土坑16-3195 | | | | | | | |
| 土坑18-1532 | | | | | | | |
| 土器棺墓16-3159 | | | | | | | |
| 土器棺墓10 3139 土器棺墓18-349 | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| 土器棺墓18-978 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-1010 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-1640 | | | | | | | |
| 土坑18-1487 | | | | | | | |
| 土坑19-527 | | | | | | | |
| 流路状遺構19-1155 | | | | | _ | | |
| 集石遺構19-1430 | | | | | | | |
| 流路状遺構18-1215 | | | | | | | |
| 竪穴住居18-1294 | | | | | | | |
| 土器棺墓16-3164 | | | | | | | |
| 土器棺墓16-3165 | | | | | | | |
| 土器棺墓16-3178 | | | | | | | |
| 土器棺墓16-3196 | | | | | | | |
| 土坑19-1033 | | | | | | | |
| 土坑19-1079 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-1271 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-3175 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-3205 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-3223 | | | | | | | |
| 竪穴住居16-200 | | | | | | | |
| 土器棺墓18-1288 | + | | | | | | |
| 土器棺墓18-1291 | + | | | | | | |
| 土坑13-143 | + | | | | | | |
| 土坑19-3109 | + | | | | | | |
| 土器棺墓13-113 | + | | | | | | |
| | + | | | | | | |
| 土器棺墓13-112 土器棺墓13-159 | + | | | | | | |
| 土器棺墓13-158 | | | | | | | |

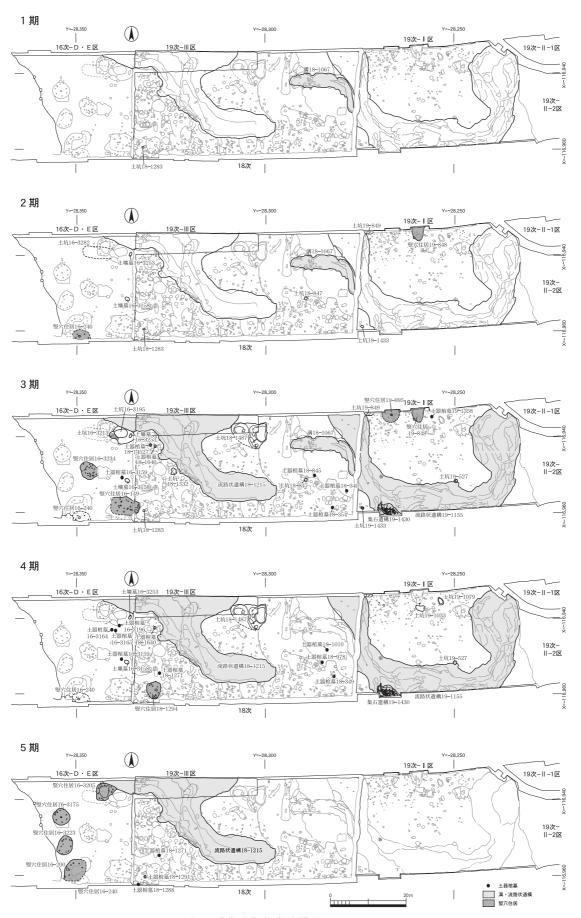


図80 縄文時代晩期前半遺構変遷図(1:1,000)

基が設けられる。墓域 ・ にはそれぞれ土器棺墓が3基が築かれる。流路状遺構18-1215の東には、石器製作跡であり、滑石製勾玉などが出土した土坑18-1487が上里4期にかけて利用される。流路状遺構19-1155内の南西部には、足場状の施設とみられる集石遺構19-1430が設けられる。排水の役割を終えた溝18-1067には不要物の廃棄が始められる。この上里3期が、居住域・墓域 、居住域 、墓域 、いずれも最も積極的に利用されており、本集落における最盛期を迎える。

上里4期(篠原式古段階) 居住域 では竪穴住居1棟が築かれる。居住域 では竪穴住居が見られなくなるものの、土坑が2基あり、活動は継続している。砂礫などの流入により、流路状遺構19-1155は本来の水源としての機能を果たさなくなって、土器や石器など不要物の廃棄所として利用されるようになる。墓域 には土器棺墓5基、墓域 には上里3期から当期にかけて3基の土器棺墓が設けられる。

上里5期(篠原式中段階) 流路状遺構19-1155が埋まり、墓域 以東での活動はみられなくなる。居住域 では4棟の竪穴住居が築かれ、墓域 には2基の土器棺墓が設けられる。しかし、流路状遺構18-1215も水源としての機能を果たさなくなり始め、19-1155同様に廃棄所として利用されるようになり、やがて埋没する。

集落が営まれた遺跡東部域は、小畑川・善峰川の合流地点に近く、特に善峰川の河川活動による浸食と堆積が繰り返される不安定な地形条件であったと考えられる(第1章第2節)。縄文時代晩期に入って河川活動が一時的に安定すると、人々の活動が開始される(上里1期)。蛇行流路の痕跡である流路状遺構に生活用水の便を求めて、その周囲に竪穴住居による居住域が設定され、土器棺墓を中心とし土壙墓を含む墓域が近接して形成される。しかし、河川活動が再び活発化して、洪水などにより上里4期に東より流路状遺構の埋没が始まると、集落内での生活の中心を徐々に西へ移しながら、上里5期まで集落は存続して廃絶する。集落域は、上里4期のうちに東端から始まり、上里6期以降に本格化すると見られる河川氾濫堆積層によって、上里7期には完全に覆い尽くされ埋没してしまう。この堆積は、上里6期の19次一区の土坑19-3109や埋土上層に上里6・7期の遺物の混入が少量見られる遺構の存在などから、漸次的で部分的な堆積の繰り返しであったと見られる。上里6期以降にも、氾濫堆積が低調で当地が利用可能な時期には部分的に生活に利用されることがあったと考えられる。

(2) 晩期後半の集落変遷

遺跡東部に営まれた晩期前半の集落は河川の氾濫による堆積層に埋まって廃絶し、約400m西の標高の高い遺跡西部の13次-A1~3・B1区へ移動したと考えられる。縄文時代の遺構面は、弥生時代から長岡京期の遺構と同一面で検出されていることから、後世に削られ大半の遺構が失われたと思われる。

晩期後半の遺構は上里6期(滋賀里 式) 上里7期(船橋式から長原式期)の2期に分けられる(表17)。遺構は土器棺墓と土坑のみである。土坑のうち、土坑13-53・13-200は焼土面が明

確であり炉跡と考えられ、居住域が存在した可能性も考えられる。

先述したように、上里6期の土坑19-3109は遺跡東部(19次- 区)で確認した遺構である。漸次的に繰り返されたとみられる河川氾濫の間にも、氾濫堆積が低調でやや安定するたびに、比較的高位の箇所では部分的な生活(活動)がなされたことを示唆する。

2 本遺跡の縄文時代晩期集落の特徴と問題点

本遺跡の縄文時代晩期集落の重要な特徴は、竪穴住居を主体とする居住域に土壙墓・土器棺墓による墓域が伴うことである。そして、この集落が滋賀里 a 式から篠原式中段階を中心とする比較的短期間に営まれたことである。短期間に営まれたにも関わらず、遺構密度が高く、土器・石器類が多く出土しており、炭化種実類や動物骨類などの有機質の資料もまとまって出土した。以下には、本集落を位置付ける上で重要と思われる項目について整理する。

(1) 流路状遺構から検出した動・植物遺存体について

主として流路状遺構から、食物残滓と考えられる炭化した植物種実や焼けて細片化した動物骨片を抽出することができた(第5章第4節、第6章第5節)。炭化種実にはイネ胚乳も含まれるが、放射性炭素年代測定による年代値と発掘調査における出土層序の年代観に齟齬があり、この点については別項で述べる。

炭化した植物種実にはマメなどの穀類、ドングリ・クリ・クルミなどの堅果類があり、種皮ではトチノキ類が多くあった。マメ類は大部分がいわゆるササゲ属に属するが、大豆よりは小型の種で、大きさにはバラツキがみられる。マメ類は流路状遺構19-1155北東・南東部に多く分布し、全体で340個体以上に換算される分量が出土した。この分量は今回の水洗選別等により採取した堅果類のうち、個体数に換算できるドングリの868個体に比して、約4割の量にあたり、非常に多いと評価できる。堅果類が炭水化物食料であるのに対して、マメ類はタンパク質を多く含む食料である。水産資源の少ない内陸部にあっては重要なタンパク源であり、出土量の多さから重視されていたと思われる。あくまでも、従来からの周囲の森や林における堅果類の採集活動が主体的であったと思われるが、単なる採集ではなく、栽培による食料確保(農耕)が試みられた可能性が指摘できる。本遺跡で多く出土した打製石斧や横刃型石器については耕作具や収穫具といった機能を想定する研究者もいるが、今回は具体的な使用痕跡を証明することはできなかった(第6章第2節)。今後もその解明に向けて分析成果を蓄積すべきであろう。なお、磨石・石皿の一部については、使用痕の分析とともに残留デンプンの分析を行い(第6章第2節)、対象とした磨石・石皿のいずれからもデンプンが検出された。これらが植物質食料(主として堅果類か)の加工具として利用されていたことを裏付ける。

動物遺存体はすべてが焼けて細片化した骨片である。同定に耐えるものはごく少量であったが、 魚類、両生類、鳥類、哺乳類などがあり、哺乳類のイノシシ、シカ以外は小型のものが主体であ る。注目されるのは、海水性の魚類であるタイ科の骨が確認されたことであろう。河内湾からも たらされたものであろうか。内陸部での海産魚類の骨類が検出された例としては奈良県橿原遺跡 などが有名であり、本遺跡例も含めて、当時海産物の流通が一定程度なされていたことを示して いる。

(2)石刀の製作について

本遺跡に特徴的な石材として、粘板岩または頁岩がある。これら石材は遺跡の西の西山山地の 麓に露頭する岩脈があり、そこから入手したと考えられる。主として、土掘り具とみられる打製 石斧や、刃器としての横刃型石器の石材として用いられるほか、祭祀具・威信材としての石刀の 石材としても用いられている。

本遺跡で石刀は製品のみではなく、製作の工程を追うことのできる大型の剥片や分割・剥離・ 敲打・研磨といった加工作業の各段階の途中に破損して廃棄された未製品も多く出土した。これ は石刀の製作が本集落内で行われていたことを裏付けるものと考えられる。これらの石刀は「近 畿型石剣」あるいは「橿原型石刀」と称される、柄部分に平行沈線で区画した文様帯を持つもの である。製品の完形品はなく、破片のみが出土しており、製作途中あるいは使用後に破損し廃棄 されたと考えられる。製品の破片は未製品や石材に比して出土量が少なく、周辺の集落へも供給 した結果と考えられる。近畿地方における石刀の出土例には、製品のみが出土する滋賀県滋賀里 遺跡や奈良県橿原遺跡などと、本遺跡と同様に未製品が出土し製作跡とみられる大阪府馬場川遺 跡や滋賀県六反田遺跡などがある。馬場川遺跡では、製作の段階を原材料、整形剥離、敲打調整、 研磨、完成品の5段階が想定されている。

なお、結晶片岩を産する中央構造線に近い奈良県以南の地域では結晶片岩製の石刀の出土例が 多くみられ、先述の橿原遺跡では結晶片岩製のものと粘板岩製または頁岩製のものが出土する。 石材の産地と製作遺跡、製品の分布状況(消費遺跡)との関係などから、それぞれの流通範囲や それが示す意義を明らかにする上で注目される。

(3)広範にわたる交易関係

土器類には他地域からの搬入あるいはその影響下で製作されたものがみられる。いわゆる、河内地方の生駒西麓産胎土のもの、北陸地方の御経塚式・中屋式や東日本の大洞式のほか、丹後地方、瀬戸内海地方、東海・中部地方などがある。

打製石器では、石鏃・石錐・削器などの石材はほぼすべてサヌカイトであり、その産地は大阪府二上山と香川県金山のものがある。肉眼観察によって判別した結果、ほぼ6:4という割合であった。近畿地方における同一遺跡内でのサヌカイトの大阪府二上山と香川県金山の比率は、おおよそ縄文時代後期中葉に5:3、後期末葉には7:2、晩期には9:1という変遷をたどり、弥生時代前期には金山産が5割以上と激増して両者の比率が逆転するという。二上山産のサヌカイトの流通が圧倒的に主流である晩期前半の近畿地方にあって、本遺跡では金山産のものが4割と突出して高い比率を占めるという特異な状況を示す。この原因としては、本遺跡がこの地域で

金山産サヌカイトの流通拠点を担っていたのか、あるいは金山産サヌカイトの流通に細かな増減 の波があり、たまたま金山産の流通量の多い時期にあたっていたことなどが想定される。

玉類は滑石製勾玉1点と翡翠製丸玉3点と少ない。翡翠製丸玉は3点とも新潟県姫川で産出し 製作されたものが持ち込まれたものと考えられる。

また、水銀朱が付着する石皿(石211・212)・磨石(石184~186)、内面に水銀朱が付着した土器が出土し、奈良県桜井市・御所市・宇陀市に分布する領家帯(中央構造帯)に産出する辰砂鉱石(石257、第6章第1節)が1点出土したことから、産地より原石が持ち込まれて水銀朱の精製が本集落で行われたことが明らかになった。土器外面や土製品(耳栓)に塗布したものが出土しており、精製された朱は集落内で使用されていたとみられる。他の遺跡でも、水銀朱が付着する石皿・磨石や内面に水銀朱が付着した土器などが出土例は多く、水銀朱の原材料である辰砂鉱石が産地より持ち込まれて、消費地で精製・使用されると考えられていたが、辰砂鉱石そのものの検出はほとんどなかった。本資料はこの推論を裏付ける実例となった(巻頭図版4-2)。

本遺跡で交易品として明確なもののうち、直線距離で60km未満の辰砂鉱石や海産性魚類、二上山産サヌカイト、河内地方・丹波地方産の土器類などの比較的近距離からのものと、100kmを超える翡翠製丸玉、金山産サヌカイト、北陸系・東日本・中部あるいは東海系の土器類などの遠距離からのものに2大別することができる。近距離からのものはより直接的な、遠距離からのものは間接的な交易を示していると考えられる。

(4)縄文時代晩期前半における本集落の意義

近畿地方における縄文時代遺跡の動向は、縄文時代中期後葉から後期前葉に増加した遺跡数は後期中葉から減少し、晩期前半に最も少なくなるが、一転晩期後半には再び増加する。この晩期後半の遺跡増加は住居を伴わない土器棺墓(群)の検出例の増加によるものであって、住居を主体とする集落はほとんど確認されていない。このような傾向は西日本でもおおよそ共通している。一方、縄文時代中・後期から晩期後半まで継続して営まれる滋賀県滋賀里遺跡や奈良県橿原遺跡、大阪府向出遺跡・馬場川遺跡など、近畿地方における代表的な大規模遺跡の多くは、古くに調査が行われた橿原遺跡を除いて、いずれも埋葬・祭祀遺構や貯蔵遺構が多数検出されるものの、馬場川遺跡で数棟の竪穴住居が検出されている以外には住居遺構が検出されていない。このような点から、後期以降には集落の機能が分化し、貯蔵施設群や埋葬施設群が居住施設から離れ、それぞれの機能に特化した遺跡が目立つようになると解釈されてきた。

上記のような動向は本遺跡の属する乙訓地域においても例外ではなく、特に晩期前半には遺跡数が激減し、向日市の中野遺跡で竪穴住居が1棟確認された以外は、土器棺墓などが単発的に検出されるものがほとんどであった。本遺跡の晩期前半の集落は、この最も遺跡が減少するとされる時期に成立する竪穴住居による居住域に墓域を伴う集落であり、特異な存在といえる。短期間に営まれたにもかかわらず、竪穴住居10棟、土器棺墓26基、土壙墓4基などを中心に土坑や柱穴などが多数設けられ、上里5期には一時期に竪穴住居4棟同時に営まれるなど、遺構・遺物とも

近畿地方では突出した集落規模を示しており、乙訓地域における代表的な集落の一つと考えてよいであるう。

上里遺跡で検出した縄文時代晩期前半の集落は、河川活動が活発で堆積と浸食を繰り返す不安定な低地部に形成された蛇行流路による河跡の周囲に占地して、河川活動が比較的低調となった短期間に営まれた。奈良県観音寺本馬遺跡の2008年度調査では、ほぼ同時期の平地式住居による居住域に土器棺墓・土壙墓からなる墓域が伴う大規模な集落が検出された。両者は住居の形態が竪穴住居と平地式住居という違いがあるものの、集落が平野低地部の河川に近接した箇所に短期間に営まれたという点や居住域に墓域を伴うという点で共通している。

近畿地方で知られていた縄文時代中・後期から長期にわたり継続する埋葬・祭祀あるいは貯蔵などの機能が顕著な大規模な遺跡に対して、本遺跡や観音寺本馬遺跡のような短期間に住居が集中的に営まれる集落の存在が明らかになり始めた。当該期の生業や社会構造を考える上で重要な成果である。

(5)炭化イネの問題

本遺跡では、縄文農耕論争と深く関係する資料であるという意識をもって、縄文時代晩期前半の流路状遺構18-1215埋土より出土した炭化イネ胚乳と炭化マメ類などの放射性炭素年代測定を詳細に実施した。2007年度には同一層から出土した炭化イネ胚乳と炭化マメ類・クルミの測定を国立歴史民俗博物館に依頼した。その結果は、炭化マメ類・クルミの測定値は土器などの年代観と同調的であったが、同一層で得られたにも拘らず、炭化イネ胚乳の測定値が500年前後新しいという結果であった。これに対して2008年度にはコンタミネーションの可能性を排除するため、改めて流路状遺構18-1215の同一地点同一層から出土した炭化イネ胚乳と炭化マメ類各1点を1組として、上・下2層分(2組)の測定をそれぞれ国立歴史民俗博物館とパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。その結果は、炭化マメ類の測定値は前年とほぼ同じ年代、炭化イネ胚乳の測定値はやや古い年代が得られて、両者間の年代値の差は300~400年と縮まったが、齟齬の問題は解決されなかった。これらの結果を受けて、当該遺構部分の土壌のX線写真や剥片の詳細な検討を行い、植物根などによる孔隙によって上位層よりの混入である可能性が高いとの結論を得た(第6章第3節)。

しかし、炭化イネ胚乳が出土した流路状遺構18-1215の層位には縄文時代晩期後半(突帯文期) や弥生時代前期の土器を含まないことと、上層において炭化イネ胚乳が全く出土していないこと から、これらを直ちには混入物としてしまうことはできず、検討の余地がある。実際に測定を行った5点の炭化イネ胚乳の放射性炭素年代測定値(131頁、表11)は以下の通りである。

 $2,562 \pm 30$ yBP (cal BC 804-747), $2,445 \pm 20$ yBP (cal BC 568-410), $2,460 \pm 32$ yBP (cal BC 669-477), $2,410 \pm 20$ yBP (cal BC 539-403), $2,365 \pm 25$ yBP (cal BC 511-391)

これらは暦年較正結果の曲線 (133頁、図73) をみても明らかなように、2,500 yBP年代の1点 と2,400 yBP年代の3点、2,300 yBP年代の1点という3つの曲線パターンが見て取れる。このう

ち、最も新しい2,300 yBP年代のものは、本遺跡弥生時代前期の遺構から採取した炭化材の放射性炭素年代測定値3点と同調的であり、弥生時代前期(中段階から新段階)に帰属すると考えても良いものと思われる。しかし、2,500 yBP年代と2,400 yBP年代のものについては明らかに本遺跡の弥生時代前期(中段階から新段階)より古い年代を示している。

現在、近畿地方で最も古いとされている炭化イネ胚乳は大阪府讚良郡条里遺跡 6-152土坑最下部炭化物層(共伴土器なし)で、本遺跡の最も古い2,500 yBP年代のものはほぼ同じ年代である。一方同遺跡で弥生時代前期最古段階の弥生土器が伴う6-143土坑最下部の炭化イネ胚乳の測定値は本遺跡の2,400 yBP年代のものと符合する。

讃良郡条里遺跡 6-152土坑最下部炭化物層 イネ胚乳 2,540±30 yBP(cal BC 795-735) 讃良郡条里遺跡 6-143土坑最下部 イネ胚乳 2,450±25 yBP(cal BC 600-400) また、縄文時代晩期後半の年代が明らかなものに、滋賀県竜ヶ崎 A 遺跡で出土した縄文時代晩期後半(長原式)の土器底部内面に付着したキビの年代がある。

竜ヶ崎A遺跡 キビ 2,550 ± 25 yBP (cal BC 800-745)

これらを参考にすれば、本遺跡で検出された炭化イネ胚乳は得られた測定値から、2,500 yBP 年代を示すものは弥生土器に先行する時期、すなわち縄文時代晩期後半(突帯文期)の年代にあたり、近畿地方で最古級のイネの一つと考えられる。また、2,400 yBP年代のものは弥生時代前期最古段階の年代にあたっていると考えられる。つまり、本遺跡検出の炭化イネ胚乳は縄文時代晩期前半までは遡らないとしても、縄文時代晩期後半(突帯文期)に遡る可能性が高いものがあり、弥生時代前期より以前に当地に何らかの形でイネがもたらされていたことを示していると評価できよう。

これまでも近畿地方では縄文時代晩期後半の土器にイネの籾圧痕のあるものが知られていたが、 稲作との関係ではあまり議論されてこなかった。近畿地方における稲作の開始が、突帯文土器期 なのか、遠賀川式期なのかを議論する上で重要な資料となる。

本遺跡の縄文時代晩期前半の遺構群は、河川の氾濫作用により堆積した弥生時代前期(中段階から新段階)の遺構基盤層に厚く覆われる。しかし、先の2,500 yBP年代のものと2,400 yBP年代の炭化イネ胚乳の供給先が本遺跡ではこれまでのところ確認できていない。本章第1節でみたように、弥生時代前期遺構基盤層の堆積は上里4期に東から徐々に始まり、上里6期以降本格化し断続的で部分的に繰り返されて、上里7期には遺跡東部域を覆い尽くす。この間も氾濫堆積が低調で比較的安定すると部分的に生活域として利用されたと考えられ、炭化イネ胚乳の示す年代によって、この堆積層の層中にすでに失われてしまった弥生時代前期最古段階あるいはそれに先行する時期(突帯文期)の遺構面が存在した可能性を認めることができる。

以上は、放射性炭素年代測定による各年代値が正しいという前提に則り、年代値に齟齬のある 炭化イネ胚乳が上位層よりの混入以外あり得ないという自然科学的な分析による結論に従って、 年代値の異なる炭化イネ胚乳の出土という事実を積極的に評価したものである。しかし、実際に 現場での発掘調査に臨んだ一人として、これですべてが整合性をもって解釈できたとは考えていない。ここでは、その問題点を挙げてまとめを締めくくる。

本遺跡で得た炭化イネ胚乳を含めた動・植物遺存体は、縄文時代晩期前半の流路状遺構の土層 観察のために設けたセクションから層位毎に採取した土サンプルを、フローテーションおよび水 洗フルイ選別を行って抽出したものである。現場の所見では層位的に大きな攪拌はなく、炭化イ ネ胚乳は計17点検出されており、同一層内での炭化イネ胚乳と炭化マメ類の共伴例が複数ある。 このような状況は通常共伴と判断され、炭化イネ胚乳のみが上位層からの混入であるとは考えが たい。ただ、現場で炭化イネ胚乳の出土状況を確認できたわけではなく、全く混入がないと否定 する材料もないが、反対に上位層からの根などによるクラック部分から出土したという状況も確 認されていない。

同一層内から出土した放射性炭素年代測定による炭化マメ類の測定値と炭化イネ胚乳の測定値の齟齬について、単に調査上の問題ではなく、放射性炭素年代測定における問題として問い直すことも必要だと考える。近年精力的に全国各地で放射性炭素年代測定が進められ、膨大な測定データが蓄積されてきているものの、この時期に係わるデータは土器付着物のものが多く、炭化イネ胚乳そのものの測定データはまだあまり多くないと聞く。これまでに、海洋リザーバー効果や古木効果などによって測定値に偏差が生じ、補正が必要なものがあることが知られている。それらと同様にC3植物・C4植物による違いや、同一種同士でも自然炭化・燃焼炭化・未炭化など炭化のプロセスや程度の差などによって、測定値に偏差が生じるか否かについての検証も必要であるう。今後、炭化イネ胚乳そのものの測定データの蓄積とともに、同一層から出土する他種の測定も積み重ね、比較試料の蓄積が望まれる。日本列島における稲作の起源を議論する上で必要な考古学的手続きであり、ここで詳細に論じた。

註

- 1) 末永雅雄ほか『橿原』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第17冊 奈良県教育委員会 1961年
- 2) 泉 拓良「縄文時代」『図説 発掘が語る日本史 第4巻 近畿編』新人物往来社 1985年。後藤信 祐「縄文後晩期の刀剣形石製品の研究(上)」『考古学研究』33-3(131)
- 3) 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会 1973年
- 4) 松田順一郎「馬場川遺跡の石刀・石棒」『東大阪市文化財協会ニュース』2-2 (財)東大阪市文化財協会 1986年
- 5) 一般に、胎土に角閃石の石片を多く含み茶褐色系の発色する土器を、河内地方の生駒西麓産と称する。産出地が限定される角閃石の石材が産地を離れた遺跡から検出された例があることなどから、土器胎土に入る石片粒子(混和剤)が流通の対象として取り上げられ、消費地で土器の胎土に故意に混ぜることで同様の焼き上がりが得られるという議論がなされている。これまで定説であった土器自体の流通ではなく、混和剤としての石材の流通が提起されている(中塚良ほか「研究報告2縄文土器の材質的研究~自然資源利用と文化の動き~」『京都府の縄文時代』第17回京都府埋蔵文化財研究集会資料集 2010年)。

- 本遺跡では当該胎士の土器は一定量出土しているが、さほど量が多い訳ではなく、わざわざ混和剤 を入れて焼かれたとは考えにくく、これまで通り土器そのものの搬入と考える。
- 6) 肉眼観察の結果の確からしさを裏付けるため、それぞれ肉眼観察で二上山産・金山産と判断したもの各4点について、蛍光X線分析を実施した(第6章第4節)。
- 7) 秋山浩三「近畿における弥生化の具体相」『論争 吉備』考古学研究会 1999年。田部剛士「縄文時代後期・晩期の石材利用」『縄文時代の石器 関西の縄文後期・晩期 』関西縄文文化研究会 2004年
- 8) 奥 義次「朱の生産と供給」『縄文時代の考古学6 ものづくり』同成社 2007年
- 9) 瀬口眞司『縄文集落の考古学』昭和堂 2009年。岩崎 誠「乙訓における縄文遺跡の消長」・千葉 豊「縄文時代の集落変遷」『京都府の縄文時代』第17回京都府埋蔵文化財研究集会資料集 2010年な ど
- 10) 渡辺博ほか「長岡宮跡第152次 (7AN16D地区)~北辺官衙(南部)・中野遺跡~発掘調査概要」『向 日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 1986年
- 11) 本村充保「観音寺本馬遺跡 京奈和自動車道(観音寺 区) 」『奈良県遺跡調査概報 2008年度 (第三分冊)』奈良県立橿原考古学研究所 2009年
- 12) この経緯については、2008年度(第19次)調査の報告書の「まとめ」(第5章第2節)にも記述した。具体的には、流路状遺構18-1215のfセクションの上層「5・6層」と下層「8~11層」を対象として、同一層から抽出した炭化イネ胚乳と炭化マメ類各1点を1組、上層と下層の2組を1セットとして、2セット用意した。異なる測定機関で測定をしてもらうため、一方を国立歴史民俗博物館を通して(株)パレオ・ラボ、もう一方をパリノ・サーヴェイ株式会社を通して(株)加速器分析研究所においてAMS法による測定を実施した。高橋 潔ほか『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-9 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 13) 中尾智行ほか『讚良群条理遺跡 』(財)大阪府文化財センター調査報告書第187集 2009年
- 14) ちなみに、北部九州に於いて、放射性炭素年代測定による測定値が本遺跡の2,500yBPのものに近い年代を示すものとして、ややバラツキがあるものの弥生時代前期初頭の夜臼 b式とされる土器の付着物のものが挙げられる。西本豊弘編『弥生農耕の起源と東アジア・炭素年代測定による高精度編年体系の構築 平成17年度・18年度研究成果報告』2007年

土器付着物(夜臼 b式) 2,550 ± 35yBP (cal BC 800-730)

佐賀県大江前遺跡 土器付着物(夜臼 b式) 2,580 ± 40yBP (cal BC 820-740)

福岡県雀居遺跡

報告書抄録

| ふりがな | かみさといせき いち ーじょうもんじだいばんきしゅうらくいせきのちょうさー | | | | | | | | | | | |
|-----------------|--|---|-------|------------|------------------------------|--------------------|---------------------------|---------------------|-------------------|--|--|--|
| 書名 | 上里遺跡 I ー縄文時代晩期集落遺跡の調査ー | | | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所調査報告 | | | | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第24冊 | 第24冊 | | | | | | | | | | |
| 編著者名 | 高橋 | 高橋 潔・近藤奈央・竜子正彦 | | | | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | | | | |
| 所 在 地 | 京都市 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | | | | |
| 発 行 所 | 財団法 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦20 | 西暦2010年11月20日 | | | | | | | | | | |
| がりがな 所収遺跡名 | ふりがな コ 所 在 地 市町村 | | | ード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 | | | |
| かみさといせき 上里遺跡 | espected 京都市 おおは5のか 大原野 の5ょう・お ノ町・ いわみ5ょう 石見町 | 西京区 ^{みさとみなみ} 上里南 ^{おはらの} 大原野 ^{5ない} | 26100 | 1047 | 34度 56分 43秒 | 135度 41分 25秒 | 2001年11月 ~ 2009年11月 | 6,650m ² | 道路新築 工事 | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な | 時代 | 主な | 遺構 | 主 | な遺物 | 特記事項 | | | | |
| 上里遺跡 | 集落跡 | 縄文時 | 代晚期 | 竪穴住居 器 柱 | 土壙墓、 穴、流路 溝、配石 石遺構、 | | 、石器、玉類、 植物遺存体、 体 | 流路状遺 に居住域 | が広がり、構の周辺・土器棺開する状 | | | |

上 里 遺 跡

- 縄文時代晩期集落遺跡の調査 -京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊

発行日 2010年11月20日

編 集 発 行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1

T602-8435 075-415-0521 http://www.kyoto-arc.or.jp/

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地

T604-0093 075-256-0961